

一般国道 18 号（野尻バイパス）
埋蔵文化財発掘調査報告書 3

—信濃町内その 3—

なか まち
仲 町 遺 跡

《第 2 分冊》

2004. 3

国土交通省関東地方整備局
長野県埋蔵文化財センター



2001年4月18日撮影



1994年10月7日撮影

例 言

- 1 本書は、一般国道 18 号野尻バイパス改築工事にかかわる、長野県上水内郡信濃町大字野尻ほかに所在する仲町遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本書は 2 分冊で構成され、調査地点を 2 分し、それぞれ時期ごとに報告した。
- 3 遺跡の概要は、長野県埋蔵文化財センター発行の『長野県埋蔵文化財センター年報』16～19 ほかで紹介しているが、内容において本書と相違がある場合は、本報告書をもって改正する。
- 4 調査は建設省関東地方建設局からの委託事業として、財団法人長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センターが実施した。委託者である建設省関東地方建設局は国の中央省庁再編に伴い平成 13 年 1 月 6 日に国土交通省関東地方整備局と名を変えている。発掘調査および整理作業の契約は建設省関東地方建設局長野国道工事事務所と国土交通省関東地方整備局長野国道事務所の両者があるが、紙面の都合上現在の名称に統一して記述する。
- 5 本書に掲載した地図は、長野国道事務所作成の国道 18 号野尻バイパス平面図 (1:500)、信濃町建設課作成の計画図 (1:2500)・地形図 (1:10000)、国土地理院発行の数値地図 25000 を使用した。
- 6 本書で扱っている国家座標は、国土地理院の定める平面直角座標系の原点 (長野県第Ⅷ系、 $X=0.000, Y=0.000$) を基準点としている。なおこの測地系は 2002 年以前の日本測地系 (旧測地系) である。
- 7 本書の執筆および編集は鶴田典昭・谷和隆・山崎まゆみ・中島英子がおこない、市澤英利・平林彰が全体を校閲した。第 2 分冊の執筆分担は以下のとおりである。
第 3 章 1 節 市川桂子・山崎まゆみ・鶴田典昭
第 3 章 5 節・6 節 中島英子
上記以外 鶴田典昭
- 8 発掘調査から本書の刊行にいたるまで多くの方々のご指導・ご協力を得た。本文中にお名前を掲げさせていただいたが、厚く感謝申し上げます。
- 9 本書で報告した各遺跡の記録および出土遺物は、報告書刊行後、信濃町教育委員会が保管する予定である。

凡 例

- 1 遺物の報告番号は本文・挿表・実測図・写真のすべてに共通する。報告番号は節ごとに遺物の種類別に1番からの通し番号とした。竪穴住居跡などの遺構単位で報告したものは、遺構ごとに1番からの通し番号とした。なお、旧石器時代の石器は、遺物番号が重複しないように、調査地点別に1000番単位の報告番号を付した。そのため、旧石器時代石器の通し番号には欠番がある。なお、詳細は第1章第4節に記した。

JS 地点 1～ BP 第3地点 3001～
 BP 第1地点 1001～ BP 第4地点 4001～
 BP 第2地点 2001～ BP 第5地点 5001～

- 2 本文中で用いた石器の呼称や器種名については、第1章第4節に記した。
 3 参考文献は各章または各節の末尾に掲載した。
 4 掲載した実測図の縮尺は原則として下記のとおりである。また、それぞれの図版右下にスケールを付した。

遺構実測図

全体図 1 : 800 または 1 : 500 ブロック 1 : 200 礫群・集石 1 : 30
 土坑 1 : 30 または 1 : 60

遺物実測図

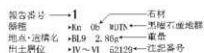
石器 実測図は 1 : 4 拓本は 1 : 3 または 1 : 2 または 2 : 3
 石器 小形剥片石器 3 : 4 または 2 : 3 大型剥片石器 1 : 2 または 1 : 3
 礫石器 1 : 3 または 1 : 4、 木器 1 : 4 または 1 : 6 金属器 1 : 3

- 5 ブロック別の遺物分布図・石器実測図・挿表・挿図の器種・石材の記号・略称は下表のとおりである。また、表中にない器種・石材については、略称を用いずに、器種名・石材を表記した。
 6 旧石器時代と縄文時代の石器分布図中の遺物に付された番号は、遺物図版の報告番号である。

記号	略称	器種	記号	略称	器種	記号	略称	器種	記号	略称	器種
◇	Kn	ナイフ形石器	☆	Sc	削器	●	UF	微細剥離のある剥片	▲	Ax	斧形石器
▽	Tr	台形石器	■	Pe	楔形石器	□	Co	石核	◎	GS	磨石
◎	CF	折断剥片	○	Bl	石刃	*	F1	剥片	⊙	PS	凹石
★	ESS	掻器・掻器状石器	○	RF	2次加工のある剥片	*	Ch	砕片	⊙	原石	原石
☆	NS	抉入削器	○	Dr	採掘器	*	SB	貝殻状刃器	▲	人破片	斧形石器破片 舟形石器剥離剥片
◆	磔	磔	◆	Po	槍先形尖頭器	⊠	DS	鋸歯縁状削器	◆	AS	厚刃掻器
⊙	Gr	形器	⊙	Sp	削片	⊙	An	台石	*	Ila	巖石
⊙	KC	細石核	⊙	KB	細石刃	⊙	PT	礫器	⊙	Wh	砥石

略称	石材	略称	石材	略称	石材	略称	石材
Ob	黒曜石	An	無産品質安山岩	SS	珪質頁岩	Sh	頁岩
ST	珪質凝灰岩	TS	凝灰質頁岩	Tu	凝灰岩	GT	緑色凝灰岩
Ch	チャート	Ag	玉髓	Ja	鉄石英	Se	蛇紋岩
Rh	流紋岩	Ge	下呂石	玄武岩	玄武岩	安山岩	安山岩
Sa	砂岩	Sl	粘板岩				

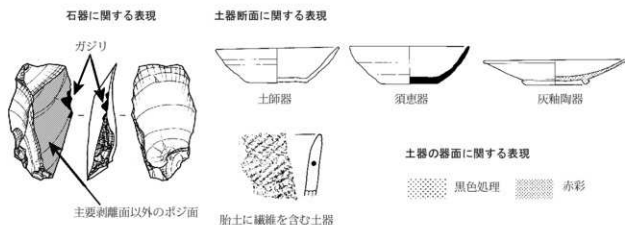
- 7 旧石器時代と縄文時代の石器実測図に付したキャプションの見方は以下のとおりである。なお、黒曜石産地の記号は下表に示す。



エリア	別称群	記号	エリア	別称群	記号	エリア	別称群	記号
和田 (WO)	ブドウ沢	W0BD	神津島	黒船島	KZDB	小池	新藤内	KDOK
	賀ヶ沢	W0MS		新藤島	KZSN	魚津	藤井上野	UTHI
和田 (WD)	宮松沢	W0TM	高原山	甘湯沢	THAY	高岡	二上山	TOPK
	栗野ライイト	WDHY	七尋沢	THNH		奥平寺	SDSK	
	黒山	WDTY	新津	金津	NTKT	佐渡	金井ニッ宿	SDKH
	小深沢	W0KB	新発田	飯山	SBHY		久見	OKHM
	土屋橋北	WDTK	深湯	八森山	HJHM	陸奥	碑地区	OKMT
	土屋橋西	WDTN	木造	出来島	KDOK		箕浦	OKMU
	土屋橋南	WDTM	男鹿	金ヶ崎	OGKS		8号沢	STHG
	古坪	WDHT		飯本	OGWM		黒塚の沢	STKY
	藤ヶ台	SMHO	羽山	月山	HGGS	白滝	黒塚の沢	STSC
	冷山	TSTY	羽黒	合野川	HGIN	赤井川	曲光台	AIMK
豊科	原山	TSHG	新保1群	KK01	豊浦	豊泉	TUTI	
陸奥	陸奥山	TSSB	北上川	新保2群	KK02	鹿戸	安住	ODAZ
天城	相神1	AGKT		新保3群	KK03	十勝	三股	TKMM
鶴根	畑原	HNHJ	宮城	湯ノ倉	MZYK	名寄	布川	NYHA
	飯治原	HNKJ	仙台	秋保1群	SOA1	旭川	豊砂台	AKTS
	黒岩橋	HNKQ		秋保2群	SOA2			AKSK
	上多賀	HNKT	色麻	鶴巻	SMNG	不明産地1	NK	NK
野ノ浦	HNAY	塩屋	塩屋産群	SGSG	下呂石		GERO	

黒曜石の産地群と産地記号

- 8 遺物の実測図に示した主なスクリーントーンなどは以下のとおりである。



- 9 本書で扱っている国家座標は、国土地理院の定める平面直角座標系の原点（長野県第VIII系、X=0.000,Y=0.000）を基準点としている。なおこの測地系は2002年以前の日本測地系（旧測地系）である。
- 10 本文中の加工の表現は次のとおりである。
- 正方向の剥離（加工）：石器の腹面を打面とした背面側への剥離（加工）。
- 反方向の剥離（加工）：石器の背面を打面とした腹面側への剥離（加工）。
- 強剥離（加工）・強い剥離（加工）：縁辺が鋸歯縁状になるような素材を強く断ち切る剥離（加工）。
- 中剥離（加工）：強剥離と弱剥離の中間的な剥離（加工）。プランティング。
- 弱剥離（加工）・弱い剥離（加工）：素材の形状をほとんど変えない弱い剥離（加工）。
- 平坦剥離（加工）・平坦な剥離（加工）：器面内部まで入り込む剥離（加工）。
- 折れ：偶発的な折れと意図的な折れの両者を含む。
- 11 石器の長さ・幅・厚さの計測方法は以下のとおりである。
- 長さ・幅：石器の主軸方向を上下の基準として方眼紙に置き、長方形を想定し、上下（縦方向）を長さ、左右（横方向）を幅とした。
- 厚さ：最も厚い箇所を、主要離面から垂直方向で計測した。

本文目次

《第1分冊》

序・例言・凡例

第1章 発掘調査の概要

第2章 JS地点・BP第1～3地点の調査

写真図版

《第2分冊》

例言・凡例

本文目次

第3章 BP第4・第5地点の調査

第1節 地形と層序	1
1 調査の概要と層序	1
2 BP第5地点の地形と層序	2
第2節 BP第4地点の旧石器時代の遺構と遺物	15
1 調査の概要	15
2 ブロックと礫群	17
3 出土遺物	22
第3節 BP第5地点の旧石器時代の遺構と遺物	39
1 調査の概要	39
2 ブロックと礫群	40
3 BP第5c地点中部野尻湖層の調査成果	48
4 出土遺物	51
第4節 縄文時代の遺構と遺物	72
1 調査成果の概要	72
2 遺構	72
3 出土遺物	78
(1) 土器群の分類と概要	78
(2) 石器群の概要	81
第5節 弥生時代～平安時代の遺構と遺物	159
1 調査成果の概要	159
2 遺構	159
3 出土遺物	161
(1) 土器 (2) 金属器・石製品・土製品 (3) 木製品・骨製品	
第6節 中世・近世の遺構と遺物	177
1 調査成果の概要とBP第5d地点の土層	177
2 遺構と遺物	178
(1) 第1面の遺構 (2) 第2面の遺構 (3) 第3面と第4面の遺構	
3 出土遺物	185
第4章 自然科学分析	
第1節 自然科学分析の概要	200
第2節 自然科学分析の結果	200
1 樹種同定 2 年代測定 3 黒曜石産地同定	
第5章 調査の成果と課題	204

写真図版

報告書抄録

第3章 BP第4・第5地点の調査

第1節 地形と層序

1 調査の概要と層序

仲町丘陵と池尻川低地との間には断層が存在し、これを境として丘陵側が隆起したが、野尻湖発掘調査団による地質断面図によると丘陵西側には階段状に落ち込む段丘崖が観察されている。この段丘崖はかつての湖岸の波食崖で、何段も観察されることから隆起が何回にもわたり起きていたと考えられている。

BP第4地点・第5地点は池尻川低地を臨む仲町丘陵西側の斜面に位置する。縄文時代早期以降のⅡ層



〔柏原黒色火山灰層〕は調査区内全域に分布するが、それより下位の層順は、調査地点により、状況が異なる。Ⅱ層は、丘陵頂部では薄く、埋没谷には厚く堆積し、縄文時代以前の微地形が現在のものどかなり異なっていることが判明した(第1図、第6図)。調査区内のⅡ層より下位の地層には、丘陵部の風成層と、斜面から低地に広がる水成層が見られ、その境界部が古野尻湖の汀線にあると考えられる。

第4地点の低地部には、水成層(シルト層と粘土層)が堆積しており、その中にも旧石器時代のブロックと礫群が確認された。第5a地点～第5c地点では、砂礫層がほぼ全域に分布する。調査区



第1図 BP第4・第5地点の調査範囲

北側は、仲町丘陵が隆起することにより古野尻湖が分化された時の狭窄部付近に当たり、かつて野尻湖から池尻川低地に向かって流れ出す池尻川はこの付近を流れて、低地との境に小規模な扇状地を形成しながらこの砂礫層を堆積させたものと推察される。縄文時代早期以前の砂礫層とシルト層が互層に堆積しており、多量の遺物群が出土した。水成層に含まれる最も新しい遺物の時期は、調査地点により異なる。BP第4地点では旧石器時代、BP第5a地点では縄文時代草創期、BP第5c地点では縄文時代早期の遺物が出土しており、それぞれの調査地点の離水時期が異なっていたと考えられる。BP第5d地点では、旧石器時代の遺物包含層は存在せず、縄文時代前期以降の遺物包含層が認められ、縄文時代後期～古墳時代の遺物を包含する砂礫層が発達する。その後、中世には整地が行われており、完全に離水して、掘立柱建物跡などの遺構群が検出されている。

なお、BP第5地点周辺では野尻湖発掘調査団により8次にわたる陸上発掘調査が行なわれており（第8図）、砂礫層などの水成堆積層の検討がなされている。

従来、野尻湖発掘調査団は、仲町遺跡の中部野尻湖層上位の堆積層を上部野尻湖層（下位より「スコリア質砂礫」、[スナガラ]、[ドロガラ]、[黄灰色シルト]、[カツレキ]）として地層区分をしていたが、野尻湖底の立ヶ鼻遺跡に分布する上部野尻湖層との対比が明確にできていなかった。今回の調査結果により、鍵層である「上Iピンク」を含む上部野尻湖層Iが調査地に分布することが明らかになり、さらにこれを削りこんで砂礫層が堆積している状況が観察された。また、堆積層中にガラス質火山灰層(AT)が確認されたことから、これらの砂礫層は少なくとも上部野尻湖層Iより上位のものであることが判明した。さらに砂礫層を堆積させた流路の縁が確認されたことで河川性の堆積物であることも明らかとなったため、野尻湖発掘調査団はこれらの一部を仲町砂礫層として再定義した（渡辺2002 花岡2003）。

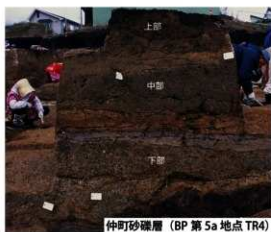
本報告書ではシンポジウムの区分（花岡2003）に従い仲町砂礫層を用いるが、本文中および図では旧来の名称も併記した。またBP第5a地点、第5c地点は信濃町教育委員会調査区（第5b地点）を挟んでいるため地区毎に別個の層名を用いた。BP第5b地点との対比は、それぞれ隣接する土層断面に、便宜的に共通する層名を付し、層名の対比ができるようにした（第7図の括弧内の層名）。

仲町砂礫層中には旧石器時代から縄文時代早期の遺物が多量に含まれ、旧石器時代の偶蹄類の足跡と推定される窪みが多数検出された。また、中部野尻湖層ではナウマンゾウの足跡群と推定される多数の窪みを検出し、足跡を覆うスコリア層から石器の可能性のある石片が出土した。BP第5a地点では仲町砂礫層下部から下部野尻湖層にかけて木片が出土したが、加工痕跡の認められるものは確認できなかった。

2 BP第5地点の地形と層序

BP第5地点には、基盤岩の上に下位より琵琶島沖泥炭層、池尻川泥流堆積物、貫ノ木層、下部野尻湖層、中部野尻湖層、上部野尻湖層I、仲町砂礫層が堆積し、風成の柏原黒色火山灰層がこれらを覆っていることが確認されている。これらの層は、さらに細分されており、地点によりその様相が異なっている。水成層の最上部の仲町砂礫層には旧石器時代から縄文時代早期の遺物群が包含されており、上部、中部、下部の3層に区分されている。

細分した地層の調査地点間の対比が困難であることから、各調査地点で別個の地層名を用いて調査を行ない、そ



仲町砂礫層 (BP第5a地点TR4)

の層名で報告書の記載を行った。但し、BP 第 5c 地点では、県道 3・4 区と C8 区で別個の土層名を用いて調査が行われたため、本報告書では C8 区の土層名に統一して報告した。第 7 図に野尻湖発掘調査団の土層名称と本報告書で用いた層名を対比した。第 2 図～第 5 図に各調査地点の土層断面図、第 6 図に仲町砂礫層の分布状況を示した。BP 第 5a～第 5c 地点の地形図は仲町砂礫層下部を除去した状況である。以下に、BP 第 5 地点の層序及び地形について観察所見を記載する。必要に応じて、調査時の調査区名を用いたが、地点名と調査区名の対応関係を第 2 図に示した。また、野尻湖発掘調査団の用いている鍵層名には [] をつけて表記している。

(1) 仲町砂礫層

① 仲町砂礫層上部 (BP 第 5a 地点の 1 層群、BP 第 5c 地点の 1a 層～2 層)

従来のカツレキ層に該当する。分布の北縁は BP 第 5c 地点で、南縁は BP 第 5a 地点の地形変換点付近と考えられる。BP 第 5 地点の標高の高い部分や BP 第 5c 地点の南側には分布しない (第 6 図)。

BP 第 5a 地点 1 層群は 1a 層から 1f 層に細分されるが、同時異層で礫質な部分と砂質・シルト質な部分との側方変化^(註1)が激しい。1 層群の層厚は約 20cm～40cm で、礫は径 5mm～30mm の安山岩垂円礫からなる。基質は細粒～粗粒砂からなり、ラミナが発達する砂層部分もある。旧石器時代から縄文時代草創期の遺物を含む。

BP 第 5c 地点では 1a・1b・1c・2 層に区分される。1a・1b・1c 層は同時異層と考えられる。1a 層は層厚 20～40cm のにぶい黄褐色の礫混じり砂層である。基質は灰褐色の粘土質シルトを多く含み、固く締りがよい。礫は径 10mm 以下が主であるが、径 10～30mm 大のものも含まれる。BP 第 5c 地点北側に広く分布し、旧石器時代から縄文時代早期の土器と石器が出土している。1b 層はにぶい黄褐～明褐色シルト層で粘性があり締りがよい。全体的に白色粒子が点在し、炭化物を少量混入する。BP 第 5c 地点 TR3 では 1b 層と 1c 層の間にやや色調の暗い暗褐～茶褐色のシルト層を挟み、野尻湖調査団区分の [BB] 層準に相当すると思われる。1c 層は黄褐灰色砂質シルト層である。砂質の部分は黄灰白～黄褐色で、褐色シルトとブロック状に混合する部分もあり、固く締りがよい。1a 層の砂質部分との区別は難しい。径 2mm 以下の白色粒子を全体に混入する。2 層は基質が砂の黄褐色～灰白色砂礫層で、径 5mm～20mm の円礫を混入する。径 10～20mm の円礫が集中する礫質な部分もあり、まれに径 10cm 以上の垂角礫も混入する。層厚は 20～40cm で級化層理^(註2)が観察される部分もある。TR4 付近ではやや灰色の硬く締まった砂礫層 (2 層と認識) が境界を不明瞭にして広がっているが、この部分から土器は出土していない。

② 仲町砂礫層中部 (BP 第 5a 地点の 2 層～5 層、BP 第 5c 地点の 3 層～6a 層)

従来の [スナガラ]、[黄灰色シルト] に該当する。第 5a 地点から第 4 地点北端の広域に分布するが、北側はカツレキ層に比べ分布範囲が縮小する。南縁は BP 第 4 地点の舌状に張り出した丘陵部の裾野まで分布する。(第 6 図)。

第 5a 地点では 2 層～5 層に区分される。2 層は層厚 10～20cm の黄灰色のシルト層で、TR4 南側などで欠落するところでは、1 層と 3 層の分層を困難にしている。3 層と 5 層は灰～灰褐色の砂質礫層で、礫径は 1～3cm の垂円礫を主体とし基質は中～粗粒砂からなる。細粒砂やシルト層とラミナを形成しながら砂礫層からシルト層への級化層理が認められる。側方変化が激しく面的にはとらえられない。4 層は 2 層に類似した灰黄色砂質土～シルトで、調査区の北西部にのみ分布するため、4 層が存在しないとこころでは 3 層と 5 層の分層は困難であり、遺物の取上げ層位は 3～5 層とした。BP 第 4 地点北端の砂礫層に、わずかに AT が認められたが、土壌サンプルの分析結果によると前後の土層は 2 次堆積の可能性が指摘さ

註 1 同一層内の水平方向の変化。

註 2 単層において、基底から上方に向かって粒度が次第に細粒となる堆積状態。

れており、第5a地点でのATの層順は確認できない。シルト層と砂礫層が互層に堆積していることから、砂礫層が堆積する流路全体にわたり細粒物質のシルト層を堆積させるような環境、すなわち、滞水状態があったものと考えられる。

BP第5c地点では3層～6a層に区分される。3層は層厚5～10cm程度にぶい黄褐～黄灰色のシルト層で粘性があり、4層上面に部分的に認められ、褐色を呈する部分もある。径3mm程度の炭化物が集中する部分も検出されているが、焼土はなく、性格は不明である。4a層は基質が泥質で茶褐色を呈し、C8区南側4b・4c層の上層に分布し、[ドロガラ]相当層の可能性もある。4b層は黄褐色の砂質土でスコリア質の礫やシルトを挟在し、4c層との境は不明瞭である。4c層は基質が中粒砂の黄褐～褐色の砂礫層で、締りはややゆるい。礫は径1～2cm程度で、礫質部分と中～細粒砂質部分など側方変化が激しく、級化層理も観察できる。4層群の層厚は40～80cmである。5層はにぶい黄橙～黄灰色のシルト層で締りはよく、白色、黒色の粒子を混入する。BP第5c地点TR5では、間に黄白～白色のガラス質細粒火山灰[ヌカ(AT)]をだんご状に挟む状況が確認された。6a層はにぶい黄褐色砂礫層で、スコリア質火山礫やシルト～細砂が主体となる部分や級化層理のみられる部分が認められる。ガラス質細粒火山灰(AT)の確認されない所では4層との分層は明確ではなく、6a層とした部分が仲町砂礫層下部に相当する可能性もある。

③仲町砂礫層下部(BP第5a地点の6層～10b層、BP第5c地点の6b層～8層)

従来のスコリア質砂礫層に該当する。その分布範囲を第6図に示した。BP第5a地点9層上面とBP第5c地点7層上面や8層中のシルト層上面ではオオツノシカなどの偶蹄類の足跡と思われる窪みが多数検出された。

BP第5a地点では6層～10b層に区分される。6層は8層を挟むことから9層とは区分されるが、8層の欠如している部分では6層と9層は連続しており分層できない、9層は有機物の含有の度合いによって色調が灰褐色～黒褐色に移行すると考えられる。9層の層厚は数cm～10cmほどであり、6層と連続している部分では最大30cmになる。7層は仲町砂礫層中部[スナガラ]の削り込みの縁にみられる褐灰色スコリア質火山礫混じりシルト層で、6層・8層・9層と同時異相と思われる。6層・9層と異なり均質なシルト層ではなく多少粘性があり、混入物もある。TR5の一部分のみに見られる。8層は比較的径のそろった粗粒砂～細礫大の白～橙色のスコリア、火山礫が密集した層である。基質が部分的にシルトとなる所は締りが悪い。層厚数cm～10cmであるが、TR8とTR9の交点付近では層厚50cmほどが確認された。10a層は灰白色のシルト層中に細粒砂の薄層を挟むもので、9層に漸移する。火山礫やスコリアは含まない砂質シルト層でラミナの発達する部分もあり、上位の9層と比べ全体的に砂質である。層厚は5～10cm、C7区でやや厚く20cmである。10b層はスコリア質火山礫を多く含む灰～灰褐色、黄灰色の砂礫層からなる。層厚は最大で約40cmで、基質は中粒～極粗粒の砂で、礫は径5mm～2cm大のスコリア質火山礫や垂円礫である。シルトや砂の薄層を挟み、部分的に下位の下部野尻湖層(10c層・10d層)を削って堆積しており、TR8ではその様子が観察できる。この削り込みによってBP第5a地点では中部野尻湖層が欠如していると考えられ、場所によってはさらに下位の下部野尻湖層Ⅲに相当する11a層や下部野尻湖層Ⅰの[三点セット][ノミ]層準も削り込んで、不整合に覆っている。また腐植物、木片を多く含む特に調査区北側に木片が多い。

BP第5c地点では6b層～8層に区分され層厚は約70～80cmである。6b層は黄褐～褐色の砂礫層である。基質はシルト～細粒砂で、全体に礫質部分と砂質部分など側方変化が激しい。スコリアやスコリア質砂礫を多く含む部分もあり5層が認められない部分では4層との分層は難しい。層厚は区分できたところで10～20cm、最大50cmである。調査時に6層(6a層)とした部分も仲町砂礫層下部である

可能性がある。TR1では8層とともに上部野尻湖層Ⅰと中部野尻湖層を削りこんでいる状況が確認されたので、この部分は下部に属するものと考え6b層とした。7層は黄褐色の粘土質シルト層で、部分的に泥炭質の部分もあり、砂の薄層やスコリアを挟むこともある。層厚は5～15cmである。8層はスコリアや石質火山礫を多く含む砂礫層である。黄灰～黄褐～灰色の中～粗粒砂を基質とし、径0.5～1cm大のスコリア、石質火山礫を主体とする礫質部分や砂を主体とする部分、砂層とシルト層が互層となる部分など側方変化が激しい。まれに径20cm前後の礫を混入することもある。

仲町砂礫層下部[スコリア質砂礫]は上部野尻湖層Ⅰおよび中部野尻湖層をNW—SE方向に削って堆積しており、BP第5c地点北側(C8区北側と県道3・4区)には存在しない。

④仲町砂礫層の形成

特に仲町砂礫層下部では、厚く堆積した砂礫層の中にシルト～粘土層を薄く挟在したり、砂礫層が泥炭層に移化したりする様子が池尻川低地に近い部分で観察されている。これは一時的に起きた洪水により砂礫層が形成されただけでなく、泥炭層を堆積する状況にある低地に、少量の砂礫が何度かにわたり供給されたものと考えられる。仲町砂礫層下部[スコリア質砂礫層]は、上部野尻湖層Ⅰや中部野尻湖層を削って堆積しているのがBP第5c地点で確認されており、中部野尻湖層が堆積した後、BP第5b地点付近を中心とした流路が形成され、そこに堆積したものと想定している。続く仲町砂礫層中部の[スナガラ]はBP第5a地点から第5c地点を広く覆って堆積し、池尻川低地に近い部分ほど厚くなっている。

BP第5a地点の標高の高い部分とBP第5c地点の南側には仲町砂礫層上部の[カツレキ]の堆積がみられない。この部分には[スナガラ]が台地状に残った可能性も考えられ、[カツレキ]を堆積させた流路が分化したか、別の流路である可能性も考えられる。すなわち、BP第5a地点とBP第5c地点では包含される遺物の時期が異なっており、両地点の仲町砂礫層上部の[カツレキ]は堆積時期が異なる別ものであると考えられる。

また、仲町砂礫層には多量の遺物が出土しており、これらの遺物や砂礫はどこからどのようにして供給されたものであろうか。今回の調査により仲町砂礫層の分布域が明らかとなったが、野尻湖と池尻川低地との標高差は少なく、短い距離で多量の砂礫が池尻川低地に運ばれてきたことに疑問が残る。仲町丘陵の隆起ともない狭窄部が埋積して古野尻湖が堰き止められたことにより水位が上昇し、洪水が一気に起きたのではないだろうか。これにより生活面が洪水によって流されたことと砂礫層中の多量の遺物も説明でき、繰り返した小規模な洪水により遺物が磨耗した可能性も考えられる。

仲町丘陵が隆起した先端部分にあたるBP第5c地点の4区ではNE—SW方向の断層が確認されており、これを境として仲町砂礫層中部の[スナガラ]の堆積はみられない。この断層より東では仲町砂礫層上部[カツレキ]が下部野尻湖層Ⅱにあたる三点セットを不整合に覆っている状況が観察されている。

なお、BP第5d地点では仲町砂礫層に対比される旧石器時代から縄文時代草創期の河川性の堆積物は存在せず、南北に伸びる窪地では縄文時代後期から弥生時代の砂礫層が確認された。その上に平安時代から近世に至る包含層や整地層が形成されている。これらの土層の詳細は第6節に記述するが、遺物包含層より下位の土層は観察していない。

(2) 上部野尻湖層Ⅰ (BP第5c地点の9層)

BP第5c地点のみで確認された。中部野尻湖層の上位に分布が確認された。水成層で



層厚は約30cm。9層上部は紫灰色細粒火山灰〔上Iピンク〕をブロックで混入するにぶい黄褐色シルト層で、全体に締りは悪く粘性も下部と比べ少ない。上部には泥炭質となる部分もみられる。9層下部は灰白色粘土質シルト層で粘性が強く締りもよく、上部と下部の境界付近は赤褐色に変色している。調査区南端付近で上部野尻湖層は伸町砂礫層下部〔スコリア質砂礫〕によって削られていることが確認された(第5図)。

(3) 中部野尻湖層 (BP第5c地点の10a層～14b層)

主にBP第5c地点のC8区に分布する。10a層～14b層に区分される。ナウマンゾウと推定される足跡を10層群下面で検出した。なお、中部野尻湖層は調査区の南端付近で前述の伸町砂礫層によって削られた状況が確認された(第5図)。

10層群は赤褐色スコリア質火山礫層〔赤スコ〕で、層厚は約80cmである。10a層は基質が淡黄褐色のシルト層で、〔赤スコ〕の再堆積層と考えられる。10b層の上位には基質がシルト質の再堆積層が全面に観察されることから10a層堆積時にはシルトを堆積させるような水辺であったと想定されよう。10b層は10c層の上位に分布しているが、ナウマンゾウの足跡は10b層掘り下げ中に検出され、踏み込み面はこの層中にあると考えられる。10c層は鉄分が沈着し、赤褐色に変化して硬く締まった部分である。11層は紫灰色細粒火山灰〔中IIピンク〕をレンズ状またはダンゴ状に挟む灰色シルト層で、ラミナが発達し、上位のナウマンゾウ踏み込み面と平行にラミナが変形している様子が観察された。また10c層との境では赤褐色に変色する部分もみられる。12層は輝石の単結晶の目立つ赤褐色スコリア質火山礫層〔ニセノミ〕である。13層は紫灰色細粒火山灰〔中Iピンク〕をレンズまたはダンゴ状に挟む黄灰色シルト層で、〔ニセノミ〕の小ブロックを混入する部分も見られる。14a層は黄灰色シルト～灰色シルト層を基質とし、青灰色の火山礫を多く混入しており、〔青ヒゲ〕の再堆積層であると考えられる。14b層は褐色スコリア混じりの青灰色火山礫〔青ヒゲ〕のブロックで、固く締まっておりますに白色軽石を混入する。

BP第5a地点では水成層の中部野尻湖層は微高地の一部で確認されたのみである。TR9の壁断面ではBP第5c地点同様に下位より褐色スコリア質火山礫まじりの青灰色火山礫層〔青ヒゲ〕が灰褐色シルト層中にブロックで混入し、灰褐色砂質シルト層中には紫灰色細粒火山灰〔中Iピンク〕がレンズ状に認められた。さらに黄褐色シルト層中に〔ニセノミ〕、紫灰色細粒火山灰〔中IIピンク〕、赤褐色スコリア質火山礫〔赤スコ〕が黄白色砂火山礫まじりシルト層中にブロックで挟まれる様子が確認された。ここでも降下火砕堆積物は塊状に断続的に分布しており、BP第5c地点と同様にナウマンゾウの足跡痕跡の可能性が考えられる。層厚は最大で60cmである。

同時期の風成層である中部野尻ローム層中の鍵層は現地形でも標高の高くなるBP第5a地点南端からBP第4地点微高地部で確認されているが、堆積の状況からみて再堆積と思われる。

(4) 下部野尻湖層Ⅲ (BP第5a地点の10c層～12層、BP第5c地点の15層～16層)

BP第5a地点では、10c層～12層に区分される。10c層(スコリア質火山礫混じり黄白色シルト質砂礫)・10d層(スコリア質火山礫混じり灰白色砂礫)の基質はシルト質で、腐植物、木片を多く混入しラミナを形成し、BP第5a地点の北側の一部分にのみ分布する。11層上面の凹凸部を埋めるような堆積状況がみられ、層厚は最大で40cmである。11a層(火山礫混じり灰白色シルト層)は、層厚15～40cmほどでBP第5地点北側のTR8沿いをのぞきほぼ全域に分布する。〔プレッシャーゾーン〕を挟まない部分では、11b層から漸移している(TR9・TR3・TR4・TR5)。灰色、白色の火山礫(径5mm)が全体に散る部分やシルト主体の部分、火山礫主体の部分があり、淘汰は悪い^(註3)。11b層(火山礫混じり泥炭～泥炭質シルト)は青灰色、灰色、白色の火山礫(径5mm)を混入し、池尻川低地に近い部分では上面の凹凸が激しいが、

註3 砂や礫などの粒径がそろっていない状態。

標高が高くなるにつれて層厚数 cm 程度の薄層となる。TR8 では、11b 層上面の凹凸を埋めるように青灰～灰色の安山岩(角閃石-輝石安山岩)の角礫(径 5 mm～15 mm)が堆積している。礫種から[プレッチャーゾーン]に対比される。プライマリーなものと考えられる部分と基質が泥炭質シルトとなるような部分が見られる。層厚は 30cm。スコリア質砂礫層流路の縁の一部に[プレッチャーゾーン]のブロックが認められた。また、BP 第 4 地点東壁では下部野尻湖Ⅲ層中の[プレッチャーゾーン]が観察されている。12 層(灰色砂礫)は調査区北半分で厚く、層厚約 40cm である(TR8・TR9・TR3)。ラミナの発達した細粒砂～細礫を主体とし、腐植物や木片を多く挟む。また標高の低い部分では泥炭質のシルト～細粒砂をラミナ状に挟む。12 層の上位は 11b 層の火山礫混じり泥炭～泥炭質シルト層に漸移する。

BP 第 5c 地点では下位より 16 層(灰～灰褐色砂礫)と 15 層(褐灰色砂質シルト層)に区分される。15 層・16 層は BP 第 5a 地点 11 層・12 層に対比されるが、10c・10d 層に対比される層は不明である。15 層は径 5 mm の白色粒子や細礫を多く混入し、角閃石安山岩の小礫も含まれる。所々ビート質となり、木片を混入している部分もみられる。

(5) 貫ノ木層 (BP 第 5a 地点の 13 層) (BP 第 5c 地点)

青灰色～灰白色の礫混じり中～粗粒の砂層、砂質シルト層からなる。淘汰はよい。BP 第 5a 地点 TR8 では、TR4 との交点付近から西側に傾斜して堆積する様子が確認できる。白色の岩片を多く含む灰白色の粗粒砂層で、層相から[灰ザラ]か[白ツツ]層準に対比されるものと思われる。その東側では琵琶島沖泥炭層上面の凹凸を埋めている様子も見られる。同様な様子は TR3・TR9 の深掘り地点などでも確認できる。また BP 第 4 地点東壁断面や北壁断面でも角閃石安山岩の岩片を含む灰～青灰～黄灰色の粗粒砂層や、淡紫色の火山灰質の中～細粒砂層が確認された。それぞれ層相から[灰ザラ]と[スミレ]に対比される。BP 第 5c 地点でも、層相から[灰ザラ]・[白ツツ]に対比される鍵層が西側に傾斜する状況が確認されている。貫ノ木層は下部野尻湖Ⅲに不整合で覆われる。

(6) 池尻川泥流堆積物

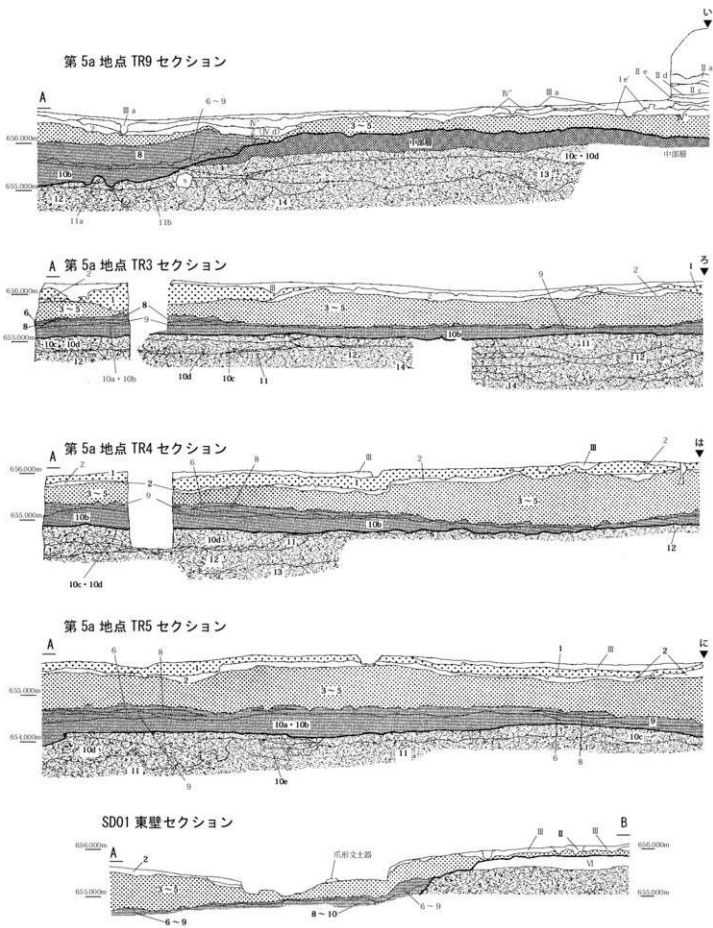
灰色砂礫層からなり、層厚は 30～50cm。暗褐色、紫灰色の安山岩(輝石安山岩、角閃石安山岩)の円礫や灰色の輝石安山岩の垂角礫を含む。礫径は 5～20cm である。基質は灰～灰褐色の粗粒～中粒砂であり淘汰は悪い。BP 第 5c 地点では下位の琵琶島沖泥炭層を不整合に覆う泥流堆積物が確認されている。やや泥質の基質で、池尻川泥流堆積物に特徴的な紫灰色の安山岩巨礫を混入し、上位に貫ノ木層が重なることから池尻川泥流堆積物と判断した。BP 第 5a 地点では明確に池尻川泥流堆積物といえるものは確認されていない。BP 第 5a 地点では 10a・10b 層発掘後の調査終了面に礫径 20～40cm、大きいものでは径 60cm を超える灰色の輝石安山岩の垂角礫が確認された。これらの礫は、池尻川泥流堆積物または下部野尻湖Ⅲの巨礫を含む灰褐色砂礫層中の礫が削られずに残されたものであると考えられる。

(7) 琵琶島沖泥炭層 (BP 第 5a 地点の 14 層)

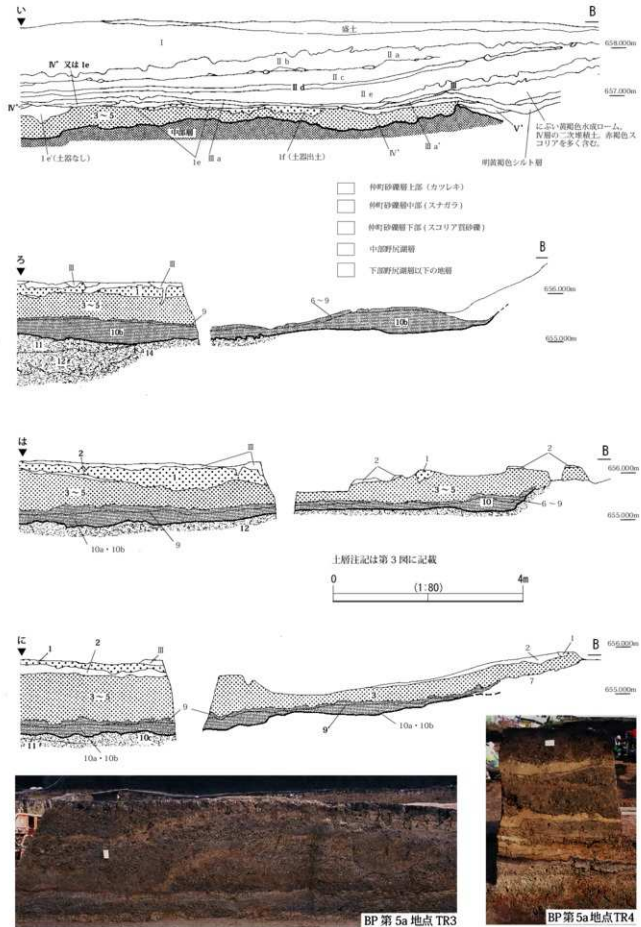
調査区内ではほぼ全域で確認されている。暗褐色泥炭質シルト層および泥炭層からなり、BP 第 5a 地点の深掘りトレンチでは全体的に北東側に傾斜し、層厚 2m 以上が確認された。また BP 第 5c 地点の深掘りでは鍵層である軽石質細粒火山灰[キピオコシ]が確認された。本層の上面は凹凸が激しくその窪みを埋めるように泥流堆積物、貫ノ木層、下部野尻湖Ⅲが不整合で覆っている。上位の地層がほぼ水平堆積しているのに比べ琵琶島沖泥炭層は傾斜して堆積している。層内部の堆積構造も異なり、堆積後に構造的な力が加わったものと考えられる。

参考・引用文献

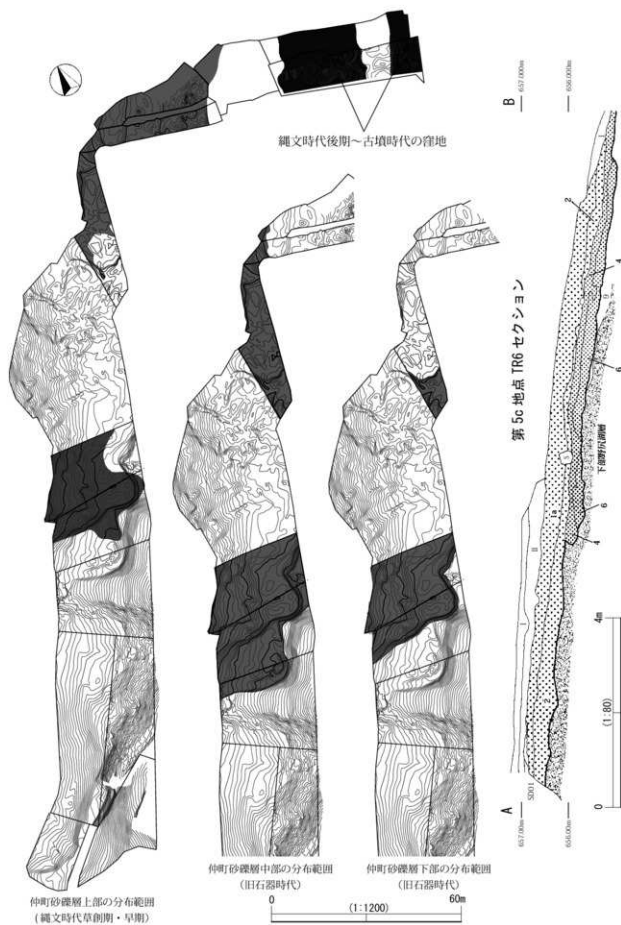
- 花岡邦明 2003 「仰町遺跡発掘地の地質」『シンポジウム「3 万年前の仰町丘陵を描く」発表要旨』信濃町教育委員会
渡辺哲也 2002 「信濃町仰町遺跡の調査」『第 14 回長野県旧石器文化研究交流会 発表資料』



第4図 BP第5a地点トレンチ土層断面図



第4図 BP 第5a 地点トレンチ土層断面図



第6図 仲町砂礫層の分布とBP第5c地点の土層断面図(2)

地層区分	凡例	鍵層・特徴	野尻湖発掘調査団の層相説明	本報告書土層名				
				BP第5a地点	BP第5c地点			
柏原黒色 火山灰層		キビダンゴⅡ キビダンゴⅠ	黒色軟質火山灰 (ダンゴ状に黄灰色火山灰層を2枚挟む)	Ⅱ	Ⅱ			
仲町砂礫層	上部	カツレキ	暗褐色細粒風化火山灰	Ⅲ b	Ⅲ ⅢⅠ a			
			灰褐色シルト～砂					
			黄褐色細粒風化火山灰					
	中部	[スナガラ]	明黄褐色細粒風化火山灰	1 (A)	4 5 6a 6b			
			暗褐色シルト～砂 (暗色帯)					
			明白色シルト					
			褐色砂礫 (3枚以上)					
			黄灰色シルト～砂			2 (B)		
			(スナガラとは同時異相で境界は不鮮明)			3 4 5 6	7 8 9	8 10a (E1) 10b (E2E3)
			火山礫混じり細礫～粗粒砂					
(黄灰色シルトを挟む数層)								
下部	[スコリア質砂礫]	黄灰色ガラス質中～粗粒火山灰	6 (D1)	7 8 9 10a (E1) 10b (E2E3)	7 (え)			
		足跡状くぼみ						
		暗灰褐色シルト～粘土 (泥炭層に移り変わり、スコリア質砂礫を挟む)						
		灰褐色スコリア質火山礫混じり砂礫						
上部 野尻湖層	Ⅰ	上Ⅰピンク	灰褐色シルト (紫灰色細～中粒火山灰を挟む。 下半部は白色シルト)	9	10			
			赤スコ					
中部野尻湖層	Ⅲ	足跡状くぼみ	赤褐色スコリア質火山礫層	11	12			
			中Ⅱピンク					
	Ⅱ	ニセノミ	暗褐色泥炭、灰褐色シルト、灰褐色砂礫 (紫灰色細粒火山灰を挟む)	13	14			
			足跡状くぼみ					
Ⅰ	中Ⅰピンク	赤褐色スコリア質火山礫層	15 (か)	16				
		暗褐色泥炭、灰褐色シルト、灰褐色砂礫 (紫灰色細粒火山灰を挟む)						
下部野尻湖層	Ⅲ	ナウマンゾウ白歯 青ヒゲ	褐色スコリア混じり青灰色火山礫層	10c (E4)	11 (F) 12 (G)			
			礫混じり灰色シルト～泥炭層	10d (E5)				
			灰褐色砂礫	10e (E6)				
			灰褐色シルト	11 (F)				
			暗褐色泥炭質シルト	12 (G)				
貫ノ木層			灰褐色砂礫	13				
			礫混じり泥炭質シルト					
琵琶島沖 泥炭層		キビオコシ	灰色中～粗粒砂	14				
			暗褐色泥炭層 (白色軽石質火山灰を挟む)					

() 内の層名はBP第5b地点との土層対比をするために便宜的に付した土層名。

図は信濃町教育委員会2003『公開シンポジウム3万年前の仲町丘陵を描く』に加筆した。

第7図 BP第5a・第5c地点の区的地質層序

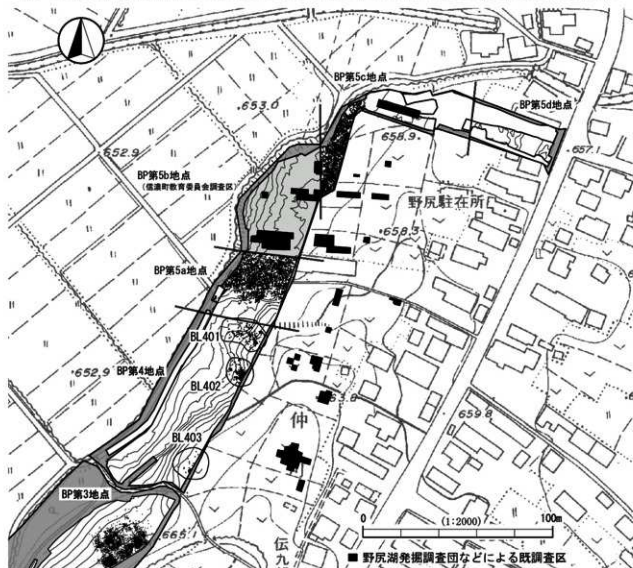
第2節 BP第4地点の旧石器時代の遺構と遺物

1 調査の概要

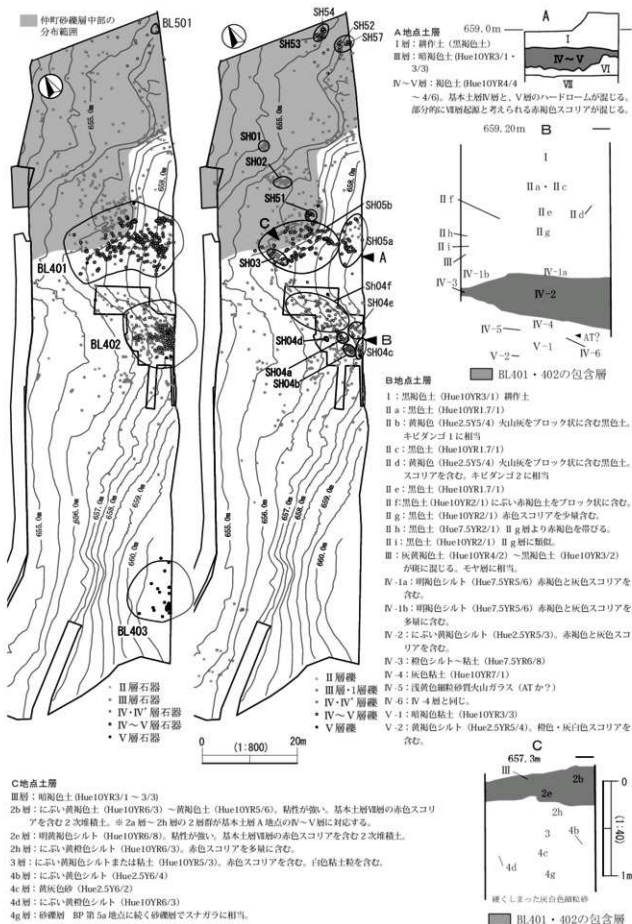
BP第4地点は丘陵の西斜面にあり、3箇所のブロックと10箇所の礫群を確認した(第9図)。第8図にBP第4地点および第5地点の旧石器時代の石器、剥片、破片の出土地点を示した。両調査地点では縄文時代の遺物も出土しており、出土層位および形態から明らかに旧石器時代の遺物と判断できるもののみを示した。なお、第5a・第5c地点の遺物密集部分は砂礫層中の遺物であり、磨耗したものも多く、原位置をとどめていないと考えられる。第5d地点では、縄文時代の遺物包含層から旧石器時代の遺物が出土しているが、出土地点の記録は行っていない。第5地点の詳細は第3節に記述した。

BL401とBL402が分布する丘陵の張り出しと谷部はⅢ層を除去したところで確認したもので、現地表では確認できない埋没地形である。調査区内の等高線は、Ⅲ層と旧石器時代のスコリア質砂礫層・スナガラ層^{註1}などの砂礫層を除去した地形を示している。BL401とBL402はスナガラ層堆積後の遺構であるか

註1 スナガラ層は野尻湖発掘調査団の地層呼称で、C地点の4g層に当たる。調査団の層名との対比を第1節第1表に示した。



第8図 第4・第5地点の調査範囲



第9図 第4・第5a地点層位別遺物出土状況とBP第4地点の基本土層

ら、厳密にはブロック形成時の地形とは微妙に異なる部分がある。なお、第9図のBL402の調査範囲はIV層群を掘り下げた範囲である。

BP第4地点の土層は、BP第1～3地点の丘陵頂上部の基本土層とは異なっており直接対比できない部分がある。第9図に3ヶ所の土層柱状図を示した。丘陵縁辺のA地点ではIII層が欠落し、基本土層のIV層～Vb層が混在した2次堆積層が認められる。斜面下方のC地点では、シルトや粘土の水成層が認められ、便宜的に算用数字で土層名を付した。水成層である2b～2e層はスナガラム層の上位にあることからIV層に対比されると考えられるが、第9図では水成層出土の遺物もIV～V層として示している。谷部のB地点では、IV・V層群がシルトまたは粘土の水成層であるため、丘陵部の基本土層とは直接対比できないが、色調および出土遺物より判断して、灰色部分（IV層群）と暗褐色部分（V層群）がそれぞれ風成層のIV層とVb層に対応すると考えられる。

2 ブロックと礫群

第9図にBP第4・第5a地点の石器群と礫群の分布状況を示した。BP第5a地点では砂礫層中に縄文時代草創期～旧石器時代の多量の遺物が含まれているが、それらは第3・4節で扱うこととし、分布図には提示していない。また、II層・III層の遺物の中には縄文時代草創期～前期の剥片や破片が含まれるが、分離できなかったため合わせて報告する。BL501、SH52～54・57はBP第5a地点の遺構であり、詳細は第3節で触れる。SH01・SH02は出土層位から判断して、縄文時代草創期～早期の礫群である。

(1) ブロック

BL401・402 (第11・12図、第1・2表)

BL401とBL402はいずれもIV層に生活面をもつ石器群で、器種組成や石材組成が類似し、石器群の形態的な特徴も近似しているため同時期の石器群と判断した。但し、ブロック間の接合は確認できなかった

(第11図)。礫群SH04a～04f、SH05a・05bは、出土層位と分布範囲から、これらのブロックに関連した遺構であると判断した。

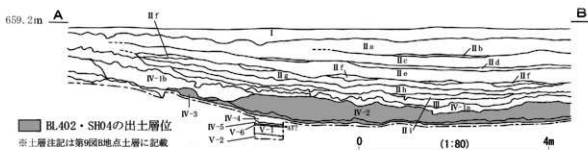
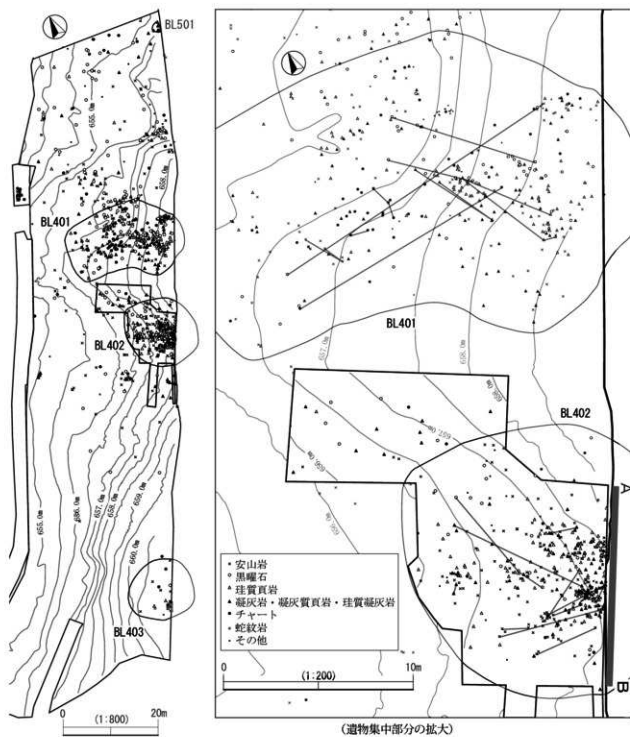
遺構名	黒曜石	凝灰岩	花崗岩	白石英	花崗岩	硬砂岩	軟砂岩	花崗岩	凝灰岩	花崗岩	白石英	花崗岩	凝灰岩	花崗岩	白石英	花崗岩	合計
BL401	47	76	89	6	2	25	32	6	47	1	4	24	360				360
BL402	20	190	108	5	5	20	58	27	8	1	8	7	3	2	462		462
BL403	1	0	3														37
BL501						18											18

遺構名	黒曜石	凝灰岩	花崗岩	白石英	花崗岩	硬砂岩	軟砂岩	花崗岩	凝灰岩	花崗岩	白石英	花崗岩	凝灰岩	花崗岩	白石英	花崗岩	合計
BL401	18	102	174	65	1												360
BL402	12	100	346	4													462
BL403															7	30	37
BL501	4	14															18

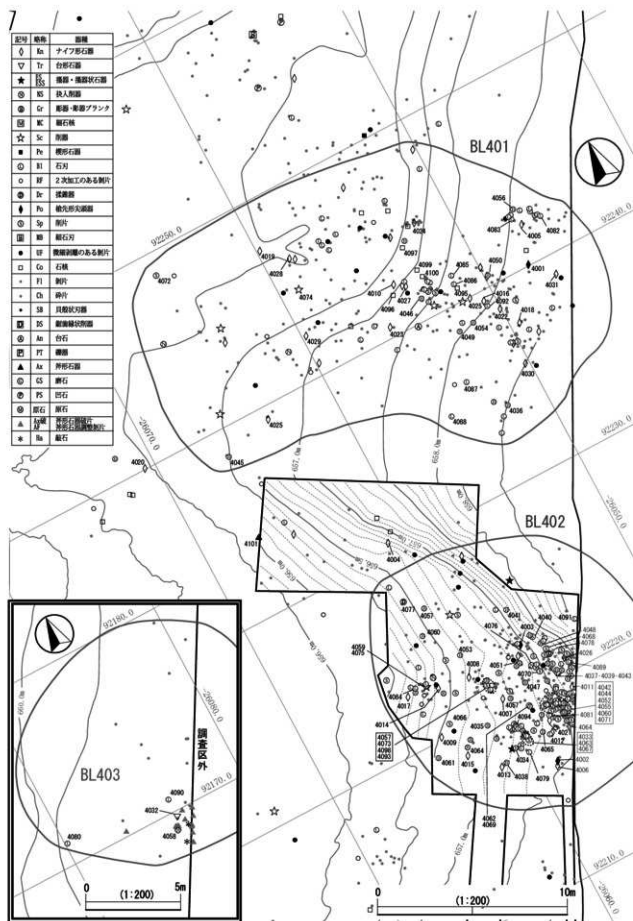
「破片」は全体の形状がわからない小破片。「接破」は欠損した石器に接合したものを示す。

第1表 BP第4・5地点のブロック別石材組成・器種組成・層別別出土点数と黒曜石産地推定集計





第11図 BP第4地点の石材別分布図と接合関係およびBL402南東壁セクション



層別別の点数を第3表に示した。

SH03

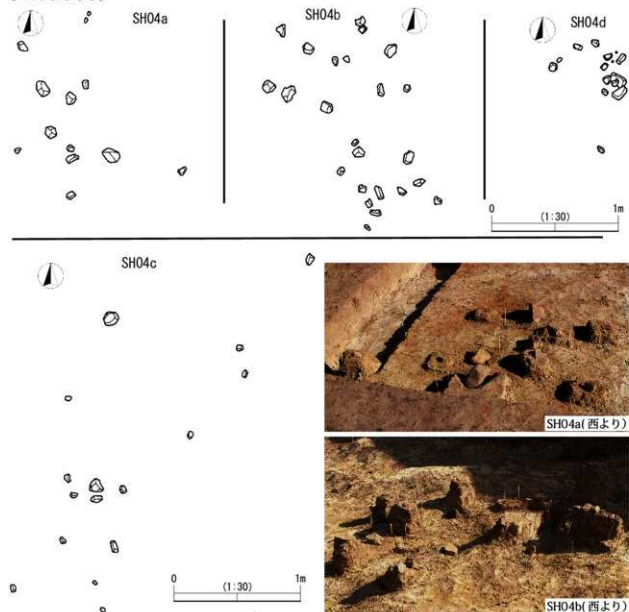
Ⅲ層に生活面が想定され、旧石器時代末から縄文時代草創期の礫群である可能性がある。SH03の範囲より種子柴型磨製石斧(6019)が出土した。詳細は第4節で記述する。

SH04a～04f(第9図・13図)

いずれもⅣ層群より出土したもので、a～dは谷部の平坦面にそれぞれがまとまった状態で出土しており、原位置を保っていると判断した。SH04e・fは斜面に散漫に分布するもので、斜面上方より落下してきた可能性が高い。欠損品が多いが、拳大の礫を用いているものが多い。

SH05a・05b(第9図)

丘陵頂上部の縁辺に比較的密集する分布を示したものをSH05aとし、それ以外の斜面部のものをSH05bとした。斜面部のⅢ層から土器が出土しており、縄文時代の礫が含まれる可能性があるため、明確に旧石器時代と断定できるⅣ層出土のもののみを便宜的にSH05bとした。出土層位に偏りがあるのはそのためである。



第13図 BP第4地点礫群

3 出土遺物

(1) 石器 (第14～27図、PL5～PL8)

剥片石器 294 点、礫石器が 5 点、石核 20 点、剥片・碎片 663 点が出土した。器種組成と石材組成を第 1・4 表に示した。BL402 の層位別器種組成を第 2 表に示し、BP 第 4 地点全体の層位別器種組成は添付 CD に収録した。器種名、石材、出土層位、ブロック名などは遺物図版の遺物番号の下に表記した。表示内容は巻頭の凡例を参照していただきたい。その他の属性は添付 CD の遺物台帳を参照していただきたい。

1. 槍先形尖頭器 (4001～4003)

3 点出土。いずれも欠損品である。4003 は粗雑な調整加工であり、製作途上で欠損した失敗品であろう。BL401・402 の範囲内より出土したが、いずれもⅢ層出土であり、他の石器群と同時期のものであるとする層位の根拠に乏しい。

2. ナイフ形石器 (4004～4031)

43 点出土した。このうち 2 点は小破片である。第 4 地点のナイフ形石器は大きく 3 つに分類される。

A 類 (4004～4016) : 石刃または縦長の剥片を素材とし、基部と頭部を尖らせた杉久保系のナイフ形石器。調整加工は基部と頭部に限られるもの、側縁全体に及ぶものがある。

B 類 (4024～4031) : 石刃の軸に直交もしくは斜交したブランティングがあるもの。ブランティングは主剥離面より加工が施され (正方向の剥離)、基部加工はほとんど見られず、石刃の打面が残存するものが多い。類例は貫ノ木遺跡・七ツ栗遺跡などで報告されている。

C 類 (4017～4023) : 石刃または縦長の剥片を素材とし、A 類・B 類に分類できないものを一括する。

A 類が 15 点、B 類が 9 点、C 類が 13 点、欠損品のため分類不能が 6 点である。なお、B 類は彫器ブランクとしたものに調整加工部位や平面形態が類似するが、彫器の打面調整にみられる背面からの調整加工 (反方向の剥離) がなされたものを彫器ブランクとし、ナイフ形石器とは区別した。B 類は貫ノ木遺跡・七ツ栗遺跡などで確認されており、その分類を踏襲した。器種分類の再検討が必要である。

4009 は素材剥片の主剥離面を保持する大形の削片を素材としており、側面形態がかなり湾曲する特異な資料である。

3. 台形石器 (4032)

1 点出土。素材剥片の打面を残し、主剥離面からの基部加工が施されている。刃部の剥離は調整加工で

石材	器種別													合計	層位別					合計														
	ナイフ形尖頭器	ナイフ形石器	ナイフ形片	ナイフ形破片	ナイフ形碎片	ナイフ形剥片	ナイフ形削片	ナイフ形残片	ナイフ形破片	ナイフ形碎片	ナイフ形剥片	ナイフ形削片	ナイフ形残片		Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ・Ⅵ	合計															
燧石	1	11																90	10.28	82.38	65.92	103.88	25.39	280.93										
黒曜石	1	3																321	40.54	124.88	95.29	111.85	83.4	285.55										
珪質頁岩	14	1	13	4	1	27	3	1						18	2	6	96	17	1						204	30.54	407.3	847.55	535.50	14.91	988.36			
珪質凝灰岩	2																	19	0.52	47.55	126.46	128.12			176.17									
土曜																		7	6.89	13.21	29.42	29.42			49.52									
凝灰質頁岩	5		5	1	1				12	3	20							47	23.69	115.6	207.38	210.13			349.42									
凝灰岩	1	6		1	1	6	1	4			2	74	10	2				108	204.9	907.67	250.38	312.48			1425.07									
緑色凝灰岩									6		2	10	10					33		5.61	60.92	160.15			165.76									
チヌート	1	4	1	1					2	1	2	44	8	8				75	18.56	121.65	144.49	1570.5	52.03	1762.74										
砂岩															2			1	5	14.89	6.19	65.29			162.64									
凝灰岩																		18							111.87									
緑心岩																		1		34.91						34.91								
ホルンフェルス																					53.64	53.64			53.64									
砂岩																		1	105	57.57	148.70	148.70			311.33									
頁岩																		1	0.65	25.43	14.71	14.71	10.71		51.48									
礫石(凝灰岩)																									35.39									
不明																										299.26								
不明	3	41	1	2	1	36	2	11	7	50	2	18	4	2	1	69	3	19	32	552	111	18	2	1	1	1	987	829	3078.9	2679	4960	32	186.4	1064.04

「破片」は全体の形状がわからない小破片。「残片」は欠損した部分に接合したものを示す。

第4表 BP第4地点旧石器器種別・層位別石材組成

はなく、使用による剥離であろうか。

4. 彫器 (4033～4059)

36点出土。彫器は石刃または石刃状の縦長剥片を素材にしたものが多い。反方向の剥離による調整加工で打面を作出し、彫刀面を正面図左側面に形成するものが多い。4043・4048・4056～4058は右側面に彫刀面が作出されるまれな例である。彫刀面は剥片の主軸に斜交するもの(4033～4036・4042～4047・4055～4057・4059)と主軸に併行するもの(4037・4048～4054・4058)がみられる。

以下に、写真掲載したもののみを解説する。4034は打面を残す縦長の剥片を素材とし、その先端部に、反方向の剥離により打面を作出し、主軸に斜交する極状剥離がなされる。4041は欠損品であるが、石刃と思われる縦長の剥片の先端部に、反方向の剥離で打面を作出し、極状剥離をなす。4049・4051は石刃の先端部に反方向の剥離により作出された打面より、極状剥離がなされるが、4049は石刃の打面は欠損している。4052は石刃の打面部に左右両側縁に交差する極状剥離を有し、先端部には彫器ブランクと同様の反方向の剥離による調整加工が認められる。4057は背面に極状剥離が認められ、正面図右側縁に、極状剥離より新しい連続した小剥離が認められる。また、4044は削片を素材とした特殊な例である。

5. 彫器ブランク (4060～4065)

11点出土。石刃の打面側または先端部に、反方向の剥離の調整加工がなされるもの。4049・4050の彫器が存在することから、調整加工は極状剥離のための打面を作出したものであると判断した。また、同様な部位に正方向の剥離の調整加工がなされたものはナイフ形石器B類と分類した。本地点の出土遺物には、正方向の剥離による極状剥離の打面作出は認められなかったため、便宜的にナイフ形石器と彫器ブランクとに分類したが、器種分類の検討を要する。

6. 削片 (4066～4073)

50点出土。素材剥片の主剥離面を保持するA類(4066～4071)と、素材剥片の主剥離面を保持しない細石刃状のB類(4072・4073)が認められる。A類が48点、B類が2点である。A類は側縁部に連続した調整加工が認められるものが存在する。これらの調整加工の意図するところは不明であるが、削片作出より古い調整加工と考えられる。また、5cmを超える大形のものがあるなど、A類の中には彫器の削片とは異なるものが含まれていると考えられる。

7. 削器 (4074・4075)

8点出土。4074は打面部に調整加工がある。4075は削片先端部に反方向の調整加工があり、彫器ブランクとすべきかもしれない。いずれも側縁に微細な剥離痕がみられる。BL401・402に集中するが、確実に旧石器時代の包含層から出土したものは4074のみで、他は縄文時代の遺物包含層より出土したものである。

8. 挟入削器 (4076)

4点出土。4076は石刃を素材とするが、他の3点は切断された剥片など形状は一定しない。ただし、4点中3点は、挟入部の差し渡しが約8mmと一定している。また、ナイフ形石器と分類した4013は調整加工部分の状態が4076と類似しており、同一器種としたほうがよいかもしれない。

9. 揉雑器 (4077・4078)

2点出土。いずれもBL402のIV層より出土したものである。

10. 石刃 (4079～4094)

69点出土。この内4点は稜付剥片である。また、彫器ブランクとしたものの中に稜付剥片を素材としたものがみられる(4063)。欠損したものが多く、本来の石刃の長さがわかる完形もしくはほぼ完形のもの14点である。欠損面は主軸に直交し、欠損部の接合例が5例ある。打面長は短く、安山岩以外の石

材では薄い石刃が多い。背面に礫面をもつものが3点、稜付剥片が5点と少なく、石刃石核は1点のみ見られない。石刃の製作工程を迫るような接合資料が認められない。

11. 掻器状石器

2点出土。いずれもBL402に含まれるが、縄文時代の包含層であるⅢ層より出土した。

12. 楔形石器

1点出土。ブロック外のⅡ層より出土しており、縄文時代の遺物の可能性が高い。

13.2 次加工のある剥片

19点出土。10点はⅣ層より出土しており、BL401・402の旧石器時代の石器群に属するものである。詳細な観察は行えなかったが、抉入削器、彫器ブランクなどに分類可能なものも含まれる。

14. 微細剥離のある剥片

32点出土。15点はⅣ層またはⅣ～Ⅴ層より出土しており、BL401・402の旧石器時代の石器群に属するものである。その他のものも大半がBL401・402のⅢ層から出土しており、石材の類似から多くは旧石器時代の石器である可能性が高い。

15. 石核 (4095～4100)

18点出土。出土層位はⅡ層4点、Ⅲ層5点、Ⅳ層4点、Ⅳ～Ⅴ層5点である。Ⅱ層の遺物はいずれもブロック外であり、縄文時代の遺物である可能性が高い。BL401・402で石刃が多数出土したが、石刃石核は出土していない。4099・4100は分割された原石で、素材剥片の剥片剥離は行われていない。

16. 剥片・碎片

剥片552点、碎片111点出土。剥片の出土層位はⅡ層33点、Ⅲ層177点、Ⅳ層またはⅣ～Ⅴ層283点、Ⅴ層35点、砂礫層24点である。碎片の9割はⅣ層より出土した。なお、Ⅴ層群出土の剥片の多くはBL403のもので、斧形石器の調整剥片と考えられる蛇紋岩の剥片18点がまとめて出土した。

17. 斧形石器 (4101)

1点出土。BL402の北西側に単独で出土した。基部を欠損し、刃部の線状痕はあまり明瞭ではない。礫面が両面に残っており、扁平な楕円礫を素材として作られたものである。石材は緑色の火成岩で、多用される蛇紋岩とは異なる趣の石材である。

18. 敲石・凹石・台石

各1点出土。凹石はⅡ層中部より出土したもので縄文時代の遺物である可能性が高い。敲石は砂岩製の欠損品で、BL403のⅤ層より出土し、この敲石と同一母岩と思われる剥片が近くで出土している。台石はⅣ層より出土した硬砂岩の小破片で、他の石器の石材には用いられないため、台石の破片と判断した。

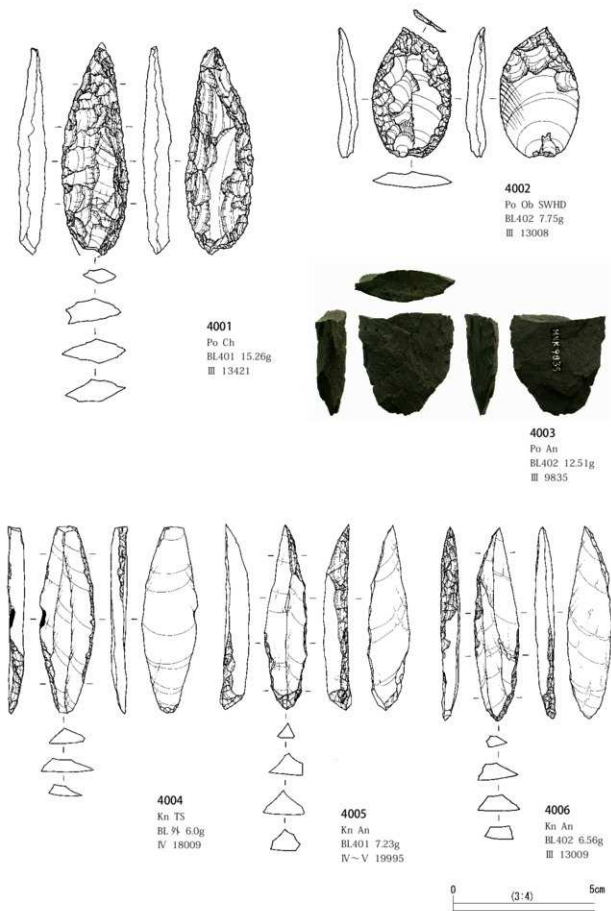
(2) 接合資料 (第11図・第5表)

BP第4地点では27例の接合が認められた。すべて同一ブロック内での接合で、ブロック間接合はない。接合資料番号1073AはBL403での斧形石器の調整剥片間の接合例で、遺跡内での石器加工行為を示す。それ以外は、BL401とBL402の石器群で、欠損資料の接合が多く、剥片剥離工程を示す資料は少ない。また、削片が多量に出土しているが、削片の接合例はわずかに一例のみである。

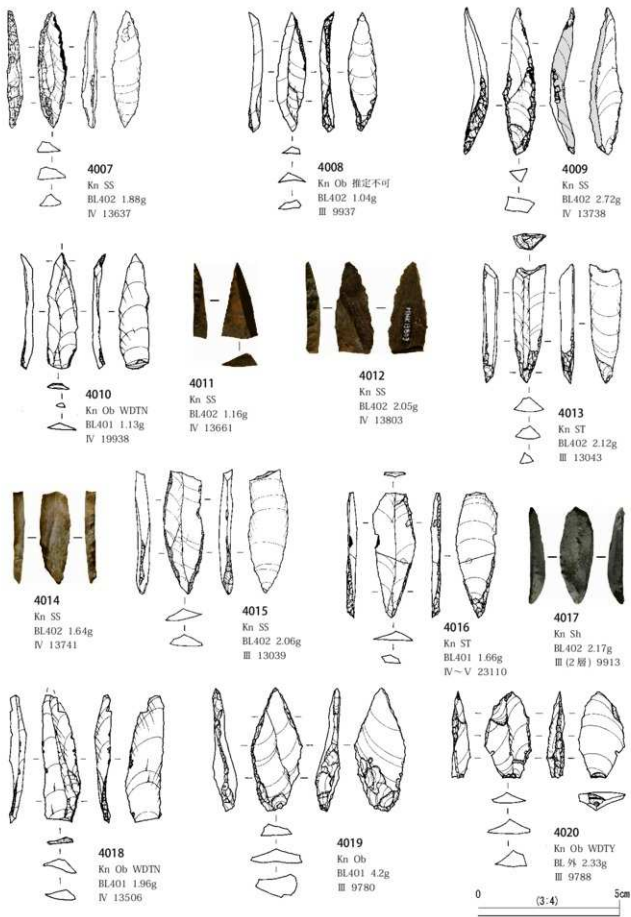
接合資料 番号	報告石材	ナイフ 形剥片	ナイフ 石核	掻器 状石器	抉入 削器	彫器 ブランク	剥片	石刃	石核	Ⅱ層加工 のある 剥片	Ⅲ層 剥片	Ⅳ層 剥片	Ⅴ層 剥片
1003A	チャート											3	3
1004A	チャート	1	1										2
1006A	チャート												2
1010A	紫曜石											2	1
1018A	緑色輝岩									2			2
1032A	珪質頁岩			1	1								2
1041A	珪質頁岩							1	1				2
1042A	珪質頁岩											1	3
1042B	珪質頁岩											1	2
1042C	珪質頁岩						1						1
1047A	無灰頁岩									2			2
1047B	無灰頁岩									2			2
1062A	無灰頁岩										1		1
1067A	無灰頁岩						3	1					2
1067B	無灰頁岩		1	2									3
1067C	無灰頁岩						1	1					2
1068A	無灰頁岩								1	1			2
1068B	無灰頁岩									1	1		2
1068C	無灰頁岩												3
1068D	無灰頁岩												2
1068E	無灰頁岩						1	1					2
1073A	紫曜石												4
21037A	紫曜石												2
21039A	紫曜石												2
21040A	紫曜石							1	2				3
21058A	輝岩							1	1	1	1		2
21068A	珪質頁岩										1	1	2

「破片」は全体形状不明な小破片。「敲器」は石器に接合したものを示す。

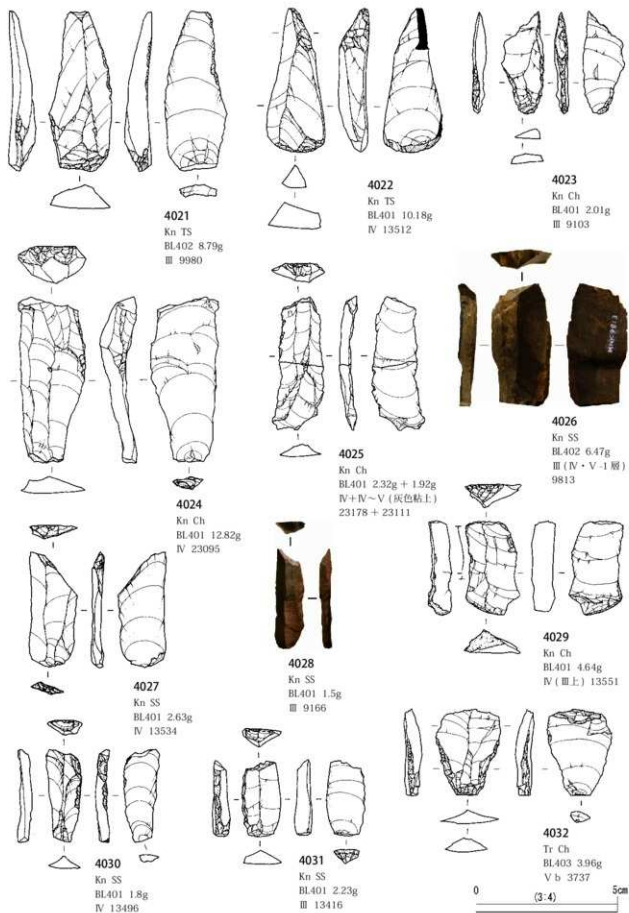
第5表 BP第4地点旧石器接合資料一覧



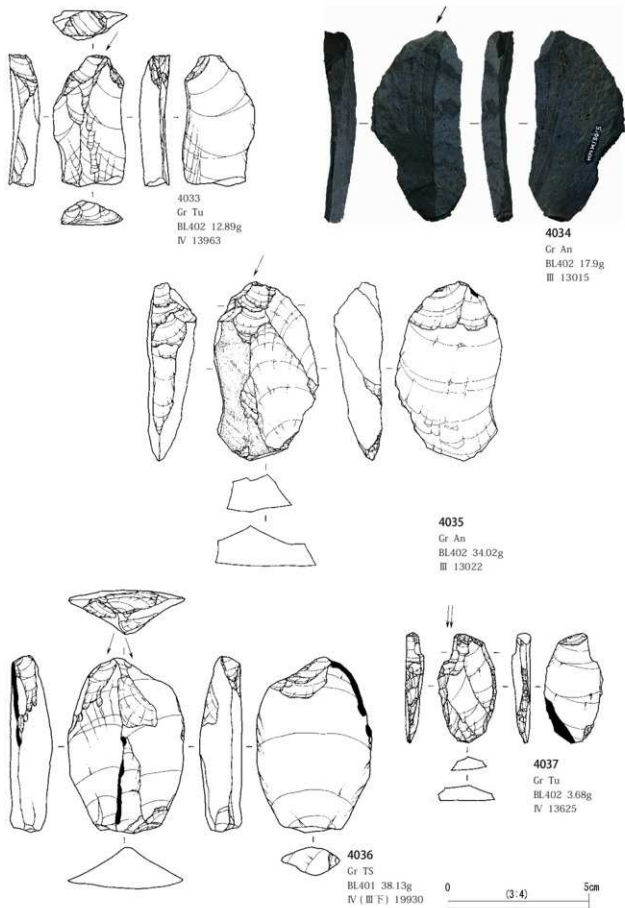
第14図 BP第4地点石器実測図（槍先形尖頭器・ナイフ形石器1）



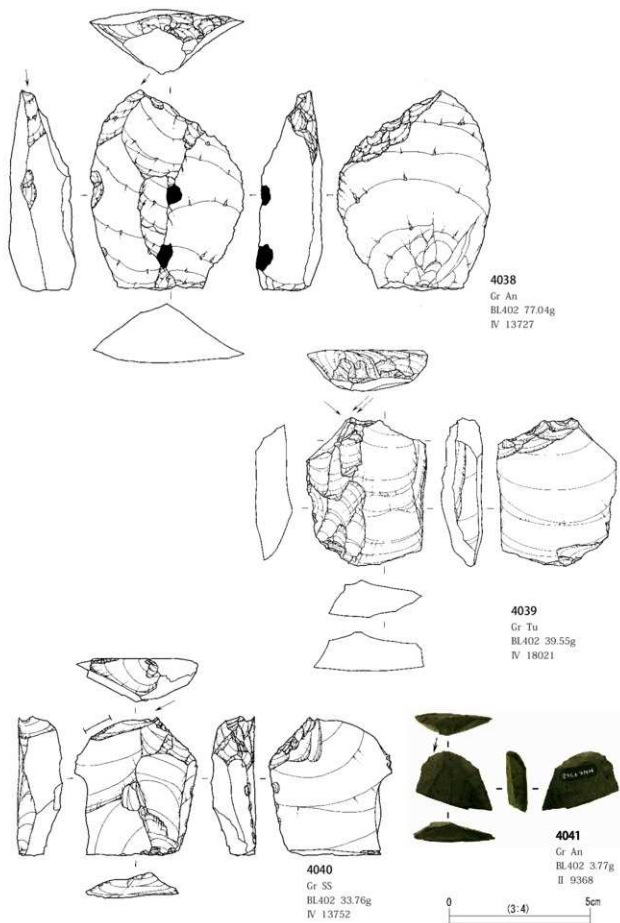
第15図 B P第4地点石器実測図(ナイフ形石器2)



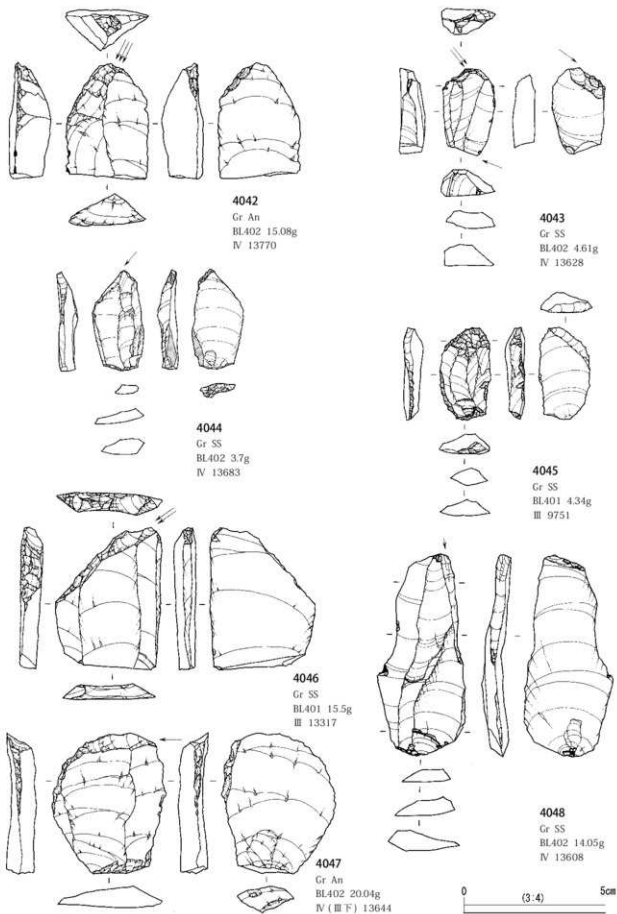
第16図 B P第4地点石器実測図(ナイフ形石器3・台形石器)



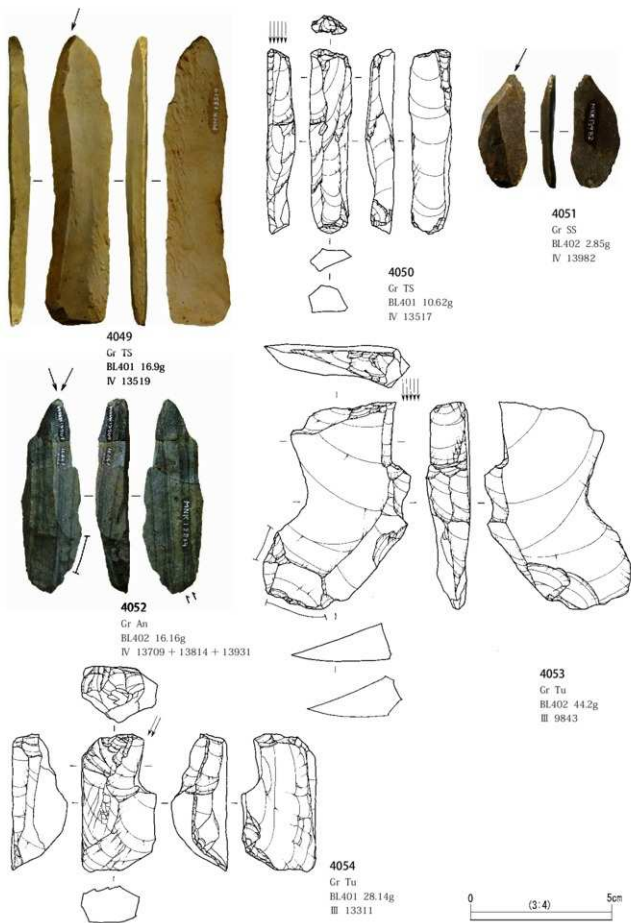
第17圖 BP第4地点石器実測図（彫器1）



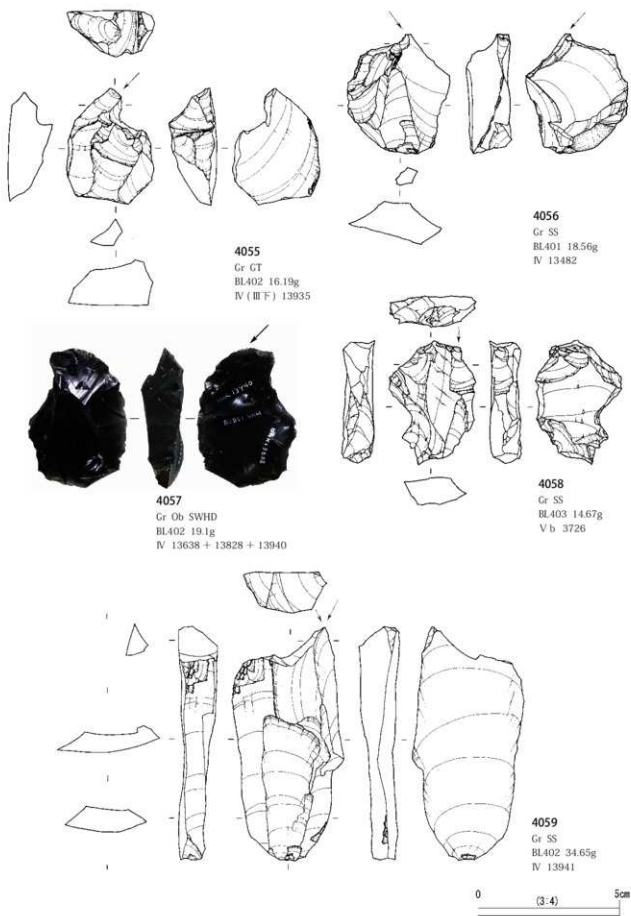
第18圖 BP第4地点石器実測図(彫器2)



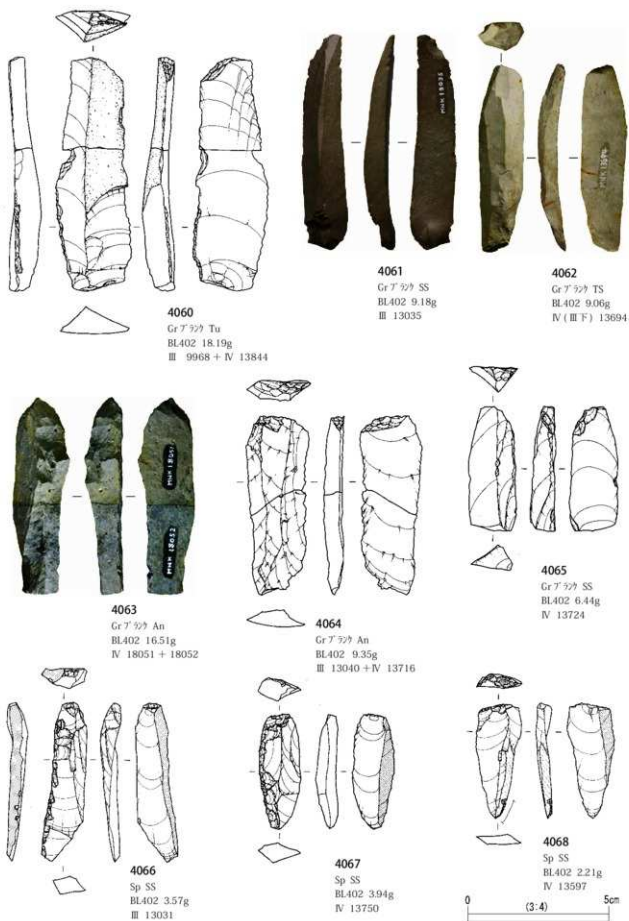
第19図 BP第4地点石器実測図(彫器3)



第20圖 BP第4地点石器実測図(彫器4)



第21図 BP第4地点石器実測図(彫器5)

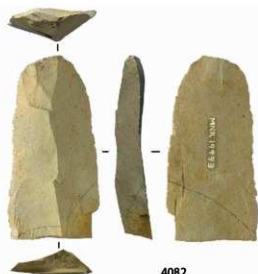


第22図 BP第4地点石器実測図(彫器6・削片1)

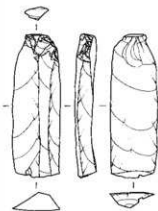
第3章 BP第4・第5地点の調査



第23図 BP第4地点石器実測図(削片2・削器・抉入削器・採錐器・石刃1)



4082
Bi Tu
BL401 23.12g
IV~V 19993



4083
Bi GT
BL401 7.12g
IV 19918



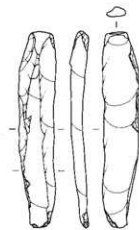
4084
Bi GT
BL402 8.24g
IV 13846



4085
Bi Ob WDTY
BL401 7.21g
IV 19999



4086
Bi Ob WDTN
BL401 0.73g
III 13313



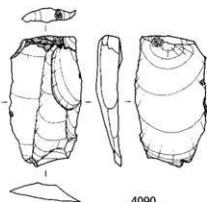
4087
Bi TS
BL401 4.67g
IV(Ⅲ下) 19969



4088
Bi Tu
BL401 9.44g
III 9317



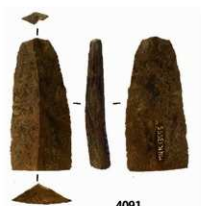
4089
Bi Sh
BL402 8.99g
IV 13591



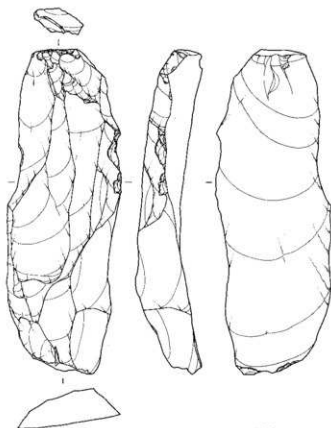
4090
Bi SS
BL403 7.63g
V b 3742



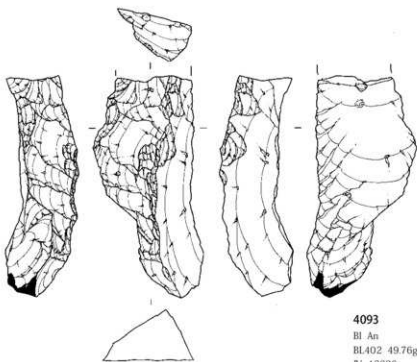
第24圖 BP第4地点石器実測図(石刃2)



4091
 Bl SS
 BL402 6.57g
 IV 13575



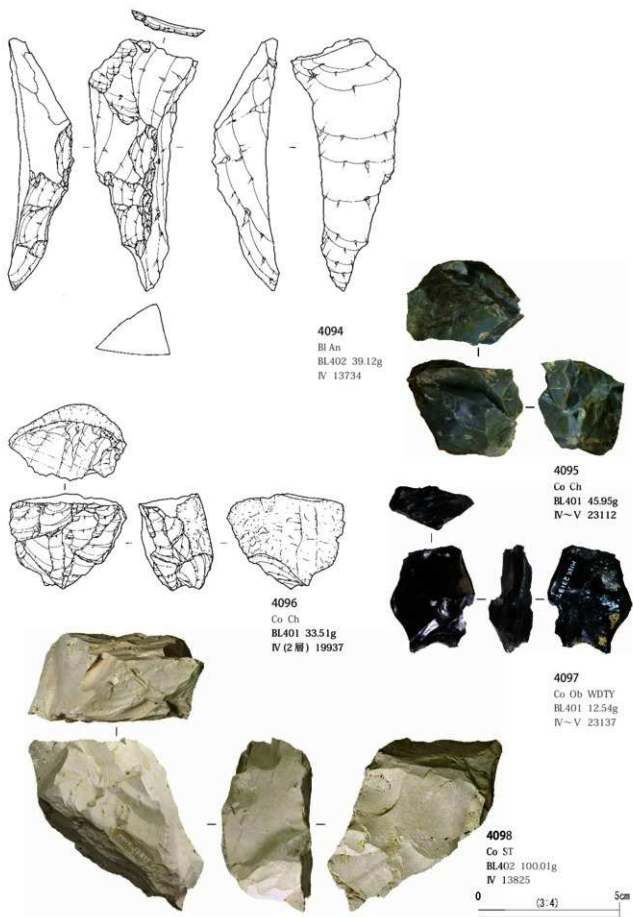
4092
 Bl GT
 BL401 86.83g
 IV~V 19980



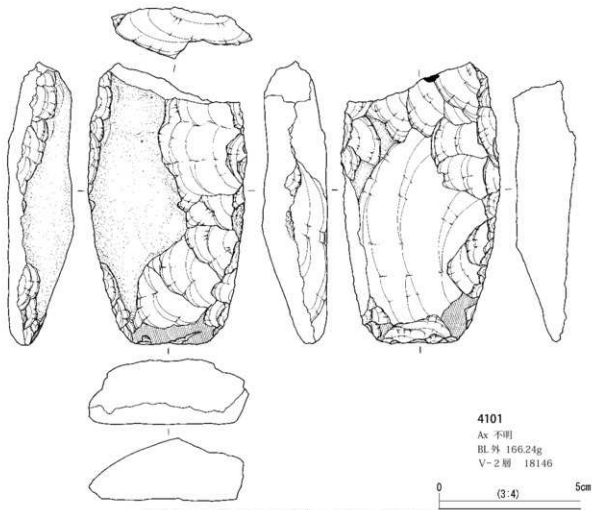
4093
 Bl An
 BL402 49.76g
 IV 13636

0 (3.4) 5cm

第25図 BP第4地点石器実測図(石刃3)



第26図 BP第4地点石器実測図(石対4・石核1)



第27図 B P第4地点石器実測図(石核2・斧形石器)

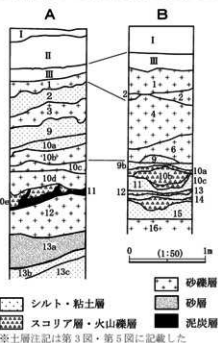
第3節 BP第5地点の旧石器時代の遺構と遺物

1 調査の概要

ブロック1箇所と礫群5箇所、炭化物集中6箇所を確認した。BP第5a地点では、旧石器時代終末期の礫群と炭化物集中がまとまって検出された。これらの遺構に隣接して、細石刃核及び同一石材の剥片等が数点出土した(BL501)。

本地点は、他の調査地点と地層が異なり、ほぼ全域に、砂礫層とシルト層が互層に堆積している。その中に旧石器時代～縄文時代早期の多量の遺物が出土した(第31・32図、第7・8表)。調査では第5a地点とBP第5c地点とで別個の層名を用いたが、これらの包含層を総称して仲町砂礫層と呼称している(第1章第7図)。遺物は砂礫層より出土しており、シルト層中から出土する遺物は少ない。砂礫層中にブロックは確認できず、出土遺物の多くは水流による磨耗が認められるため、原位置をとどめるものは少ないと想定される。また、砂礫層中の石器について、層別別に磨耗がみられない石器の分布を検討したが、有意な分布のまともりは確認されなかった。但し、調査区北東側のみに分布するIV'層に礫群と細石刃核を伴う少数の石器群が出土し、ブロックと認識した。

仲町砂礫層の調査終了後、BP第5c地点で中部野尻湖層の、BP第5a地点で下部野尻湖層の調査を実施した(第28図)。中部野尻湖層ではナウマンゾウの足跡群と推定される窪みと石器の可能性のある資料が出土した。BP第5a地点の下部野尻湖層では、火山噴出物と考えられる石片が数点出土したが、人工遺物と考えられる資料は確認できなかった。



第28図 BP第5地点の調査範囲と土層

2 ブロックと礫群

第29図に検出されたブロック(BL)と礫群(SH)と炭化物集中(SF)の位置を示した。砂礫層の石器群にブロックは認識できず、仲町砂礫層中部と下部のに分けて提示した(第31図)。なお、SH01はⅢ層を主体とした礫群で、縄文時代草創期～早期のものである。

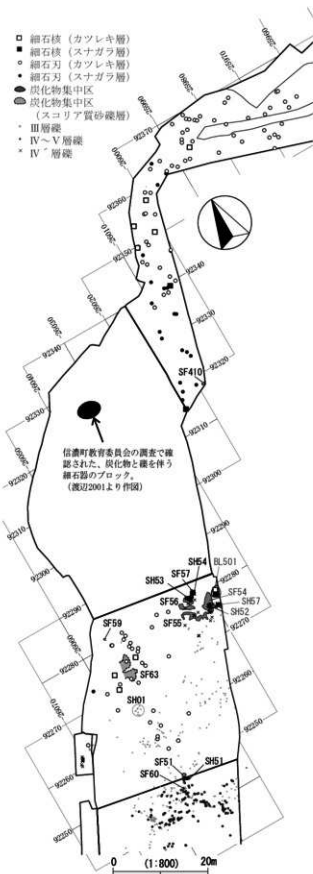
(1) 仲町砂礫層中部の遺構

BL501 (第29図)

ピット状の窪みとその周辺2mほどの範囲に、珪質凝灰岩製の細石核1点、細石核ブランク2点、剥片15点と頁岩製の削器1点が出土した。ピット状の窪みの大部分はトレンチ調査で破壊してしまい、半分以上が失われたため詳細は不明である。窪みは深さ20cm程度で、Ⅳ'層を掘り込んでいる。Ⅳ'層はシルト層でBP第5a地点の北東側のみにみられ、仲町砂礫層中部最上面に対比される。遺物はⅢ層とⅣ'層より出土しているが、調査時の所見を尊重すると生活面はⅣ'層中であると考えられる。周辺より、後述の礫群と炭化物集中が検出されており、同時期の遺構群である可能性が高い。

SH52～SH54・SH57・SF54～57 (第30図)

Ⅳ'層中に検出された礫群(SH)と炭化物集中(SF)である。炭化物はⅣ'層の中部より検出され、炭化物包含部分をⅣb層、その上下をそれぞれⅣa層、Ⅳc層としⅣ'層を細分した。礫群もⅣb層より検出され、全て同時期遺構群であると判断した。近接するBL501の石器の中にはⅣb層上面出土のものもあり、遺構群が細石刃石器群に伴うと判断した。また、Ⅳ'層より上位の砂礫層(BP第5a地点1層)から、細石刃及び細石刃が出土しており、これらとの関連も想定される(第29図)。第30図に



第29図 BP第5地点の遺構配置図とBL501

礫群周辺のIV'層出土遺物の分布を示した。土器、石鏃、有茎尖頭器が出土したが、これらはIV'層上面より出土したものが多く、IV'層中の礫群とは時期が異なる遺物であると判断した。

礫群の礫の属性を第6表に集計した。3cm～5cm大の礫を多用しており、他地点で確認された礫群に比べ小形の礫を選択していることが特徴的である。

SF59

BP第5a地点の2層上面で確認した。約0.6m×0.4mの範囲に炭化物粒が分布し、1cm程の炭化物が点在する。

SF51・60

BP第4地点のBL401よりも下層のシルト層上面で検出した炭化物集中である。SF60は0.9m×1.3mほどの範囲に炭化物が平坦面に密集している。SF51は半分が試掘トレンチにより失われており全容はわからないが、SF60と同規模の分布範囲を示す。BL401より下層で検出されたことから、炭化物が検出されたシルト層は仲町砂礫層下部に対比される可能性もある。周辺に遺物は出土していない。

なお、隣接するSH51は出土層位が異なり、被熱による礫の変色などは認められない。礫群ではなく自然礫の集積の可能性もある。

(2) 仲町砂礫層下部の遺構

SF410

BP第5c地点7層で検出した。トレンチにより一部破壊され、全貌は不明であるが、55×70cmの範囲に炭化物粒が集中していた。

SF63

BP第5a地点9層で検出した炭化物集中。5.5m×3mの範囲にわたって検出した。炭化物の依存状態が悪く、シルトが黒ずんでいるようにも見える。9層に遺物はほとんどみられず、遺構であると断定できない。

偶蹄類の足跡 (第33・34図)

BP第5a地点では6層上面に、BP第5c地点では7層上面と8層中に挟むシルト層上面で偶蹄類の足跡と考えられる窪みが多数確認された。窪みには砂礫層が入っており、偶蹄類の足跡と明確に認識できるものが少数認められた。他の形状が不明確な窪みも、大きさと配列などから偶蹄類の足跡と判断した。検出面の前後の砂礫層からは石器が出土しているが、シルト層中に石器はほとんど出土しない。BP第5a地点では微高地の縁に足跡が集中していることが判明した。BP第5c地点ではシルト層の分布範囲に限られているため、足跡の範囲が必ずしも偶蹄類の行動範囲とは一致しない。

遺構名	赤色礫	赤化礫	赤化礫	遺構名	破片	赤色礫	赤化礫
SH1	10	6	1	SH1	7	7	3
SH2	7	21	11	SH2	1	11	27
SH52		23		SH52	8	10	5
SH53	3	25	10	SH53	4	11	23
SH54	24	44	3	SH54	6	13	52
SH57		8	30	SH57	3	1	40

第6表 BP第5地点礫群属性の集計



SF60



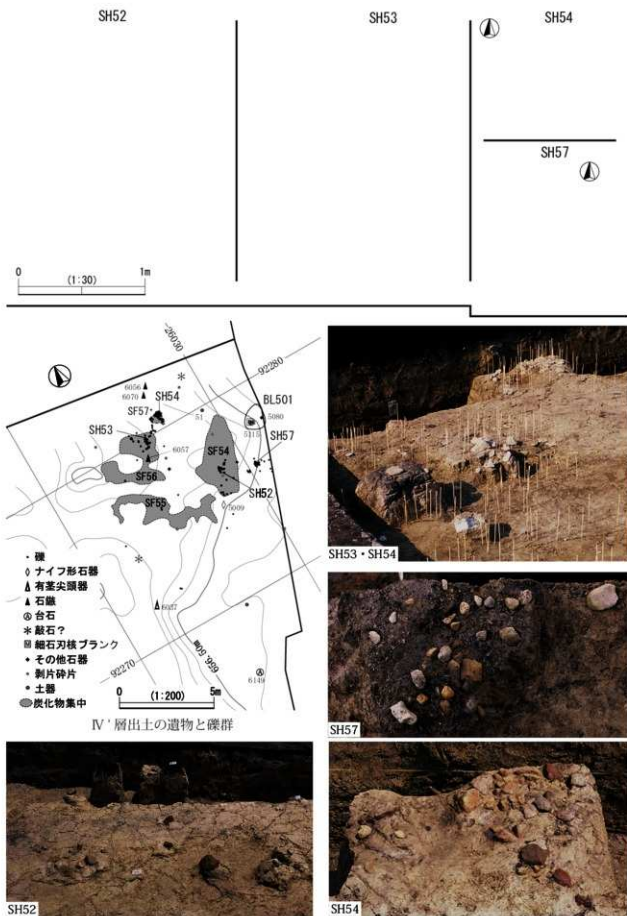
SF51



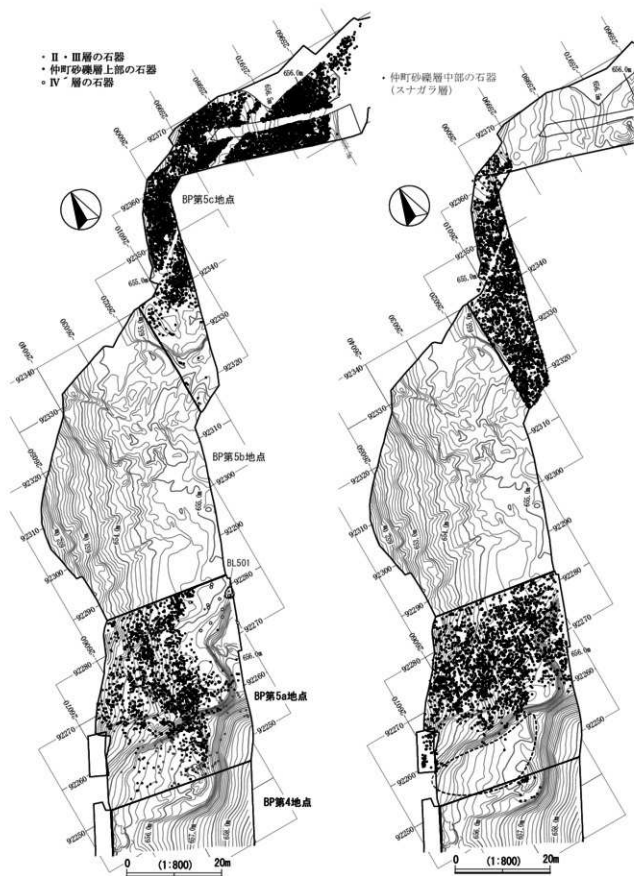
BP第5a地点仲町砂礫層遺物出土状況



BP第5c地点偶蹄類足跡

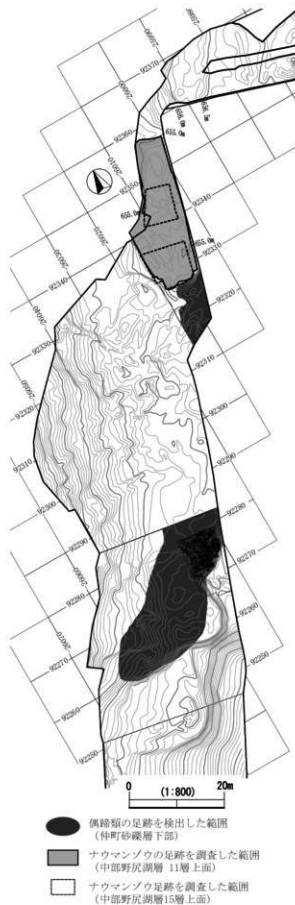


第30図 BP第5a地点の礫群と炭化物集中区



※右図の点線はカツレキとスナガラの区分ができなかった範囲を示し、出土層位が判別できないものは全て左図に出土地点を示した。

第31図 BP第5地点の層別石器出土状況1



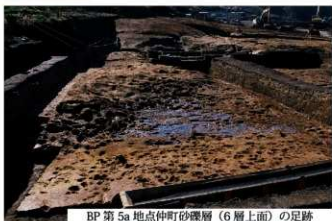
BP 第5c 地点中部野尻湖層 (11層上面) の足跡



BP 第5c 地点中部野尻湖層 (15層上面) の足跡

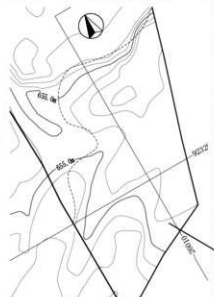


BP 第5c 地点仲町砂礫層 (8層) の足跡



BP 第5a 地点仲町砂礫層 (6層上面) の足跡

第33図 BP 第5地点の足跡の調査



※上図足跡の拡大図をPDF形式でCDに収録。ファイル名「BP第5地点足跡1・2」

第34図 仲町砂礫層下部の偶蹄類の足跡

3 BP第5c地点中部野尻湖層の調査成果

(1) ナウマンゾウ足跡と出土資料

第33図に中部野尻湖層の調査範囲を示した。BP第5c地点の11層上面と15層上面で足跡を検出した。

11層上面では、ナウマンゾウの足跡と推定される窪みが多数確認された。土層の断面観察により、11層中のラミナが上部からの圧力で変形しているのが確認され、窪みは掘られたものではなく足跡であることが判明した。足跡は径40～80cm、深さ10～20cm程度のもが多い。中には小形の窪みが認められ、オオツノシカなどの偶蹄類の足跡と思われるものも少数認められた。覆土の10層は赤スコ（赤褐色スコリア）に由来するもので、10a、10b、10cに分層される。10aは水成層のスコリア混じりの黄灰色シルトで、赤スコの二次堆積と考えられる。10b層は赤スコのプライマリーな堆積層、10cはスコリアが圧縮されたような状態で、その上面が踏み込み面の可能性がある。11層は水成堆積層で、11層上面で踏み込まれた場合、窪みが崩れて足跡は明瞭に残らないと推定されることから、赤スコの堆積過程、もしくはその直後に、足跡が形成されたと判断した。赤スコの年代は39,000年前～41,000年前とされており（沢田健他1992）、足跡の年代もおおよそ4万年前のものと考えられる。

ナウマンゾウの足跡は、おおよそ270㎡の調査区から約600個検出され、その中の1つNF3とした足跡の10c層下面から酸性凝灰岩^(註1)（第52図5127）が1点出土した（第35図）。さらに他の足跡内及び足跡を覆う10a層から、石器の可能性のある安山岩などが出土した（第51図～54図）。これら資料を含め10層中より、465点の安山岩が出土した（第9表）。なお、石片とした安山岩は、後期旧石器時代の石器群に多く見られる無珪品質安山岩とは異なり、輝石安山岩、角閃石安山岩などである。

石器の可能性のある資料を含め、ナウマンゾウの足跡に関連して中部野尻湖層より出土した安山岩を主体とする資料群を石片と呼称する。石片の中には、報告したもののように、二次加工の可能性のある剥離が認められるものが少数含まれるが、大半の石片には人工的な加工痕跡は確認できない。

11層上面の調査終了後、調査区を縮小し15層上面で確認される足跡の調査を行った。15層上面まで人力により掘り下げ、多数の石片を採取した。15層上面の足跡は11層上面のものに比べ全体に小さく、径25～60cmの円～楕円形のもの、長径30～40cm、短径15～20cmの長楕円形のものが見られる。いずれも深さ5～15cm程度である。足跡は調査区のほぼ全域に分布するが、11層上面と比べやや分布密度が低い。

(2) 中部野尻湖層出土の石片について

石片の出土状況を確認するために、JS地点とBP第3地点とで中部野尻湖層に相当するVI層・VII層の調査を行った。両調査区は本調査地点よりそれぞれ250mと750mほどの距離がある。8m×8mの調査区内より、JS地点のG201では49点、BP第3地点のG35では41点の安山岩石片が出土した。これらの石片はVI層下部からVII層中に多く出土しており、人工的な遺物である状況は見出せなかった。さらに、BP第3地点では重機によるVII層以下のトレンチ調査を行ない、多量の安山岩の石片が出土した。第9表に調査地別の石片調査の集計を示した^(註2)。これらの調査結果から、安山岩はスコリア層及びその上下の層に多く含まれており、人為的に遺跡内に搬入されたものでは

層色		JS地点	BP第3地点	BP第5c地点	合計
10層	赤スコ			465	465
11層				75	75
12層	ニセノミ			66	66
13層				105	105
14層	青ヒゲ			480	480
15層	下部野尻湖層			553	553
16層				32	32
遺物		12	1		12
Va層		11	3		14
Vb層		7	0		7
Vc層		38	550		587
Vd層	赤スコ	12	397		409
堆積		121			121
残積	ニセノミ	136			136
文層		397			397
文I層	青ヒゲ	563			563
文II層		630			630
文III層		1			1
文IV層	ト対松	147			147
文V層		21			21
文VI層		33			33
文VII層		13			13
文VIII層		7			7
合計		90	3068	1778	4924

第9表 層別別石片出土数

註1 ナウマンゾウ博物館学芸員中村由克氏の肉眼鑑定による。中部野尻湖層中より出土した石片中に数点確認される石材である。

註2 添付CDに石片の重量の計測値を示した。ファイル名は「仲町遺跡石片属性表」。

なく、火山噴出物であることが理解できる。ナウマンゾウの足跡覆土に含まれる石片は赤スコとともに遺跡内に降下した火山噴出物と考えられる。但し、降下した石片を人類が使用したかどうかは、形態、打面や剥離面など個々の資料の観察から検討する必要がある。

石片の中に、酸性凝灰岩が数点確認された。酸性凝灰岩については石材の検討が十分にできなかったため、酸性凝灰岩が火山噴出物に由来するものなのか否か、結論は出せなかった。但し、安山岩と酸性凝灰岩の中間的な様相の石材が存在しており、酸性凝灰岩も火山噴出物である可能性がある。

火山噴出物に由来すると考えられる石片の中に、二次的な剥離面を有する資料や、人為的に作出された剥片の可能性がある資料が含まれている。BP第5c地点10層出土の石片の接合作業を行ったが、接合関係は確認できなかった。接合関係が認められないため、これらの剥離が人工的なものなのかどうか、個々の資料から判断することは非常に困難である。出土状況からは石片の中に人工遺物が存在する根拠を得ることはできない。

多数の石片の中から、剥片及び石器の可能性を検討する必要があると判断したものを抽出し、その一部を第52～54図とPL12に掲載した。以下に個々の資料の観察所見を述べる。

5127は酸性凝灰岩、5128～5134は安山岩、5135～5138は酸性凝灰岩に近い石質であるが、酸性凝灰岩と特定できない。5137には酸性凝灰岩のような部分と安山岩のような部分があり、両者の中間的な様相の石材である。

5127は灰色のやや光沢を持ったガラス質の石材で、他の安山岩とは明らかに異なる石材である。大きな剥離面が表面に4つ、裏面に1つ確認される。表面には同一打面からの連続した剥離面が形成されているが、打面が失われている。また、自然面と剥離面の区別は明確ではなく、右側面図で自然面とした部分にもリングが観察され、ボジ面の剥離面である可能性がある。主剥離面の打点も明確にはとらえられない。また、断面が鋭角な稜線には、実測図には表現されていない1～3mmほどの微細な剥離が多数見られる。稜線上の微細な剥離状態は、佐久市天神小根遺跡IV層出土の偽石器に類似している。^(註3)

5128～5130は安山岩の剥片状の石片である。5132は自然面と思われる面があるが、剥離面との区別は明確にはできない。主剥離面はいずれも打点が不明確で、打痕も明瞭ではない。5131・5132・5134には主剥離面からの剥離が観察される。剥離は1回ないし2回程度で、連続的な剥離はみられない。また、5128・5133の表面には大きな剥離面があり、同じ打面または打面転移による連続した剥片剥離の可能性が伺われる。5131と5134には折れ面がある。5136と5137は両極打法による稜上からの微細剥離と類似したものが一側縁に認められる。5138は石片の中では希少な石材であるが、主剥離面が明確ではなく、二点以上からの加圧により弾けた破碎礫のような印象をもつ。

上記の特徴はクラッシャーなどで粉砕した碎石などにも認められ、自然現象の中でも生じうる剥離と考える。個々の石器の観察からは、これらの石片が石器である確証は得られない。

前述のとおり、安山岩は火山噴出物として降下してきたものであり、酸性凝灰岩及びその類似石材の石片についても、火山噴出物である可能性が否定できない。個々の石片の観察や出土状況からは人工遺物であるとの確証は得られない。しかし、隣接する立が鼻遺跡の中部野尻湖層からは骨製クレーヴァーや石器などが報告されており（野尻湖人類考古グループ1987）、本遺跡の資料も検討無しに偽石器とすることはできない。酸性凝灰岩が遺跡内にある理由を自然現象では説明しきれていない点、安山岩石片の中にも剥片と考えられるものが存在する点など、遺物である可能性も残されている。今後、周辺遺跡の調査により関連資料が得られたところで、さらに資料批判をおこない、史料としての評価をしていかなければならないが、現時点では、これらの石片を史料として用いることは時期尚早と考える。

註3 須藤隆司氏の教示による。（須藤2001）



BP 第5c 地点中部野尻湖層（11層上面）の足跡



BP 第5c 地点中部野尻湖層の足跡断面



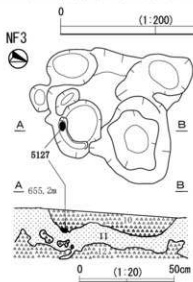
BP 第5c 地点足跡 NF3 図版番号 5127 出土状況



NF3 下部のラミナの変形状況



NF3
図版番号 5127
出土状況



第35図 BP 第5c 地点中部野尻湖層 11層上面のナウマンゾウ足跡と NF3 資料出土状況

4 出土遺物

旧石器および旧石器時代の可能性がある遺物が17085点出土した。そのほとんどは仲町砂礫層より出土した。第7・8表に器種別石材組成と調査地点別の器種組成を示した。槍先形尖頭器、削器、搔器、凹石、磨石などの縄文時代の石器との区別が明確にできない器種は、旧石器時代の包含層（仲町砂礫層中部・下部）より出土したもののみを本節で報告した。縄文時代の包含層より出土したこれらの器種は第4節で縄文時代の石器と合わせて実測図を掲載した。

BL501以外の石器は砂礫層より出土したもので、原位置は保たれていない。縄文時代の包含層から旧石器時代の石器が出土しており、下層のものが上層に混在することが確認される。砂礫層より出土するため、多くの石器に磨耗が認められる。磨耗の度合いを3段階に分類し、添付CD収録の遺物観察表に記載した。磨耗度Aはほとんど磨耗が認められないもの。磨耗度Bは稜上に磨耗が観察されるもの。磨耗度Cは剥離面全体に磨耗が観察されるものである。また、磨耗の進行は石材により異なるため、磨耗度の比較は同一石材間においてのみ有効である。

また、BP第5a地点の9層～14層に木片が100点あまりが出土した。加工痕は認められず、自然遺物と考えられる。これら木片の樹種同定の結果を第10表に示した。詳細は添付CDに収録した。

(1) 石器 (第36～51図、PL9～12)

BP第5a・第5c・第5d地点の遺物を器種別に掲載した。調査地点により別個の層名を用いているので、図中に示した出土層位の対比は第7図を参照していただきたい。特に必要と思われるものについて観察所見を記載する。遺物の属性等は、実測図と添付CDの遺物台帳を参照いただきたい。

1. 槍先形尖頭器 (5001～5008) 176点出土。この内、旧石器時代の包含層から出土したものは13点である。5001にファシットがみられ、他に比べ磨耗が激しい。5007と5008の自然面は、本来石器の剥離面であったものが磨耗したものと考えられる。5004・5005は左右非対称の同一型式の石器である。5005が旧跡時代の包含層から出土したため、両者を本節で取上げしたが、第5c地点4層には土器が4点混在しており、調査時の層位誤認の疑いがある。これらは縄文時代草創期の石器の可能性がある。

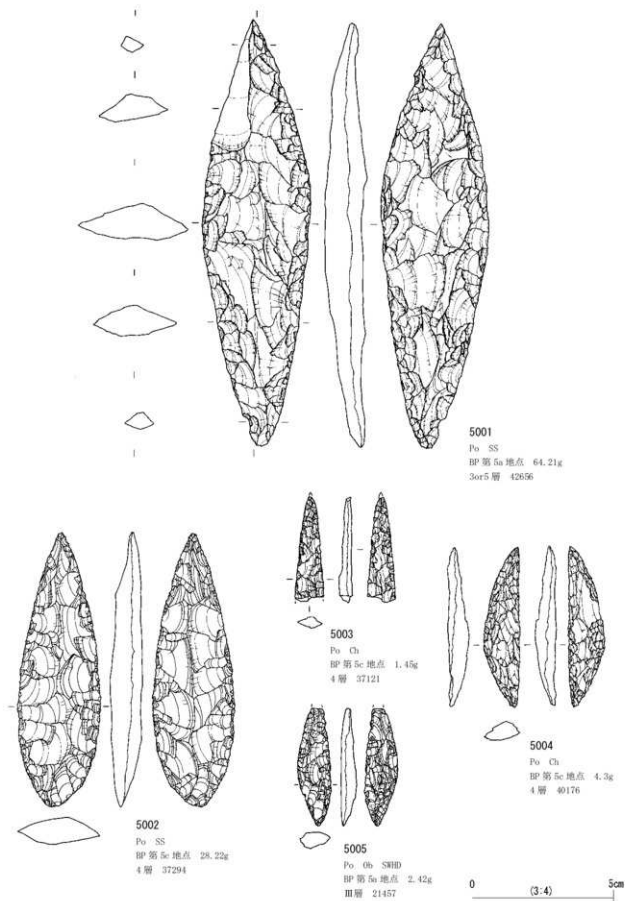
2. ナイフ形石器・台形石器 (5009～5066) ナイフ形石器148点、台形石器48点が出土した。5009は先端を欠損する杉久保型ナイフ形石器で細石器の礫群と同じ層位より出土した（第30図）。5029・5031は表面にボジ面を有する横長剥片を素材としたナイフ形石器で、いずれも対向調整によるブランディングがみられる。5071・5032・5034・5035・5049・5050・5058・5066が他よりも磨耗が進行している。

3. 彫器・搔器・彫搔器・削器 (5067～5080) 彫器19点、搔器83点、彫搔器4点、削器167点が出土した。この内、旧石器時代の遺物包含層から出土したものは彫器4点、搔器16点、彫搔器1点、削器35点である。5068・5070はブランディング状の周辺加工を施し、それを打面とし彫刀面を作出する。荒屋型彫器に分類され、5067・5069も類似した資料である。5073は打面が失われているが、縦長剥片端部に搔器状の刃部が作り出され、打面側に彫刀面が作出される。削片は2点出土したのみである。5080は細石核の石器群と同一層位で出土した削器である（第29図）。いずれもあまり磨耗していない。

4. 揉錐器・楔形石器 (5081～5083) 揉錐器2点、楔形石器78点が出土。旧石器時代の包含層から

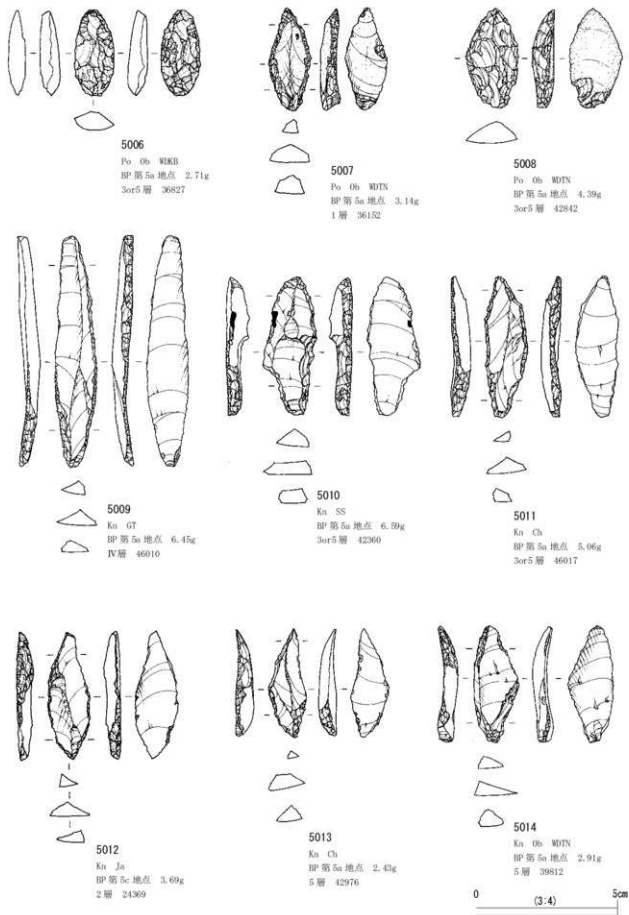
器種	旧石器 時代の 包含層 より 出土 した もの の 数	旧石器 時代の 包含層 より 出土 した もの の 数	縄文 時代の 包含層 より 出土 した もの の 数	合計
トウヒ属	20	15	1	35
マツ属	1	3	2	4
マツ属の樹皮炭化層	1	1	2	2
ツバキ	1	1	1	3
セキトウ	3	1	1	3
イチイ	1	1	1	1
針葉樹	2	2	2	2
イヌエンジュ	2	4	6	6
トネリコ属	3	2	5	5
ヤナギ属	1	1	1	1
コナラ属	4	4	8	8
コナラ属 樹	1	1	1	1
クリ属 コナラ属	1	1	1	1
サクラ属	5	1	6	6
サクラ属 樹?	1	1	1	1
カバノキ属	5	5	5	5
カマシラ属	3	3	3	3
ナシ亜科	1	1	2	2
散孔材 A	8	8	8	8
グミ属	3	3	3	3
ハンパノキ属	1	1	1	1
カエデ属	1	1	1	1
クマノミズキ属	1	1	1	1
ヒサカキ	1	1	1	1
ツツジ科	1	1	1	1
ヒヨウタンボク属	1	1	1	1
広葉樹	1	1	1	1
広葉樹類	1	3	1	1
合計	69	37	106	106

第10表
BP第5a地点木片樹種組成

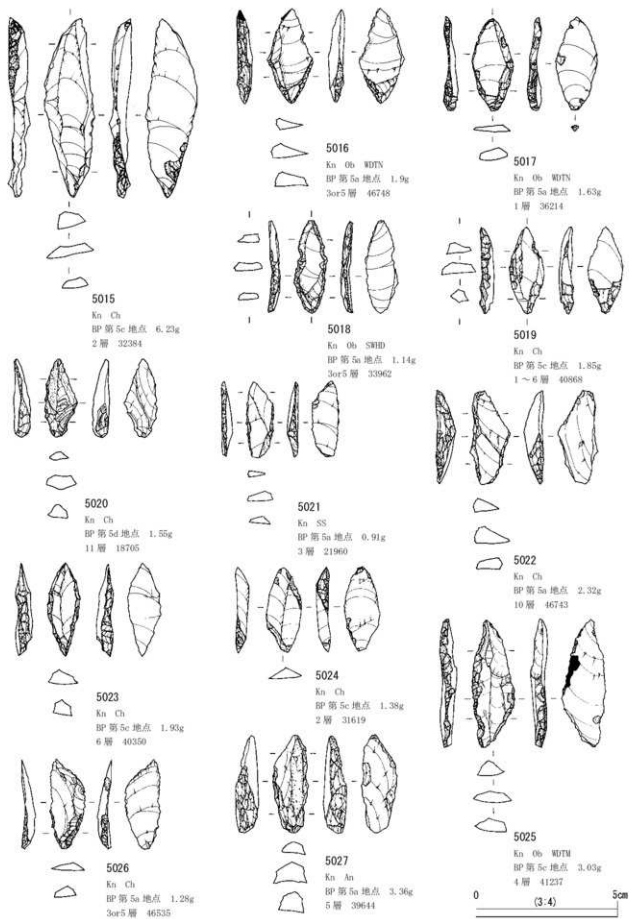


第36図 B P第5地点石器実測図(槍先形尖頭器1)

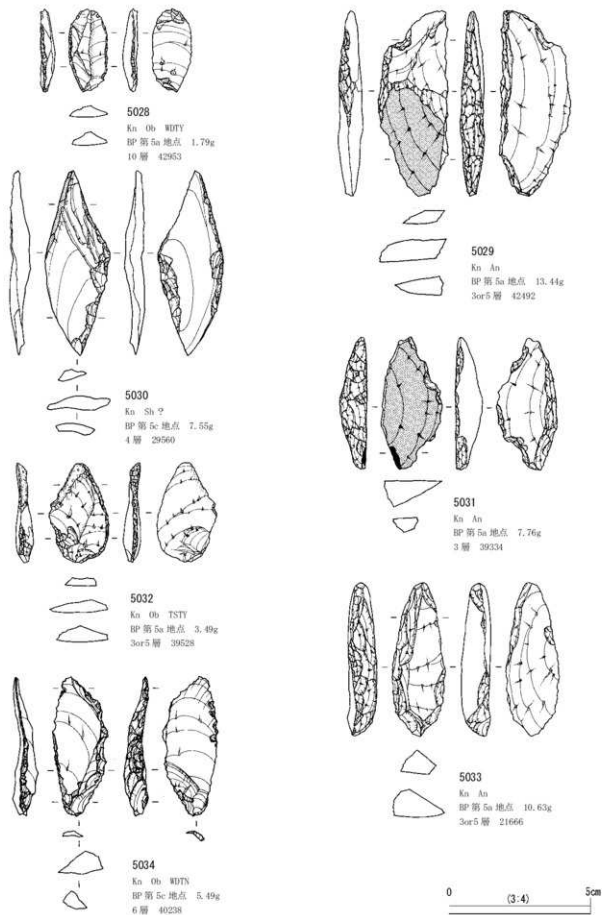
第3章 BP地点・BP第4・第5地点の調査



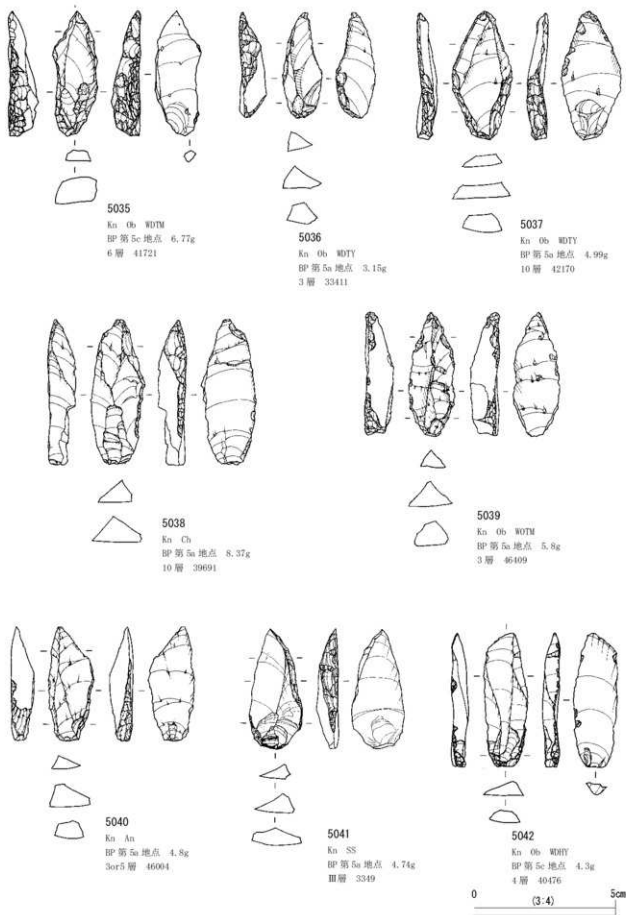
第37図 B P第5地点石器実測図（槍先形尖頭器2・ナイフ形石器1）



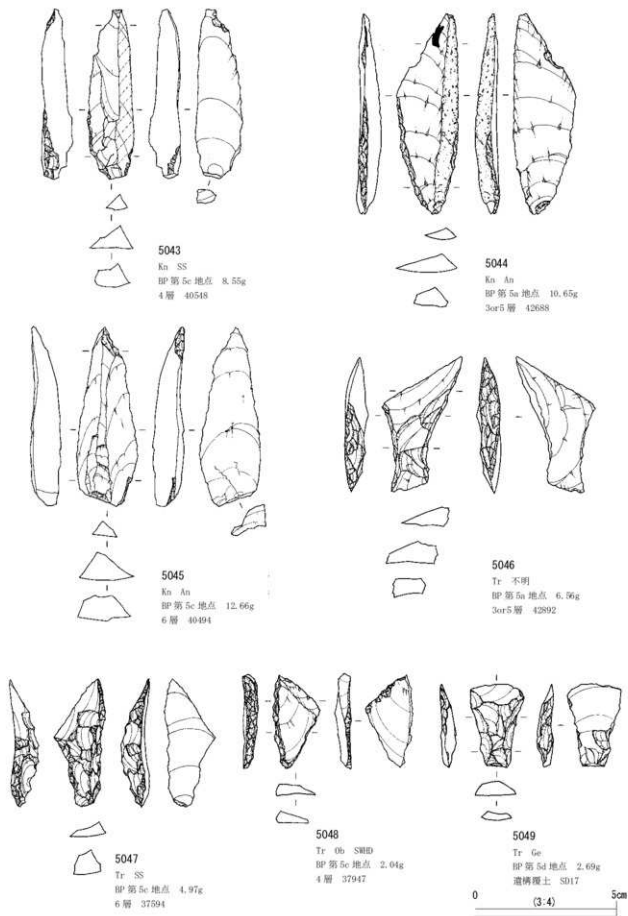
第38図 BP第5地点石器実測図(ナイフ形石器2)



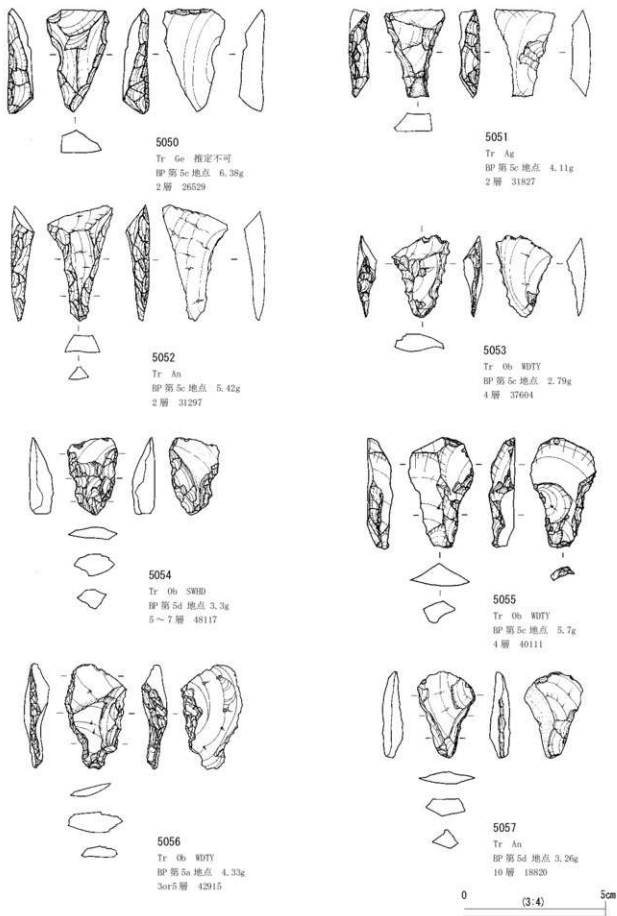
第39図 B P第5地点石器実測図（ナイフ形石器3）



第40図 BP第5地点石器実測図(ナイフ形石器4)

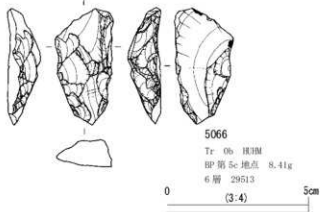
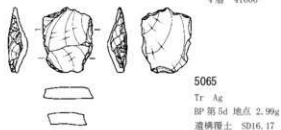
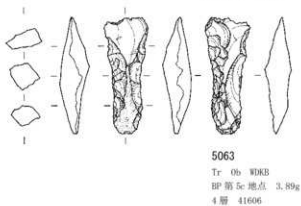
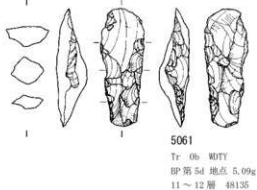
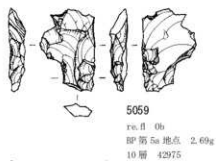
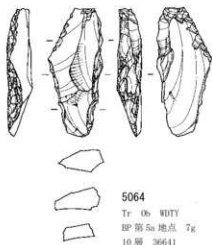
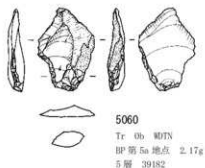
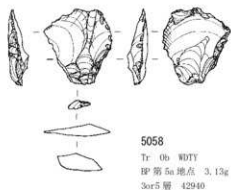


第41図 B P第5地点石器実測図(ナイフ形石器5・台形石器1)

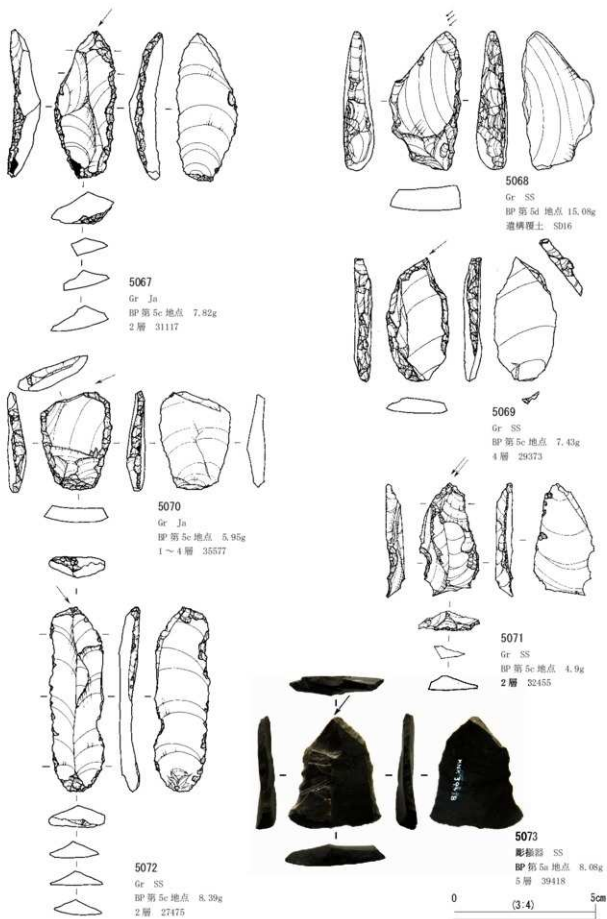


第42図 B P第5地点石器実測図(台形石器2)

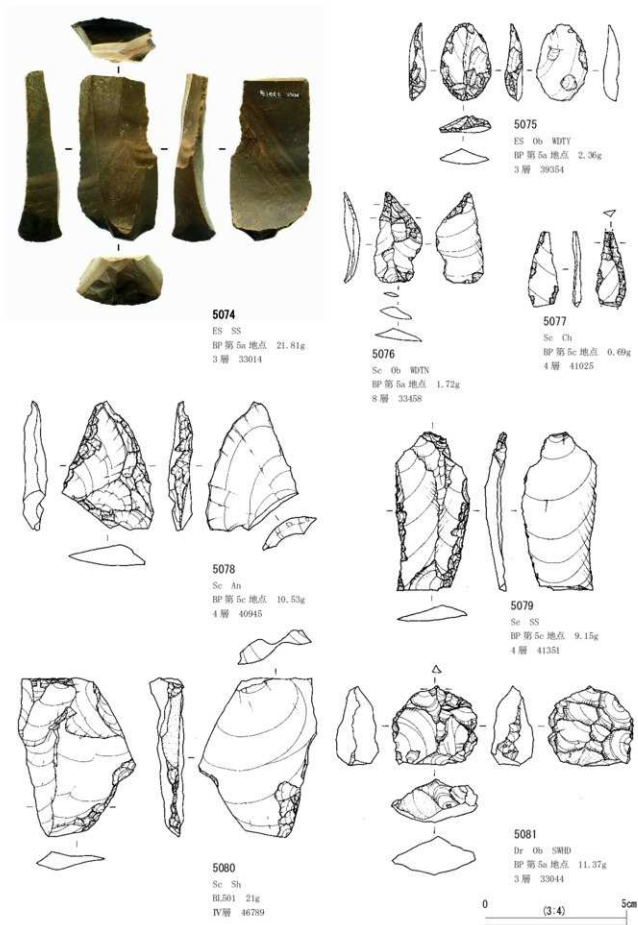
第3章 BP地点・BP第4・第5地点の調査



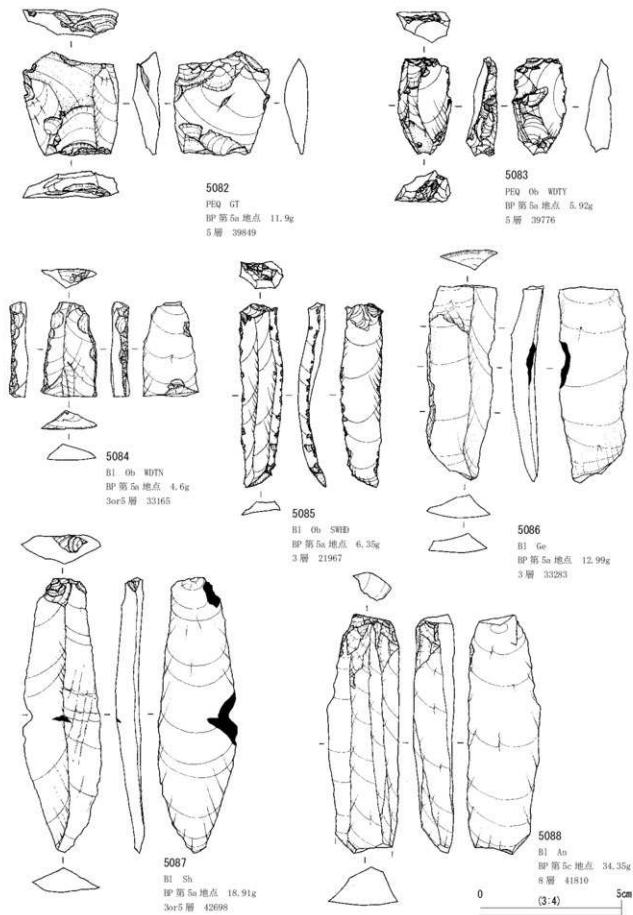
第43図 B P第5地点石器実測図(台形石器3)



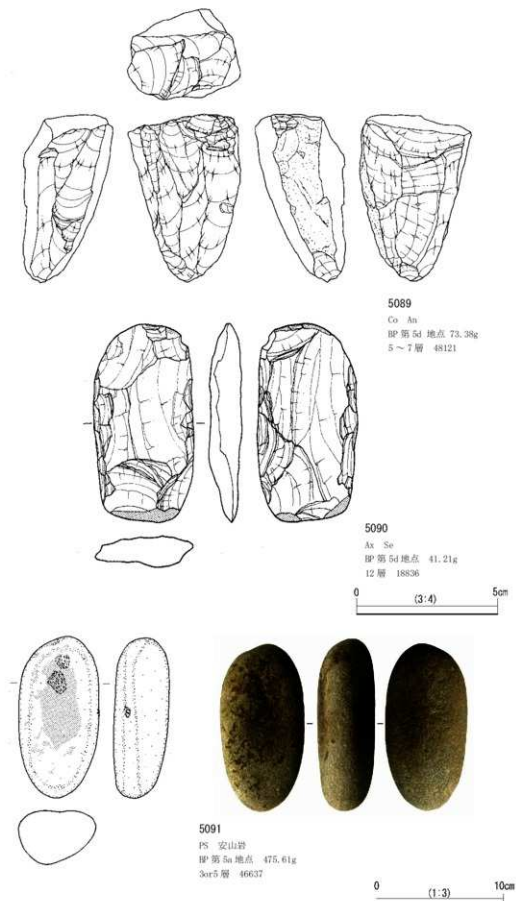
第44図 BP第5地点石器実測図(彫器1)



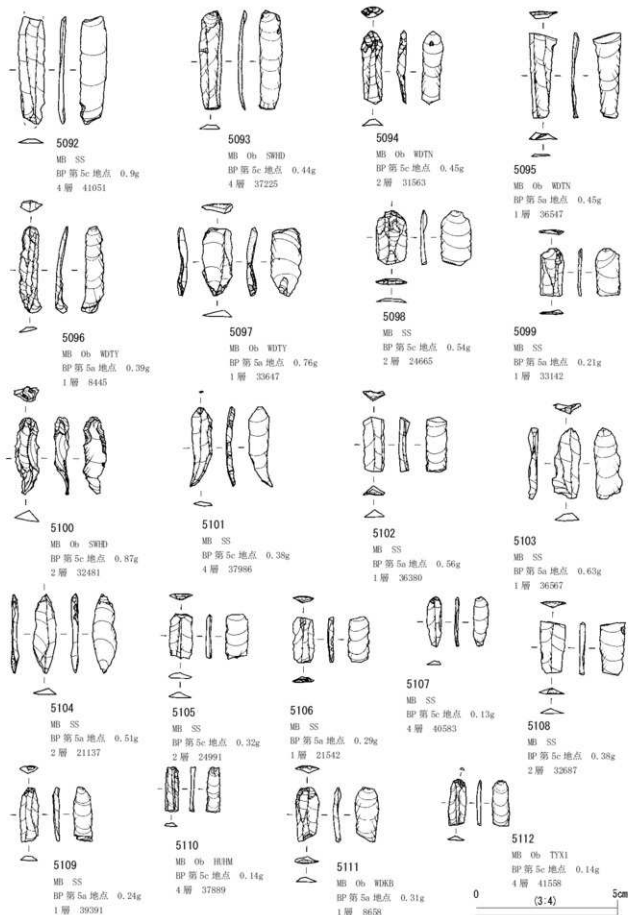
第45図 BP第5地点石器実測図(掻器・削器・採種器)



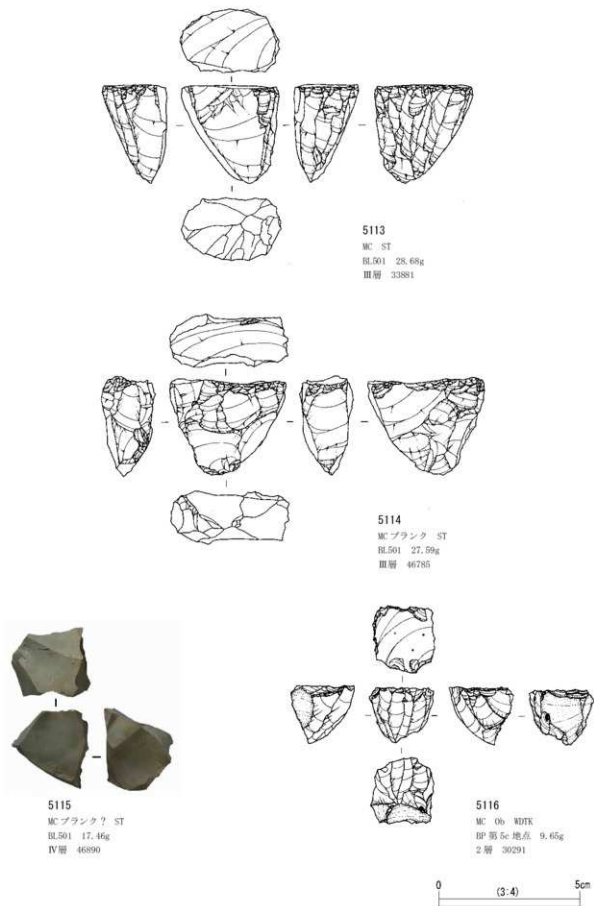
第46圖 B P第5地点石器実測圖(楔形石器・石刃)



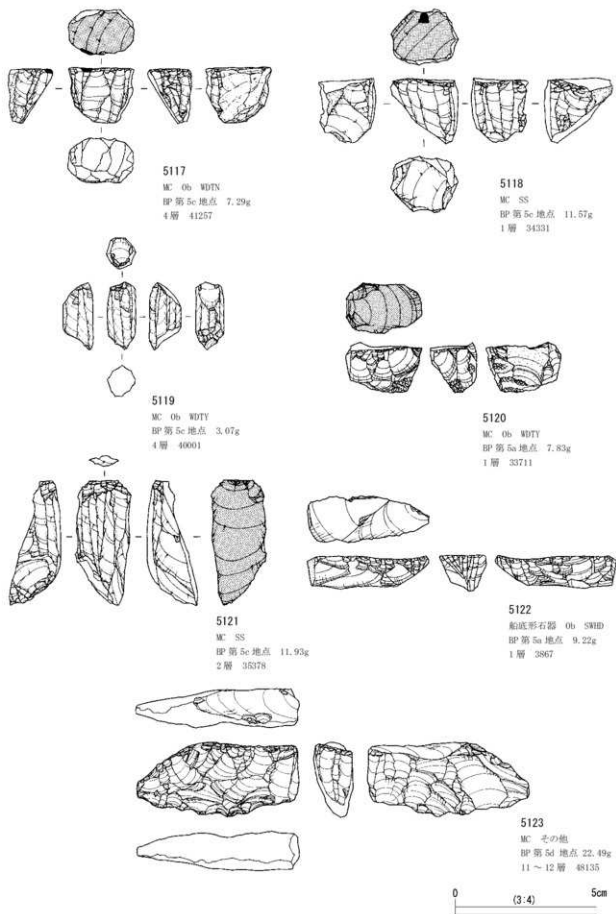
第47図 BP第5地点石器実測図(石核・斧形石器・凹石)



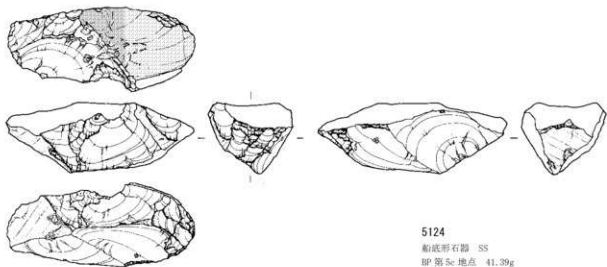
第48図 B P第5地点石器実測図(細石刃)



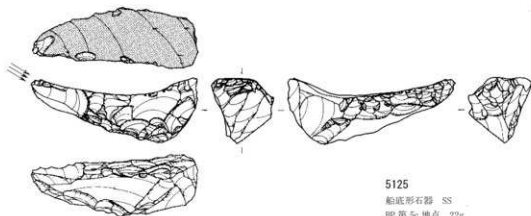
第49図 B P第5 地点石器実測図(細石核1)



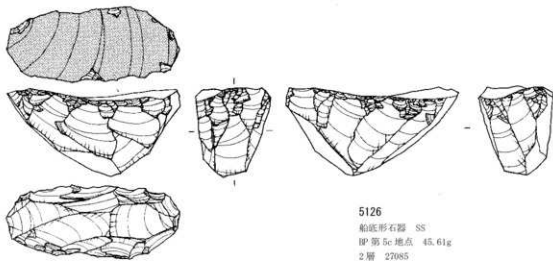
第50図 B P第5地点石器実測図(細石核2・船底形石器1)



5124
船底形石器 SS
BP第5c地点 41.39g
2層 26197



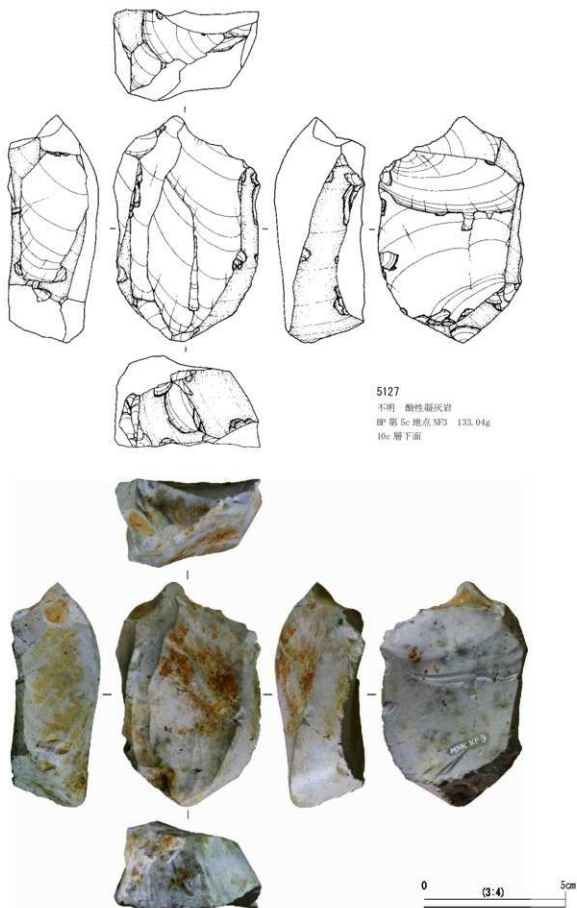
5125
船底形石器 SS
BP第5c地点 22g
2層 31273



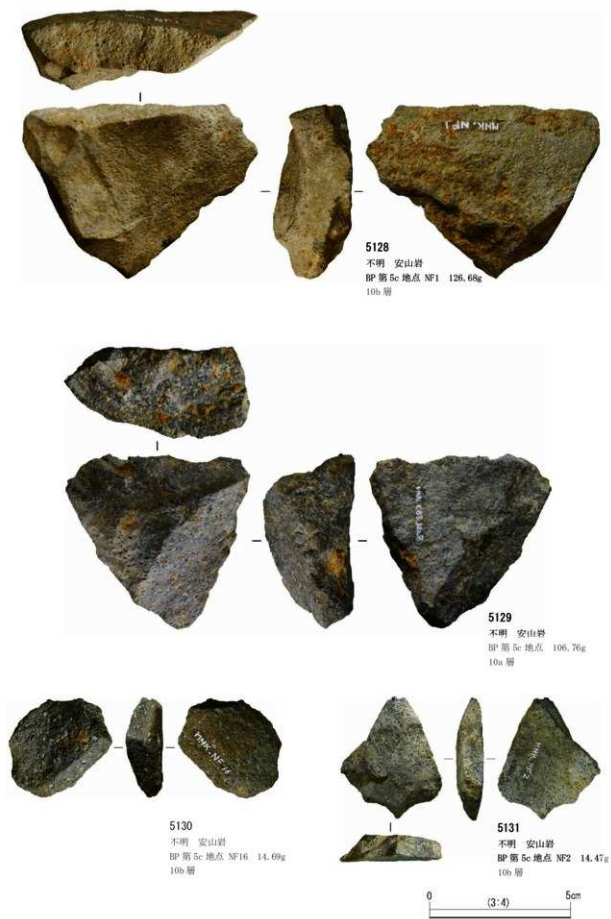
5126
船底形石器 SS
BP第5c地点 45.61g
2層 27085

0 (3.4) 5cm

第51図 BP第5地点石器実測図(船底形石器2)



第52図 B P第5c地点中部野尻層出土遺物1



第53図 B P第5c地点中部野尻層出土遺物2



第54図 B P第5c地点中部野尻層出土遺物3

第4節 縄文時代の遺構と遺物

1 調査成果の概要

BP第4地点～BP第5c地点では、縄文時代草創期～前期初頭の遺物群が出土し、BP第5d地点では多数の後・晩期の資料が出土した。これらの遺物群に伴う竪穴住居跡などの居住施設は検出されず、BP第4・第5a地点で草創期の礫群と炉跡が検出されたのみである。

遺物包含層は各調査地点で様相が異なり、調査地点ごとに別個の層名を用いた。詳細は、第1節に述べた。BP第4地点はⅡ層とⅢ層(風成層)で草創期から前期の土器が出土した。BP第5a地点ではⅢ層と1層(水成層)から草創期の遺物群が出土し、炉と炭化物集中が確認された。土器群の大半は無文土器で、隆起線文、円孔文、円形刺突文および爪形文の土器が含まれる。BP第5c地点では、Ⅱ・Ⅲ層からは早期と前期、その下層の1・2層(水成層)からは草創期から早期前半の遺物群が出土した。特に2層からは多量の土器と石器が出土したが、草創期から早期前半の遺物が混在している状況であった。BP第5d地点では後期・晩期の遺物包含層が確認され、上層の中世以降の整地層にも縄文時代の遺物が混在する。

なお、調査区周辺では、野尻湖発掘調査団による発掘が行われており、BP第5a地点の南東には爪形文土器を出土した土坑3基が報告されている(野尻湖人類考古グループ1987)。

2 遺構

BP第4地点とBP第5a地点で草創期の土坑8基、礫群3箇所、炭化物集中1箇所が確認された。この他に、BP第5a地点ではⅡ層を覆土とする縄文時代早期以降のビット群と炭化物集中が検出されたが、時期は不明である。なお、同時期の土器がまとまって分布する範囲を遺物集中区(SQ)として示した。第58図に草創期の遺構と土器、石器の分布図を示した。石器はⅢ層・1層出土のもののみを示した。以下に、草創期の遺構について記載する。

(1) 土坑(第56図)

SK5003は半分が失われているが、土坑縁辺に石が置かれており、内部から炭化物が出土した。火床面は確認できなかったが炉であると判断した。土坑底面より無文土器と爪形文土器(第61図26・27)が出土した。SK5003と5007は炭化物集中区(SF52)の下部に確認された。他の土坑は不整形で自然地形の窪みの可能性もあるが、SK5008には無文土器片がまとまって出土した。SK5003・5008は1e層上面で、SK5007はⅢa層上面で検出した。

(2) 礫群(第9図、第58図)

SH01はⅡ層下部からⅢ層にかけて検出され、



第55図 BP第4・第5地点の調査範囲

1.5m × 1.4mの範囲に被熱した17点の礫が分布する。周辺には早期以降の遺物が見られないことから、草創期の遺構と判断した。礫群中に凹石が含まれており、SH02内のものと接合した。

SH02はⅢ層中に検出された。3.0m × 2.4mの範囲に45点の礫が出土し、36点に被熱による赤化が観察された。

SH03はⅢ層上面からⅢ層下部にかけて、64点の礫が出土した。顕著に赤化したものが16点確認される。礫群に接し、Ⅲ層下部から神子柴型磨製石斧(6019)と挟入削器(6016)が出土した。付近からは無文土器(第3群土器)が数点出土している。

(3) 炭化物集中(第56図)

SK5003の北東側の斜面裾野から平坦面に炭化物の集中と焼土が検出された。その中の特に炭化物が密集する部分をSF52とした。炭化物と焼土はⅢ層中に検出され、炭化物の下層には砂礫層(1e層)が堆積する。SF52周辺には第2群・3群土器が集中しており、土器はⅢ層、1e層、1f層から出土する。つまり、SF52を挟んでその上下から土器が出土している。焼土塊は炭化物層の上に乗っており、二次堆積の疑いがある。炭化物を含む層を挟んで上下から、類似した土器群が出土していることから、SF52は第2群・3群土器に伴う遺構と判断し、数次にわたる場の利用があったことを想定した。

しかし、SF52のⅢ層と1層より出土した炭化物のうち、任意に抽出した3点の木炭の炭素14年代測定を行ったところ、cal BC 8849-8747、cal BC 9884-9842、cal BC 21281-20696の値が出ており、第2群土器着物の年代測定結果と齟齬が生じた。測定資料の年代に開きがあることから、測定した炭化物が混入したとも考えられるが、SF52が早期である可能性もあり、土器群と炭化物集中との間に時期差がある可能性も考慮しなくてはならない。なお、BP第5a地点のⅢ層で出土した最も新しい土器は、表裏縄文土器である。年代測定の概要は第4章に記し、詳細は添付CDに収録した。

(4) 遺物出土状況(第57・58図、第8・12・14表)

a. 第4地点・第5a地点の出土状況

BP第4地点とBP第5a地点では同時期の土器がまとめて出土する状況が認められた。第57図に、土器分類別の分布状況を示した。

SQ01はⅢ層に爪形文の破片がまとめて出土したもので、全て同一個体と思われる。SQ02はⅡ層下部にまとめて出土した。SQ03は大半がⅢ層と1層から出土し、13m × 25mの範囲で特に分布密度が高い。Ⅲ層と1層では無文土器を主体とし、隆起線文、円孔文、



SH02



SH03



SK03



SK04

円形刺突文、爪形文が出土する。第6群・9群・10群・12群土器は全てⅡ層出土、第7群土器がわずかにⅢ層から出土したのみである(108)、1層からは草創期の土器のみが出土する。前述の土坑と炭化物集中がSQ03と関連する遺構と考えられる。SQ04は人頭大の礫の下に1個体の土器がつぶれて出土した(第70図137)。SQ05とSQ16はⅡ層、Ⅲ層に出土。SQ17は広範囲に分布する土器群を一括したが、第

遺構名	第1群(縄文)	第2群(縄文)	第3群(縄文)	第4群(縄文)	第5群(縄文)	第6群(縄文)	第7群(縄文)	第8群(縄文)	第9群(縄文)	第10群(縄文)	第11群(縄文)	第12群(縄文)	第13群(縄文)	第14群(縄文)	第15群(縄文)	第16群(縄文)	第17群(縄文)	第18群(縄文)	第19群(縄文)	第20群(縄文)	合計	備考		
SQ01					26																26	30~40		
SQ02										17							13				30			
SQ03	1	10	6	720	10	2	1			1	4						2			8	774	2~29・41・43~49 52~102・104・108		
SQ04																					3	137		
SQ05																		9	16		23	29	77	124,131,132
SQ16																					23	65	125,136	
SQ17	3		28				1			16	72	5	12	10							33	184	1・42・117~119・123 126・127・129・133~135	
SQ18																						1	116	113~116
SQ19								2		6	33											10	51	105・106・109・110
SQ51																						10	10	138~140・144・146

1群に接合した無文土器は1群としてカウントした。SQ17で平底2点出土。

第12表 B P第4・第5a地点のSQ別土器分類構成

1群・3群・6群・11群土器はⅢ層、第12群土器はⅡ層、第9群・10群・13群土器はⅡ層およびⅢ層から出土し、層位的に前後関係がつかめる。なお、Ⅱ層下部からは平底の底部が出土した。SQ18はⅡ層中部で出土し、ほとんどが同一個体の第8群押型文土器(113~116)である。SQ19はⅡ層下部~Ⅲ層上部にかけて、第7群・9群・10群土器が出土した。SQ51は直径2mほどの範囲に分布する前期前葉の土器で、いずれもⅡa層から出土した。

なお、B P第5a地点の第1群・第2群・第3群土器(12・43・44・92他)について土器付着物の炭素14年代測定を実施した。分析結果は第4章に記す。

石器は、第3節の第8表に旧石器時代の石器と合わせて器種組成を示した。第57図に縄文時代の包含層より出土した石器群の分布を示した。

B P第4地点では種子柴型石斧、有茎尖頭器、石鏃などが単独で出土し、剥片・破片は少数である。B P第5a地点のⅢ層・1層出土の石器は、伴出土器から隆起線文土器、円孔文土器、無文土器および爪形文土器の時期のものであることがうかがえる。Ⅲ層には表裏縄文土器が1点出土しているが、1層からは草創期の土器群のみが出土しており、草創期の石器群を抽出することができる良好な資料である。

b. 第5c地点の遺物と出土状況

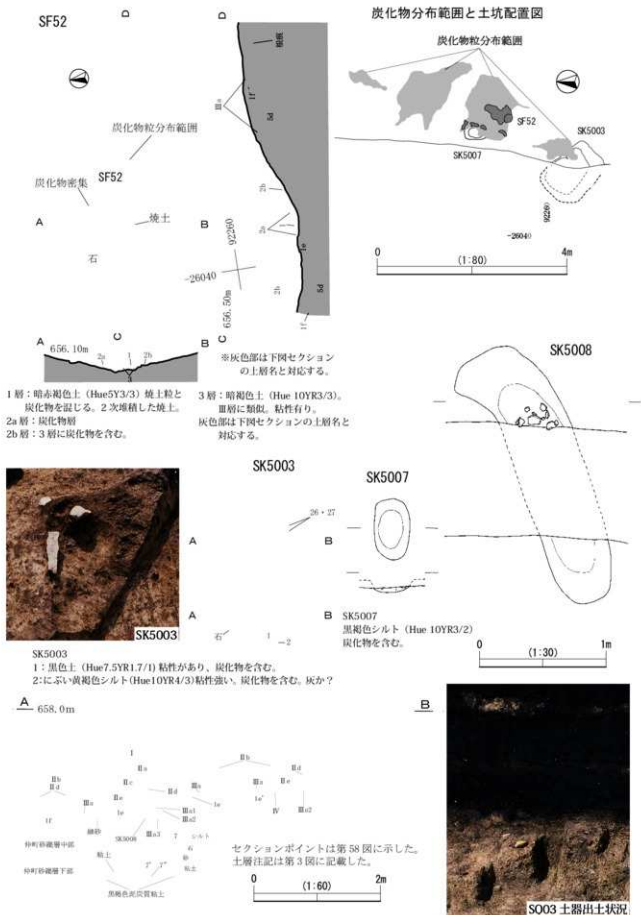
1層・Ⅱ層では、前期の第12群・13群・14群土器が主体となる。1層群~2層の砂礫層では草創期から早期前半の第4群~11群土器が主体となり、わずかに第1群土器(隆起線文土器)が見られる。特に、砂礫層中に遺物が多く、2層下面から8群土器(押型文土器)が出土しており、草創期から早期の土器が混在している。また、砂礫層の分布範囲全域から遺物が出土しており、特に有意な分布のまともりは認められない。砂礫層の遺物には、摩滅したものと磨耗が見られないものがあり、磨耗していないものはある程度原位置を保っていると考えられる。

縄文土器が出土する砂礫層をB P第5a地点と合わせて仲町砂礫層上部と呼称しているが、出土遺物の時期差から、B P第5a地点の仲町砂礫層上部とは堆積時期が異なることが想定される。

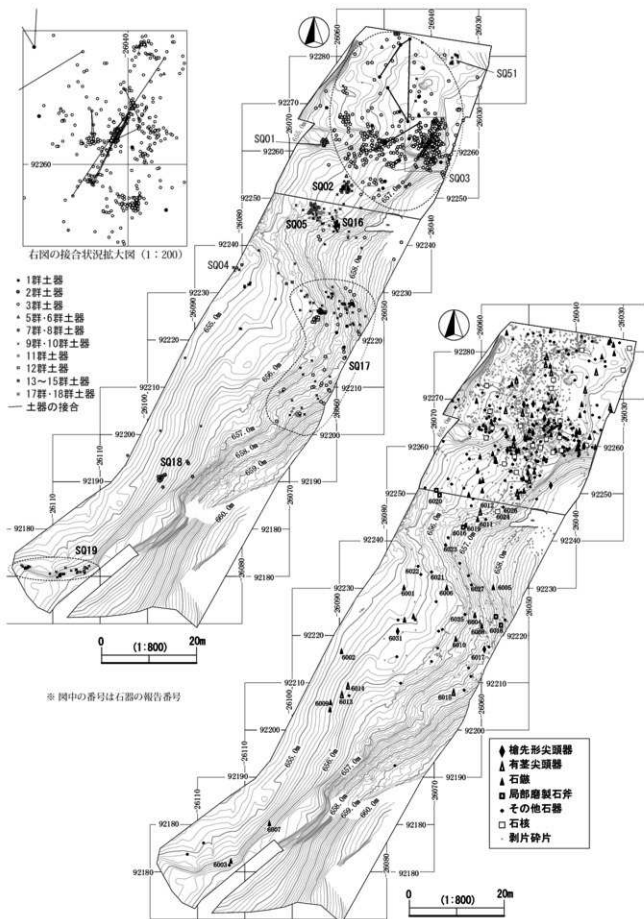
石器も土器と同様に砂礫層全域に分布するが、下層には旧石器時代の遺物包含層(仲町砂礫層中部)が堆積しており、仲町砂礫層上部にはナイフ形石器などの旧石器時代の遺物が多数含まれている。

c. 第5d地点の遺物と出土状況

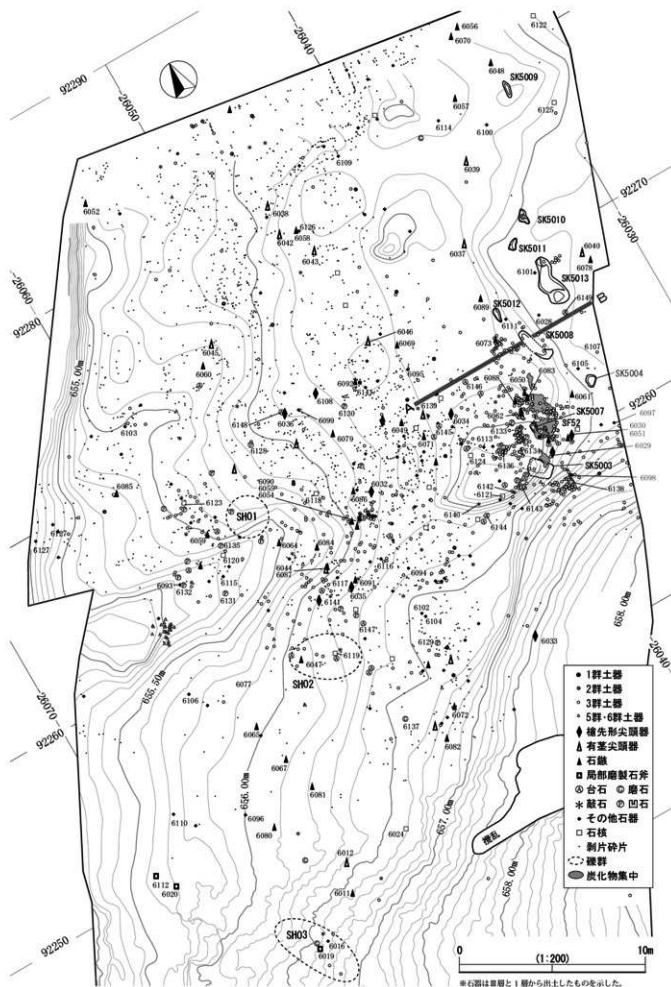
草創期から晩期の土器が出土した。11~13層の砂礫層が縄文時代の遺物包含層で、草創期から晩期の遺物を包含層する。13層は前期以前の遺物がわずかに出土したのみで、遺物群の大半は11層と12層より出土した。また、耳飾、耳栓、土鏃などの土製品などが出土している。



第56図 BP 第5a地点の遺構と土層



第57図 BP第4地点・BP第5a地点縄文時代の土器と石器の分布



第58図 縄文時代草創期の遺構と遺物

3 出土遺物

(1) 土器群の分類と概要 (第14表、第59図～88図、PL25～PL28) (PDF版 PL35～PL45)

仲町遺跡出土の縄文時代土器を以下のように分類した。

- 第0群土器 1群から6群以外の草創期土器
- 第1群土器 隆線文土器
- 第2群土器 円孔文・円形刺突文土器
- 第3群土器 無文土器 (草創期、第1群・第2群土器の無文部を含む)
- 第4群土器 格子目沈線を施文した土器
- 第5群土器 爪形文土器
- 第6群土器 多縄文系土器 (押圧施文・回転施文)
- 第7群土器 表裏縄文土器
- 第8群土器 押型文土器
- 第9群土器 回転縄文土器・摺糸文土器 (草創期、押型文に伴うもの、条痕文系土器に伴うものを含む)
- 第10群土器 無文土器 (早期～前期)
- 第11群土器 貝殻沈線文系土器
- 第12群土器 条痕文系土器
- 第13群土器 胎土に繊維を含む縄文施文土器 (早期後半～前期前半)
- 第14群土器 胎土に繊維を含む網目状摺糸文土器 (前期)
- 第15群土器 半裁竹管文系土器 (前期)
- 第16群土器 中期の土器群
- 第17群土器 後期初頭から前葉の土器群
- 第18群土器 後期中葉から後葉の土器群
- 第19群土器 晩期の土器群

以下に、各土器群の概要を記す。詳細は、添付CDの遺物台帳を参照していただきたい。

第0群土器 (41・51)

BP第5a地点で2点出土したのみである。41はⅢ層、51はⅣ層より出土しており、何れも草創期の土器と考えられるが、本遺跡で他に類例は見られない。41は連続刺突文の小破片で、51は斜行する沈線がみられる。特に、51は胎土に獣毛状の繊維痕跡が認められ、1群～3群土器より下層に出土しており、本遺跡最古の土器である可能性がある。

第1群土器 隆起線文土器 (1～13、148～153)

横走する低い隆線上に薄い壺状の工具で刻みをいれるもの(1・2)、斜行又は横走する微隆起線をもつもの(4～10、148～151)、口縁部に隆線が一条巡るもの(11～13)に大別できる。同類に分類されるものはそれぞれ胎土が類似し、1と2は同一個体の可能性がある。12・13は接合して11に含まれる。口縁部の円孔は焼成後の穿孔である。150・151には浅い爪形文が認められる。

第2群土器 円孔文・円形刺突文土器 (43～47)

口縁部に焼成前の円孔もしくは円形刺突があるもので、器厚が4mm～6mmと薄手の土器である。内面には指頭圧痕と擦痕が見られるものが多い。43は口縁部に豆粒状の貼付文が見られる。同様な貼付文が第3群土器の中にも認められ(48～50)、類似した胎土の土器が第3群土器の中に多数見られる。47は小片であるが、隅丸方形の器形の可能性を示す。43・44の器形は円形、方形のどちらとも判断できない。

第3群土器 無文土器 (14～17, 48～50, 52～102, 154・155・331・332)

貼付文があるもの(48～50)、口唇部に刻みがあるもの(15・16・154・155・331)などを含み無文土器とした。

59は焼成後の穿孔である。厚さが、3mm～4mm程度の薄いもの(72～75)、1cmを超える厚いもの(54・55・59・99)などが見られるが、5～8mm程度のものが多い。胎土と焼成により以下のようにA～E類の5種類に大別した。A類は大粒の石英粒を多量に含むのが特徴的で、少量の金雲母がみられ、全体的に黒色味を帯びる色調で器面に光沢が感じられるものがある(58・59・81～88など)。B類は小粒の白色岩粒が特徴的にみられる(14・48・49・154・155など)。細い繊維状の圧痕が器面に認められるもの(49)がある。C類は混和材が顕著に見られず、精選された胎土で、焼成が良好で硬質で器厚が薄いものが多い(56・57・101など)。なお、2群土器はいずれもC類の特徴を持つ。D類は小粒の石英粒、白色岩粒などを含み、器壁が厚く軟質な印象の胎土である(52～54・99・102など)。E類は胎土に細かな石英・輝石を含み、全体に黄褐色を呈し、第3群土器の中では異質である(15～17)。32点出土したが、すべて同一個体の可能性がある。

44と56は同一個体かと思われるほど胎土と内面調整などがよく似ている。

A群～C群には縦口縁が顕著であり(85～97)、粘土積み上げ方法の類似性が認められる。

BP第5a地点の草創期の遺物のみが出土する包含層で底部破片は5個体出土した(14・17・100～102)。その中に平底の器形が存在する。14は第1群土器の中に類似した胎土が見られる。15～17は同一個体で器高10cmほどの平底の鉢形の器形が推定できるが、底部が円形か方形か判断できない。100は平底の可能性が高く、80と同一個体と思われる。101は隅丸の方形を呈する平底であり、57と胎土や内面調整の擦痕が共通しており、同一個体の可能性がある。2群土器の中にも101と類似した胎土のものがあり、2群・3群土器の中に方形平底のものが存在すると考えられる。102は平底の底部であろうか。なお、56・57は円形の器形として復元実測したが、方形の可能性も捨てきれない。

77点の口縁部破片が出土したが、同一個体のものがあるため個体数は10～15個体前後と推定される。

第4群土器 格子目の沈線文を施文した土器 (161・162)

BP第5c地点で2点出土した。細く浅い沈線で格子目文を描く。

第5群土器 爪形文土器 (18～40・156～160・333～342)

25は爪遺跡の爪形文とされるものに類似する。30～40はSQ01でまとまって出土した同一個体である。157はハの字状の爪形文で、本遺跡ではまれな例である。

第6群土器 多縄文系土器 (42・154・155・163～193・343)

草創期の押圧縄文、回転縄文を一括する。主に、BP第5c地点から出土した。口唇部の押圧縄文(163・164)、自縄自巻a種(172)、自縄自巻b種(168・169)、正反の合(173・174)、絡条体圧痕(176・177)など多様な縄文が見られる。また、178～183の薄手の縄文土器は室宮洞窟の室宮下層式土器に極めて類似する。

第7群土器 表裏縄文土器 (104～106・196～223・334～347)

BP第5c地点に多く出土した。裏面の縄文は口縁部のみで、口唇部に縄文が施文されるもの(口唇部拓本を示した)と縄文がないものが見られるが、前者の方が多数を占める。222と223は同一個体で、胴部裏面に縄文が見られる唯一の例である。第9群土器に類似する胎土のものが多数含まれることから、表裏縄文施文は口縁部のみで胴部は表面のみの縄文施文と想定される。

第13表 第1～3群土器の胎土別出土層位

土器分類	胎土	出土層位不明	II	III	I	Str5
第1群土器	A類		1	2		
第1群土器	B類			1	15	
第2群土器	C類				6	
第3群土器	A類	2	2	94	218	1
第3群土器	B類	1	1	17	82	1
第3群土器	C類			27	79	
第3群土器	D類			9	33	
第3群土器	E類		2	25	5	
第3群土器	分類不能			11	72	

第8群土器 押型文土器 (113～116・224～263・352～354)

BP第5c地点に多く出土した。楕円文、山形文、格子目文、菱目文、異種並列が見られる。224～228の胎土には黒鉛が含まれ、257～260・262・263は繊維を含む胎土である。なお、113～116と262・263とはそれぞれ同一個体である。

第9群土器 縄文土器・撚糸文土器 (107～111・134・135・264～288)

BP第5c地点で多数出土した。本群には、表裏縄文土器の胴部、押型文土器・条痕文系土器に伴う縄文施文土器などが含まれる。多くは単節縄文で、撚糸文は264・278などわずかである。内面に指頭圧痕を残すもの(266・269～273・276など)が多く見られる。胎土に微量の繊維を含むものが少数みられる。279・280の腹口縁には、粘土組織み上げに関わる手法の痕跡と思われる器壁に併行した細い沈線が確認される。同様なものが、押型文土器の中にも確認された(241)。

第10群土器 無文土器 (289～293)

第3群土器以外の無文土器片を一括した。BP第4地点とBP第5c地点で多数出土した。第3群土器との区分が困難なものもあり、個々の土器の特徴から明確に分離できないものもある。したがって、第5群土器と分類した中に草創期の土器が存在する可能性もある。

第11群土器 沈線文系土器 (117～125・294～307)

BP第4地点とBP第5c地点で出土した。櫛歯状工具で条線を描くもの(117～125)、数条の並行沈線で文様を構成するもの(299～307)、貝殻腹縁文を施文するもの(294～298)に分けられる。数個体は少なく、同一個体と認識される破片が多い。117・118、120～123、299～304はそれぞれ同一個体である。

第12群土器 条痕文系土器 (112・126～129・308～311)

BP第4地点とBP第5c地点で出土した。多量の繊維を混じる胎土は共通するが、内面に、条痕が顕著なもの(126・127・308)とそうでないものがある。

第13群土器 胎土に繊維を混入する縄文施文土器 (131～133・137・315～326)

BP第4地点とBP第5c地点で出土した。単節縄文、無節縄文、羽状縄文などが見られる。いずれも繊維の混入が顕著である。大半はⅠ・Ⅱ層より出土した。BP第5c地点Ⅰ・Ⅱ層(砂礫層)から出土したものは、沈線文系土器群以前の時期に属する可能性があるが、いずれも小破片であり、混入の可能性が高い。

第14群土器 胎土に繊維を含む網目状撚糸文土器 (313・314)

Ⅱ層および攪乱から出土したもので、全て同一個体の破片と思われる。器壁は5mm前後と薄く、白色および赤褐色の粒子が多数含まれる。

第15群土器 半截竹管文系土器 (327・328・367～375)

前期中葉～後葉の土器で、半截竹管文系土器を主体とする。出土数はわずかで、提示したもの以外はほとんど出土していない。

第16群土器 中期の土器群 (329・330・376～403)

中期の土器群も出土数が少なく、出土量はテン箱1つに満たない。

第17群土器 後期初頭から前葉の土器 (138～140・146・147・404～406)

138～140・146はBP第5a地点Ⅱa層にまとまって出土したものである(SQ52)。遺跡全体では出土点数は少ない。

第18・19群土器 (第82～第87図) (PDF版PL35・PL41～46)

BP第5d地点から第18群・第19群土器がまとまって出土したが、詳細な分類と検討をおこなうことができず、代表的なものを提示するにとどめた。資料化した土器の抽出基準を明確にはできないが、土器

群の全容を提示できるように勤めた。

第18群土器(141～143・414～496他)はBP第4地点でわずかに出土したが、大多数はBP第5地点より出土した。495は特殊な器形を呈し、環状の胴部の双口土器の一部であろうか。

第19群土器(502～518・530～545他)はBP第5地点のみで出土した。498・502～516は晩期前葉、530～533・544は晩期後葉の浮線網状文、534～543・545は細密条痕文土器である。

526～529は表面に輪積み痕が残る特徴的な無文土器である。546～556・560・561は底部で、後期～晩期のものが含まれる。546は指ナズ痕が顕著に残るもので、後期前葉に北信地方でみられる粗製土器であろう。底部には網代痕が残るものが見られる。559～574は後期～晩期の縄文施文の粗製土器と考えられる。

土製品(578～590)

BP第5d地点で出土した。耳飾り9点、土錘1点、土製円盤1点、土偶1点が出土した。

第9群土器～第19群土器の写真は紙面の都合で印刷していないので、添付CDのPDF版報告書のPL35～PL45を参照していただきたい。

(2) 石器群の概要(第89図～133図、第7・8表、PL13～PL24、) (PDF版PL46)

第3節の第7・8表に調査地点別の出土点数と石材組成を示した。遺物図版も調査地点別に提示した。BP第4地点・5地点の遺物の属性は添付CDの遺物台帳に収録した。

遺物図版および遺物台帳にはPo(槍先形尖頭器)、AH(石鏃)、TP(有茎尖頭器)、Sc(削器)、NS(扶入削器)、ES(搔器)、Pe(楔形石器)、PT(礫器)、PS(凹石)、GS(磨石)、Ha(敲石)、Wh(砥石)、An(台石)の略号を用いた。

また、BP第5d地点1～10層では弥生時代中期の土器が出土しており、報告したな石器に弥生時代の石器も少数含まれると考えられる。

槍先形尖頭器・半月形石器(6017・6028～6036・6151～6166・6173・6287～6305)

槍先形石器163点、半月形石器3点が出土した。左右非対称のものを半月形石器(6028・6289・6291)とした。槍先形尖頭器は、旧石器時代のものとの区別ができず、縄文時代の包含層から出土した

土器分類	第4地点			第5a地点				第5c地点					第5d地点	合計					
	不明	Ⅱ	Ⅲ	不明	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅰ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅰ	Ⅱ			Ⅳ	Ⅰ	Ⅲ		
第1群(環状線文)		3			2		17				1	8			31				
第2群(円形刺突文)							5								5				
第2群(円孔文)							1								1				
第3群(無文)		34	1	4	45	183	489	1				10	○	767					
第4群(格子状線文)												2			2				
第5群(爪文)				2	30		6						17	○	55				
第6群a類(網目線文)				2				2	2		5	57		○	68				
第6群b類(斜線文)		1						2		4	57	1	○	7	65				
第7群(表裏線文)	2				1			3	2	1	6	70	2	○	87				
第8群(格子状押型文)											1	8		○	9				
第8群(山形押型文)								5	2	3	26	84		○	120				
第8群(縦列押型文)								1			1	9			11				
第8群(横列押型文)	13	3						5	5	5	12	43	○	81					
第8群(菱状押型文)												1			4				
第9群(縄文)	16	8			3			3	2		19	194	8	253					
第9群(指頭直)									3		47	275	1	○	326				
第9群(無文)												10	○	10					
第10群(無文)	1	81	73		20	1		4	4	6	4	52	274	5	525				
第10群(薄手無文)			14									13	135		162				
第11群(長段線文)									1	1		3	8		13				
第11群(環状工具)	9	20						1	1	1				○	32				
第11群(花線文)								1	7		10	6		2	26				
第12群(条痕文)	6	1		2	1				3	5	1				19				
第12群(筋条体打線文)	5							2	2	2					11				
第13群(縄文)	13	23		13				4	5	33	7	5	2	○	105				
第13群(網目線文)								4	6	2		3		○	15				
第14群(網目状条痕文)								3	18	7					28				
第15群(半環竹管文)								1	1					○	3				
第16群(中間の土器)								3						○	3				
第17群(後期前葉土器)				1	10									○	11				
第18群(後期～後葉)	3	1												○	4				
第19群(晩期土器)														○	4				
その他					1										1				
分類不明	52	68		3	3	7	3	10			13	24	116	329	1	629			
合計	4	198	248	1	10	95	229	3	528	1	44	65	90	18	323	1604	4	18	3483

○点数は破片数、接合により複数編文土器と判明した無紋土器は、複数編文土器としてカウントした。
 ※BP第5d地点の点数は13層から出土した土器破片数である。12層より上層で出土した土器の点数は、カウントしていないため、○印で出土例があることを示した。11～12層では、第16群～19群土器がまとまって出土したが、特に18群土器が多い。

第14表 BP第4・第5地点縄文時代土器分類別出土数

粗製土器であろう。底部には網代痕が残るものが見られる。559～574は後期～晩期の縄文施文の粗製土器と考えられる。

土製品(578～590)

BP第5d地点で出土した。耳飾り9点、土錘1点、土製円盤1点、土偶1点が出土した。

第9群土器～第19群土器の写真は紙面の都合で印刷していないので、添付CDのPDF版報告書のPL35～PL45を参照していただきたい。

(2) 石器群の概要(第89図～133図、第7・8表、PL13～PL24、) (PDF版PL46)

第3節の第7・8表に調査地点別の出土点数と石材組成を示した。遺物図版も調査地点別に提示した。BP第4地点・5地点の遺物の属性は添付CDの遺物台帳に収録した。

遺物図版および遺物台帳にはPo(槍先形尖頭器)、AH(石鏃)、TP(有茎尖頭器)、Sc(削器)、NS(扶入削器)、ES(搔器)、Pe(楔形石器)、PT(礫器)、PS(凹石)、GS(磨石)、Ha(敲石)、Wh(砥石)、An(台石)の略号を用いた。

また、BP第5d地点1～10層では弥生時代中期の土器が出土しており、報告したな石器に弥生時代の石器も少数含まれると考えられる。

槍先形尖頭器・半月形石器(6017・6028～6036・6151～6166・6173・6287～6305)

槍先形石器163点、半月形石器3点が出土した。左右非対称のものを半月形石器(6028・6289・6291)とした。槍先形尖頭器は、旧石器時代のものとの区別ができず、縄文時代の包含層から出土した

ものをすべて本節で報告したため、163点の中には旧石器時代のもも含まれる。出土層位から、明らかに旧石器時代のもものが13点確認されており、BP第4・第5地点では176点の槍先形尖頭器が出土したことになる。多数の形態が認められ、6017・6287・6034・6035など別な器種とした方がよいものも含めている。特に6017は局部磨製石斧と分類した6416と法量、調整加工が類似しており、これらに新たな器種名を付した方がよいかもしれない。

槍先形尖頭器・半月形石器には断面D字型になる片面調整のものが認められ(6017・6163・6287・6290・6291)、局部磨製石斧に含まれる神子柴型石斧に共通する剥片剥離と加工技術とが同われ、注意を要する石器である。

石鏃・挟入三角形石器・有茎尖頭器・石鏃未製品 (6001~6014, 6038~6092, 6150, 6167~6241, 6303~6388)

石鏃585点、挟入三角形石器2点、有茎尖頭器63点、石鏃未製品79点が出土した。6188・6189は石鏃の形態であるが、先端部に浅い抉りが入り、先端が平坦になる。この2点は法量、形態が類似しており、一つの器種であると認識し、挟入三角形石器と仮称した。

石鏃と有茎尖頭器の器種分類は議論があるところであり、有茎尖頭器と有茎石鏃は形態的に区別が不明確であるものがある。便宜的ではあるが、出土層位などから、草創期のものを有茎尖頭器、中期以降のものを有茎石鏃とした。有茎石鏃は主に後期～晩

期のもと思われるが、草創期とは石材が異なる。黒褐色の石質頁岩やチャートを多用しており、これらの石材は草創期には認められない石材であり、分類は可能である。Anなどの各時期に用いられる石材については、器種分類があいまいであることも否めない。

草創期に時期が限定できるBP第5a地点のⅢ層と1層出土の石鏃や有茎尖頭器の中にも石材、形態、法量のヴァリエーションがあり、複数の時期のものが混在していると考えられる。79点出土した石鏃未製品のほとんどが、BP第5d地点から出土しており、草創期の石鏃の未製品が認められない。また、石鏃・有茎尖頭器と剥片・碎片の石材組成が必ずしも一致しない(第15表)。Ⅲ層・1層出土の剥片と碎片は旧石器時代のもも混在することを考慮すると、草創期の石鏃・有茎尖頭器は調査区外で製作されたものと考えられる。また、PB第5a地点では土器は2群・3群土器が主体を占めることから、石鏃や有茎尖頭器の多くが第2群・第3群土器に伴うと短絡的に結論づけるには疑問が残る。新潟県千遺跡の石器群と共通しない部分があり、さらに、詳細な検討が必要である。

また、望月明彦氏に依頼し、黒曜石の産地推定分析をおこなったところ、有茎尖頭器と石鏃に長野県外の産地のものが確認された(第3節第11表)。産地は新潟県の新発田板山群、新津金津群、佐渡金井二ツ坂群、東京都神津島恩馳鳥島群、青森県深浦八森山群、富山県魚津草月上野群、山形県羽黒山山群である。佐渡金井二ツ坂群以外の石器は、出土層位から草創期から早期前半に限定されるものである。黒曜石産地推定分析の詳細は第4章に記述し、分析結果は添付CDに収録した。

削器・掻器・挟入削器・彫掻器・楔形石器 (6016・6096~6109・6111・6242~6252・6410~6414)

これらの器種は旧石器時代の石器との区別が困難であり、縄文時代の包含層から出土したものを本節で取上げたため、旧石器時代の石器を含む可能性がある。縄文時代の包含層から出土した点数は、削器132点、掻器67点、挟入削器29点、彫掻器3点、楔形石器57点である。

石匙・石錐 (6093~6095・6389~6400)

石匙11点、石錐61点が出土した。石錐は先端部のみを作り出したもの(6093~6095)と、細長い

石材	黒曜石	黒曜石未製品	頁岩	頁岩未製品	頁岩	頁岩未製品	頁岩	頁岩未製品	頁岩	頁岩未製品	頁岩	頁岩未製品	頁岩	頁岩未製品	頁岩	頁岩未製品	頁岩	頁岩未製品	頁岩	頁岩未製品	不明
石鏃	11	5	10							5			1	5							3
槍先形尖頭器	7	3	1							2											
有茎尖頭器	8	2	1																		1
削片	465	815	144	25	23	17	96	5	197	6			1		2	3	24	1	32		
剥片	74	131	19				50		24				2								1
石鏃	4	2		1	3					1	1										5

第15表 BP第5a地点Ⅲ層と1層の石材組成

錐部を作り出すもの(6389～6397)がある。後者はBP第5d地点のみで出土している。

打製石斧・局部磨製石斧・磨製石斧・石篋・礫器(6018～6021, 6112～6117, 6254～6261, 6415～6427)

打製石斧39点、局部磨製石斧23点、磨製石斧30点、石篋1点、礫器10点が出土した。

局部磨製石斧は断面D字型または楕円型に調整加工した斧形の石器で、神子柴型石斧と考えられるものを全て含めたので、研磨が認められないもの(6260・6261・6416)も本器種とした。局部磨製石斧はほとんどが神子柴型石斧である。6019はSH03内に出土したもので、側縁に研磨面を持ち、裏面は平坦に加工された優品である。6415は全体に線状痕が顕著に認められ、研磨ではなく磨耗によるものであるため、打製石斧と分類した。

6254・6255は出土層位から早期の磨製石斧である。

石篋(6257)は小形のもので、類似した資料がJS地点、BP第2地点で出土している。

2次加工のある剥片・不定形石器・微細剥離のある剥片

これらの器種は旧石器時代の石器との区別が困難であり、縄文時代の包含層から出土したものを本節で取り上げたため、旧石器時代の石器を含む可能性がある。縄文時代の包含層から出土した点数は、2次加工のある剥片441点、不定形石器111点、微細剥離のある剥片9点である。不定形石器は何らかの形態の作出意図が見られるもので、2次加工のある剥片と区別した。

砂礫層から出土した剥片は、自然現象による二次的な剥離が想定されるため、抽出対象から除外した。

砥石・有溝砥石(6126・6127・6266・6268・6474・6475)

砥石9点、有溝砥石(6266)が1点出土した。6126は最大幅2.6cmの浅いくぼみが見られ、石斧の砥石の可能性はある。

石錘(6022・6262～6264・6428～6435)

18点出土。6262～6264は出土層位から縄文時代早期以前のものである。

磨石・敲石・凹石・特殊磨石・スタンプ形石器・三角錐形石器

磨石24点、敲石38点、凹石64点、特殊磨石63点、スタンプ形石器5点、三角錐形石器4点が出土した。

台石・石皿(6025～6027・6143～6149・6283～6286・6476)

台石20点、石皿5点が出土した。磨面などの機能面と思われる部分を縦溝またはスクリーントーンで示した。6148は欠損後の使用により、厚さが減じていることが確認される接合資料である。

その他

小形船底形石器(6253)と剥片縁辺に磨耗が見られる刃部磨耗石器(6110)、研磨面を有する礫(6265)が各1点ずつ出土した。

剥片・碎片・石核・原石

縄文時代の包含層から石核156点、原石8点が出土した。剥片・碎片はBP第4～第5c地点で剥片7892点と碎片2640点、BP第5d地点で剥片・剥片合わせて約6000点が出土している。これらの中には旧石器時代の遺物が含まれる。

石製品

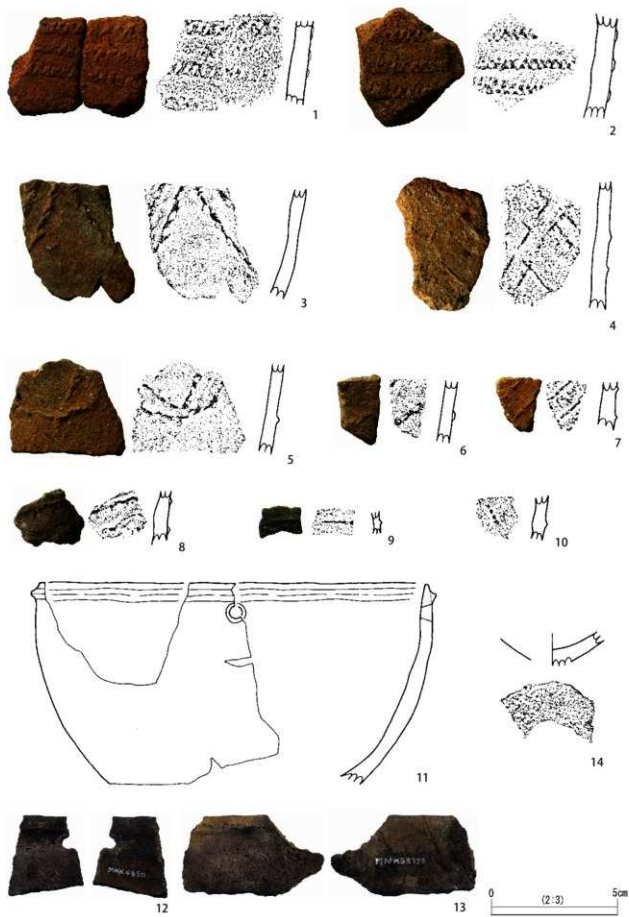
BP第5d地点で、岩版、石棒の破片、ヒスイ玉などが出土した。第5節第148図に実測図を掲載した。

参考文献

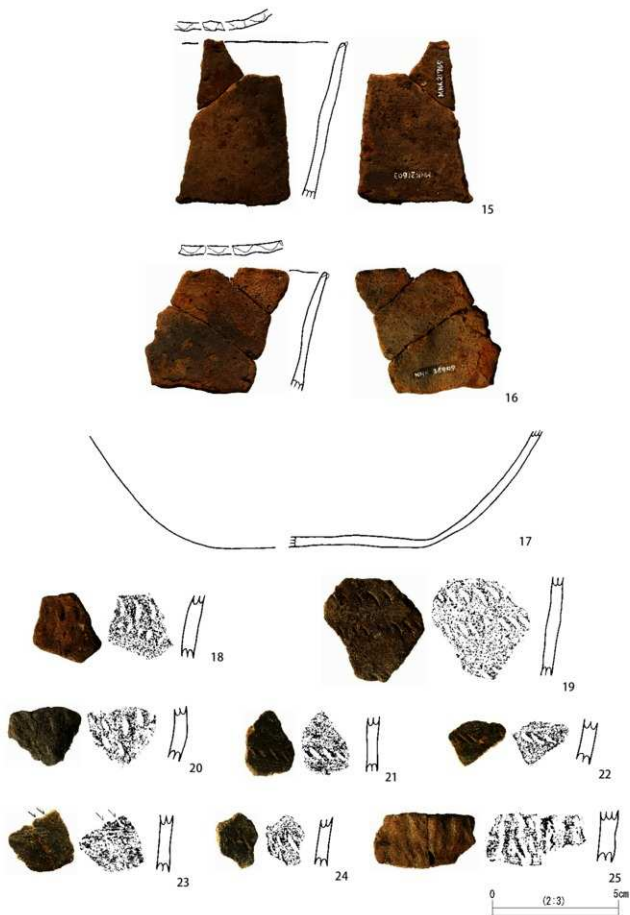
野尻湖人類考古グループ 1987 「Ⅱ 第2回～第4回野尻湖陸上発掘の考古学的成果」『野尻湖遺跡群の旧石器文化Ⅰ』野尻湖発掘の考古学的成果 第1集



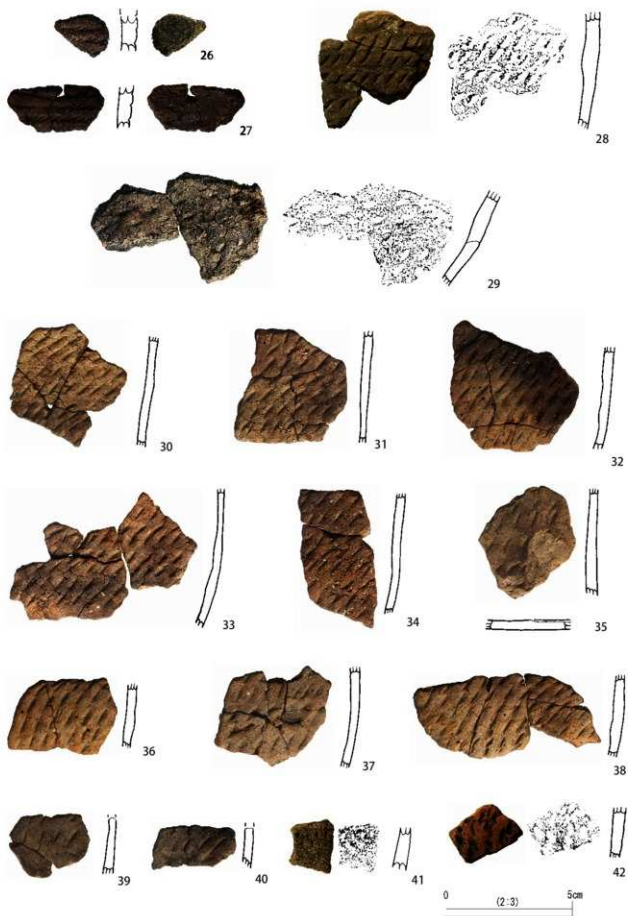
BP第5a地点から黒原山を望む



第59図 BP第4・第5a地点縄文土器1(草創期)



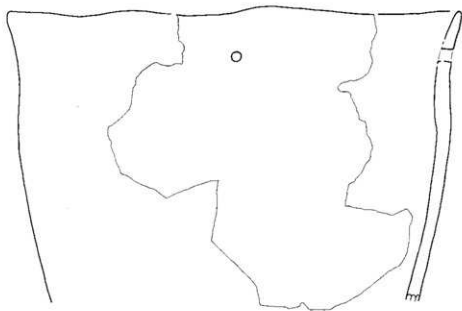
第60図 BP第4・第5a地点縄文土器2(草創期)



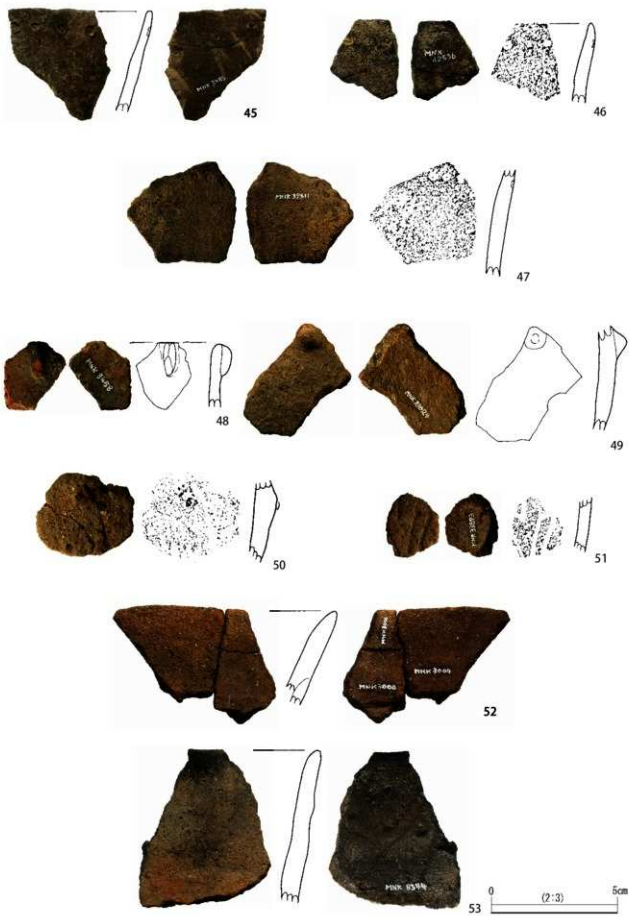
第61図 BP第4・第5a地点縄文土器3(草創期)



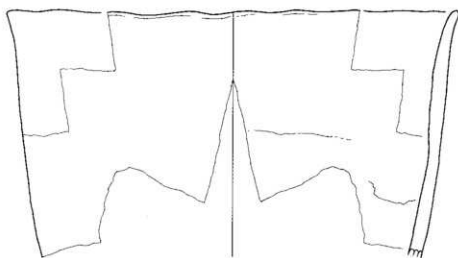
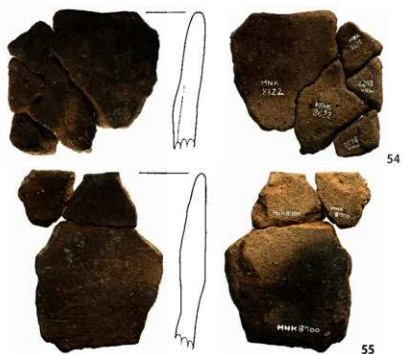
43



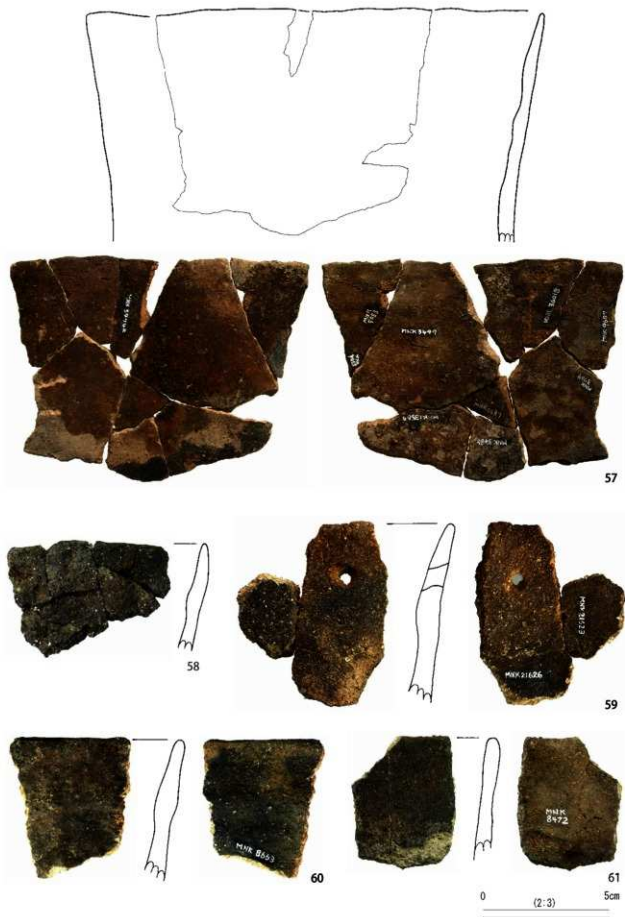
第62図 BP第4・第5a地点縄文土器4(草創期)



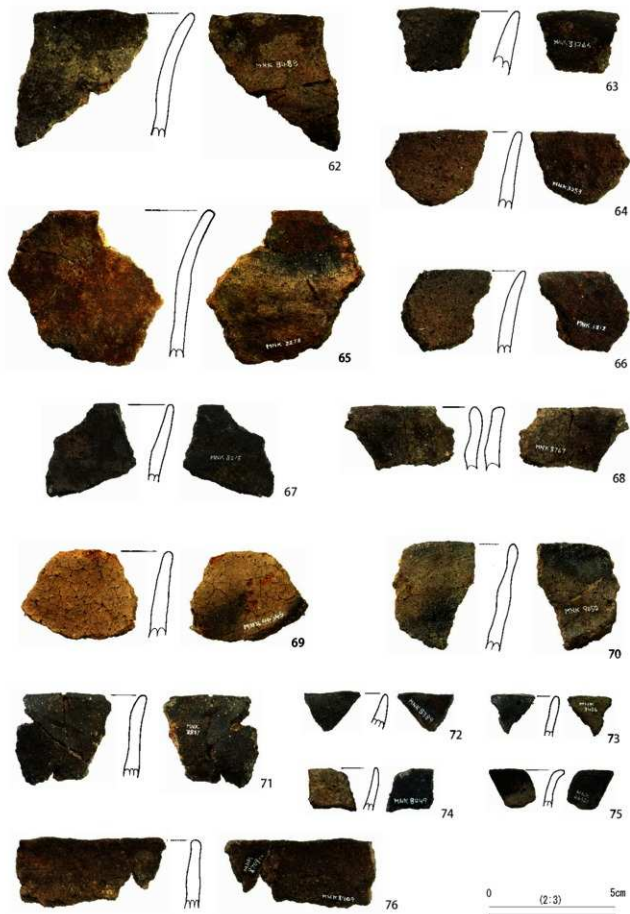
第63図 BP第4・第5a地点縄文土器5（草創期）



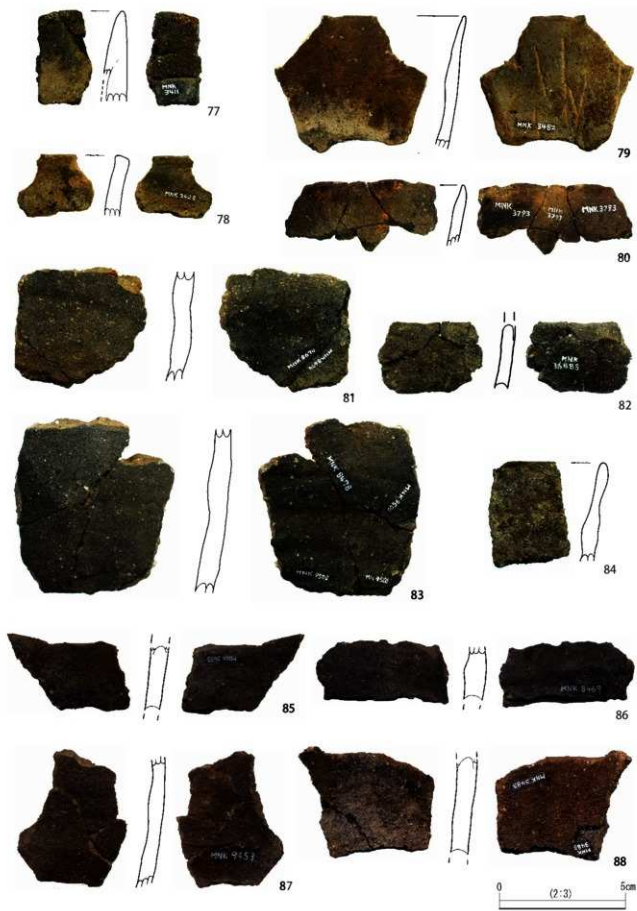
第64図 BP第4・第5a地点縄文土器6(草創期)



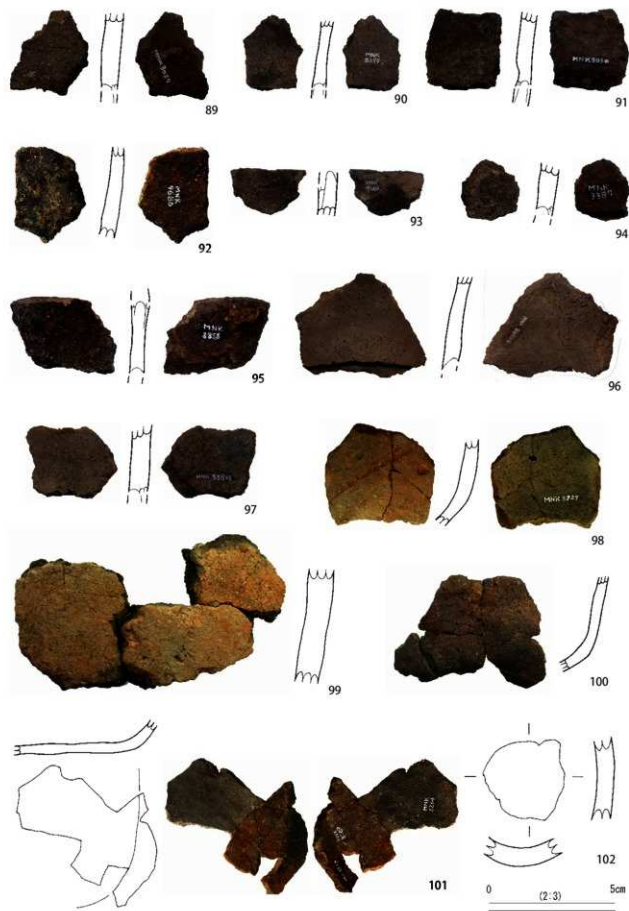
第65図 BP第4・第5a地点縄文土器7(草創期)



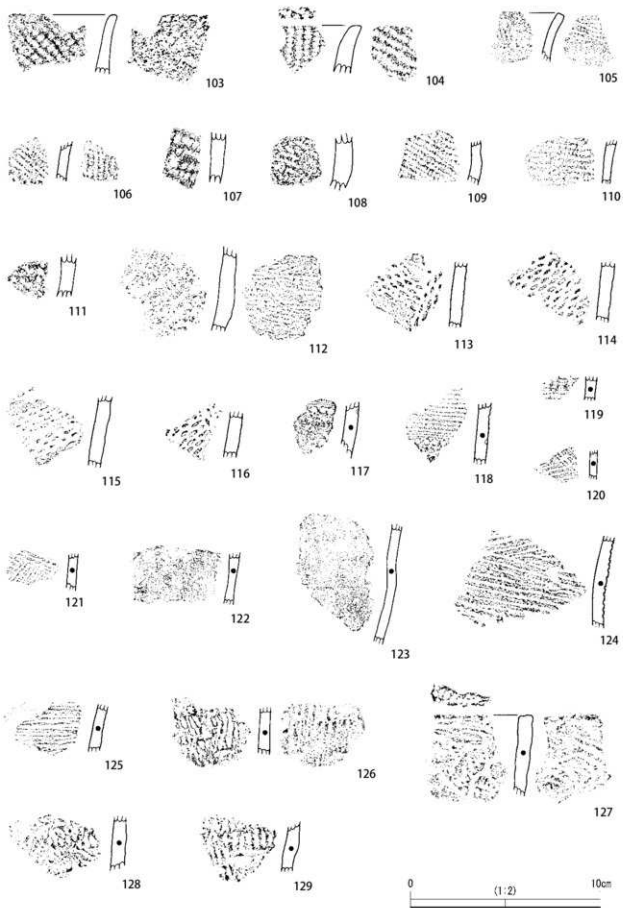
第66図 BP第4・第5a地点縄文土器8(草創期)



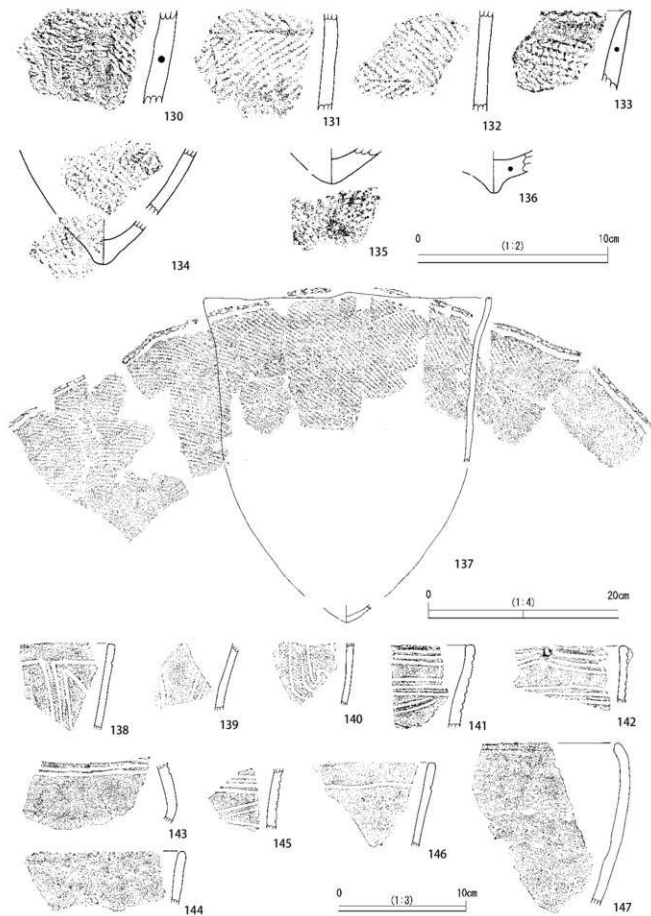
第67図 BP第4・第5a地点縄文土器9（草創期）



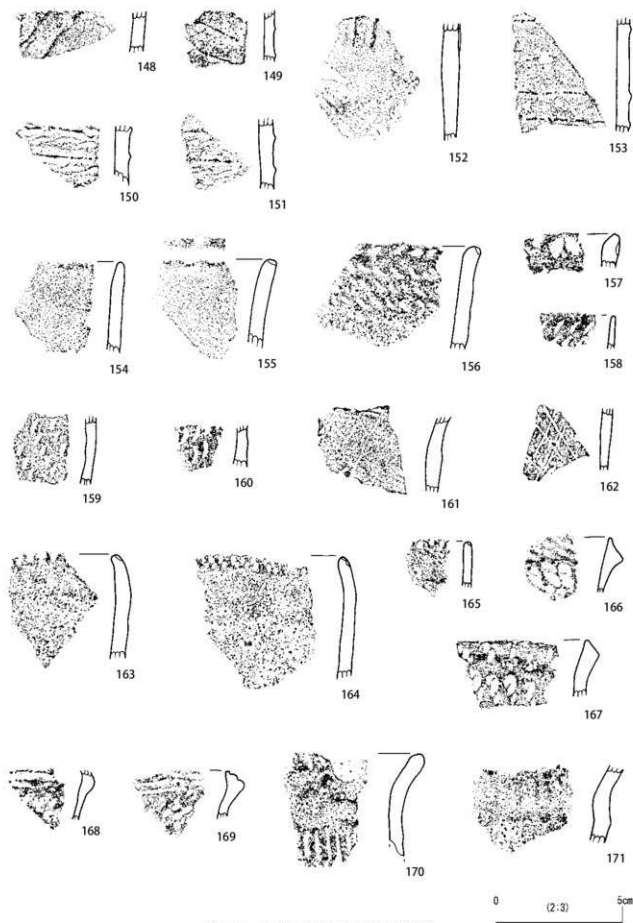
第68図 BP第4・第5a地点縄文土器10（草創期）



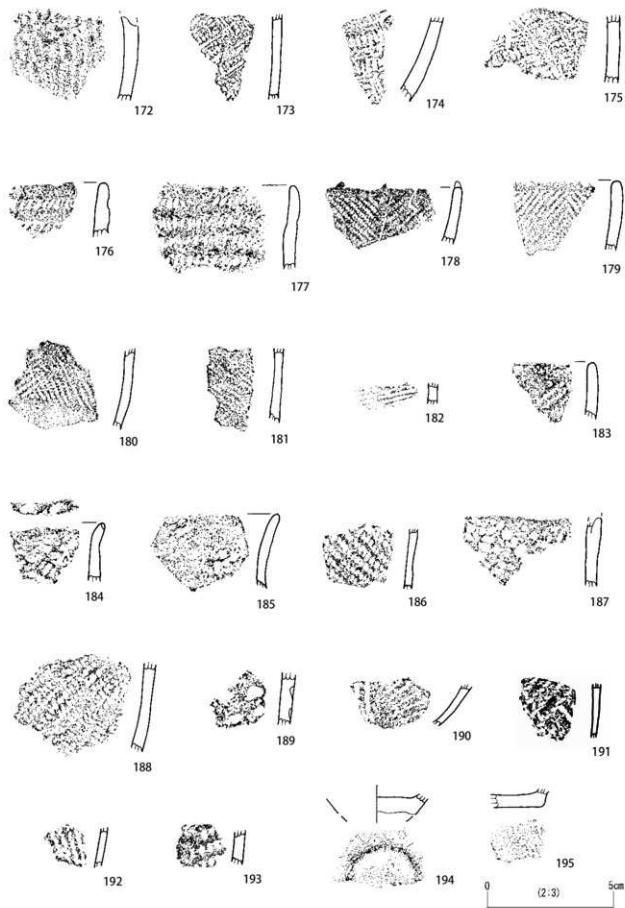
第69図 BP第4・第5a地点縄文土器11(早期)



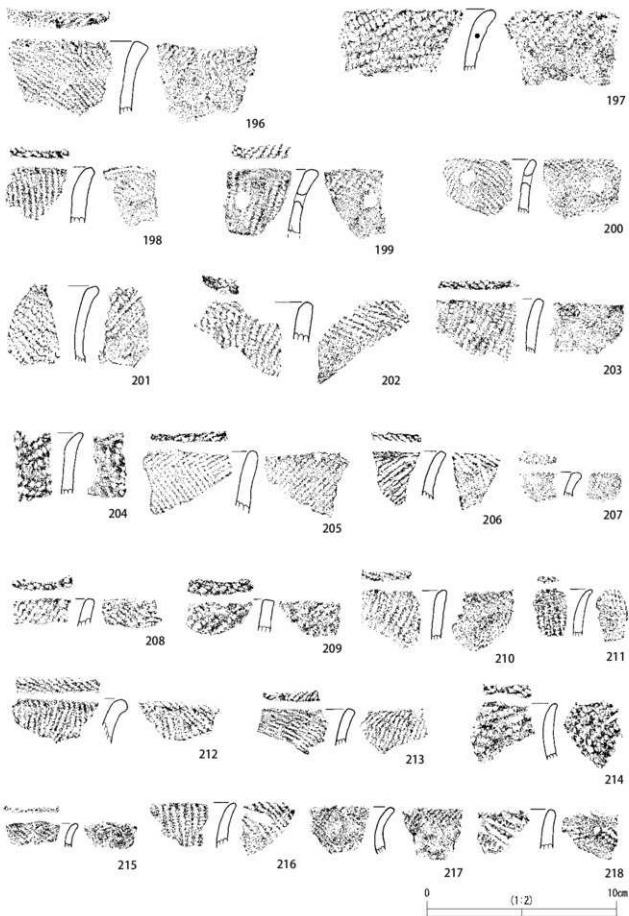
第70図 BP第4・第5a地点縄文土器12（早期・前期・後期）



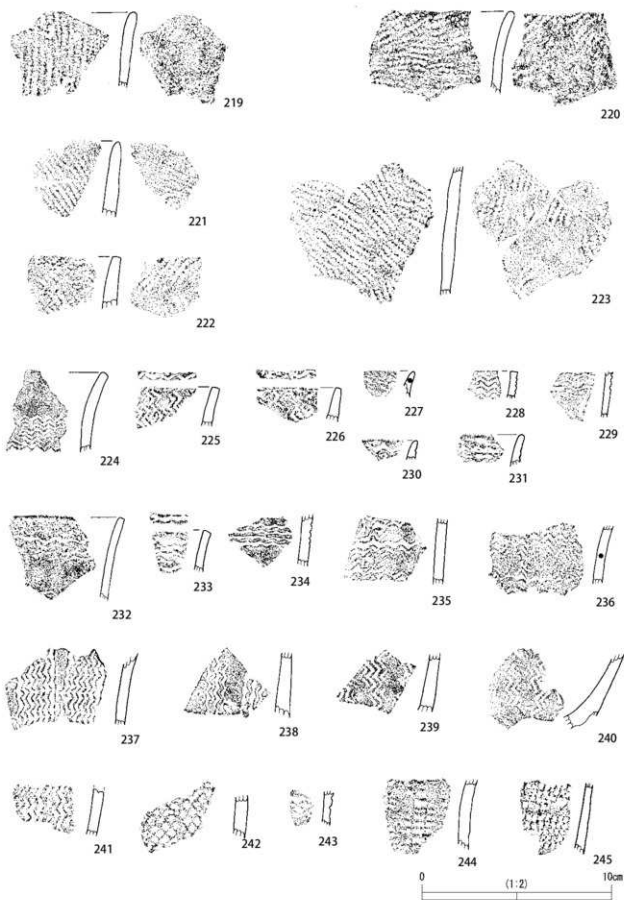
第71図 BP第5c地点縄文土器I(草創期)



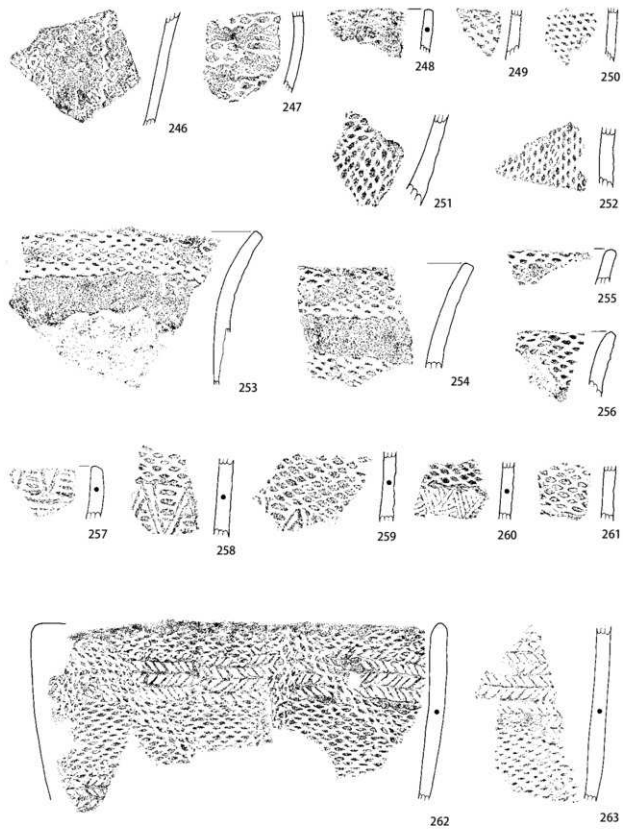
第72図 BP第5c地点縄文土器2(草創期)



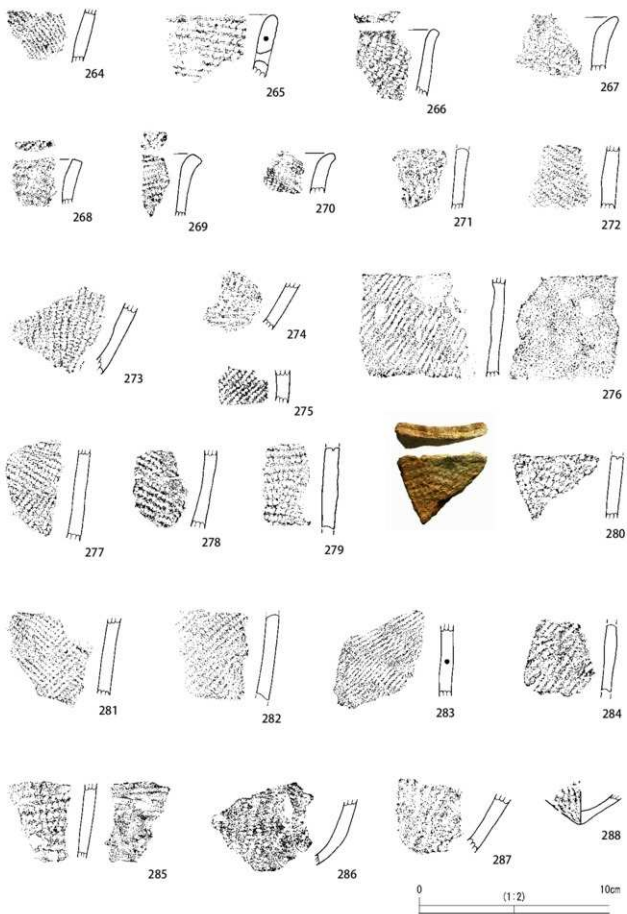
第73図 BP第5c地点縄文土器3(草創期・早期)



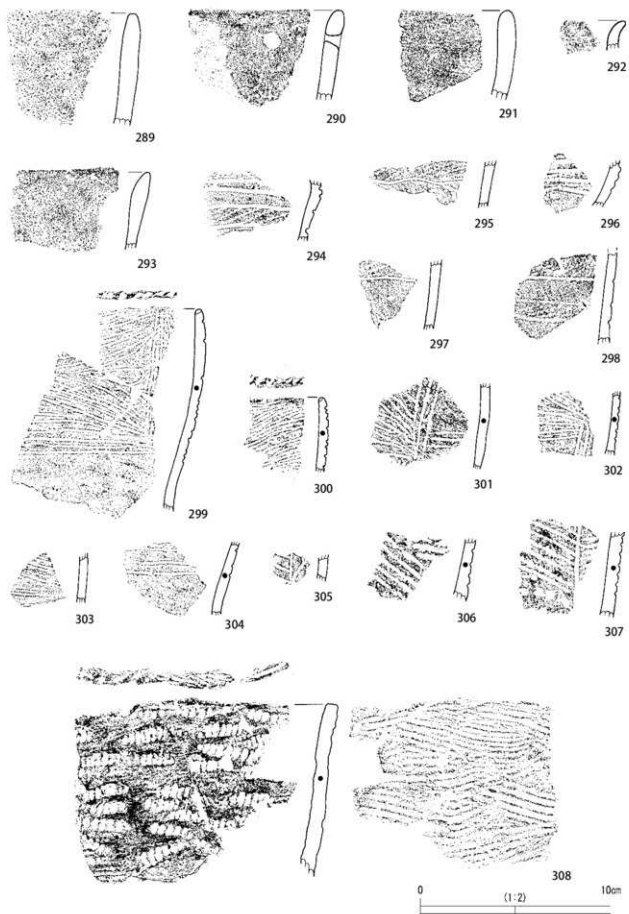
第74図 BP第5c地点縄文土器4（草創期・早期）



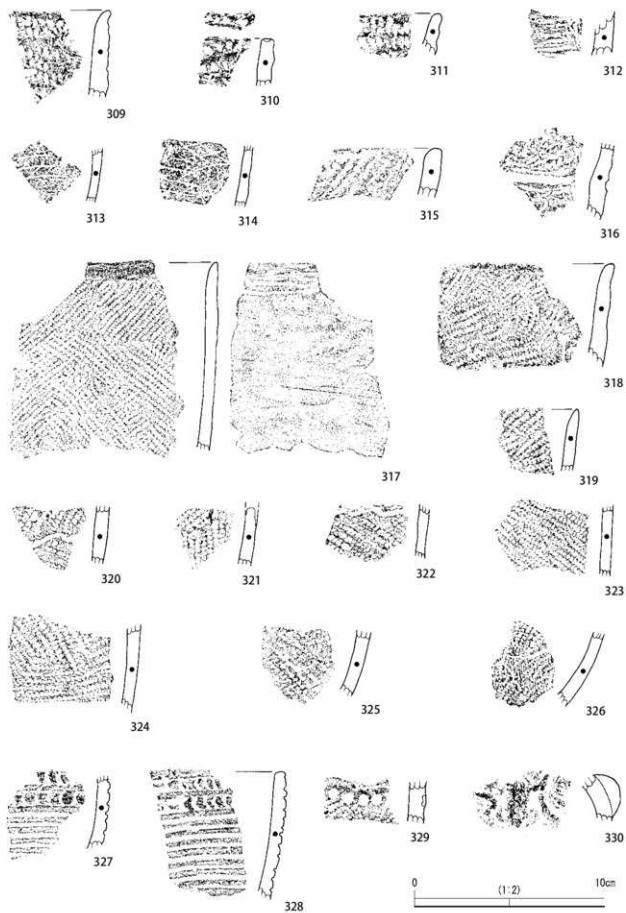
第75図 BP第5c地点織文土器5(早期)



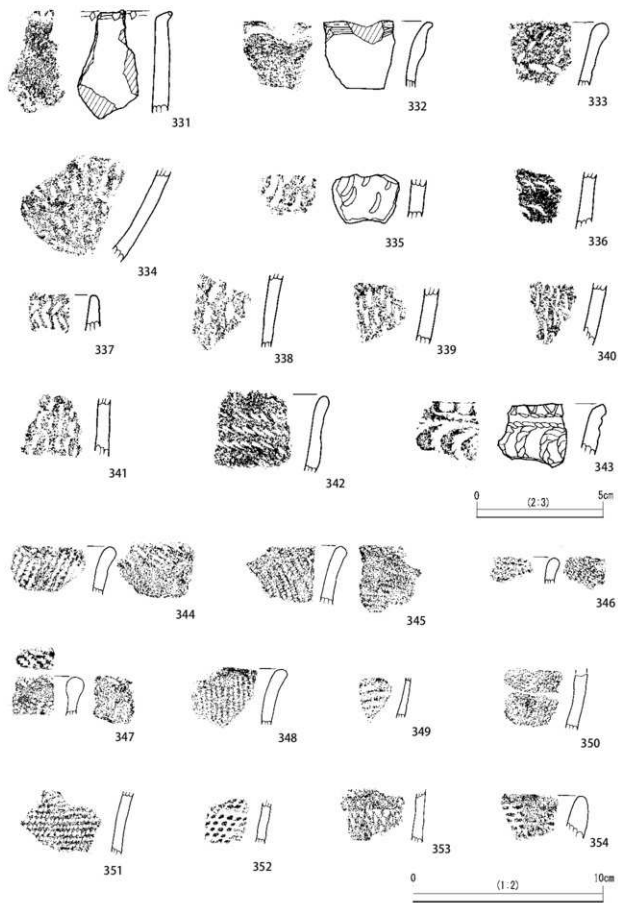
第76図 BP 第5c地点縄文土器6（早期）



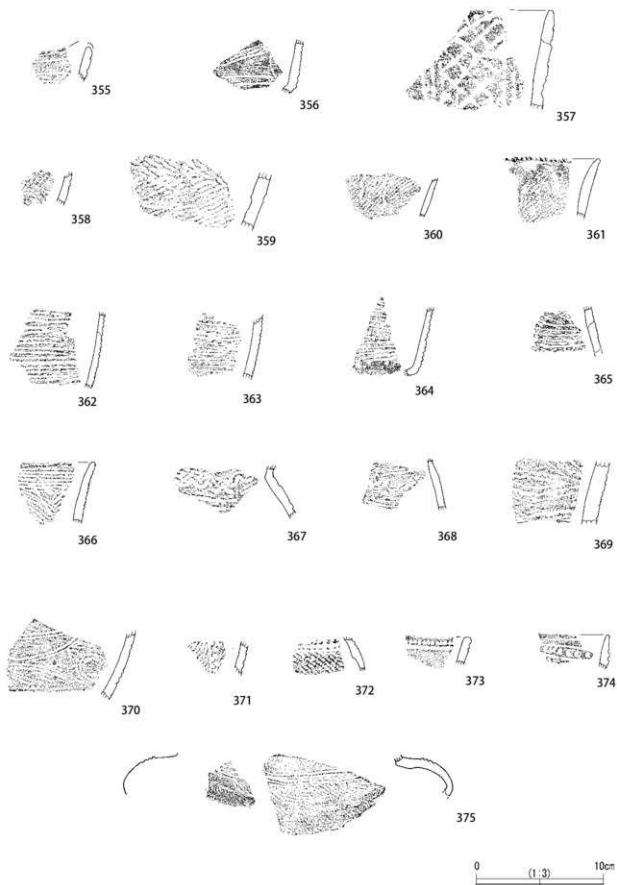
第77図 BP第5c地点縄文土器7(早期)



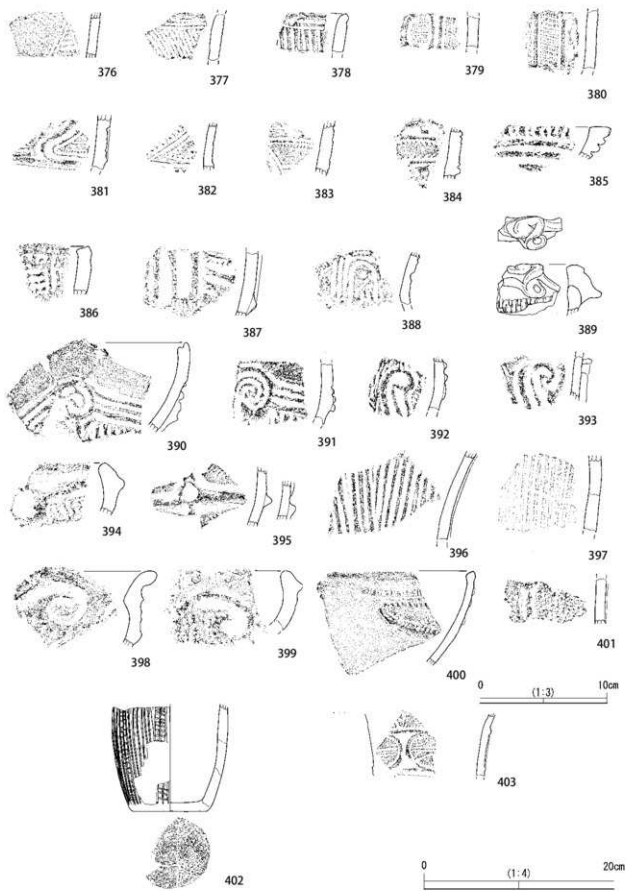
第78図 BP第5c地点縄文土器8(早期・前期・中期)



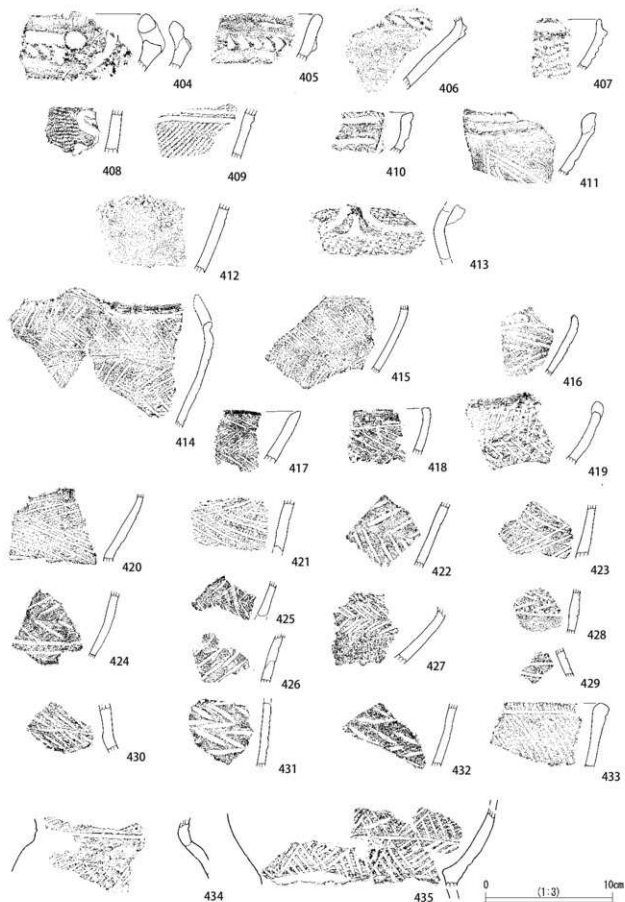
第79図 BP第5d地点縄文土器1(草創期・早期)



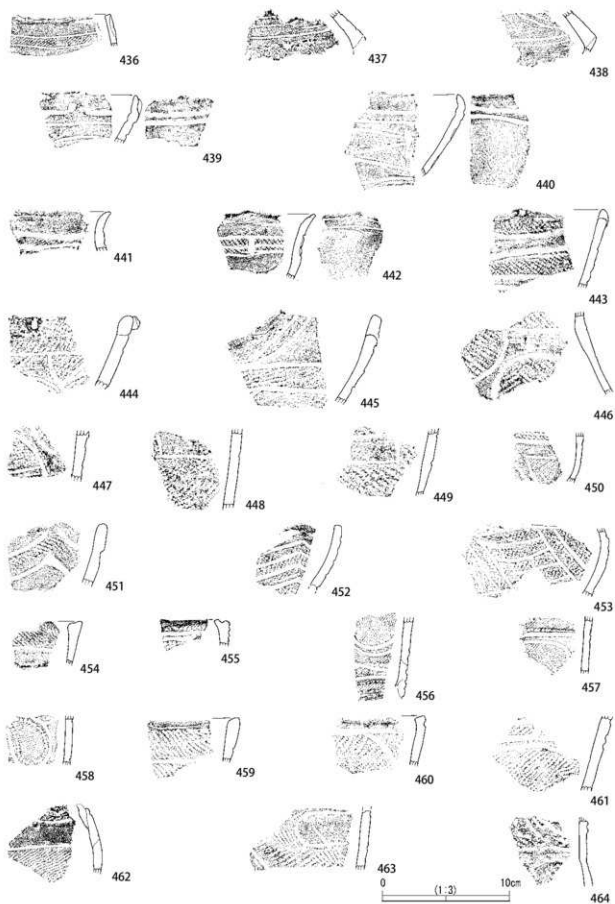
第80图 BP第5d地点縄文土器2(早期・前期)



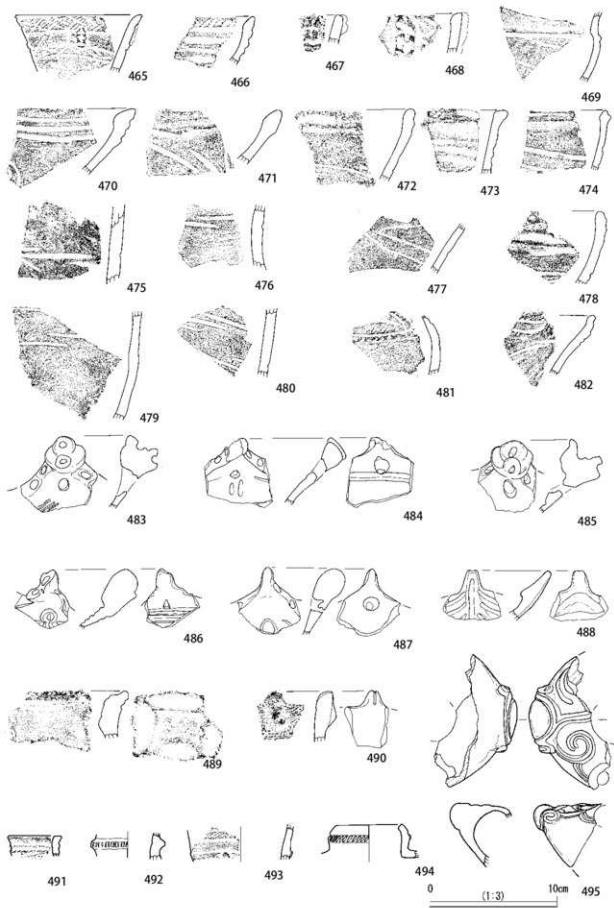
第81図 BP第5d地点縄文土器3(中期)



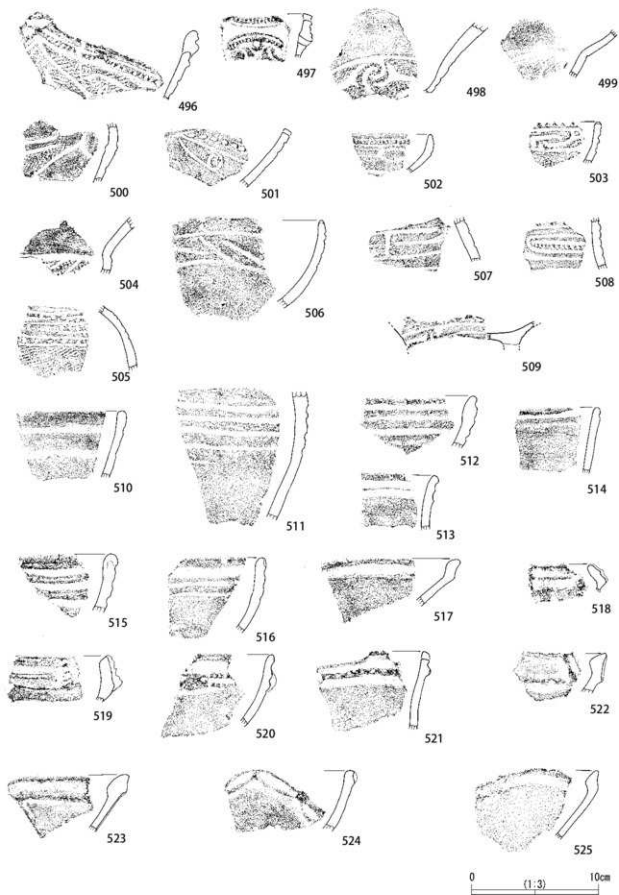
第82図 BP第5d地点縄文土器4（後期）



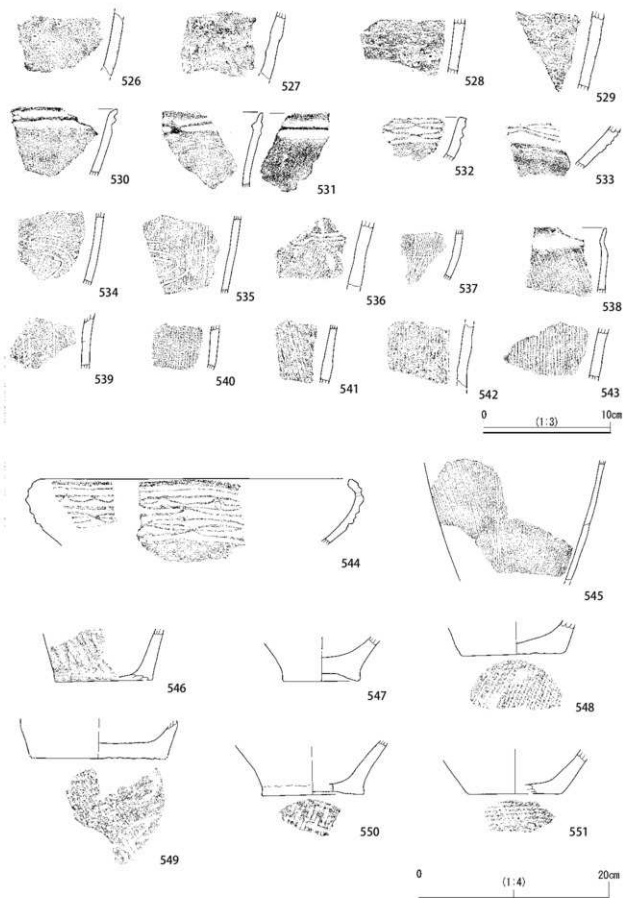
第83図 BP第5d地点縄文土器5(後期)



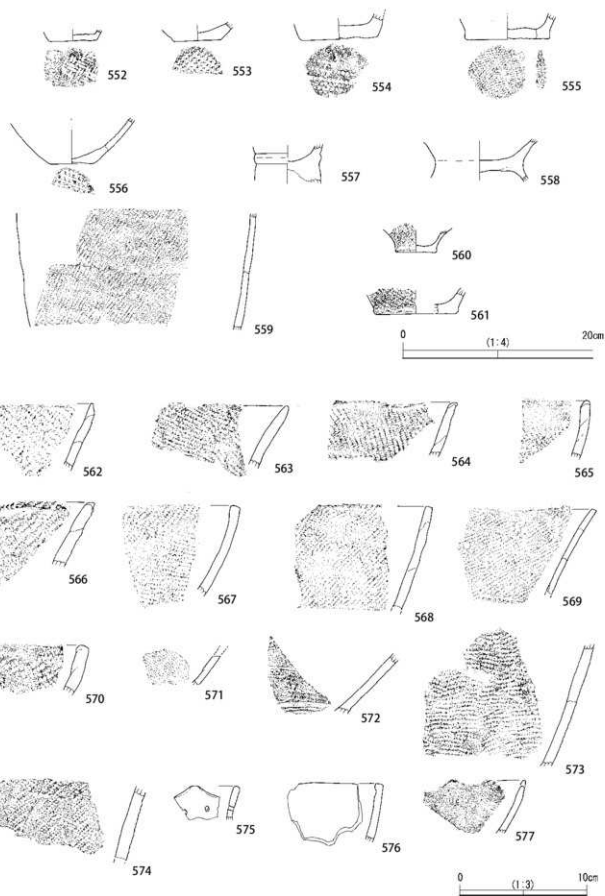
第84図 BP第5d地点縄文土器6(後期)



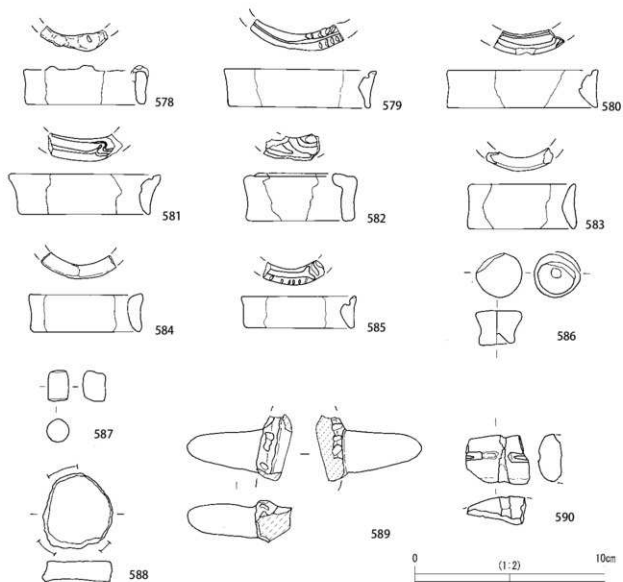
第85図 BP第5d地点縄文土器7（後期・晩期）



第86図 BP第5d地点縄文土器8(後期・晩期)

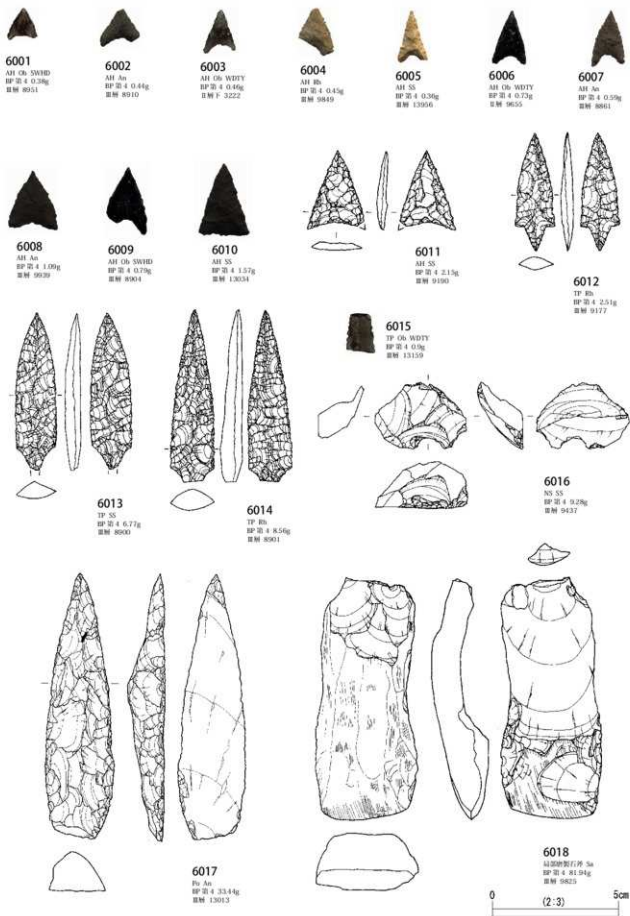


第87図 BP第5d地点縄文土器9(後期・晩期)

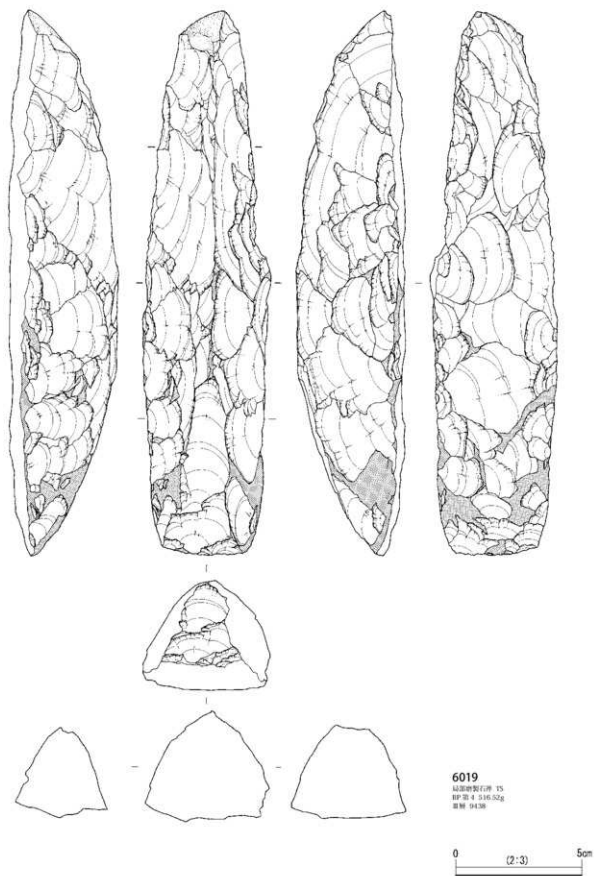


第88図 BP第5d地点土製品

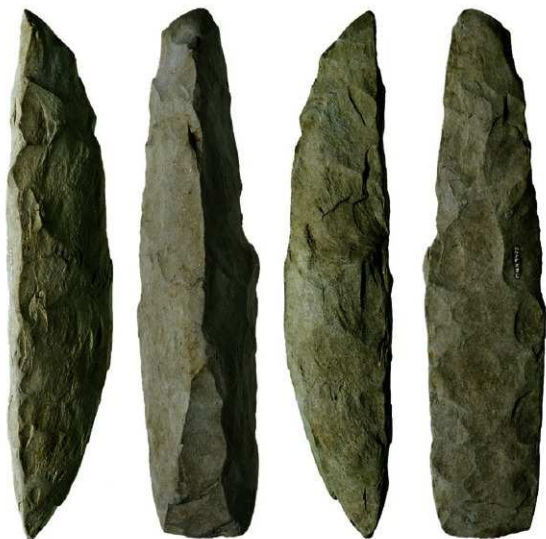
第3章 B P地点・B P第4・第5地点の調査



第89図 BP第4地点の石器

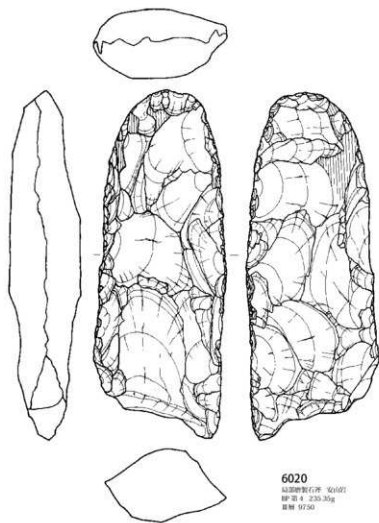


第90図 BP第4地点の石器



6019の展開写真

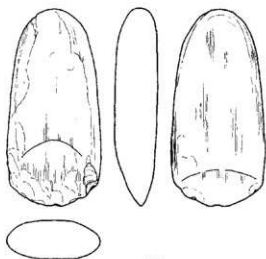
第91図 BP第4地点の石器



6020
 糸島野原石斧 No.007
 野原 4 23.26g
 図録 9750



6020と6112の接合

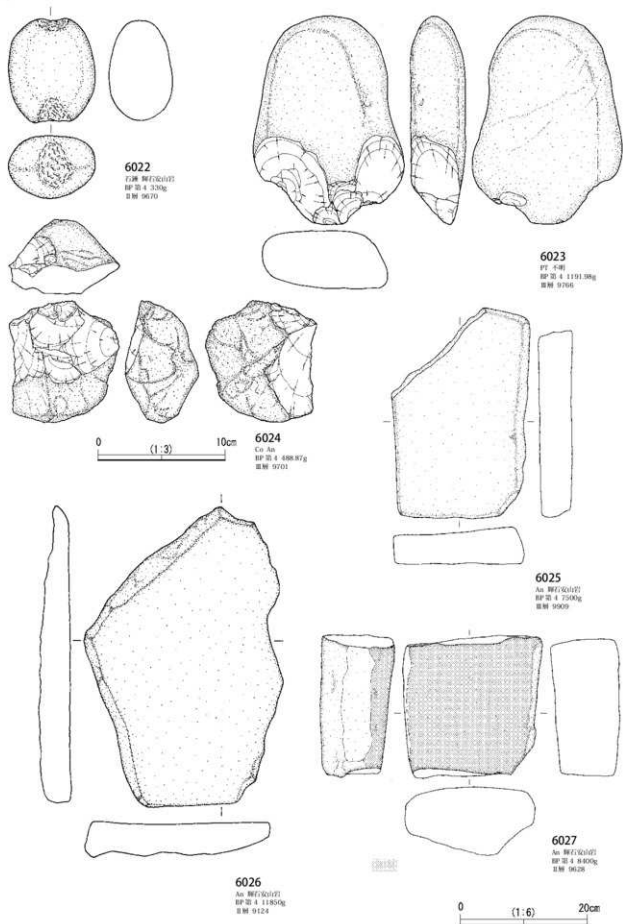


6021
 糸島野原 5a
 BP 野 4 73.19g
 図録 9608

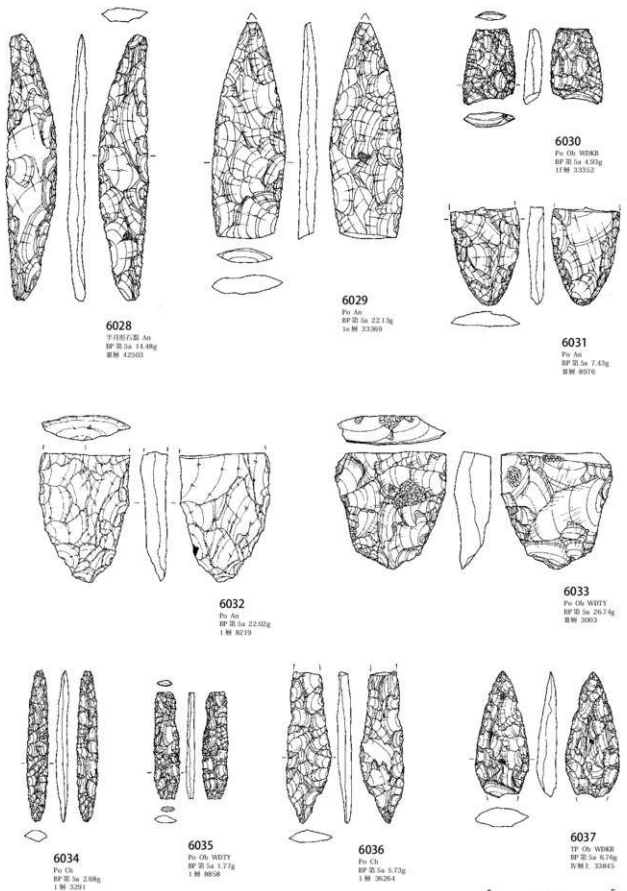


第92図 BP第4地点の石器

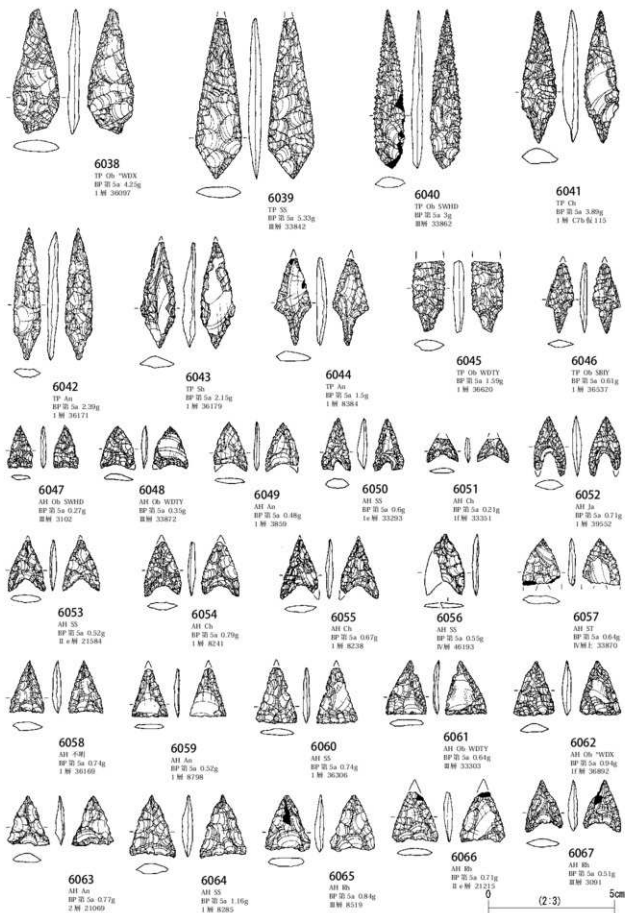
第3章 B P地点・B P第4・第5地点の調査



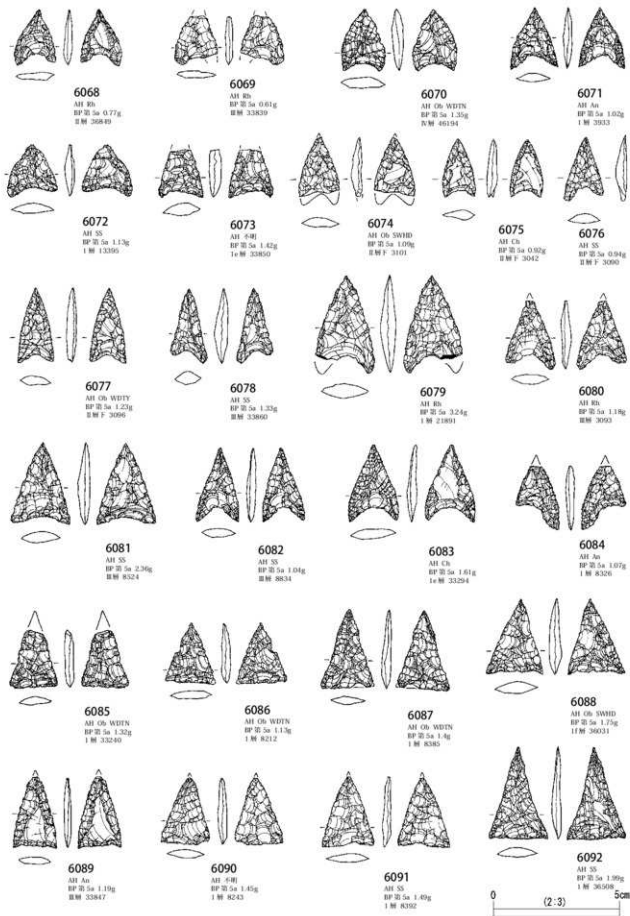
第93図 BP第4地点の石器



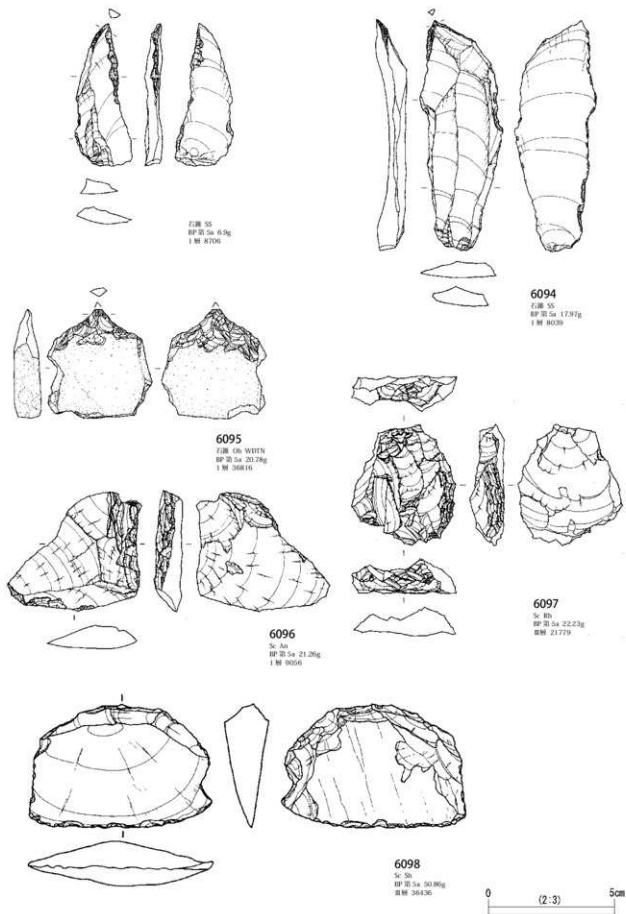
第94図 BP 5a地点の石器（半月形石器・槍先形尖頭器）



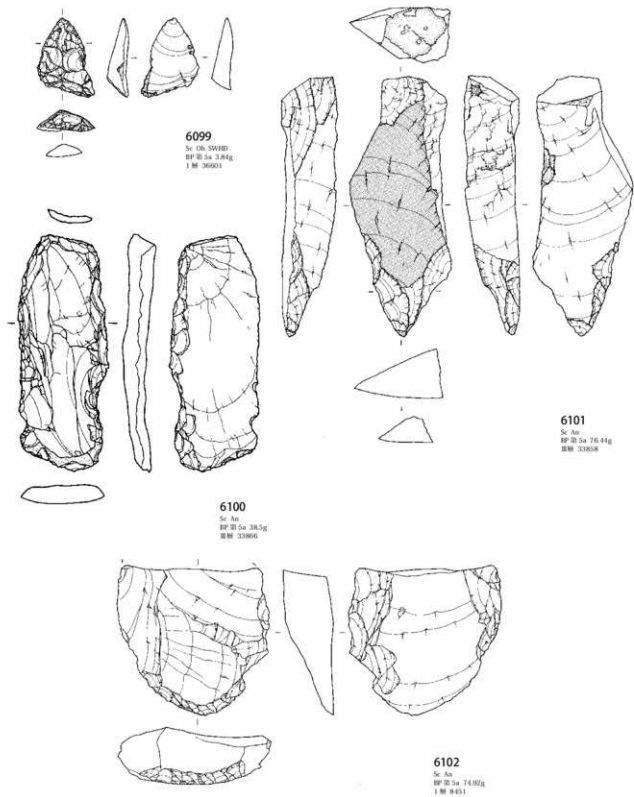
第95図 BP 5a地点の石器(有茎尖頭器・石鏃1)



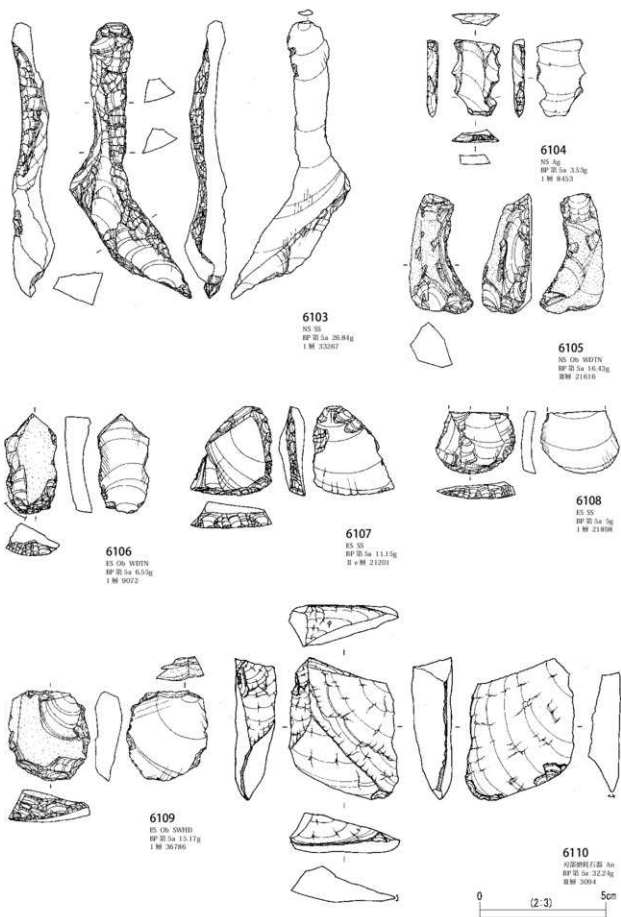
第96図 BP 第5a地点の石器（石鎌2）



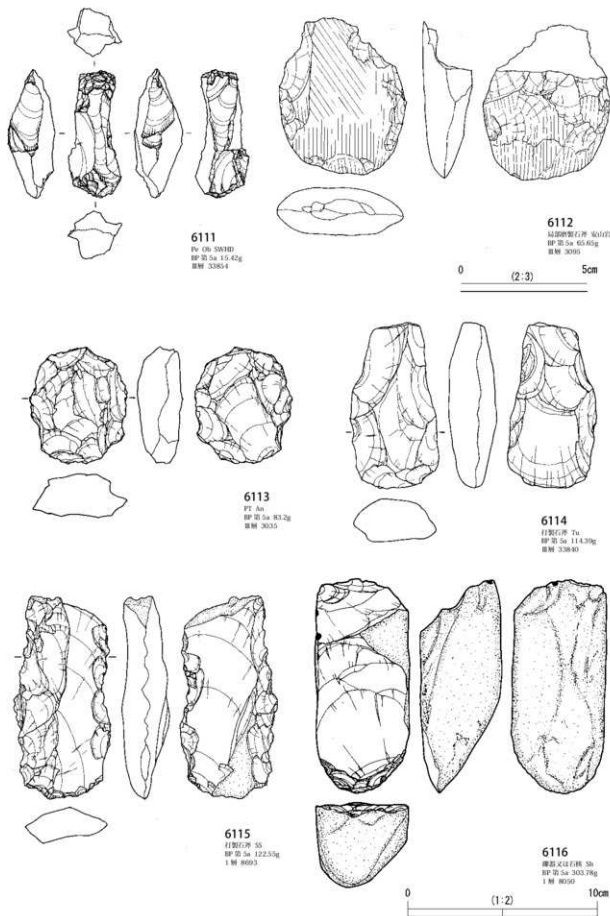
第 97 図 BP 第 5a 地点の石器（石錐・削器 1）



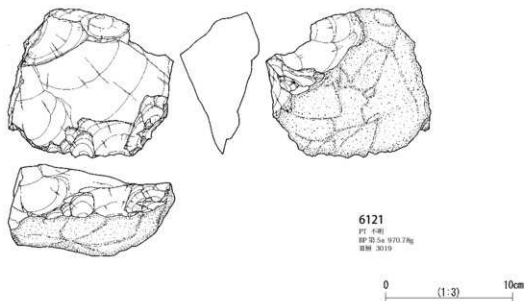
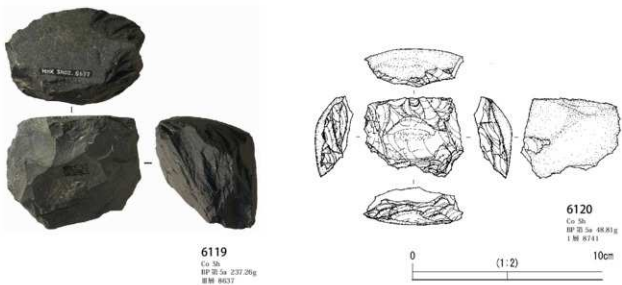
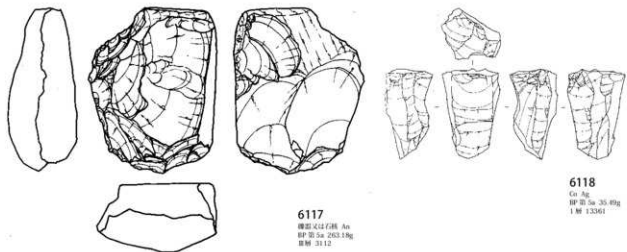
第98図 BP 第5a地点の石器（削器2）



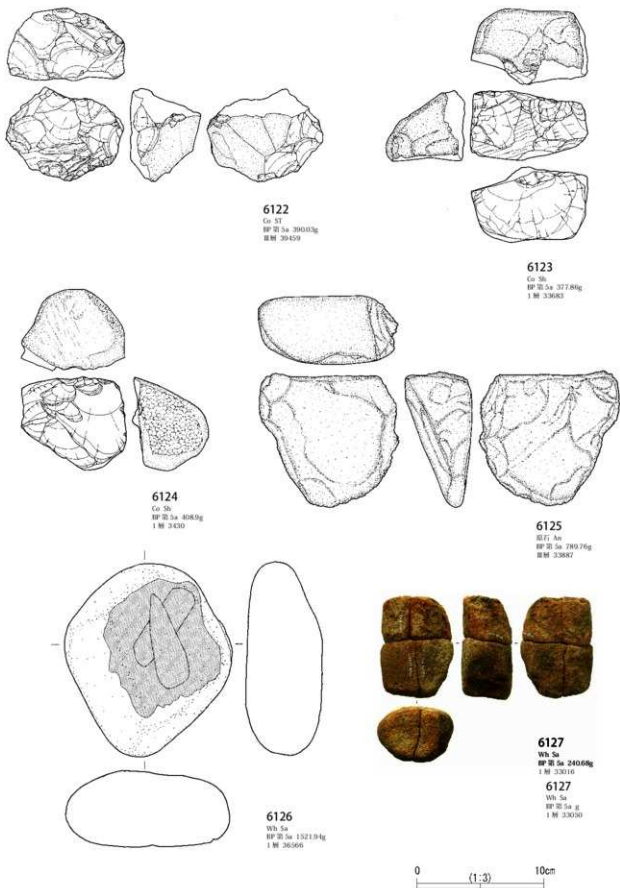
第99図 BP 第5a地点の石器（抉入削器・掻器）



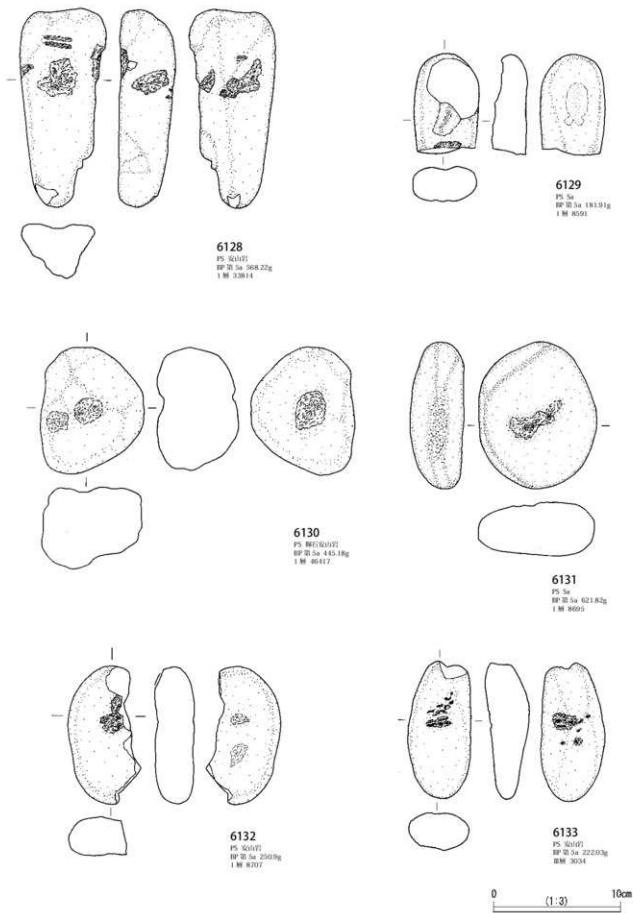
第100図 BP 5a地点の石器（楔形石器・局部磨製石斧・礫器・打製石斧）



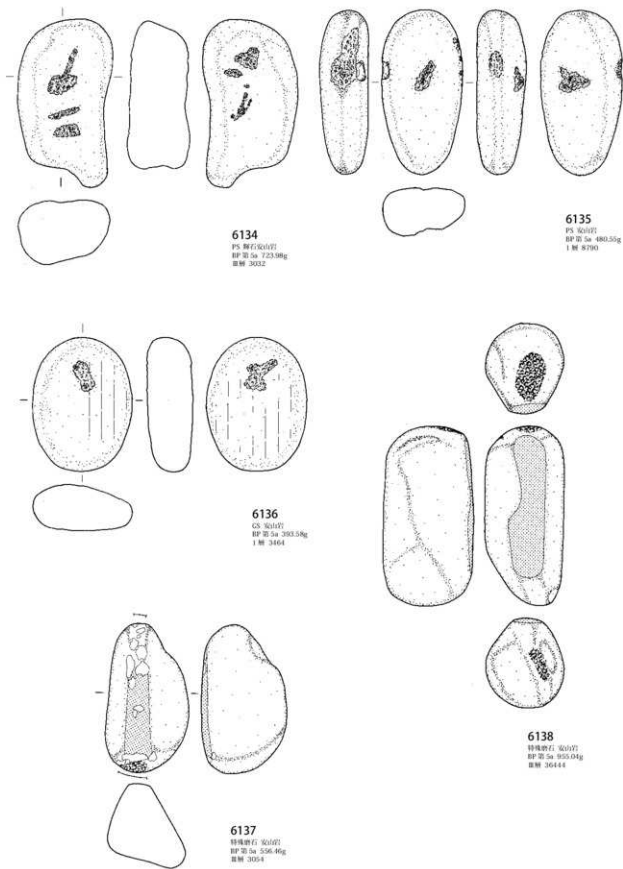
第 101 図 BP 第 5a 地点の石器 (礫器・石核 1)



第102図 BP 第5a地点の石器(石核・原石・砥石)

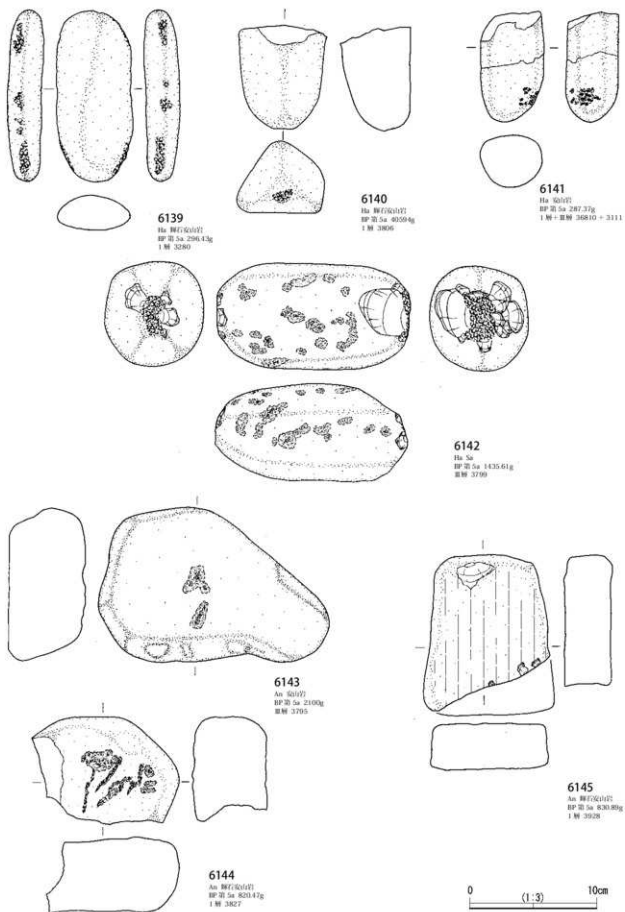


第103図 BP 5a地点の石器(凹石1)

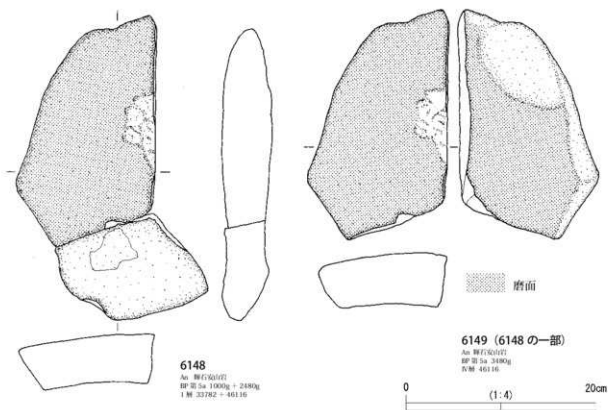
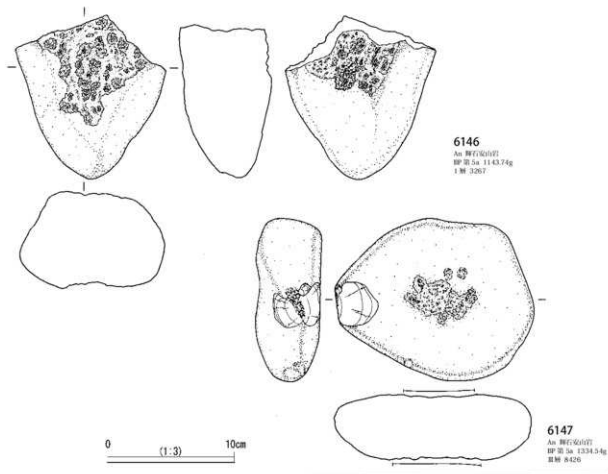


第104図 BP 第5a地点の石器(凹石2・磨石)

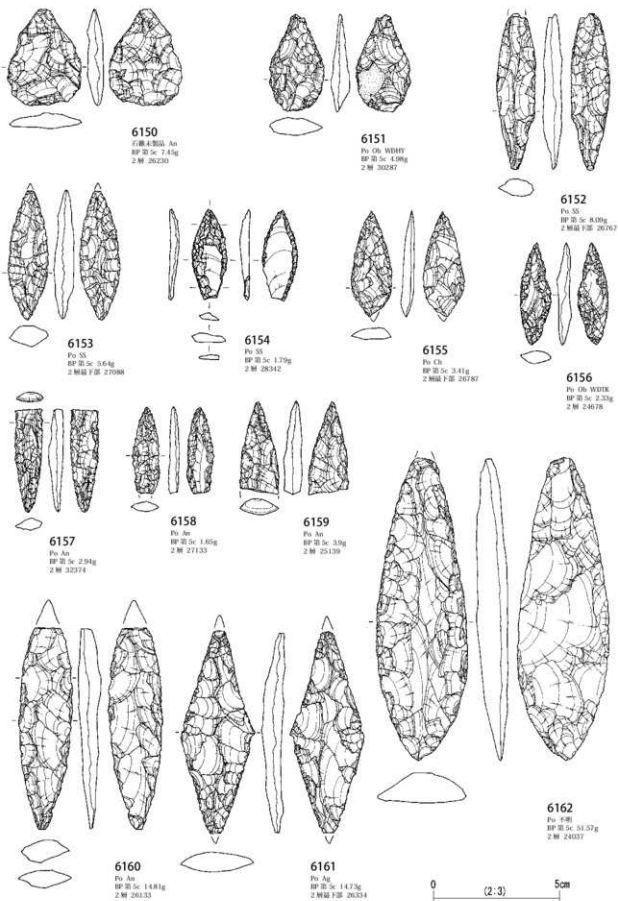
0 (1:3) 10cm



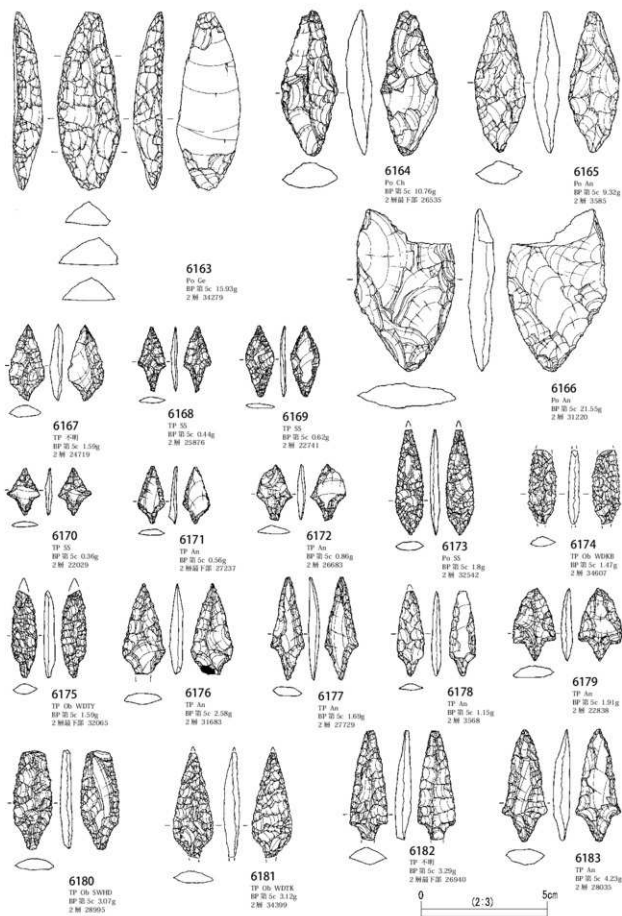
第105図 BP 第5a地点の石器(礫石・台石1)



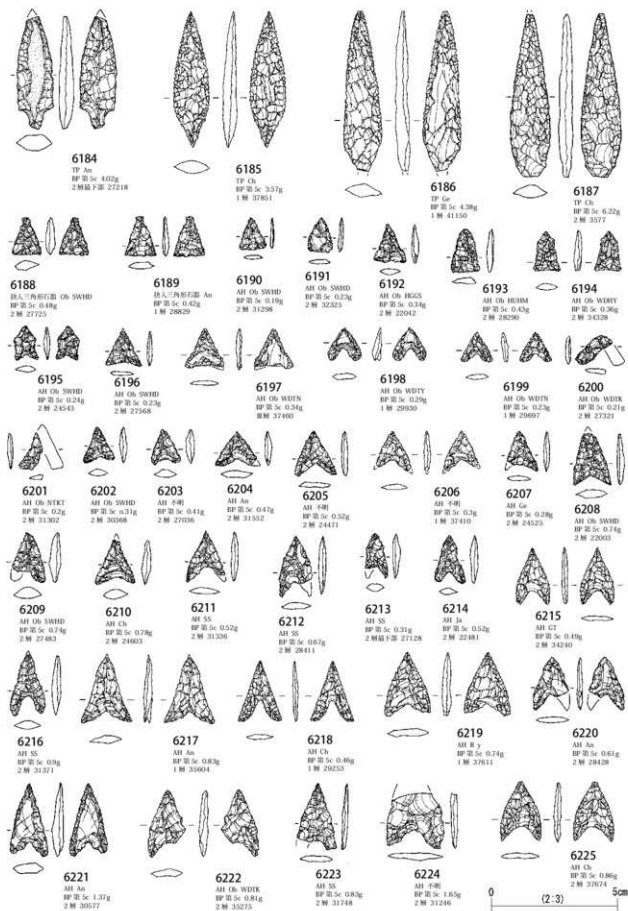
第106図 BP 5a地点の石器(台石2)



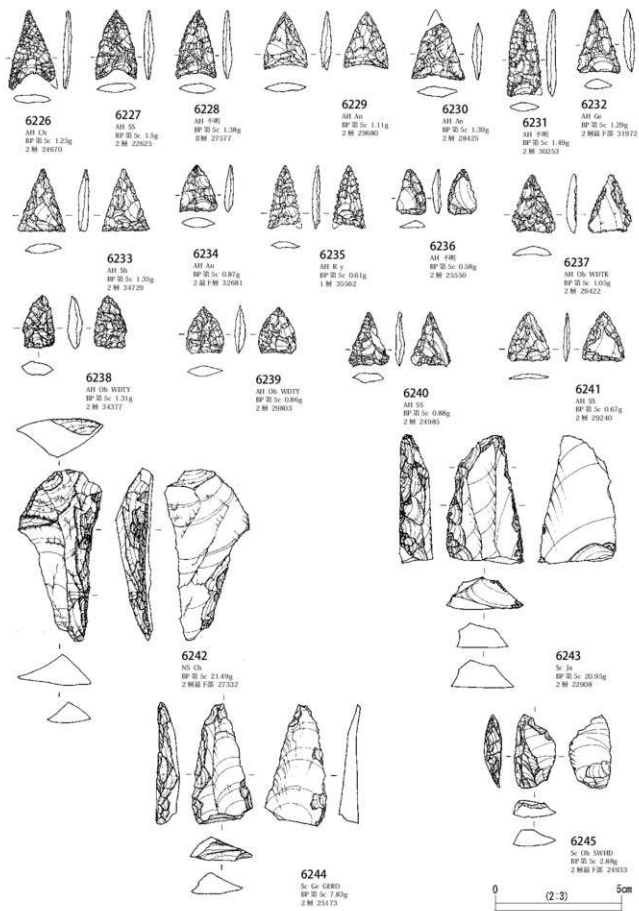
第107図 BP 第5c地点の石器（槍先形尖頭器1）



第108図 BP 5c地点の石器（槍先形尖頭器2・有基尖頭器1）

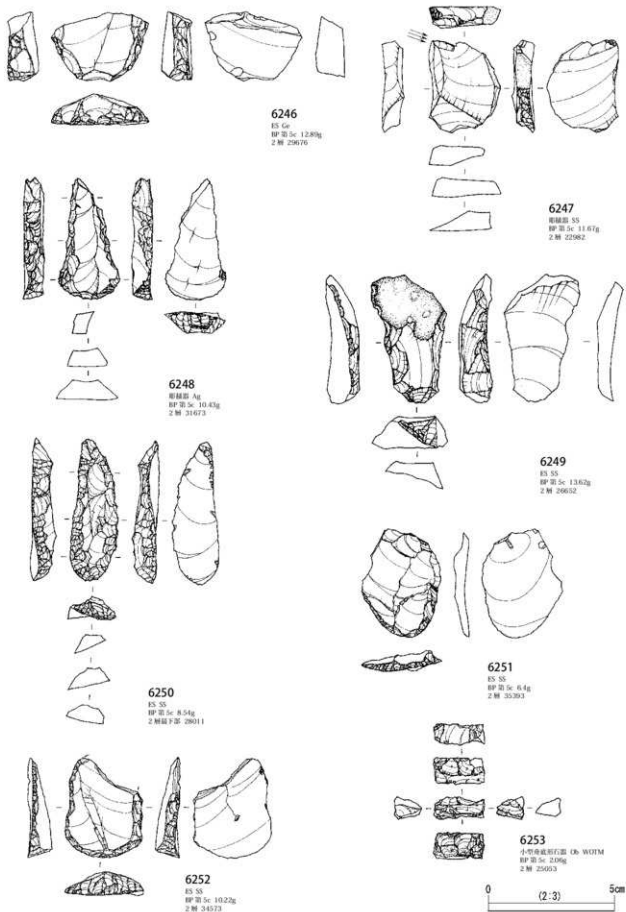


第109図 BP第5c地点の石器(有茎尖頭器2・石鏃1)

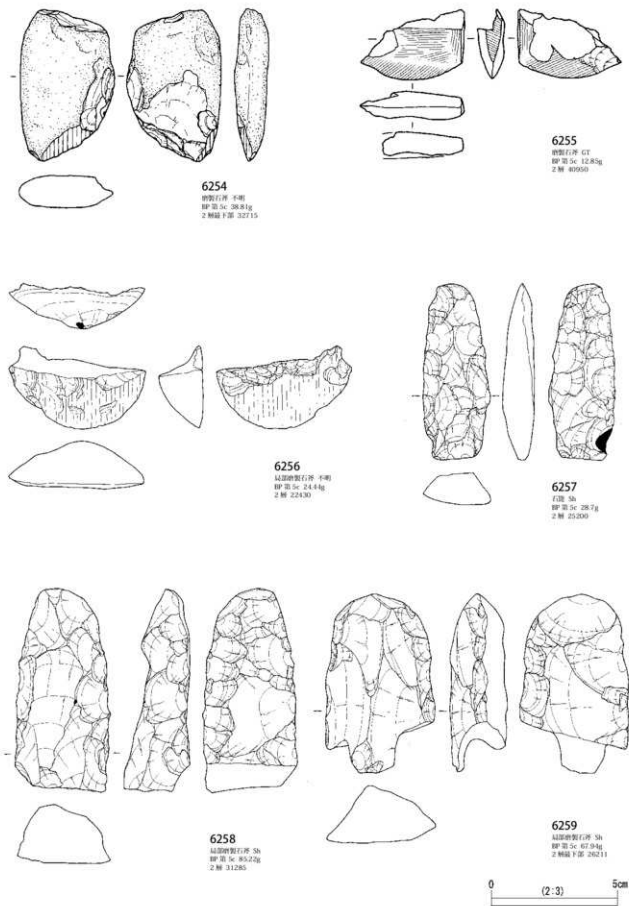


第110図 BP 第5c地点の石器（石鏃1・抉入削器・削器）

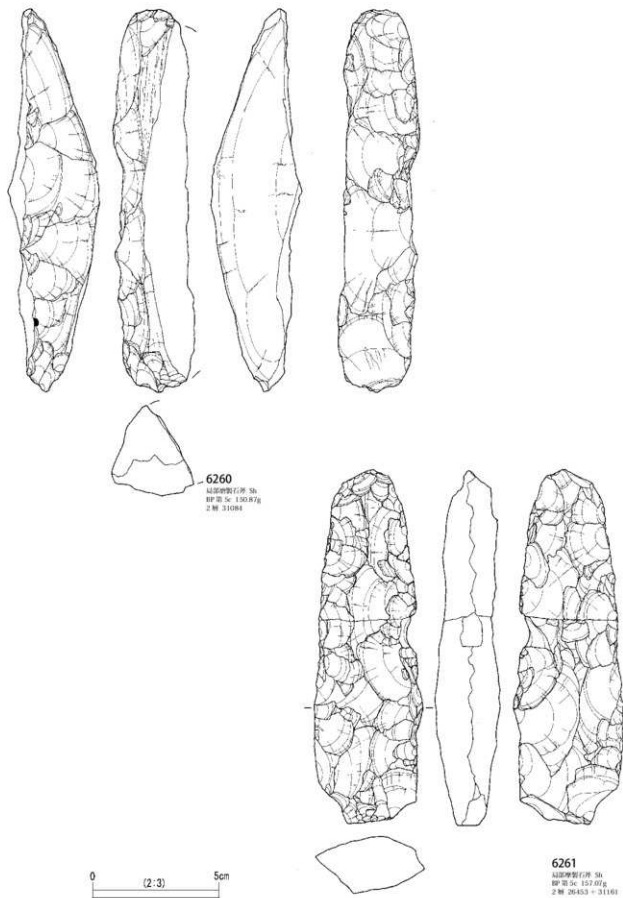
第3章 B P地点・B P第4・第5地点の調査



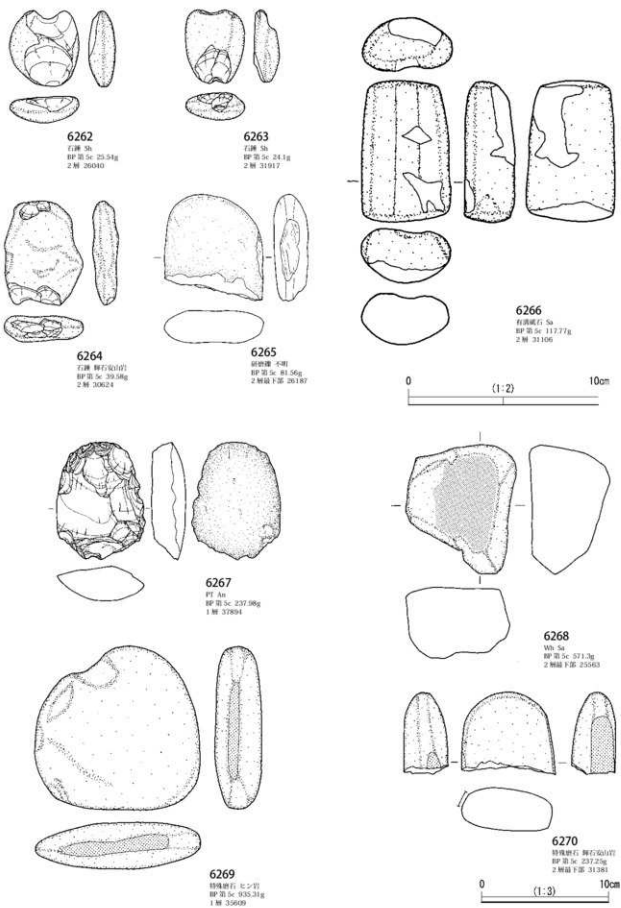
第111図 BP 第5c地点の石器（槌器・形類器・小型舟底形石器）



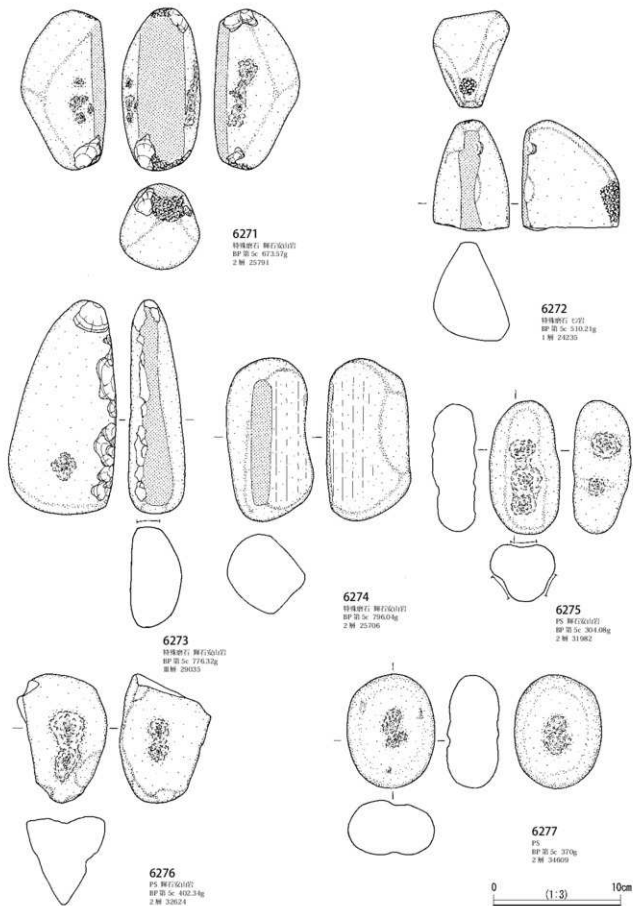
第112図 BP 第5c 地点の石器（磨製石斧・局部磨製石斧1・石鏟）



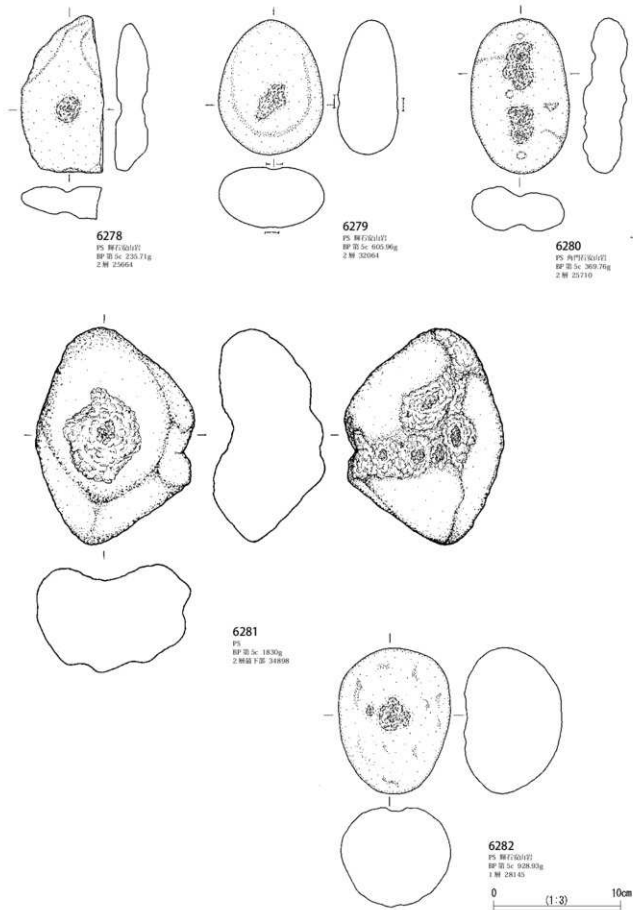
第113図 BP第5c地点の石器（局部磨製石斧2）



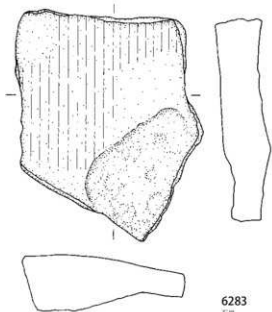
第114図 BP第5c地点の石器(石錘・砥石・礫器・特殊磨石1)



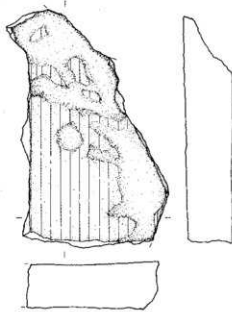
第115図 BP 第5c地点の石器(特殊磨石2・凹石1)



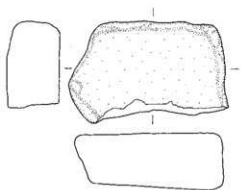
第116図 BP第5c地点の石器(凹石2)



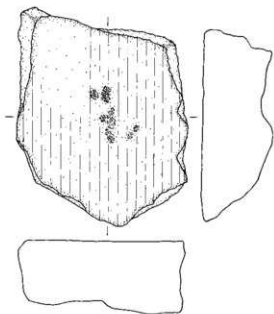
6283
石皿
BP第5c 3720g
2冊 34837



6284
石皿
BP第5c 3330g
1冊 37127



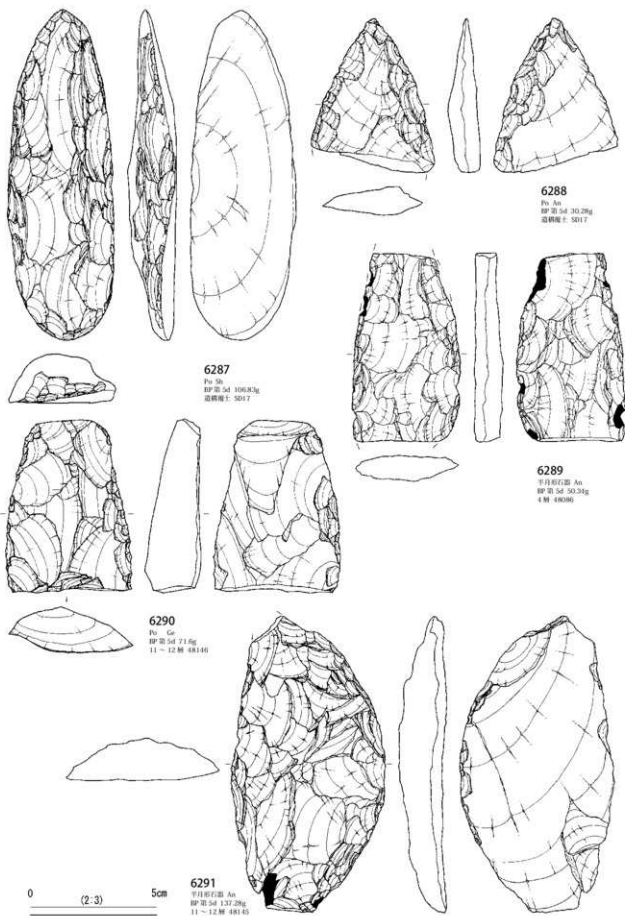
6285
A07 石皿(石)01
BP第5c 1854.20g
2冊 29245



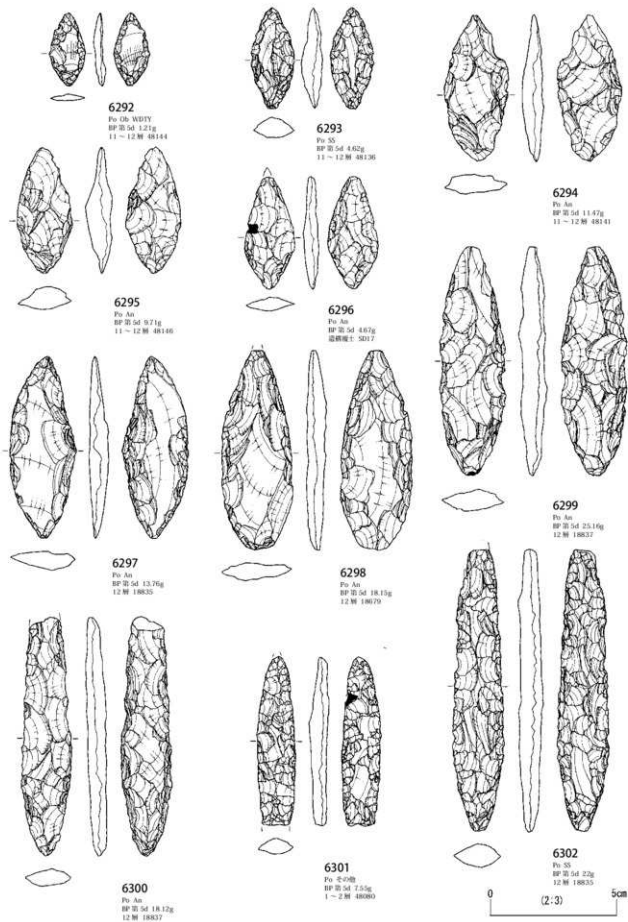
6286
石皿
BP第5c 4650g
2冊 34836

0 (1:4) 20cm

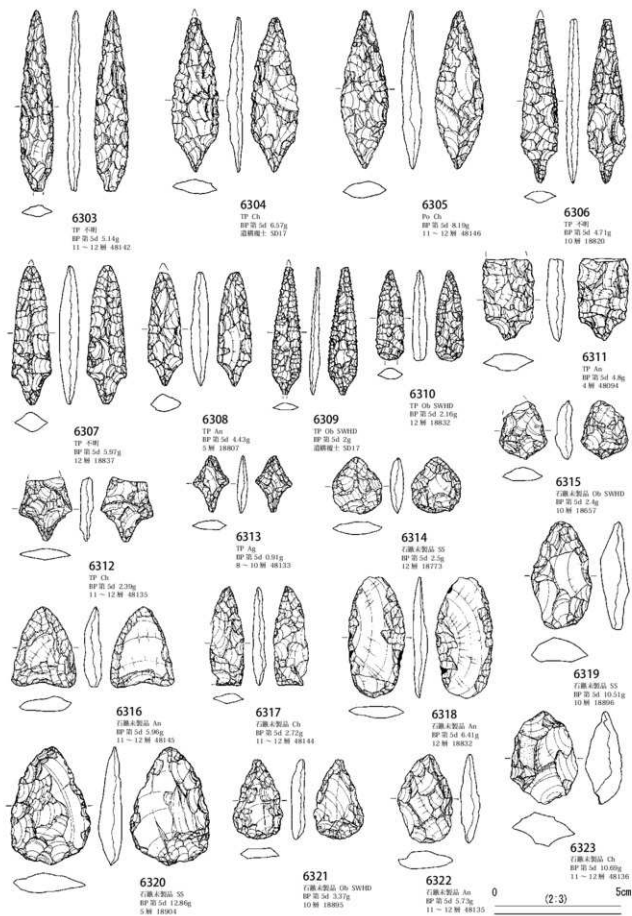
第117図 BP第5c地点の石器(石皿・台石)



第118図 BP 第5d地点の石器(槍先形尖頭器1・半月形石器)

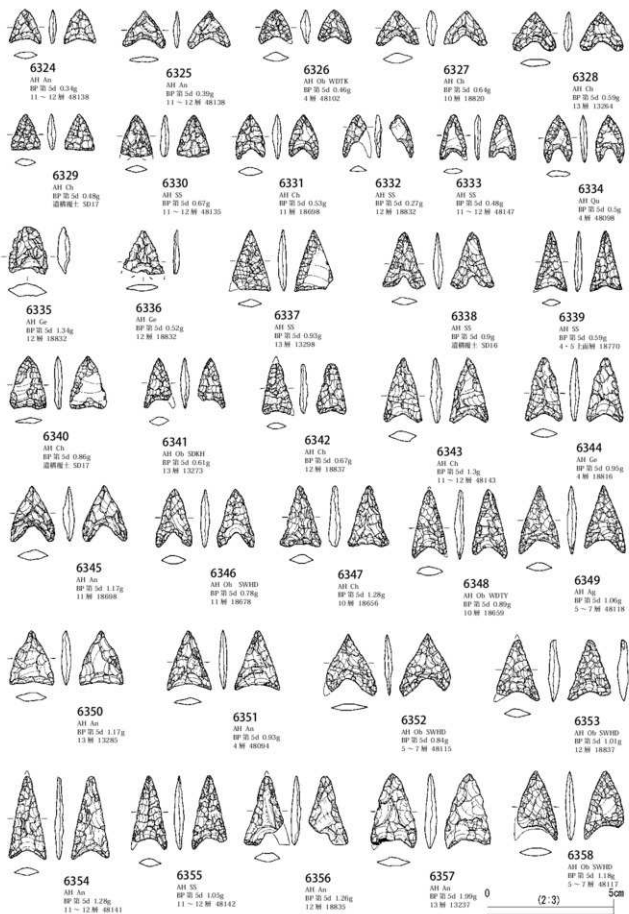


第119図 BP 第5d地点の石器(槍先形尖頭器2)

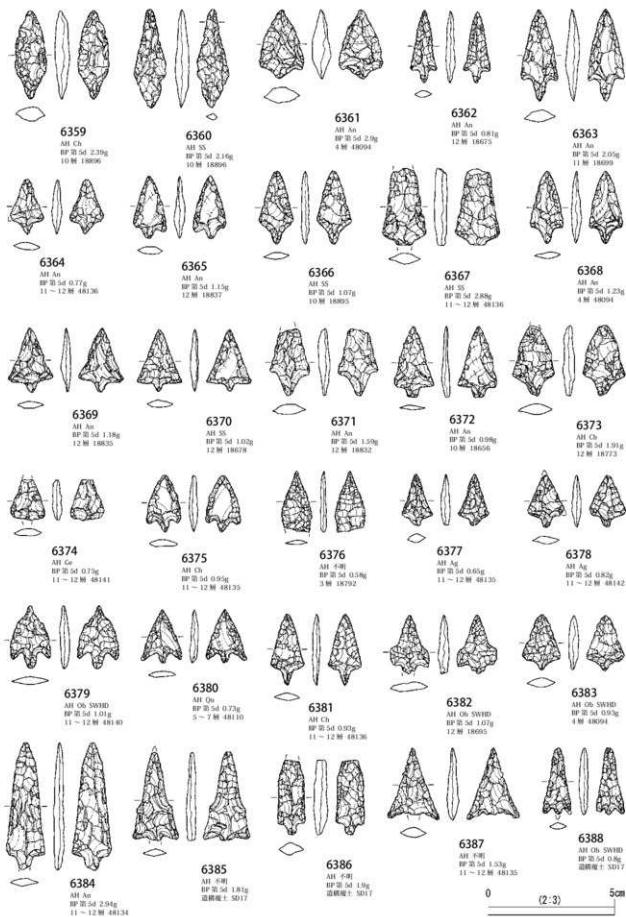


第 120 図 BP 第 5d 地点の石器 (有茎尖頭器・石礫未製品)

第3章 B P地点・B P第4・第5地点の調査

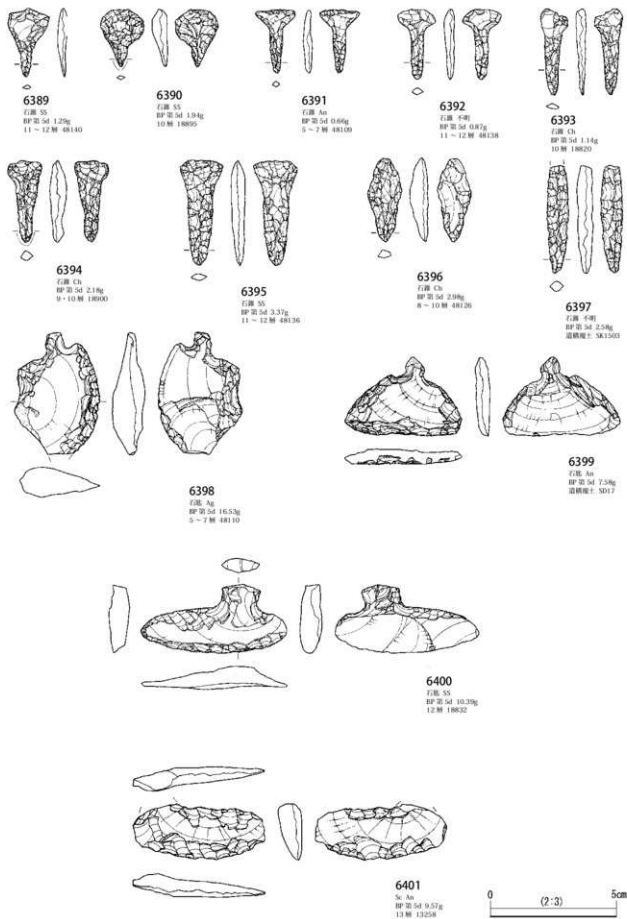


第121図 BP 5d地点の石器(石畿1)

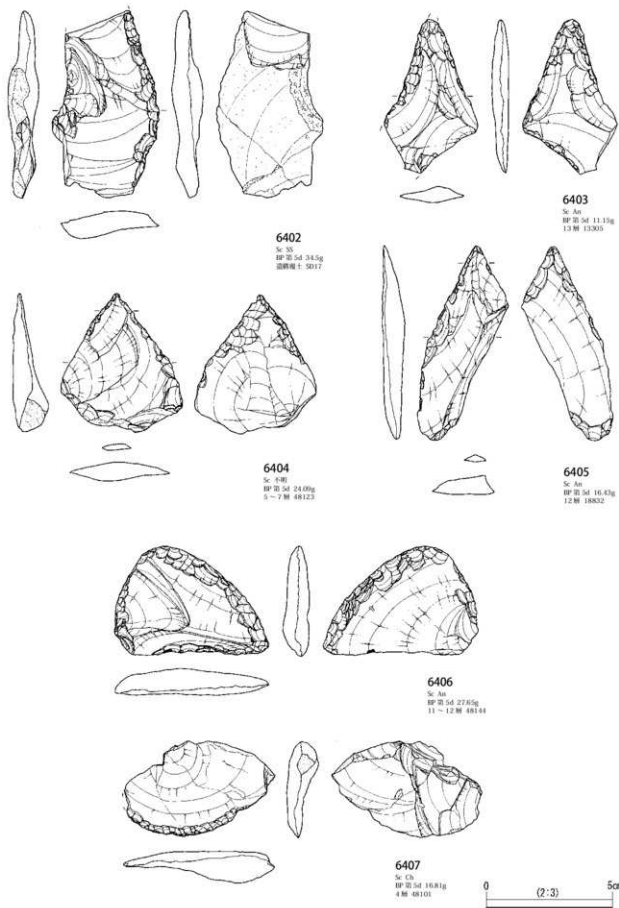


第122図 BP 5d地点の石器(石鏃2)

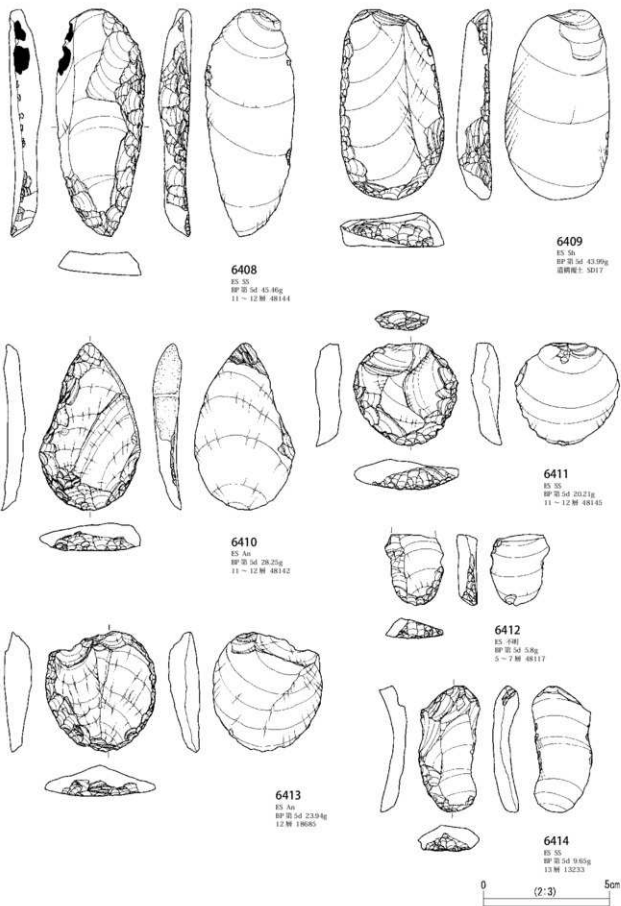
第3章 B P地点・B P第4・第5地点の調査



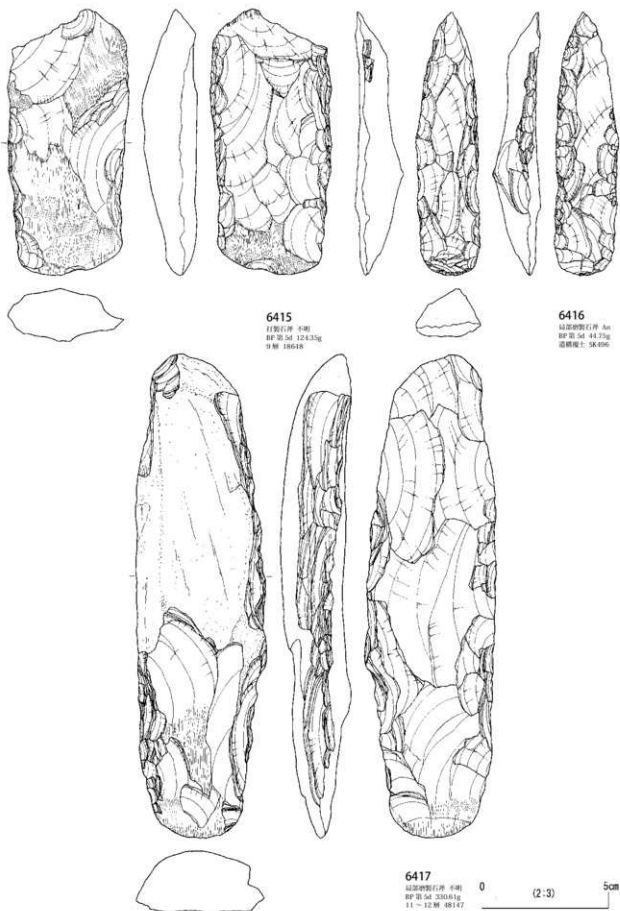
第123図 BP 第5d地点の石器(石鏢・石匙)



第124図 BP 第5d地点の石器(削器)



第125図 BP 第5d 地点の石器 (攝器)



6415

局部磨製石斧 不明
 BP 第5d 124.35g
 全長 186.19

6416

局部磨製石斧 An
 BP 第5d 44.75g
 遺構層上 58.696

6417

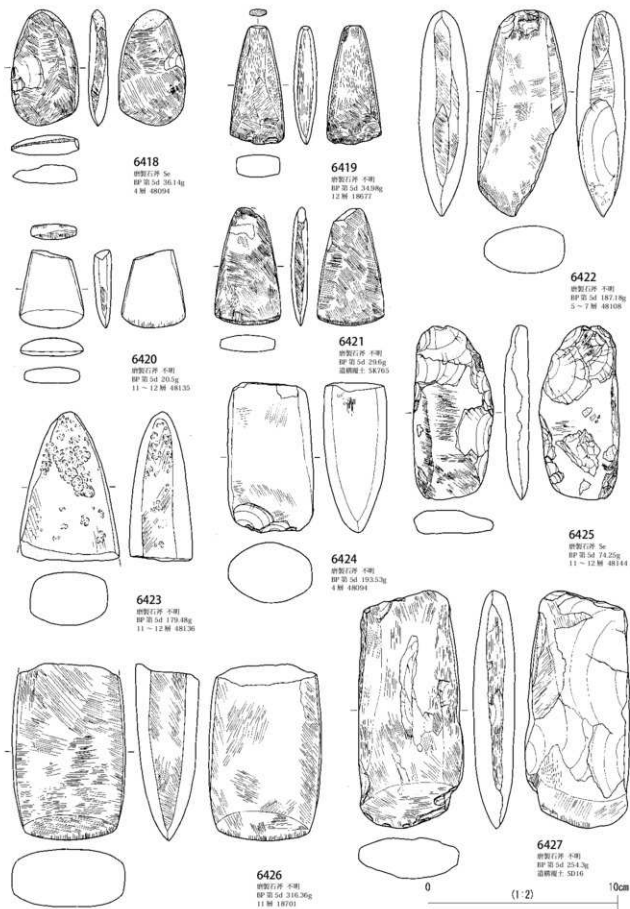
局部磨製石斧 不明
 BP 第5d 233.61g
 11~12層 48.147

0

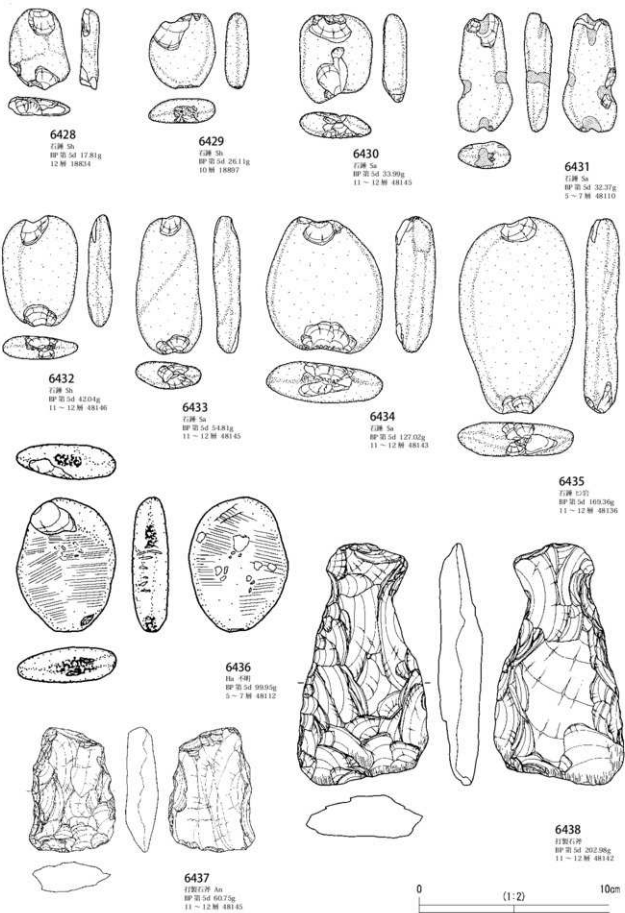
(2:3)

5cm

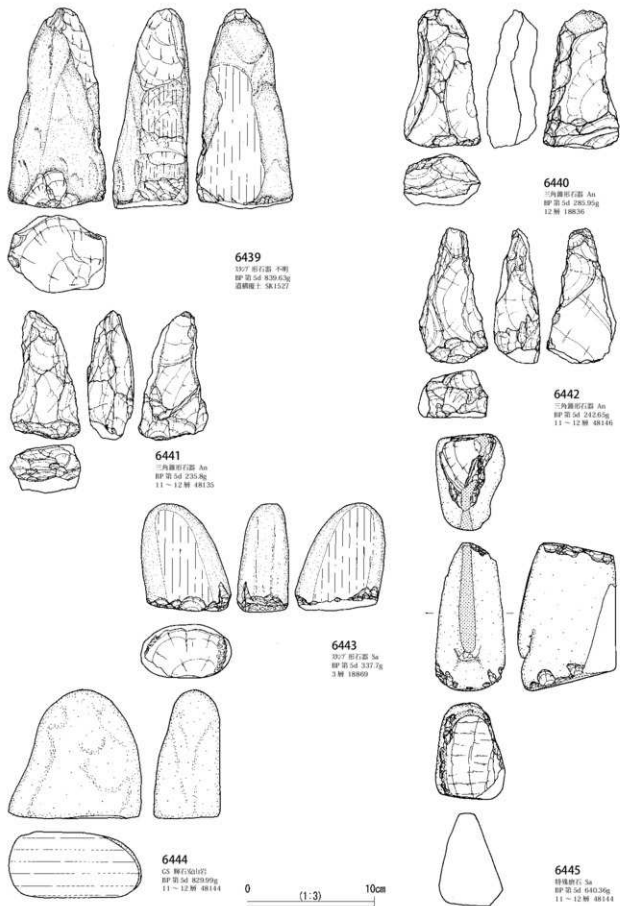
第126図 BP 第5d地点の石器(局部磨製石斧)



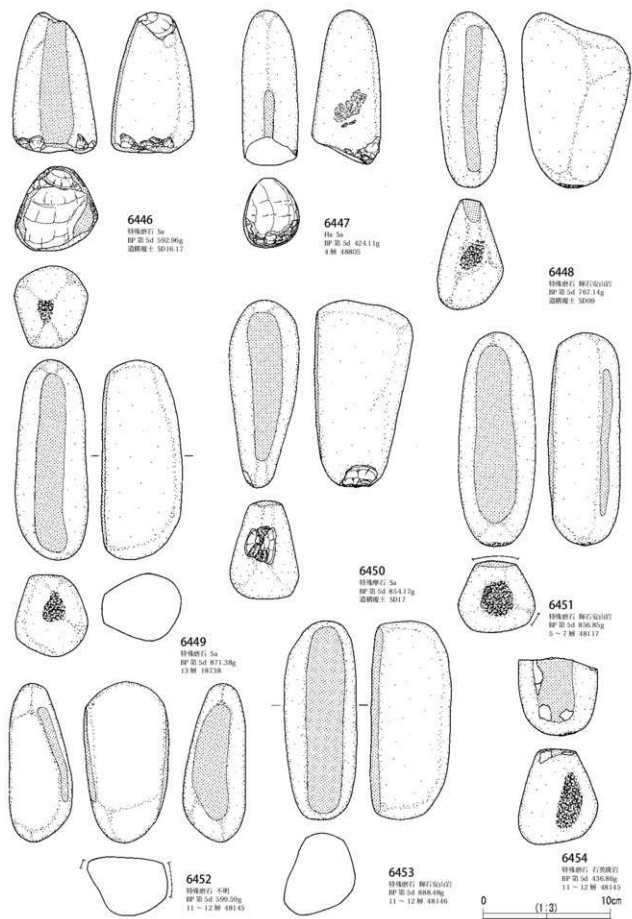
第 127 図 BP 第 5d 地点の石器 (磨製石斧)



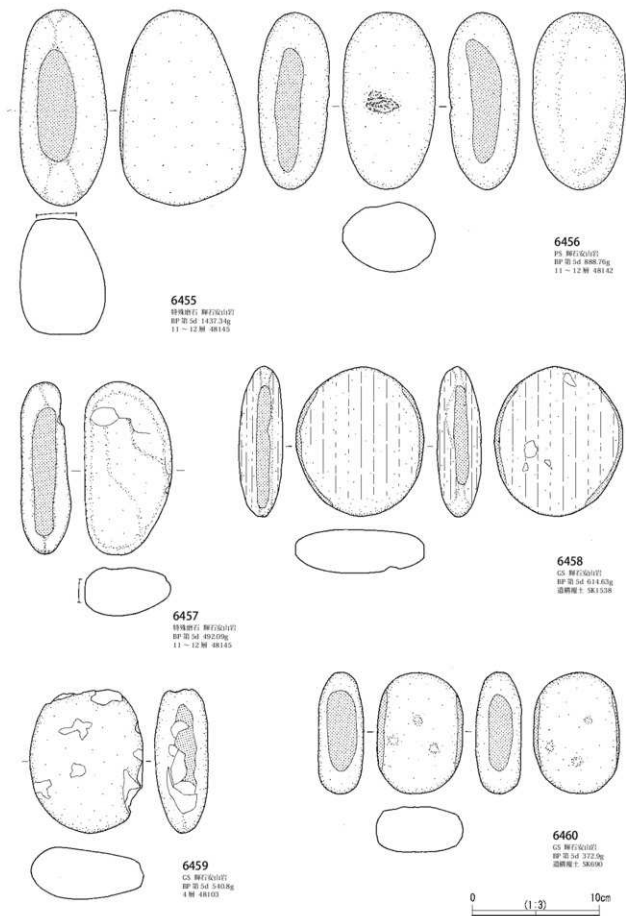
第128図 BP 第5d地点の石器(石錘・打製石斧)



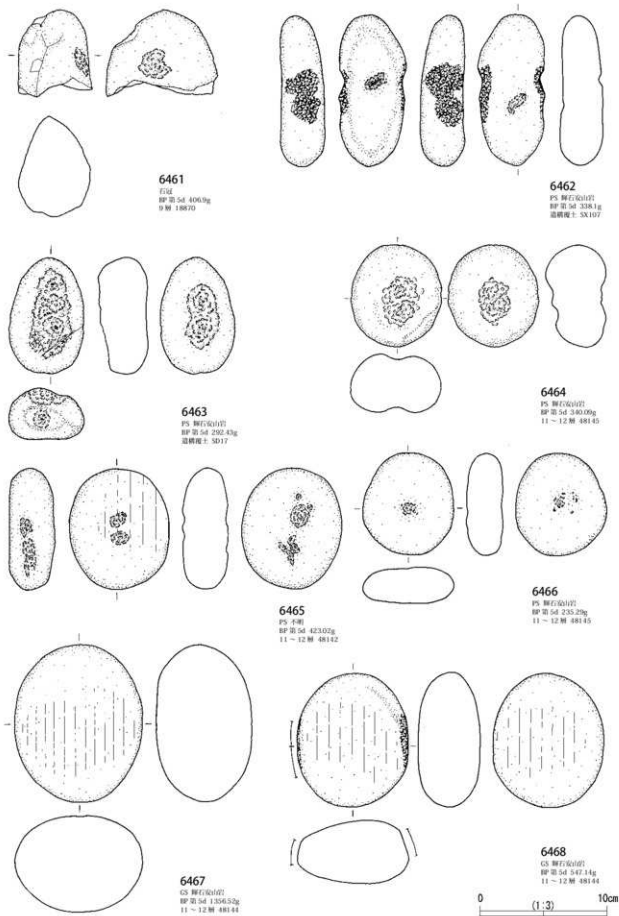
第129図 BP第5d地点の石器(三角錐形石器・スタンプ形石器)



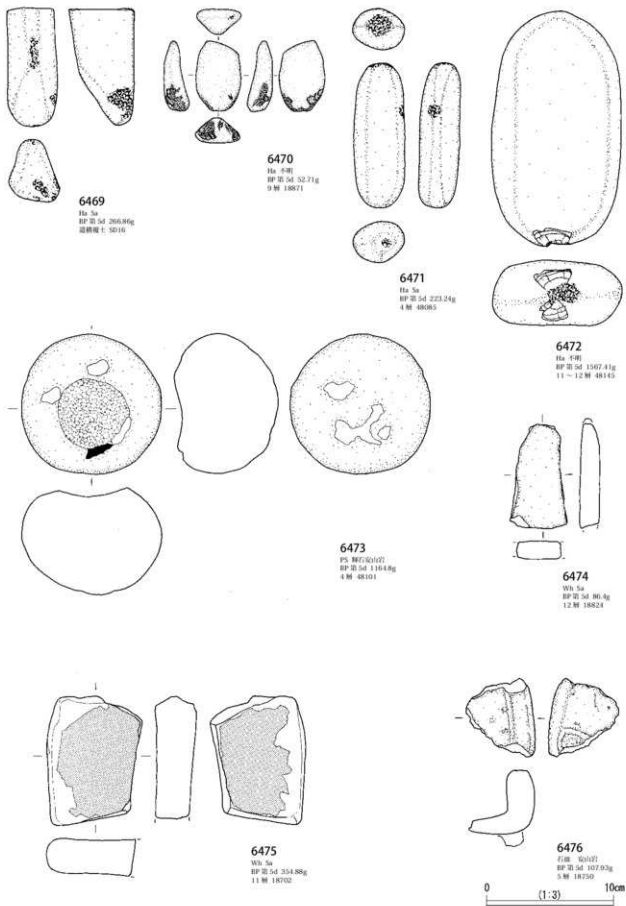
第130図 BP第5d地点の石器(特殊磨石1)



第 131 図 BP 第 5d 地点の石器 (特殊磨石 2)



第132図 BP 第5d地点の石器(凹石・磨石)



第133図 BP 第5d地点の石器(敲石・石皿他)

第5節 弥生時代～平安時代の遺構と遺物

1 調査成果の概要

BP 第5d地点を中心に、弥生時代から平安時代の遺物が出土した。遺構はBP 第5c地点で溝(SD401)が検出された他は、自然流路と窪地が確認されたのみである。窪地には弥生時代と古墳時代前期の土器がまとまって出土し、鉄剣、鉄斧などの金属器が出土した(SQ101)。また、SX107とした窪地では、古墳時代から平安時代のものと思われる木製品が出土した。

BP 第5d地点では、縄文時代後・晩期から近世までの遺物の包含層が厚いところで約1.7m堆積しており、6枚の調査面がある。調査区内は河川堆積物と整地層が複雑に堆積しており、統一した層名で調査することができなかった。調査終了後、断面図を検討し、第134図に示した基本土層を設定した。添付CDに収録した遺物台帳には、基本土層を記載した。本文中で用いる層名は、特に断りがない限り基本土層名である。調査壁面の土層断面図の土層名は、基本土層とは異なっており、その対応関係を土層注記中に示す。

2 遺構

(1) 溝

SD401(第134図左上と写真)

BP 第5c地点Ⅲ層上面で、東西に走る幅3.5m～4m、深さ約40cmの溝を検出した。底面はほぼ平坦で、水の流れた形跡や硬化面は認められなかった。覆土はⅡ層黒色土の単層である。覆土中及び底面付近より、土師器破片10点ほどが出土した(第144図18・19)。野尻湖発掘調査団のJ-12、K-12、I-23ケラドでも存在が確認されており、BB 第5b地点へ伸びる。出土遺物から、平安時代の遺構と判断した。

SD15(第134図)

調査区の中央やや東寄りを北東方向から入り、南西方向に向かってSD16と重なるところで収束している。検出段階では、SD16の砂礫層を削り込んでSD15の砂礫層が堆積し、それらの上に黒褐色粘質土が堆積しているのが観察できた。したがって、SD16の堆積埋没後にSD15は流れたものである。

検出できた長さは12mであるが、状況から推して北東方向に調査区外へ延びていることは確実である。上端幅約2～3m、深さ約15cmを測る。溝底は平坦ではなく、ところどころに凹凸がある。

縄文土器や耳飾りが混在しているものの、主体は古墳時代の土師器(第142・143図39・55・99)である。SD16との切り合い関係から、古墳時代終末期以降、古代以前の自然流路であると考えられる。

SD16(第134図)

調査区の中央やや東寄りを南北に横断している。中央東側でSD15と重なっており、本址がSD15に削られているのは先述の通りである。検出できた長さは18.5mであるが、調査区外へ南北に延びている。上端幅約6～7m、下端は4～6.5m、深さは30cm前後である。溝底には凹凸がなく、全体に平坦である。

出土遺物は縄文晩期土器片、弥生土器片に混じって、多量の土師器(第140～143図1・4・22・29・35・42・46・56・65・80)や須恵器(第143図107、第144図3)、土錘(第148図16)などである。須恵器は6C後半(TK208期)の杯蓋(第143図107)と7C後半の蓋の口縁部片、杯底部(第144図3)であり、7C後半の資料は本址の埋没時期を示すものと考えられる。

SD17(第135図)

調査区の中央やや東寄りを南北に横断している。平面的な位置はSD16と重なる。SD16の覆土が粗砂

を母材として5cm大から時には20cm大の礫を含むのに対して、SD17は細砂～粗砂を主体に細かな礫が混じるという違いがみられる。SD17の緩やかな流れが終息したのち、その凹地に再びやや流速の早い流れが訪れたと考えたい。SD15～17は一連の溝内の堆積層である可能性がある。

検出できた長さは18.5mであるが、調査区外へ南北に延びている。上端の最大幅は8.7m、下端は7.55m、深さ約30～60cmである。溝底の凹凸は激しく、東側の底面が西側より一段低いため、当初2本の流れであったものが合流したとも考えられる。流路のほぼ中央部に不定形の窪みがあった。中央部の窪みには大形の材が横たわっており、その周辺から先端部に加工痕がある棒状木製品、板状木製品、ヘラ状木製品（第146図18）など21点の木製品が出土した。

流路内には古墳時代の土師器（第140図～143図11・30・59・73・83・96・98・103・105）を中心として、縄文時代早・前・晩期土器片や弥生土器片も散在していた。出土遺物から判断して、SD16とほぼ同時期かそれ以前と思慮される。

（2）その他

SQ101（第136図）

微高地に挟まれた窪地に、弥生時代と古墳時代前期の土器と鉄製品がまとまるため、有意な単位の遺構と認識しSQ101の遺構記号を付した。調査区は南北に半分に分割して、2年次に分けて調査した。土層名の統一ができず、分層発掘も十分にできなかったため、出土層位が不明確な資料が多数ある。特に、調査区南半分では出土層位が明確にできない土器があり、出土状況の写真などから層位を判断した。なお、出土層位は、前述した基本土層により記載する（第134図）。

弥生時代の土器（第138図1・2・5・7・8、139図20）は9層～11層にかけて出土した。特に、弥生時代前期から中期初頭の土器は相対的に下層から出土している。第138図1は基本土層10～12層で、同図5は11層より出土した。古墳時代前期を主体とする土師器（第140図～143図6・12・13・20・23・25・27・28・31・36・40・53・57・58・60・68・101）は9層及び10層で出土している。また、鉄製品（第148図12・13）は8層で出土しており、SQ101の土器群より新しいものであると考えられる。第148図11の鉄斧は10層と記録されているが、出土位置がSD15に重なっており、SD15の調査以前に出土していることから、SD15の覆土上面のものと考えられる。以上の検討から、SQ101の土器群には弥生時代前期から中期初頭、中期後半、古墳時代前期の土器群が層位差をもって出土しており、さらにその上層に鉄製品が出土している状況が伺われる。特に、古墳時代前期の土器が多数出土しており、何らかの有意なまとまりと考えられる。

古墳時代前期の土器群は、SD15～17の東側に位置しており、微高地との境界部に土器が多く出土している。小破片に割れた状態で出土しており、出土場所を違えた個体が接合する例が複数あることから、窪地に廃棄されたような状況が想定される。調査時には、上記の遺物の包含層とSD15～17との前後関係は認識できなかったが、SQ101にはSD15～SD17の遺物より新しいものが確認できないことから、古墳時代前期の土器集中が形成された後に、SD15～SD17が形成されたと考えられる。鉄製品が出土した8層とSD15～SD17との前後関係は明確にはできないが、これらの自然流路が形成される前後の時期に堆積したものであり、第148図の鉄製品は古墳時代中期から奈良時代初頭の遺物であると考えられる。

SM01（第136図）

東西3m、南北最大幅1.2mと、東西に長い楕円形のマウンド状を呈し、中央部は周囲に比べて約5～15cm前後高い。マウンド状の最高地点から掘り下げてみたところ、底面から厚さ1cm、幅20ないし30cmの炭化板材が長短4枚ほど出土した。板材は、長いもので1m短いのは30cmほどである。また、板材の南横から栗林式の甕形土器（第138図8）が潰れた状態で1個体分見つかった。マウンドが人為的

なものであるのか不明であり、土器と板材との関連も明らかではない。

SX107 (137 図)

調査区の最東端の不定形な窪みに多数の木製遺物が出土した。湿地に植物遺体が集中したためにできたいわゆる泥炭質の窪みである。窪み部には部分的に深いところがあり、特に木№2・3などが出土する土坑状の落ち込み部分をSX107とした。SX107 上部の黄褐色砂礫層内に特に大形の材が入っている。位置や傾きなどに規則性は認められないため、人為的に配置したものではないと判断した。

SX107 覆土内には多数の土器（第142図51、第143図70）と加工痕がある木製遺物96点（第145～147図1～8・10～14・19～21）などが出土した。木製品では、漆を塗った刀子の柄（1）・櫛形木製品（15）・手斧の削り片（11～14）などがみられた（第16表）。その他、ガラス小玉（第148図2）・種子・貝などが出土した。

土器の主体は古墳時代の土器であるが、中に中世以降の陶磁器小破片が認められる。調査状況から判断して、陶磁器片は調査時の混入の可能性があり、SX107の埋没時期は、土器の年代から6世紀前半から中頃（須恵器MT15からTK10頃）以降と判断した。また、櫛形木製品の炭素14年代測定の結果、歴年代較正值でcal AD685年の年代値を得た。SX107の埋没時期は7世紀代まで下る可能性がある。なお、年代測定の詳細は、添付CDに収録した。

3 出土遺物

(1) 土器（第138図～144図）

弥生時代から平安時代の遺物が出土したが、主体は古墳時代の土器である。

弥生時代の土器はテン箱に1箱程度出土したが、栗林式・箱清水式は少量で、その前後の時期のものが目立つ。古墳時代の土器は、北陸系（第140図1～7）、東海系（第140図8・9）が見られるなど、隣接する川久保遺跡と類似した様相を示す。土器分類は川久保遺跡（長野県埋蔵文化財センター2003）に準じた。古代では、出土量は少ないが、奈良時代から平安時代前半期のものが主体となる。BP第2地点で同時期の竪穴住居跡が確認されており、関連が注意される。

個々の遺物の十分な観察ができなかったが、詳細は添付CDの遺物台帳を参照していただきたい。また、遺物写真は添付CD所収のPDF版報告書のPL47～PL51に掲載した。

(2) 金属器・石製品・土製品（第148図）

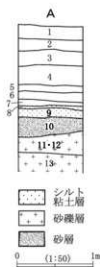
石製品（1～10）は縄文時代から中近世のものをまとめて提示した。鉄製品（11～13）と土製品（14～27）は弥生時代～平安時代の包含層より出土したものを提示した。5はヒスイの玉、9は岩版の破片、10は石棒の破片であり、縄文時代の石製品である。11～13の鉄斧、小刀はSQ101の古墳時代中期～古代の包含層より出土した。詳細は、添付CDの遺物台帳を参照いただきたい。

(3) 木製品・骨製品（第145～147図、第16表）

BP第5d地点で、古墳時代から近世の木製遺物が227点出土した。加工痕や炭化部分があるものは166点である。代表的なものを第145～147図に示した。16・17の柱は中世以降のものであり、他は古墳時代から古代の包含層から出土したものである。骨製品は2点出土し、いずれも小片で詳細は不明であるが、古墳時代から古代の包含層から出土した（第147図22・23）。詳細は添付CDの木製品骨角製観察表を参照いただきたい。

参考文献

長野県埋蔵文化財センター 2003 『川久保遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 64



- 1層：黒褐色土層。表土。
- 2層：にぶい黄褐色土層。ロームブロック（黄褐色）を多く含む整地土。
- 3層：黒褐色土層。1cm 大の礫を含む整地土。
- 4層：黒褐色土層。軟らかく、3層よりも深い、1cm 大の礫を多く含む整地土。
- 5層：黒色土層。軟らかく、粘性ある。ロームブロックと炭化物粒をわずかに含む。整地土。
- 6層：黒色土層。軟らかく、粘性ある。ロームを多く含む。炭化物粒を含む。整地土。
- 7層：黒色土層。軟らかく、粘性ある。非常に多量のロームブロックと小礫を含む。炭化物粒を含む。整地土。
- 8層：黒色土層。軟らかく、粘性がある。炭化物を多量に含む。
- 9層：黒褐色～暗褐色土層。軟らかく、粘性がある。炭化物を含む。
- 10層：褐色砂層。
- 11層：灰黄褐色砂礫層。
- 12層：砂礫層。11層に類似。
- 13層：灰オリーブ色砂礫層。1～10cm 大の礫が多量に含まれる。



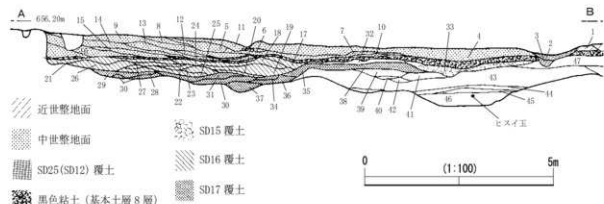
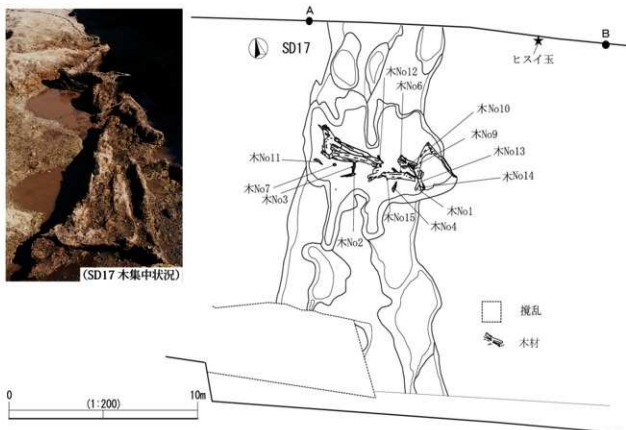
BP 第5c地点SD401 西より



第134図 BP 第5地点の土層と弥生時代～平安時代の遺物配置図



SD17 木集中状況



- 1 黒色土 (10YR3/3) 砂礫多量に混入
- 2 黒色土 (10YR2/1) 粘性土質が、ローム状や基礎層ブロックが混在。炭化配合有 (DB12 土層)
- 3 黒色土 (10YR2/1) ~暗褐色 (10YR3/3) 砂礫層 1~20cm 大の礫多量に混入 (SD16 下層)
- 4 黒色土 (10YR2/1) ローム状・砂礫多量に混入。粘性強く締りよい
- 5 黒色粘土 (10YR2/1) 帯状のロームブロック多量に混入 (基本土層 5層に相当)
- 6 黒色粘土 (10YR2/1) ローム状・砂・礫多量に混入。片々混在を含む 締り悪い
- 7 黒色土 (10YR2/1) ローム状・砂礫少量混入。粘性強く締りよい
- 8 黒色土 (10YR2/1) 2~5cm 大のローム多量に混入
- 9 黒色粘土 (10YR2/1) ローム状多量に混入
- 10 黒色粘土 (10YR2/1) ローム状・砂礫少量混入
- 11 黒色粘土 (10YR2/1) ローム状・砂礫少量混入
- 12 緑色のロームブロック土層
- 13 黒色土 (10YR2/1) 2~3cm 大のロームブロック多量に混入。面々帯状のロームブロックあり
- 14 黒色粘土 (10YR2/1) 1cm以下のローム多量に混入
- 15 黒色粘質土 (10YR2/1) 1~3cm 間のローム状や帯状のロームブロック多量に混入
- 16 黒色粘質土 (10YR2/1) 3cm 以下のローム多量に混入
- 17 黒褐色砂礫層 (10YR3/1) 人頭大の礫少量混入 (DB16 覆土)
- 18 黒褐色砂礫層 (10YR3/1) 5cm以下の礫多量に混入 (DB16 覆土)
- 19 黒色粘土 (10YR2/1) 1~5cm 間の礫多量に混入。20cm 大の礫・炭化を含む (DB16 覆土)
- 20 黒褐色砂礫層 (10YR3/1) 1~3cm 以下の礫少量混入 (DB16 覆土)
- 21 黒褐色砂礫層 (10YR3/1) 2~5cm 大の礫や中々多量に混入 (DB16 覆土)
- 22 黒褐色粘質土 (10YR2/1) 多量の粘土と 1~5cm 大の礫少量混入 (DB16 覆土)
- 23 黒褐色粘質土 (10YR2/1) 多量の粘土と 1~5cm 大の礫少量混入 (DB16 覆土)
- 24 黒褐色粘質土層 (10YR2/1) 多量の粘土と 1~5cm 大の礫少量混入 (DB16 覆土)

- 25 灰褐色粘質土層 (10YR4/2) 1~5cm 大の礫少量含む (DB16 覆土)
- 26 灰褐色粘質土層 (10YR3/2) 5cm以下の礫少量含む (DB16 覆土)
- 27 濃い・黄褐色粘質土層 (10YR5/2) 礫少量混入。鉄分が混在している (DB16 覆土)
- 28 黄褐色粘質土層 (10YR3/4) 鉄分が混在 (DB16 覆土)
- 29 黄褐色粘質土層 (10YR6/0) 砂礫少量混入 (DB17 覆土)
- 30 黄褐色粘質土 (10YR4/0) 3cm以下の礫少量混入 (DB17 覆土)
- 31 灰褐色粘質土層 (10YR4/2) 砂礫多量に混入 (DB17 覆土)
- 32 黒褐色粘質土 (10YR2/1) やや粘質
- 33 褐色砂礫 (10YR4/0) 粘性土と 1cm 大の礫多量に混入 (DB15 覆土)
- 34 赤褐色粘質土 (2.5YR5/5) (DB17 覆土)
- 35 黄褐色粘質土層 (10YR4/1) 3cm 以下の礫少量混入 (DB17 覆土)
- 36 黄褐色粘質土 (2.5Y/2) 5cm以下の礫多量に混入 (DB17 覆土)
- 37 黄褐色粘質土 (2.5Y/2) 5cm以下の礫少量混入 (DB17 覆土)
- 38 灰褐色粘質土層 (10YR4/1) 1cm以下の礫多量に混入 (DB17 覆土)
- 39 黒褐色粘質土層 (10YR2/1) 1cm以下の礫多量に混入
- 40 黒褐色粘質土 (10YR2/1) 表面質
- 41 濃い・黄褐色粘質土層 (10YR5/2) 1~10cm 大の礫多量に混入。20cm 以上の礫も混入
- 42 濃い・黄褐色粘質土層 (10YR5/2)
- 43 濃い・黄褐色粘質土層 (10YR5/2) 1~10cm 大の礫多量に混入
- 44 黒褐色粘質土 (10YR6/0) 礫を混入しない
- 45 黒褐色粘質土 (2.5Y/2)
- 46 黒褐色粘質土 (10YR2/1) 上部からヒスイ玉混入
- 47 濃い・黄褐色粘質土層 (10YR5/2) 1~5cm 大の礫多量に混入。1cm 大の礫土層

第135図 SD17



古墳 40・68 出土状況



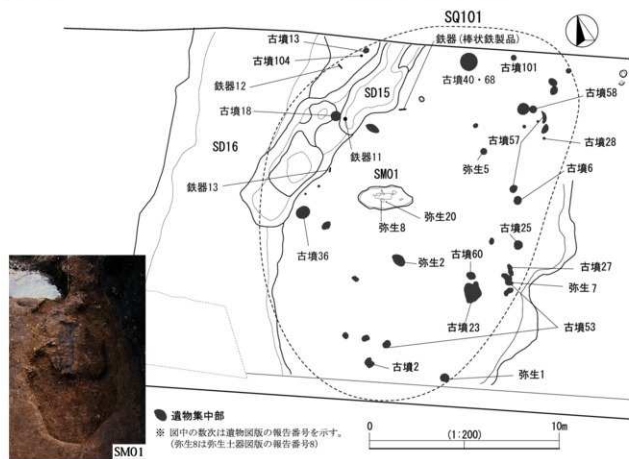
鉄器 12 出土状況



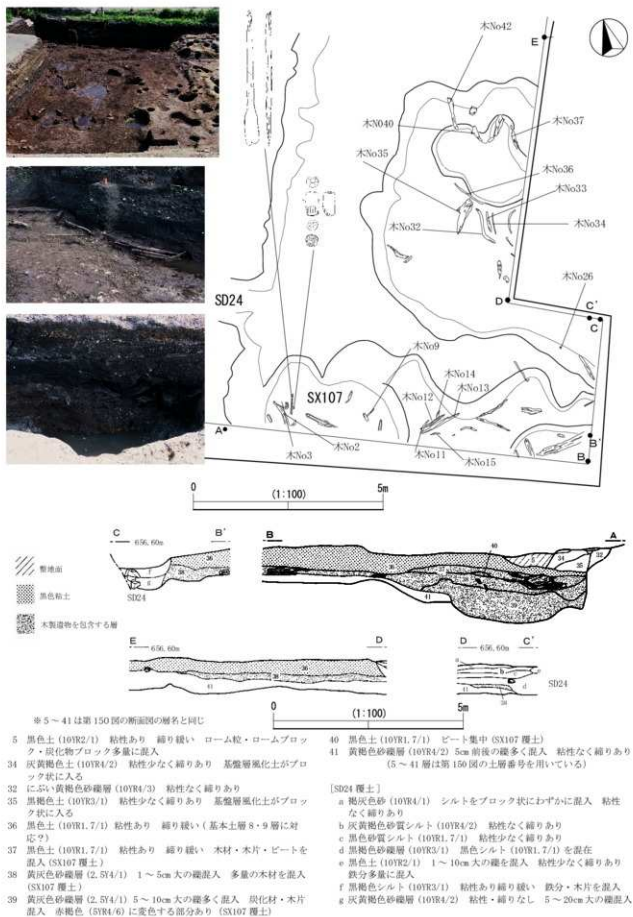
調査区北半部 SQ101・SD16 完掘状況 南西より



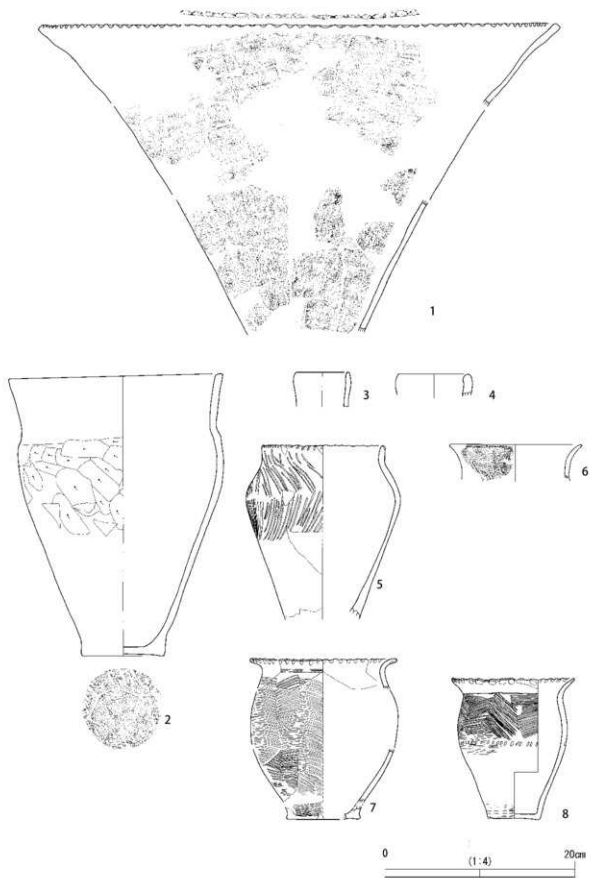
古墳 23・60 出土状況



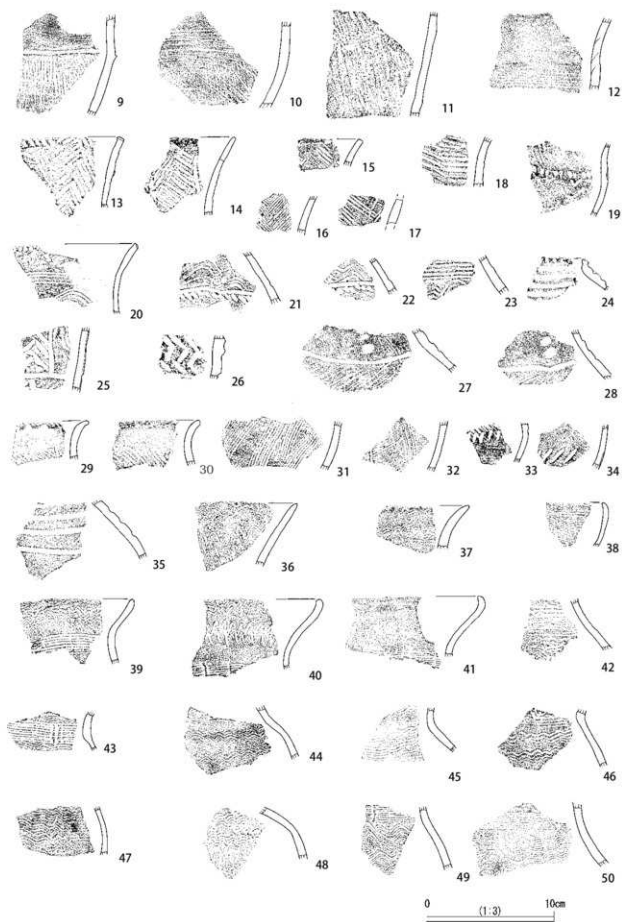
第136図 SQ101



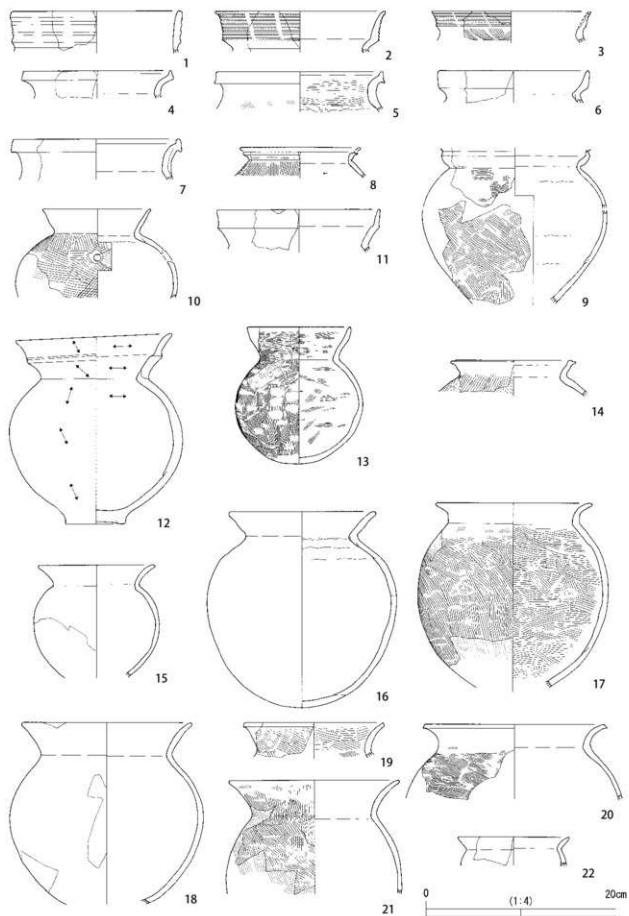
第137図 SX107



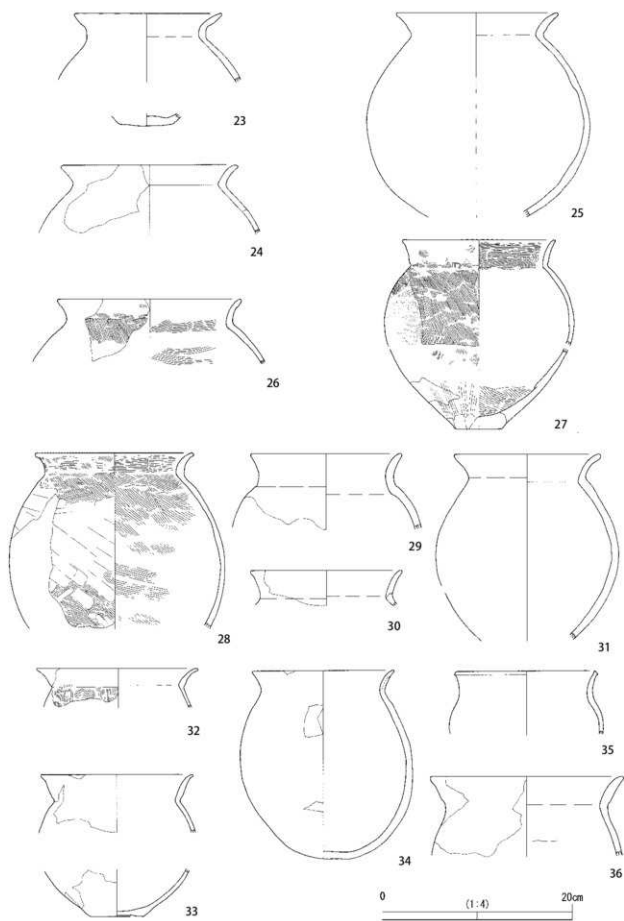
第138図 第5d地点弥生土器1



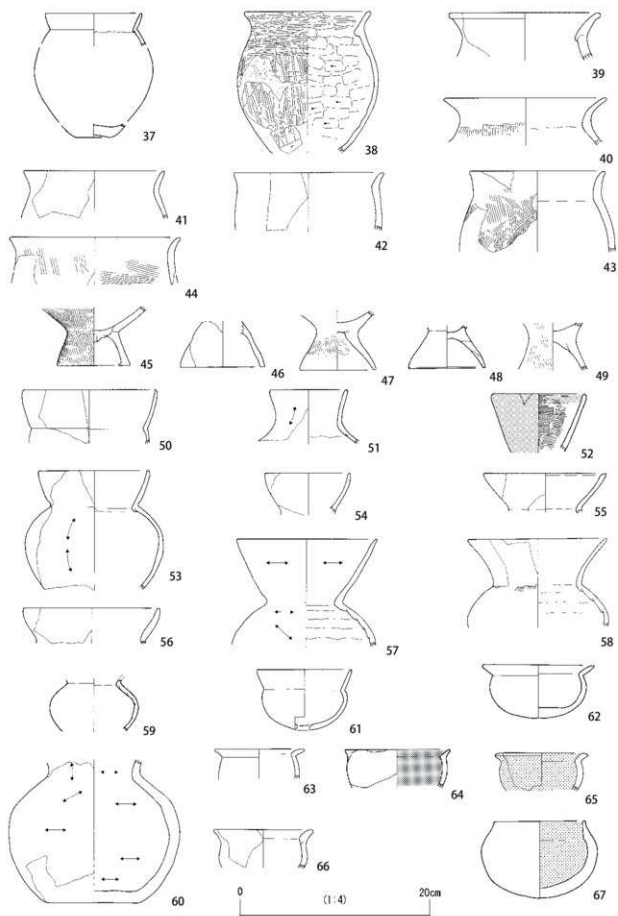
第139図 第5d地点弥生土器2



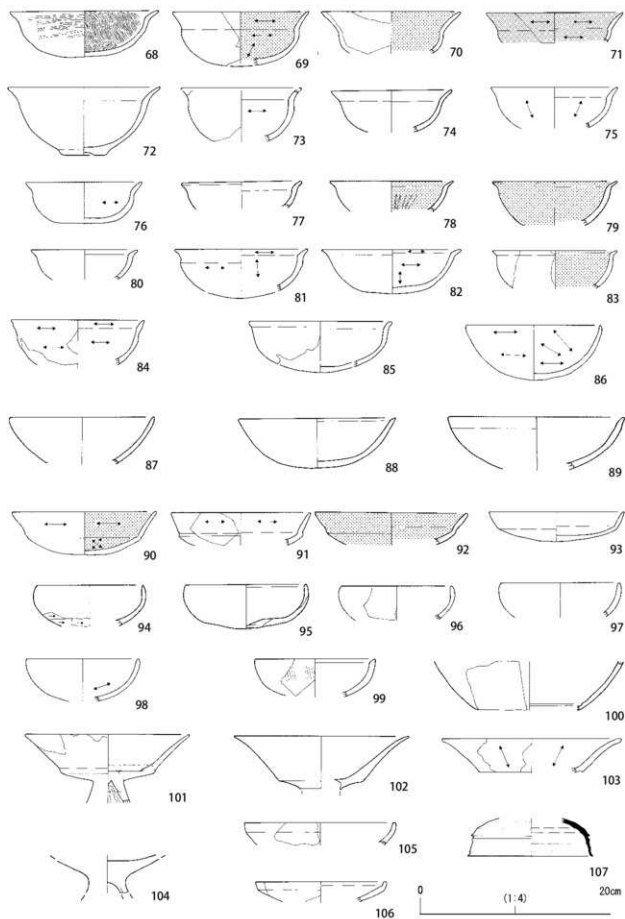
第140図 第5d地点古墳時代土器1



第141図 第5d地点古墳時代土器2

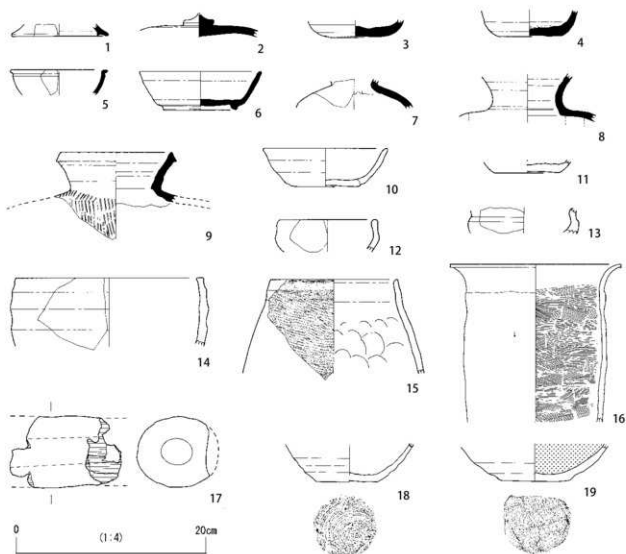


第142図 第5d地点古墳時代土器3



第143圖 第5d地点古墳時代土器4

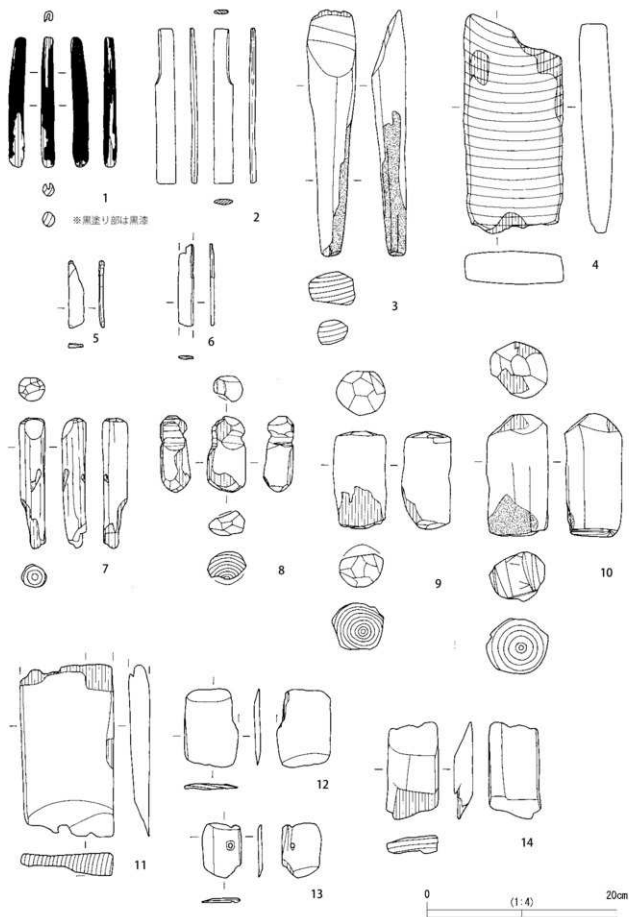
第3章 BP第4・第5地点の調査



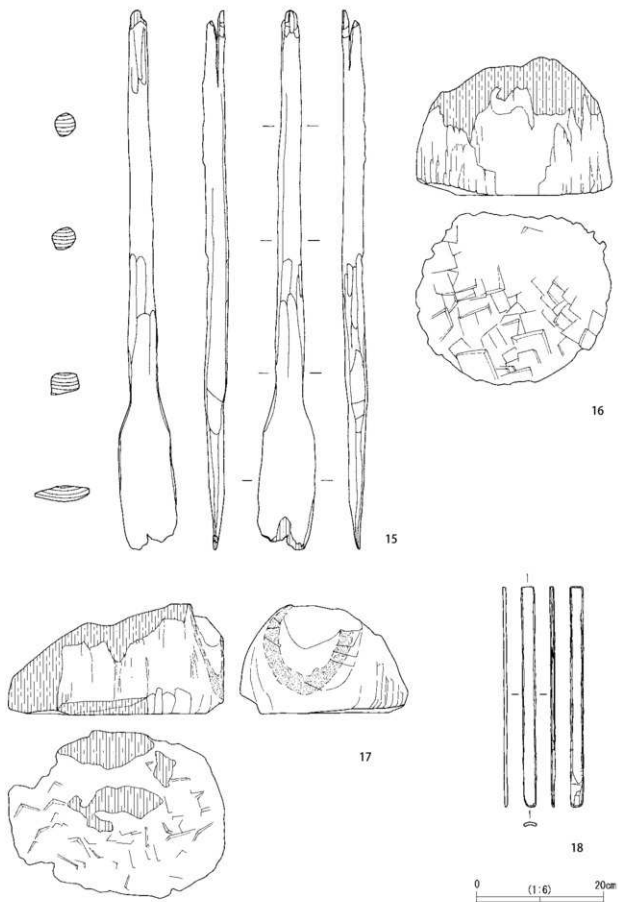
第144図 第5d地点古代の土器

断面番号	整理番号	遺構名	出土層位	遺物番号	器種	材質	長さ (cm)	幅・直径 (cm)	厚 (cm)	欠損	備考
1	C1	SX107			刀子柄		13.7	1.3	1.5	先端部欠損	
2	C2	SX107			覆土木製品	板材(楕円)	10.4	2	0.6		断面埋り。長さ3.5cm幅0.3cm深さ0.3cmの溝あり
3	C5	SX107	内30層		神瓦木製品	丸木材	26	5	3.5		柄の部分6×1.6×0.4cm
4	C11	SX107	覆土一岳		丸瓦木製品	板材(楕円)	23.2	10.5	3.5		楕円りにした材を用いて厚手の板材を拵えている。
5	C10	SX107	覆土一岳		丸瓦木製品	板材	7.1	1.5	0.4	先端部欠損	
6	C9	SX107	覆土一岳		丸瓦木製品	板材	8.7	1.5	0.3	両端欠損	
7	C3	SX107	30層		神瓦木製品	丸木材	13.7	2.4	2.7		断面面取り加工。製部も縦方向の磨り痕
8	C13	SX107	覆土一岳		神瓦木製品	丸木材	7.9	4	3.1		両端加工断面に括弧加工あり
9	C14	SX107 周辺	第5横出面	木No.5	神瓦木製品	丸木材	10.3	5.6	5		両端加工
10	C12	SX107	覆土一岳		神瓦木製品	丸木材	12.9	6.5	6		断面一方向取り。もう一方製部右側断面縦方向の磨り痕
11	C4	SX107	内37層		磨り痕のある木片	板材(楕円)	18.3	10	2.4		断面ナナメ 基部断面多角形
12	C6	SX107	覆土一岳		磨り痕のある木片	板材	8.3	5.7	0.6		
13	C8	SX107	覆土一岳		磨り痕のある木片	板材	5.8	4.2	0.4		円形の穿孔あり
14	C7	SX107	覆土一岳		磨り痕のある木片	板材	10.3	5.3	2		
15	C15	SX107 周辺	第5横出面	木No.4	覆土木製品	板材	85.2	9.1	2.4	欠損	(断面の法線62.2×3.3×3.8cm)
16	C02	SK1157			柱	丸木材	22	31	2.7		断面平らで加工痕あり
17	C02	SK085			柱	丸木材	17	33.5	25.5		断面平らで加工痕(磨痕)あり
18	C140	SD17		木No.10	ヘラ木製品	竹材	34.8	1.8	0.5		断面平らと丸み加工
19	C164	SX107			弓状木製品	丸木材	7.7	1.5	1.5		一端部先磨り
20	C092	SX107	30層		弓状木製品	丸木材	65.5	2.3	2.2		C112と接合
21	C094	SX107	30層		弓状木製品	丸木材	31	2.3	1.5	欠	断面加工
22	C202	第4横出面	48039		骨製品		2.1	1.2	0.25	欠	骨製品(断面取付または中足骨)
23	C201	SQ101	第4横出面		骨製品		1.4	0.7	0.25	欠	骨製品(骨)

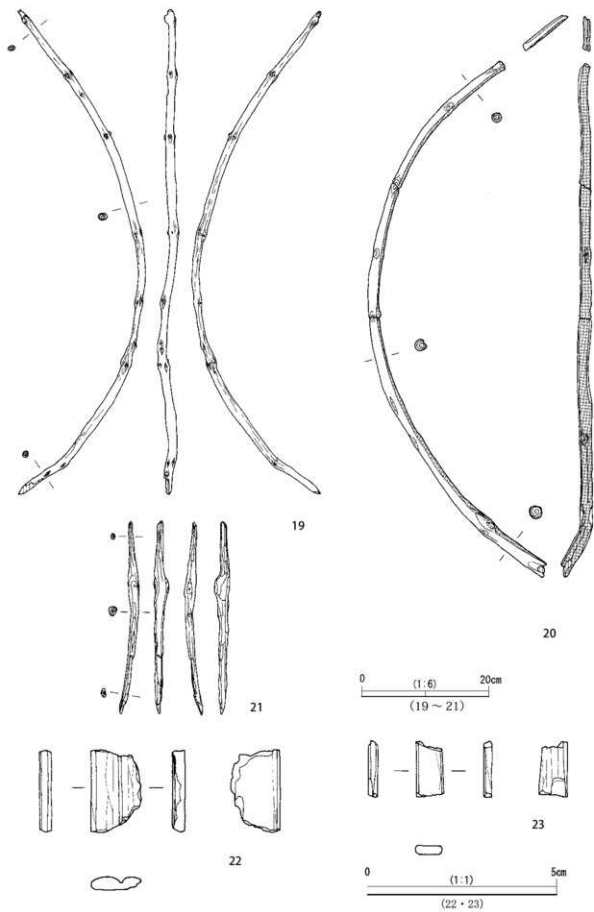
第16表 第5d地点木製品観察表



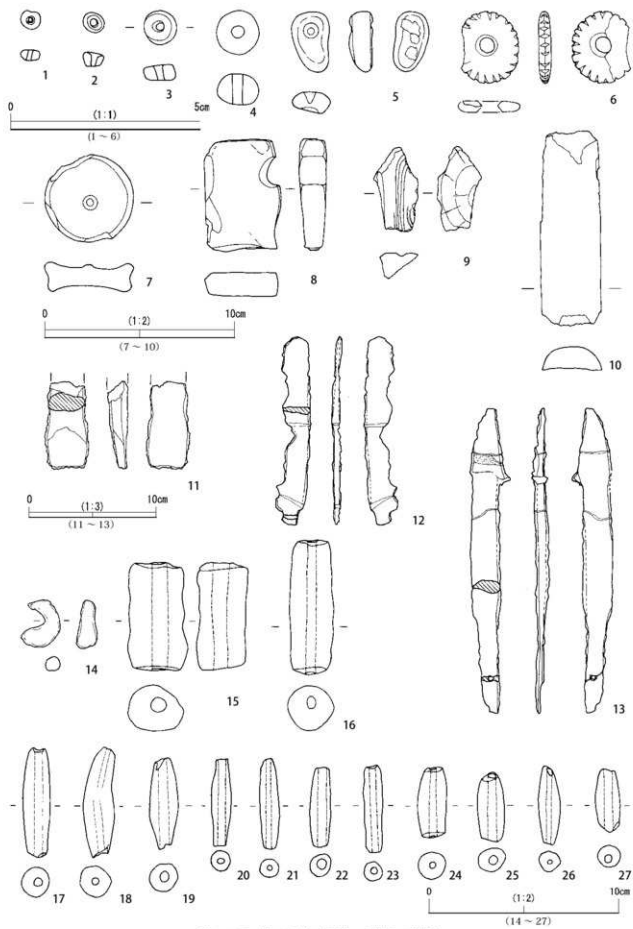
第145図 BP第5d地点木製品1



第146図 BP第5d地点木製品2



第147図 BP第5d地点木製品3・骨角器



第148図 第5d地点金属器・土製品・石製品

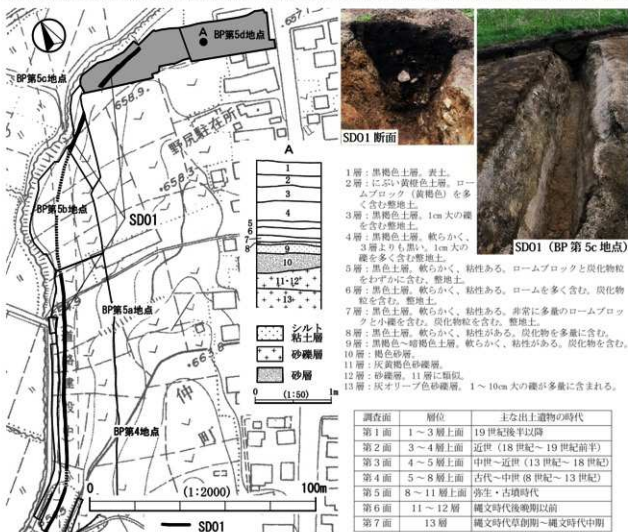
第6節 中世・近世の遺構と遺物

1 調査成果の概要とBP第5d地点の土層

中世から近世の遺構と遺物は、BP第5c地点北半部とBP第5d地点（調査時点では県道地点と呼称。第1節第2図参照）にまとまって検出された。工事工程との関係で、5地区に分けた分割調査をおこなった。

BP第5d地点では、中世以降の4枚の遺構検出面が確認された。調査区内には河川堆積物と整地層が複雑に堆積しており、統一した層名で調査することができなかった為、調査終了後、断面図を検討し、第149図に示した基本土層を設定した^{註1}。本報告書では、基本層序1層～3層上面を第1面、基本層序3層～4層上面を第2面、基本層序4層～5層上面を第3面、基本層序5層～8層上面を第4面とした。第1面の包含層は近世末期～近代の遺物が多く、第2面では近世、第3面では中世、第4面は古墳時代～中世の遺物が包含されていた。

BP第5c地点では地山が微高地状に高くなるため、調査面は1面であり、BP第5d地点の調査面に直接対比はできない。遺構配置図では、遺構の時期を鑑みて、BP第5c地点の遺構を提示した。したがって、



第149図 中近世の遺構・遺物集中地区の調査と基本土層とSDO1

註1 添付CDに収録した遺物台帳には、基本土層を記載した。調査断面の土層断面図の土層名は調査時に付したものをそのまま提示するなど、変動的な土層番号となっている。基本土層との対応関係を土層断面図の土層注記に示した。

調査面ごとの遺構配置は必ずしも同一時期でないものが含まれていることがある。

第1面からは、溝(SD)9条、土坑(SK)43基、建物跡(ST)10箇所その他、銭貨が広く出土した。第2面では、溝10条、土坑22基、集石などが検出された。第3面では溝3条、土坑199基、集石1基などと、古銭集中部が確認された。土坑の中には、掘立柱建物跡の柱穴と思われるものが多数検出されたが、密集しすぎており、建物の形を想定することはできなかった。また、井戸の可能性のある深い土坑が17基検出された(第153図)。第4面では、溝3条、土坑18基と古銭集中部が確認された。古銭集中部は、第3面とほぼ同じ範囲であり、一連の遺物群であると考えたほうがよいのかもしれない。

なお、出土遺物の時期、産地の同定は市川隆之調査研究員の鑑定によった。

2 遺構と遺物

(1) 第1面の遺構

ST01・ST02・SD04・SD05 (第151図)

遺構の構造：ST01に関わる柱穴はSK44・SK45・SK47・SK49・SK27・SK24・SK25・SK13の8本で、南北短軸は約2.7m、東西長軸が約5.4mの建物址が推定できる。これらとSD04とは重複せず、しかもSD04が柱穴の外側を「L」字形に巡ることから、両者は同一の建物に関わる遺構と考えられる。SD04はST01の西側と南側を画する溝であるが、南辺の中央から北へST01の軸に平行して走るSD05もこれらと密接な関連をもつと考えてよい。SD04の外周を巡る8基の柱穴で構成される建物をST01Bとした。東西の長軸が約6.6m、南北短軸は調査範囲内で約4.1mである。

ST01の各柱穴は径20cm～80cmで、深さ4～25cmである。この柱穴以外にも大小数個の穴を検出したが、これらが柱の立て替えによるものか、別途の用をなすものなのか、判断材料に欠ける。また、ST1Bの柱穴は径27～40cmで、深さ10～15cmである。このうちSK34がSD04の一部を掘り込んでいる。ST01BはSD04と前後関係をもつことから、ST01を増築したものであろうか。

SD04は確認できただけで南北6m、東西7.7m、上端幅は15cm前後、深さ約50cmを測る。「L」字形の西端は段切り状態で溝が途切れている。溝の位置および構造から判断して、地割りまたは区画割りの溝であろう。SD05は南北2.5m、上端幅20cm前後、深さ約5～10cmを測る。

遺構の時期：ST01、SD04、SD05は同一の建物に関わる遺構とみたい。出土遺物がなく、SD04がST02を切っていることから、明治期以降のものだと判断した。

ST02・SD03 (第151図)

溝に区画された整地土である。SD03は、上端の幅40cm前後、深さ10～15cmを測る。東西の長さは約9.7mで、西側部分はL字状に屈曲し、北方向へ約2.7m延びているが、攪乱のためその先は不明である。底面は凹凸がはげしく、溝が途切れる部分もある。SD03に区画された内部の整地され土間状となった範囲をST02とした。SD03覆土から19C後半以降の陶磁器片が出土しており、明治期の遺構と判断した。

ST03・ST04 (第151図)

ST03は東西長軸約4m、南北短軸2.4～2.6mを測る。4本の柱穴は掘り方が方形で、径20～30cm、深さは5～15cmである。ST04は確認できた柱穴が7基である。東西短軸は2.8～3.3m、南北長軸は約5.5mを測る。各柱穴は径10～20cmほどで、深さは5～15cm、掘り方は楕円形あるいは方形をしている。

ST03はST04の東側に並列しており、軸が並行しているため同一時期とみたい。ピット内の出土遺物はないが、検出面および周辺遺構や周辺出土遺物から近世以降の建物に関わる柱穴であると考えられる。

ST05～ST09・SD19・SD20 (第151図)

これらの遺構は調査区の東寄りにまとまる掘立柱建物跡群である。調査終了後に認識した掘立柱建物跡については誤謬の可能性もあるが、仮説として提示しておきたい。切り合い関係も確認され、複数時期の建物跡が混在しているが、明確に分離できないため、まとめて報告する。

遺構の構造：ST05は柱穴12基(SK409・SK411・SK415・SK421・SK423・SK428・SK429・SK430・SK452・SK458・SK459)で構成され、南西側隅の柱穴が不明である。東西の長軸は約8.5m、南北短軸は約6～6.4mを測る。それぞれの柱間は1.8～2mだが、東側は約4.5mの間隔がある。各柱穴の径は40～100cm、深さは10～20cmである。形状は円形や楕円形をしている。多くの柱穴に3～20cmの礫を敷いてあった。土台として用いていた可能性がある。

ST06はST05の東側に接している。北東側が攪乱されていたため柱穴を検出できなかったが、8基の穴(SK402・SK403・SK408・SK410・SK416・SK554・SK748・SK755)を同一時期の柱穴と認識した。柱穴の間隔は短いところで約1mであるが、長いところでは約3.5mである。全長は東西間が4.9m、南北間約5.3mで、やや方形に近い建物址である。各柱穴の径は10～15cm、深さは10～40cmで、形状は円形や隅丸方形をしている。多くの柱穴に、3～20cmほどの礫を集めてあった。土台として用いていた可能性がある。

ST07はST06の東隣に位置する。P1～P19の19本の柱からなり、東側に庇をもつ総柱の建物が想定される。北西隅の柱穴は攪乱によって確認できなかった。規模は東西約6.8m、南北約7.2mである。柱穴は、平均的な径が約60cm、深さは約5～30cmで、南西隅のP19には差し渡し約30cm板石3枚を敷き詰めた礎石が残っていた。切り合い関係から、SD19より新しいことが確認された。

ST08はST07の南側にある。P1～P9の9本の柱からなるが、SK1113・SK1114・SK1106も本址に関連すると思われる。全体の規模は、南北約4.5m、東西9.5m前後である。

ST09はST08にほぼ並行して配列する総延長3.1mの礎石列である。P1からP6すべてに拳大の礎石が入る。掘り方はそれぞれ明確ではなかったが、礎石から判断して径約50cm前後の柱穴があったと思われる。ST08のピットがST09の礎石を崩して掘削しており、ST08より古いことが確認できる。

SD19・SD20は、ST07とST08にまたがる位置にあり、国道18号に隣接する東側が開いた「コ」の字形の溝である。SD19はSD20の北側にあたり、東西約7.5m、西側先端が約1m南へ直角に曲がる。幅は約50cm、深さは約30cmである。一方のSD20は、南北8m、東西7.5m、幅約50cm、深さ30cmの「L」字形をした溝である。SD19の南側先端部とSD20の北側先端部の間には幅約1mほどの切れ目がある。ここを方形区画の出入口と想定する。それぞれの溝の中には拳大から人頭大の礫が出土した。溝は建物の布基礎跡であろう。

出土遺物：ST05・ST06は出土遺物がない。ST07では柱穴から陶磁器が出土している。いずれも17C末～19Cのもので、明治以降のものも含む。ST08では中世の珠洲焼や近世の唐津焼や伊万里焼の他、現代のガラスを含む近代以降の陶磁器が出土している。

SD20からは、伊万里焼の上絵付け鉢等、唐津焼輪ハゲ皿、16C末～18C前半の播鉢、17C前半の志野焼丸皿、カワラケ等が出土している。また、金属製品としてキセルや指輪等が出土している。

遺構の時期：遺構の軸方向や切り合い関係から判断して、SD19、SD20とST09はほぼ同時期と考えられ、SD20から出土した遺物により18C前半以降末までの時期に比定される。一方、これより新しいST07、ST08は、建物の軸方向や柱穴の構造からみてST05やST11と一緒に、ST06はそれより若干新しいものの、ほぼ同時期に建てていたものと考えてよい。これらの遺構に伴う陶磁器の下限が19C後半であることから、明治以降に建てられた建物である可能性が高い。

ST11 (SD06・SD21・SX101) (第151図)

ST11はST05の西隣である。全長約3.5mを測る東西溝SD06と、同じく約5.2mを測る東西溝SD21に囲まれた範囲(SX101)で、全体の規模は長軸約8m、短軸約4.5mである。SD06は上端幅が約40cm、深さは50cm前後、SD21は上端幅が25cm前後、深さは約5～10cmである。また、溝に囲まれた部分は10～15cmの厚さに整地土で固めたような様子がみられる。おそらく建物の土間として利用されていたのであろう。

SD06とSD21には出土遺物がなく、SX101の整地土内からは、中世カワラケ、唐津焼輪ハゲ皿、18C末～19C前半の伊万里焼香炉、19C後半以降の産地不明陶磁器が出土した。検出面および土間と考えられるSX101の遺物から、18C末～19C前半幕末期～近代にかけての建物跡と考えられる。

SK743 (第151図)

ST07の区画内に検出された。東西85～98cm、南北122～107cm、深さ2～13cmのやや歪になった長方形である。非常に多くの青銅製品や銭貨、鉄製品が出土している。長方形の穴の中に木製の箱(釘が出土)が入れてあり、その中に銭貨等金属製品を収納した地下収納庫であった可能性がある。

土坑内より、銭貨43枚(寛永通寶34枚・文久永寶7枚・天寶通寶1枚・不明1枚)、キセル5個、鎖付銅製品1個、内蓋状銅製品1個、その他鉄製品(釘や不明6点以上)、伊万里焼の急須や碗、近代陶磁器が出土した。銭貨の下限を示す文久永寶の初鋳年が1863年であることから、これ以降の流通銭と考える。また近代陶磁器も出土しているため、本址はST07に伴う近代以降の地下収納庫と考えてよい。

近世銭の出土状況

県道地点(BP第5c・5d地点)で、寛永通寶と識別できた銭貨は114枚である(第16・17表)。その内112点がBP第5d地点に集中する。前述のSK743では寛永通寶・文久永寶など44枚の銭貨がまとまって出土した他、SK750、SK917、SK1243では2枚から3枚の銭貨が張り付いた状態で出土した。多くの銭貨は遺構外から出土しており、第1面から寛永通寶41枚、第2面では寛永通寶14枚が出土した。

出土場所が調査区の国道18号線側に片寄るのは、包含層が厚く残っていることも一因ではあるが、国道18号線は、旧北国街道であり、検出された遺構群が野尻宿関連のものであるためであろう。BP第5d地点ではSD19・20に囲まれた範囲から多く出土している。

なお、BP第2地点でも44点近世の銭貨が出土しており、その多くは国道18号線沿いの調査区であり、やはり野尻宿が関連しているためであろう。

(2) 第2面の遺構

SD01 (第149・152図)

基本土層II層中に、検出した。低地へ下る丘陵の縁に沿って掘られてた、BP第3地点からBP第5d地点に続く全長300mを超える溝である。BP第3地点からBP第5b地点にかけてはU字状を呈し、上端幅約1.2m、深さ約0.8m前後を測る。BP第5c地点からBP第5d地点にかけてはV字状を呈し上端幅約2m、深さ約1.7m前後を測る。

肥前焼・伊万里焼・唐津焼・銭貨など、先土器時代資料から近世資料まで混在する。14世紀代の陶磁器も見られるが、主体は17世紀代に生産された近世の陶磁器である。18世紀代の遺物がないことから、18世紀にはすでに埋没していた遺構と判断した。中世遺物が多いので、掘削時期は中世まで遡る可能性はあるが、16世紀代の遺物が見られないことを考慮すると、中世の遺物は混入品で、17世紀代に掘られた溝と考えたい。なお、出土品の中に19世紀代の紅皿が1点見られたが、1点だけ離れた時期を示しており、調査状況などを鑑みて調査時の混入品と判断した。

遺構の時期から、BP 第 5d 地点第 2 面の遺構群の時期と判断した。

SD07・SK1122 (第 152 図)

南北 3.0m、東西 2.4m ほどの不整形をした SK1122 を起点として、北方向へ走る溝である。SK1122 は南北に分けて 2 年次の調査が行われていた。北壁側に石を組んでいるが南側の石組は記録されていない。記録が乏しいため全体の構造については不明である。

SK1122 との接続部から北へ 5m の間は、溝の東西壁に 30～50cm の礫や石白を、上面と内側とを揃えて並べた石組み溝である。それから先、調査区北壁までの 2.2m は素掘りの溝で、調査区の北側へ延びている。石組み溝の上端幅は約 20～30cm であり、深さは 20～25cm である。石組み溝の SK1122 との接続部と素掘り溝との接合部は礫で塞がれている。全体の構造は、SK1122 へ水を引くか、SK1122 に溜めた水を懸け流す引水施設とみられるが、底面の傾斜方向が記録されていないため、詳細は不明といわざるを得ない。

15C の白磁と 18C 末～19C 前半の伊万里焼が出土しており、出土遺物から判断して、19C 前半の幕末期に構築されたものと思慮される。

SD08 (第 152 図)

調査区の東寄り、北壁に近い位置を東西に走る。西側はやや北に曲がりながら調査区外へ延びている。

攪乱や土坑によって削平しているため全体の形状を捉え切れていない。深さは 30～60cm で、東西のほぼ中央の溝底面に SK525(SK901) がある。また、火災のあった土が溝の上部に載っている部分がある。

16C 末～17C 前半の越中瀬戸焼播鉢などが出土している。SK525 が 16C 末から 17C 初頭の土坑であるから、本址はそれより新しいことは確実で、幕末期の整地土の下から本址を検出したとの調査記録がある点を信じれば、幕末までは下らない。

SD09・SD10・SD11・SK1124 (第 152 図)

SD07 の東側に位置する。SD09～SD11 は、北方向へ走る素掘りの溝である。SD09、SD10、SD11 の関係は、断面観察から、SD11 が最も下に位置し、その上に SD10 がかぶり、さらに SD09 が乗っている。SD10 や SD11 の流路はほぼ上下に重なっているものの、SD09 はやや東側にずれている。SK1124 ところで溝が切れているが、SK1124 を境に調査年次が異なり、溝がさらに南側に伸びていた可能性もあり、溝と SK1124 が一連の遺構であるのか否か不明である。また、後述の SX103 より下層で検出された遺構であり、SX103 とは時期が異なる。

遺構の構造：SD09 の断面形は緩やかな V 字状あるいは U 字状を呈する。上端の幅 50～60cm、深さ 50cm 前後を測る。SK1124 との接続部から北壁までの長さは約 8m である。SD10 は上端の幅が 80cm から広いところでは 250cm あり、深さは 10～30cm を測る。また SD11 の上端幅は 60～70cm で、深さは 15cm 前後である。SK1124 は南北 1m、東西 1.5m の半円形を呈し、調査所見によると、SD09 に切られている。

出土遺物：SD09・SD10 からは 17C 後半～17C 末にかけての唐津焼が多く出土しており、縄文土器片や古墳時代土器片あるいは 13C 後半の珠洲焼甕・播鉢、カワラケ等が混在している。また SD11 からは 17C 後半の唐津焼播鉢が出土している。

遺構の時期：SD09 上部には幕末期の整地土が載っていることが確認され、SD09 は幕末 (19C 中頃) 以前に埋没したものとする。また、最下部の SD11 は、近世の盛土下から検出したことや 17C 後半の唐津焼が出土していることから、近世中期以降に構築されたものと思われる。

SD22・SD23 (第 152 図)

東西に走る溝で、SD22 が石組みで SD23 は素掘りであるが、両者は一連の溝と考えたい。

SD22は残存長9.5mで、東側は調査区外東側にさらに延び、西側のSD23との間はSX105によって埋されている。東側4mの間は南北壁に20～40cm大の石や水輪を用いた石組が並んでいる。溝の幅は約90cm、深さは20cm前後となる。一方のSD23は残存長10.5m、幅は15～20cm、深さ25～35cmの素掘り溝である。

下部の第3面では検出したSD24やSD25と同じ位置・方向であることから、経年的な土地区画あるいは屋敷地割りを示す溝であったらしい。SD09～11またはSD07も本址と関わりがあるとすると、調査区の北東側を画する溝であった可能性も出てくる。

SD22からは、五輪塔の水輪(第163図22)、16C後半～17C中頃の唐津焼皿、近世の唐津焼あるいは伊万里焼の陶磁碗等、13C後半古瀬戸大窯段階の陶器、元豊通宝などが出土した。ことに古瀬戸大窯段階の陶器は県内最北の資料である。SD23からは伊万里焼、唐津焼、珠洲焼、中世内耳鍋、古代須恵器が出土している。出土した伊万里焼は17C後半～18C前半頃のものであるが、下層のSD24や同一遺構であるSD12から19世紀代の遺物が出土しており、本溝は19世紀以降に埋没した基の考えられる。

SX106 (第152図)

SD22の北側約3.5mの、調査区東壁際に位置する。SD22に並行して、約20～30cmの大きな礫が2列で東側調査区外に延びる。2列の礫の間は50～70cmあるため、SD22のような石組みの溝の可能性もある。

18C末葉～19C前半の伊万里焼と鉄製の角釘が出土した。出土遺物から幕末期の遺構と考える。

ST10 (第152図)

SD22・23と並行する柱穴列である。東からP1・P2・P3の3つ柱穴が並ぶ。間隔はそれぞれ約1.8mである。各柱穴とも底面に3～5cm程度の小粒な礫を粘質土で固めている。礎石的な役割をしていたものとする。対になる柱穴が南側の調査区外にあるのか、あるいは塀などに関係する柱穴か不明である。

出土遺物は無いが、SD22・23との関わりを考えると17C後半～18C前半頃と推定される。

SK741 (SK855)・SK839 (第152図・第159図)

調査区の北東隅の一画に隣接して検出した。いずれも底面に板材がある土坑である。SK741は上端の直径100cm内外、SK839は90cm弱と大小あるが、深さはいずれも40cm余りと一定している。SK741と重複して検出されたSK855の東側壁面には20～30cmの礫が壁面に並び、一連の遺構と判断した。SK741の底面北側半分は曲物(桶)が壁面と底面に一部残る。3つの土坑は、いずれも桶を埋設した施設と考えられる。

SK741から19C前半の陶磁器、SK839からは18C末の瀬戸美濃焼が出土している。出土遺物からSK741は19C前半以降、SK839は19世紀代の遺構と考えられる。

SK763・SK774・SK918・SK1004 (第152図・第158図)

調査区の北東側、SD10・11とSD22・23とに囲まれた一画にあり、土坑内に木柱が遺存しているもの、または柱痕が確認された柱穴である。SK763は上端幅約1.15m、下端幅約0.9m、深さ約0.42mを測り、ほぼ円形になる。径0.3～0.35mの柱跡が確認され、底面には厚さの5mmの板材が出土した。他は、木柱が出土した柱穴で、SK774は木柱の直径20cmに対して柱穴直径は50cm、SK918は直径30cm弱の柱に対し直径100cmの柱穴(第158図)、SK1004は10cm程度の木柱に直径30cmの柱穴である。

SK763から17C後半から18C後半の唐津焼が出土し、18C末～19世紀代の柱穴と推定される。他の柱穴に出土遺物はないが、SK763と同一検出面であることから、同時期の遺構と判断した。

SK1131・SK1141・SK1143・SK1144・SK1145・SK1146 (第152図)

調査区の北東側、SD10・11とSD22・23とに囲まれた一画にあって、SD22・23の北側に沿って並ぶ

ように検出した。いずれも底面に5～20cm程度の礫が敷いてある土坑である。構造的にはST10を構成するPitと類似していることから、柱穴と判断した。ただし、木柱が遺存していたSK774などは底面に礫敷きが認められなかったため、これらとは建物の用途・構造が異なるのかもしれない。

SK1143からは17C後半の唐津焼播鉢、SK1145からは同時期の伊万里焼が出土している。17C後半～18Cの遺構であろう。

SX103 (第152図・第159図)

東西1.2m、南北1.8mの範囲に、厚さ10～20cmほど土を盛り、その上に20cm前後の石を方形に積み並べたものである。北側は調査区外に延びる。建物址に関わる遺構と思われるが、性格はわからない。

伊万里焼、唐津焼など陶磁器類をはじめ、寛永通宝、板状鉄製品、釘など鉄製品や漆片が出土した。

調査区北壁断面で観察すると、第1面の整地土がSX103上に載り、SX103の下部に第2面の整地土があり、その下部にSD09がある。出土した陶磁器類は18C末～19C前半頃のものが多く、幕末期の遺構と考える。

SX105 (第152図・第159図)

調査区の南東隅で検出した。SD22とSD23を切っている。四周の壁面と底面に10～15cmの白色粘土を貼った平面長方形の土坑である。土坑の内法は東西130cm、南北50cm、深さは25～30cmである。底面には白色粘土の上に厚さ2cmほどの炭化物層があった。また粘土の壁面にそって厚さ1cmに満たない板材が残っている部分もある。

鉄製の角釘が出土したのみであるが、SD22やSD23を切っていることから近世以降の新しい遺構であり、18世紀後半から19世紀代の年代が想定される。

土鍾の集中部 (第152図)

SK774の土坑より上面から、長さ約6～8cm、太さ約2cmほどの太い土鍾6点が、径20cm範囲内で集中して出土した(第163図10・11)。出土層位と土鍾の形状から近世以降のものであろう。

(3) 第3面と第4面の遺構

第3面は整地された面が上下2枚ある部分が観察できたが、それを明確に区別して発掘することはできず同一面として作業を終了した。整理段階でこの2枚を分離しようと試みたが、土坑の数が多く、遺物も土坑覆土のものが複雑に混在していて果たせなかった。

SD24・SD25(SD12) (第153・154図)

SD25は調査区の北東隅を鍵の手に区画する溝、SD24はSD25の上部に重なる東西方向の溝である。また、調査区を南北に分けて2次にわたり調査したため、同一の溝にSD12とSD25の別名称が付された。すなわち、北半部の調査区ではSD12、南半部の調査区ではSD24・25の名称で調査をしている。調査後の検討で、調査区南半部では、上位のSD22・23と下位のSD24・25とは微妙に位置がずれるものの、ほぼ重なった配置を示しており、再構築などによる前後関係は認められるが、一連の遺構であることが判明した。しかし、調査区北半部では、これらの溝の続きをSD12と一時期の溝として調査しており、南半部との対比が十分にできない。そのため、第2面の遺構配置図に破線で溝の位置を示している。

SD24は長さ約8.5mの東西溝である。幅は50～70cm、深さは10cm前後である。西側は第2面のSD23の溝によって削られており、本来の状況は不明である。東側は、さらに調査区外へと延びる。

SD25は長さは南北15m、東西26m、断面形は「U」字形を呈し、上端幅50～70cm、深さ25～30cmを測る。SD区画内には多数のピットや土坑が分布している。

SD12からは、13Cの青磁、珠洲焼きやカワラケ等の中世遺物と、18C末から19Cに及ぶ伊万里焼や

唐津焼、嘉定通宝などが出土した。SD24では珠洲焼、17C前半の志野焼丸皿、銅貨、18C末～19C伊万里焼や唐津焼が出土した。SD25からは上層ではシノギ連弁の青磁、15C中から後半の古瀬戸折縁皿、珠洲焼の播鉢や甕、カワラケ、16C後半の志野焼、唐津焼の播鉢やハゲ皿、17C後半の瀬戸美濃丸碗、17C前半～18C伊万里焼皿などが出土している。また、下層では内耳鍋、常滑、珠洲焼の播鉢、16C末～17C中頃の唐津焼播鉢・碗・徳利・香炉、刀子？、角釘、板状鉄製品、開眼通宝、至道通宝、至和通宝、元祐通宝、寛永通宝などがあった。

以上の遺物出土状況から、SD22・23を含めて、遺構の時期を推定すると、17C後半以降に溝が作られ(SD25)、18世紀代に一度作り直しがおこなわれた(SD24)。そして、SD12から19世紀代の遺物が出土していることから、19世紀以降まで、この溝が存続していたと考えられる(SD22)。

SD13 (第154図)

SD25の西側を東西に走る。東西3.5m。溝の西側はL字状に屈曲し、東側は攪乱されており末端は不明である。上端幅50～60cm、深さ10～15cmを測る。

タタキ目のある須臾器破片及び中世の内耳鍋片が出土した。出土遺物からや検出面から判断して、中世に埋没したものと推定した。

SD14 (第154図)

調査区の東寄り以北壁側で南北方向に延びる4mのみを検出した。さらに北側調査区外へ延長する。上端幅約50cm、深さ5～10cmを測る。

出土遺物が無いが、検出面から中世以降の溝と判断した。

SK1661 (第153図・第155図)

調査区の西端で検出した。1.4m×1.5m、深さ約3.5mの円筒形の土坑で、底面に人頭大の礫が出土した。覆土はロームブロックが混在した黒色土が詰まっている。調査時に土坑底部には水がしみ出してきており、井戸跡と判断した。最下部の土層から弥生土器が出土したが、周辺に弥生時代の遺構が確認されないことから、弥生時代の遺構ではないと判断したが、他に出土遺物がなく、時期は不明である。覆土の類似から周辺のビット群と同時期と推定した。

SK102 (第153図・第155図)

調査区の中央やや東寄りで見出した。検出時は不整形に20～30cmの礫が集中した状態で、上面の礫を除去したところ、礫や石臼を縁に組み込んだ井戸と判明した。直径85～90cm、深さは約50cm、石組みの高さは15cmである。

珠洲焼の播鉢や大壺、カワラケ、石臼が出土した。出土遺物から14C前半以降の井戸と判断した。

SK1174

調査区の東側、SD24・25によって「L」字形に区画された土坑群の中で検出した。上端幅40cm、下端約30cm、深さ約30cmを測る。掘り方の底面下に径8cm、長さ30cmの柱が残っていた。

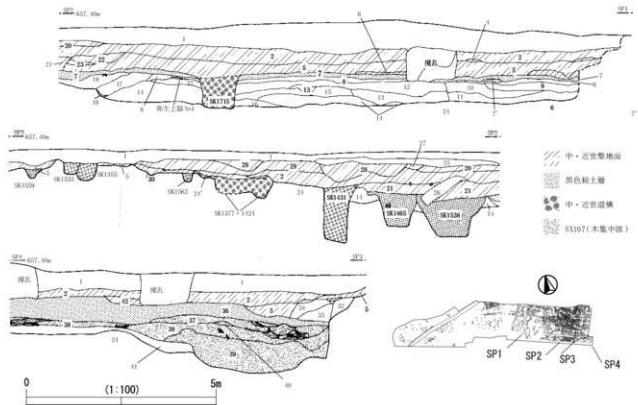
SK1193・SK1645

SK1193は上端幅約18cm、深さ約35cmを測るビットに、直径14cm、長さ55cmの木柱が残っていた。SK1645は上端幅約15cmの円形のビットに、直径12cmの柱が出土した。これらのビットは周辺にある穴と組み合わせによって掘立柱建物となるものと考えられるが、あまりに穴柱が多いので判断しえない。なお、SK1645は第2面で検出されたSK1143と重複しており、同じ遺構の上部と下部である可能性がある。

SK144・SK401・SK674・SK679・SK681・SK690・SK702・SK723(SK1641)・SK724・SK731・SK1430(SK1438)・SK1431・SK1443(SK1680)・SK1465・SK1527・SK1538・SK1715

SK144及びSK401は調査区の西寄りを走るSD01の西側に沿った位置で見つかり、他は調査区の東寄

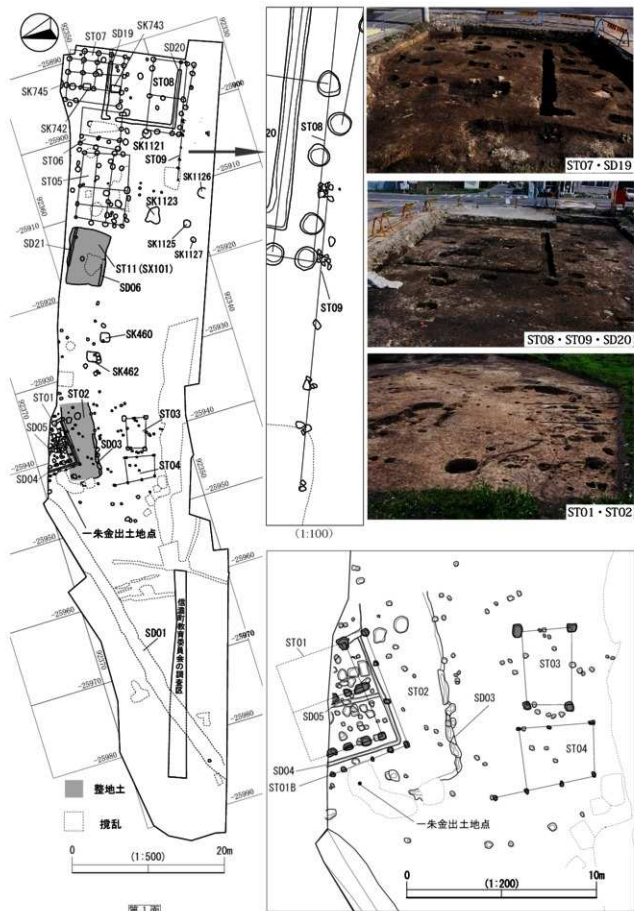
第3章 BP第4・第5地点の調査



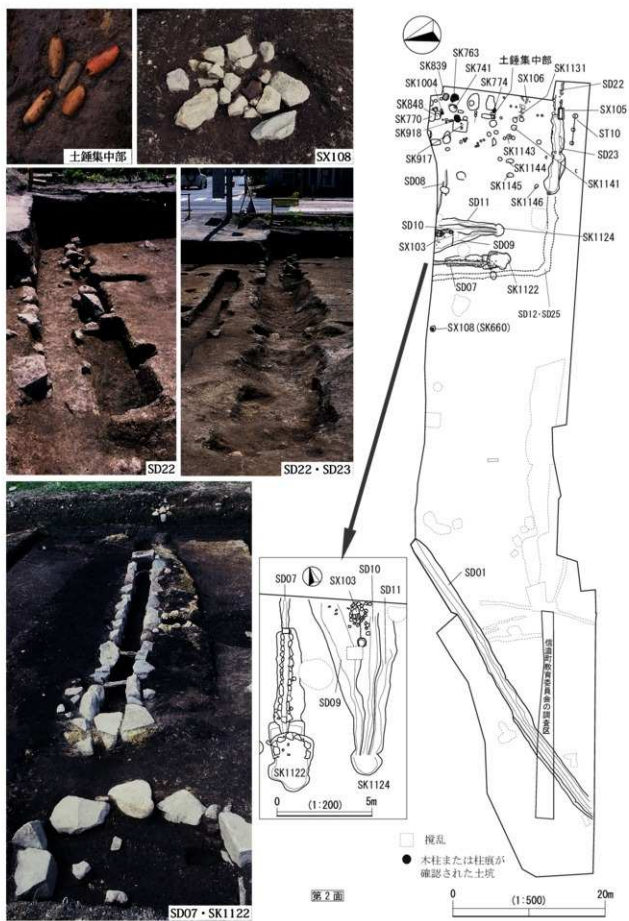
- 1 灰黄褐色土 (10YR4/2) 粘性少 粘りあり 1~3cm大礫含有(黄土)
- 2 黒褐色土 (10YR2/1) 粘性少 粘りあり
- 3 黒褐色土 (10YR2/1) 粘性わずかなり 粘り強 炭化物等に混入
- 5 黒色土 (10YR2/1) 粘性あり 粘り弱く、ローム粒・ロームブロック・炭化物を多量に混入
- 6 黒褐色土 (10YR3/1) 粘性わずかなり 5層より粘り弱く、ローム大ブロック多量に混入
- 7 黒褐色土 (10YR3/2) ~ 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性あり粘り弱い 炭化物粒を混入
- 7 7層に8層の混合層
- 8 灰色砂層 (10YR4/4) 粘性・粘りない
- 9 灰色砂層 (10YR4/4) 粘性は弱く粘りあり 3~10cm大の礫混入 (50層 礫土)
- 10 灰オリーブ色砂層 (5YR4/2) 300~300mm大の礫が混在 (5~5cm大)
- 11 灰黄褐色砂層 (10YR4/2) 径1~20cm大の礫が混在 古墳土部混入 (50層 礫土)
- 12 灰黄褐色砂層 (10YR5/1) 8層に類似 1~5cm大の礫混入
- 13 褐色砂層 (10YR4/4) 粘性・粘りなく、1cm大の礫が混在
- 14 褐色砂層 (10YR4/4) 8層に類似 1~10cm大の礫混入、20cm大の礫多量
- 15 灰黄褐色砂層 (10YR5/1) 灰色砂・1~5cm大の礫が混在 12層に類似
- 16 黒褐色砂層 (10YR3/2) 20cm大の礫と自然木炭、粘性なく粘り強
- 17 褐色砂層 (10YR4/4) 8層(砂層)より粘り強 1~10cm大の礫多量に混入
- 18 7層に1~10cm大の礫が充満する
- 19 褐色土 (10YR1/7) 粘性なく粘り強
- 20 黒褐色土 (10YR2/1) 粘性なく粘り強、ロームブロックやローム粒を混入
- 21 2層に類似 ローム粒・炭化物を多量に混入
- 22 2層に類似 ローム粒・ロームブロック・炭化物が多量に混入
- 23 22層に類似 砂層が混在
- 24 オリーブ色 (5Y4/4) ~ オリーブ灰色砂層 (10Y5/2) 1~10cm大の礫多く混入(黒層)
- 24' 黒層のブロック
- 25 黒褐色土 (10YR3/4) 塊状の礫
- 26 2層黒褐色土 (10YR2/1) に礫や砂を多く混在
- 27 明黄褐色土 (10YR6/6) ロームブロック
- 28 灰黄褐色土 (10YR4/2) 粘土や炭化物を多量に混入 ロームブロックも混在する
- 29 灰黄褐色土 (10YR4/2) 粘土・炭化物粒子や小ブロックを混入 ロームブロックも混在
- 30 5層黒褐色土 (10YR2/1) に1~10cm大の礫多量に混入、粘性なく 粘り強
- 31 灰色土 (7.5YR/2) 粘性なく粘りあり
- 32 灰色・黄褐色砂層 (10YR4/2) 粘性なく粘りあり
- 33 5層黒褐色土 (10YR2/1) に2層に似、黄褐色砂層 (10YR4/2) の混合土
- 34 灰黄褐色土 (10YR4/2) 粘性なく粘りあり 黒層礫土がブロック状に入る
- 35 黒褐色土 (10YR3/1) 粘性少く粘りあり 黒層礫土がブロック状に入る
- 36 褐色土 (10YR1/7) 粘性あり 粘り強い(基本土層より9層に対応)
- 37 褐色土 (10YR1/7) 粘性あり 粘り強い、木材・木片・ビートを混入 (SX107 礫土)
- 38 灰白色砂層 (5Y5/1) 1~5cm大の礫混入、多量の木片を混入 (SX107 礫土)
- 39 灰白色砂層 (5Y5/1) 5~10cm大の礫多く混入 炭化材・木片を混入 赤褐色 (5YR4/6) に変色する部分あり (SX107 礫土)
- 40 褐色土 (10YR1/7) ビートを混入 (SX107 礫土)
- 41 黄褐色砂層 (10YR4/2) 5cm前後の礫多く混入、粘性なく 粘りあり
- 42 5層黒褐色土に多量の粘り強、ロームブロックを混入



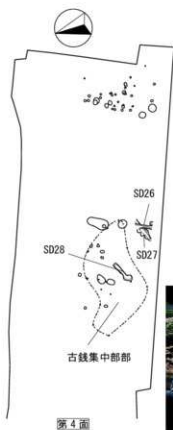
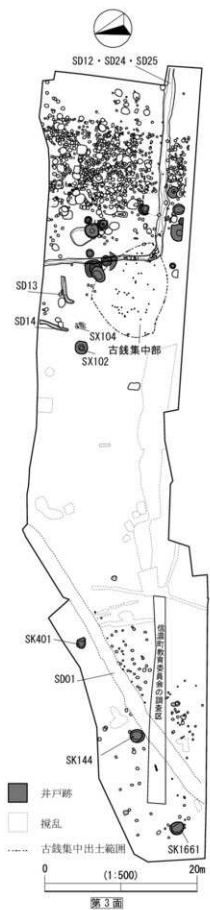
第150図 BP第5地点南壁土層図



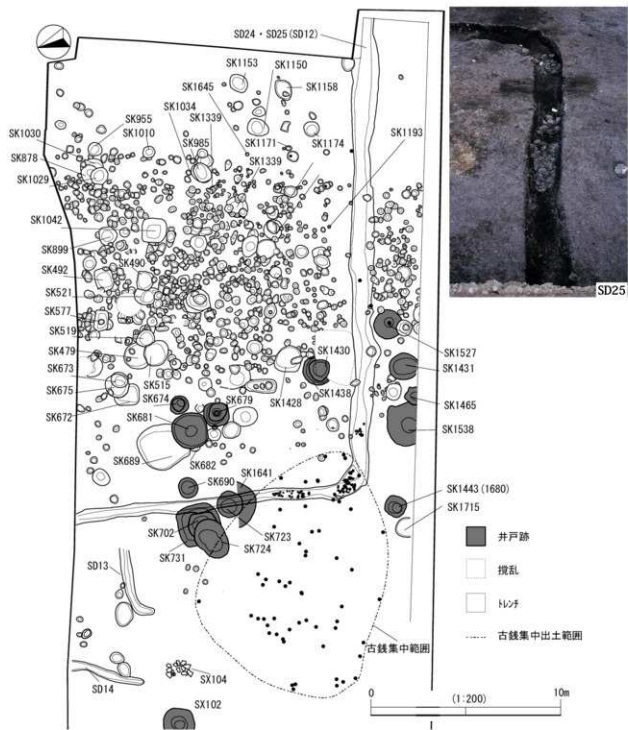
第151図 BP 第5c・5d地点第1面遺構配置図



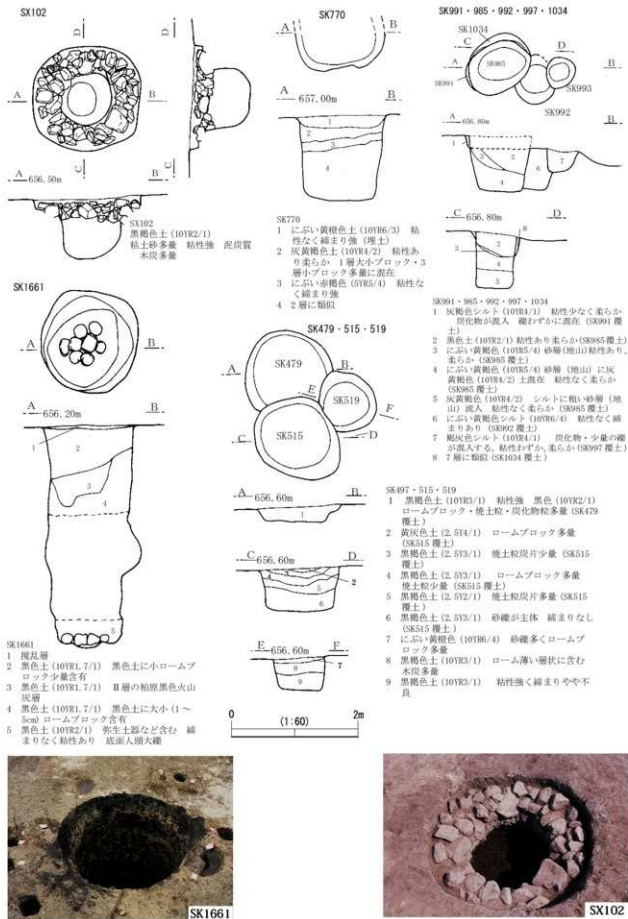
第152図 BP第5c・d地点第2面遺構配置図



第153図 BP第5c・d地点第3面・4面遺構配置図



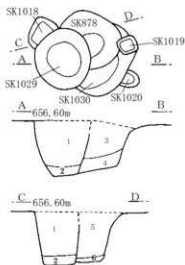
第154図 BP第5d地点第3面遺構配置図



第155図 BP第5c・d地点の土坑1

第3章 BP第4・第5地点の調査

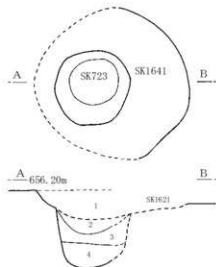
SK878・1030・1029



SK878・1030・1029

- 1 黒色土 (10YR2/1) 粘性わずかで、柔らかく炭化物粒含有 種わずかに混入 (SK1029 覆土)
- 2 ぶい、黄褐色土 (10YR6/4) 粘性はなく締まり強、ロームブロック多量含有、炭化物粒含有 種わずかに混入 (SK1029 覆土)
- 3 黒色土 (10 Y R 2/1) バウダー状のシルト層 柔らかく粘性あり。全体にぶい、黄褐色 (10YR6/3) 土・ぶい、褐色 (2.5Y6/4) 土の大ブロックが多く混在 (SK1030 覆土)
- 4 ぶい、黄褐色土 (10YR6/4) 粘性なく締まる (SK1030 覆土)
- 5 黒色土 (10YR2/1) 炭化物・種少量の織が混入する粘性がわずかにあり柔らかい (SK878 覆土)
- 6 ぶい、黄褐色土 (10YR6/4) 粘性はなく締まり強 (SK878 覆土)

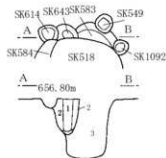
SK723 (SK1641)



SK723 (SK1641)

- 1 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性わずかでロームブロック点在。炭化物小ブロック少量含有 (SK1621 覆土)
- 2 黒褐色土 (10YR2/1) 粘性あり柔らかく、ロームブロック・織含有 (SK723 覆土)
- 3 黒褐色土 (10YR2/1) 2に類似、ロームブロック・織含有せず (SK723 覆土)
- 4 黒褐色土 (10YR2/1) 3に人頭大織が含有、木材 (柱)・木片含有 (SK723 覆土)

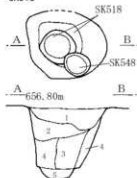
SK583・643



SK583・643

- 1 黒褐色土 (2.5Y3/1) 粘性強 織土粒・砂礫・砂ブロック 少量含む (SK643 覆土)
- 2 黒褐色土 (2.5Y3/1) 砂礫多量に含む (SK643 覆土)
- 3 黒褐色土 (2.5Y3/2) 織ブロック主体 (SK583 覆土)

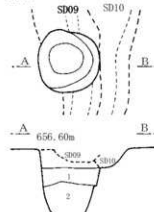
SK518



SK518

- 1 黒褐色土 (10YR3/1) 炭片多量 粘性強、ロームブロック多量
- 2 黒色土 (2.5Y2/1) 黒褐色土ブロック・砂礫多量
- 3 黒色土 (2.5Y2/1) 粘性強、砂礫多量
- 4 黒褐色土 (2.5Y3/1) 砂礫ブロック多量
- 5 黒褐色土 (2.5Y3/1) 砂礫が主体、砂多量

SK674

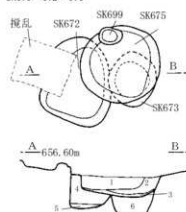


SK674

- 1 黒褐色土 (10YR3/1) 粘性あり締まり強く小礫混在
- 2 黒褐色土 (10YR3/1) 粘性あり締まり強く小礫混在やや軟質



SK675・672・673



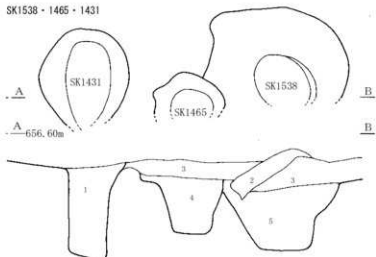
SK675・672・673

- 1 砂礫のみ (SK675 覆土)
- 2 黒褐色土 (10YR3/2) 砂礫多量ローム・炭化物粒多量 (SK675 覆土)
- 3 ローム混り床 (SK675 覆土)
- 4 黒褐色土 (10YR3/1) 粘性あり締まり強く小礫混在 (SK672 覆土)
- 5 灰黄褐色土 (10YR4/2) 粘土 (SK672 覆土)
- 6 明黄褐色土 (10YR6/6) 粘性ある柔らかい、ローム質 (SK673 覆土)



第156図 BP第5c・d地点の土坑2

SK1538・1465・1431

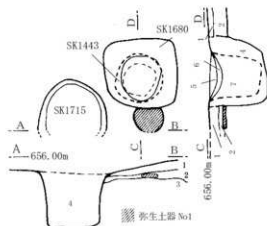


SK1431

SK1538・1465・1431

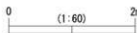
- 1 黒色土 (10YR1.7/1) 粘性あり 柔らかくロームブロック含有する (SK1431 覆土)
- 2 黒褐色土に礫や砂が多く含有
- 3 黒褐色土 (10YR3/1) 寄土 粘性・締まりあり
- 4 焼灰色土 (10YR4/1) 粘性わずかで柔らかく 炭化物含有 縦わずかに混入 (SK1465 覆土)
- 5 (SK1538 覆土)
 - ① にがい・黄褐色土 (10YR5/2) 小礫含む 粘性なく締まり強
 - ② 黒褐色土 (10YR3/1) 粘性なく締まり強 ロームブロック多く含有
 - ③ 黒色土 (10YR1.7/1) 粘性あり 柔らかく 人頭大の礫含有 石目含む

SK1715・1443・1680

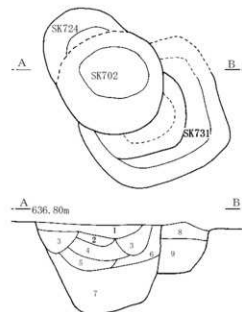


SK1715・1443・1680

- 1 黒褐色 (10YR2/2) 粘質土 柔らかく 炭化物点在 (第5面)
- 2 褐色川砂礫 (10YR4/4) 粘性なくゴロゴロ (第5面)
- 3 灰黄色砂礫層 (10YR4/2) 川砂に1~10cm大の礫が入る(第6面)
- 4 黒色土 (10YR1.7/1) 粘性あり 柔らかく拳大以下の礫多数含有 (SK1715・1680 覆土)
- 5 黒褐色土 (10YR3/1) 粘性少なくローム小ブロックが点々に入る (SK1443 覆土)
- 6 明黄褐色土 (10YR6/8) ロームブロックと砂礫が入るゴロゴロ (SK1443 覆土)
- 7 黒褐色土 (10YR6/8) 粘性少しありゴロゴロし1~5cm大礫が点々に含有 (SK1443 覆土)



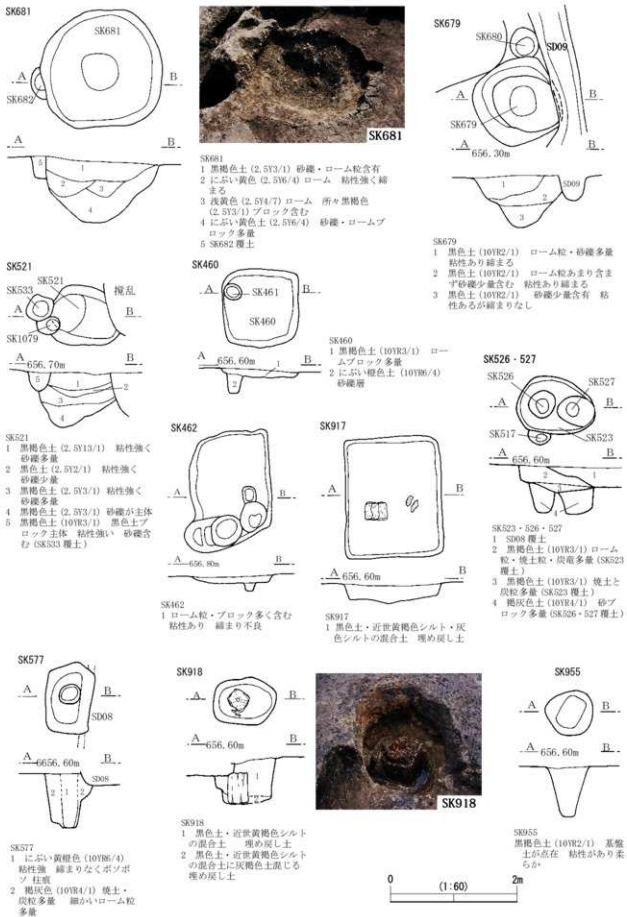
SK702・731・724



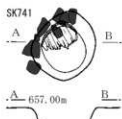
SK702・731・724

- 1 黒色 (2.5Y2/1) 粘性強く締まっている。ローム粒・砂礫・木片少量含有 (SK702 覆土)
 - 2 黒色土 (10YR2/1) 粘性強く締まっている。泥炭質 (SK702 覆土)
 - 3 黒色 (2.5Y2/1) 粘性強く締まる。小ローム粒・砂礫も多量に含有 (SK702 覆土)
 - 4 褐色 (2.5Y2/1) 粘性強く締まる。小ローム粒・砂礫少量含む 全体的に粘性強 (SK702 覆土)
 - 5 黒褐色 (2.5Y3/1) 粘土・ローム粒少量含有 (SK702 覆土)
 - 6 黒褐色 (2.5Y3/1) 粘土・ローム粒多量含有 (SK702 覆土)
 - 7 黒色 (2.5Y2/1) 泥炭質 砂多量に含む 締まりなし 植物片多量含有 (SK702 覆土)
 - 8 灰黄色土 (2.5Y7/2) 埋め土ロームブロック (SK731 覆土)
 - 9 灰黄色土 (2.5Y6/2) 埋め土ロームブロック (SK731 覆土)
- SK724 覆土
黒褐色土 (10YR2/2) ロームブロック・3cm大の礫点 粘性があり柔らかい

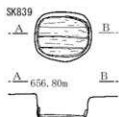
第157図 BP第5c・d地点の土坑3



第158図 BP第5c・d地点の土坑4



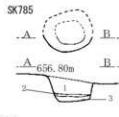
SK741
灰オリーブシルト (5Y4/2)・
明黄褐色シルト・(2.5Y6/6)・
灰黄褐色シルト (10YR4/2) の
混合土 粘性なくポロポロ



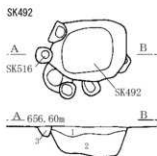
SK839
黒褐色 (10YR3/1) 粘性なく
柔らかい 炭化物含有



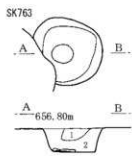
SK839



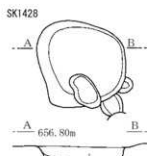
SK785
1 褐色土 (10YR4/1) 粘性
わずかにありポロポロ 明黄
褐色ロームブロック多く混入
2 黒色土 (10YR1.7/1) 粘性
なくポロポロ 1cm 大の炭化物
含有
3 黒褐色土 (10YR2/1) 粘性
なく柔らかい 炭化物粒含有



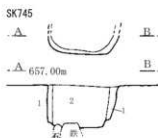
SK492
1 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性強
砂礫多量 (SK492 覆土)
2 黒褐色土 (10YR2/2) 砂礫多
量含有粘性あり (SK492 覆土)
3 黒褐色土 (2.5Y3/1) 粘性強
砂礫多量 (SK516 覆土)



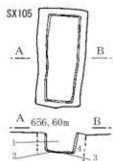
SK763
1 黒色土 (10YR1.7/1) 粘
性があり柔らかい
2 黒褐色土 (10YR2/1) 粘
性があり柔らかい ローム
ブロック・黒色土ブロッ
クが多く混在 底面に柱
の礎石あり



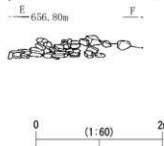
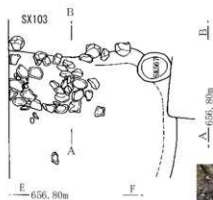
SK1428
1 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性なく
柔らかい ローム粒や炭化物粒含
有
2 黒褐色土 (10YR3/1) 粘性あり
柔らかい ローム粒や青灰色砂礫
(基盤層) わずかに混在



SK745
1 明黄褐色シルト (2.5Y6/6) 粘
性あり柔らかい
2 黒褐色シルト (10YR3/1) 粘性
なくポロポロ



SX105
1 黒褐色 (10YR3/1) シルト質
にふい黄褐色 (10YR7/4)
ロームブロックが多く混入
2 炭化物層 黒色 (10YR1.7/1)
粘性なく、柔らかい (厚さ
2cm)
3 黄褐色 (10YR5/6) シルト質
土 粘性なく柔らかい
4 粘土層 灰白色ブロック
(2.5Y6/2) と黄灰ブロック
(2.5Y6/1) 混在 粘性あり
柔らかい 鉄分含有



0 (1:60) 2m



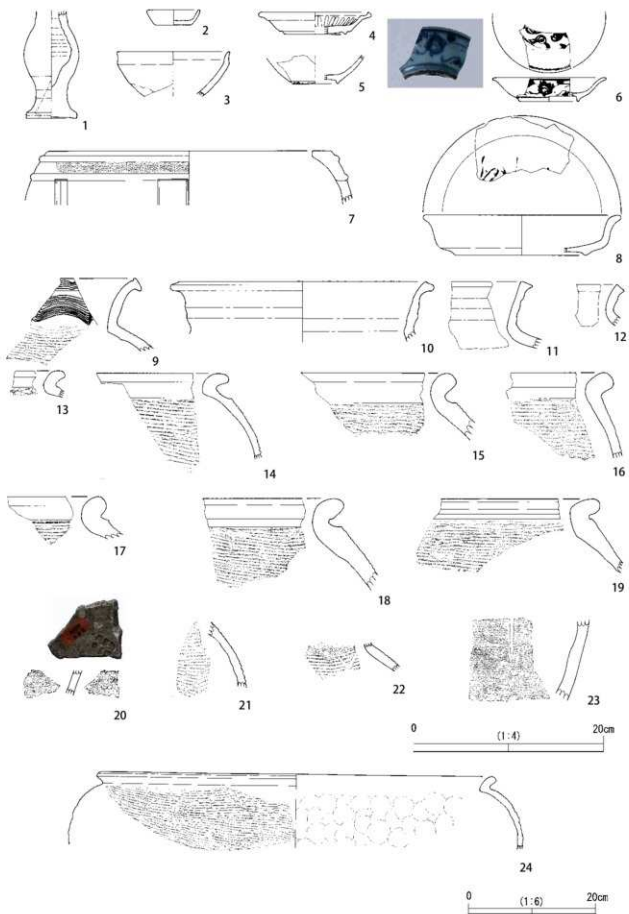
SX103
1 埋土 灰黄褐色 (10YR4/2) 砂礫・焼土
粒炭化粒少量含む
2 埋土 暗褐色 (10YR3/4) 粘性強 ローム
粒少量 砂礫含まず
3 埋土 黄褐色 (10YR7/8) ロームブロッ
クからなる
4 灰黄褐色 (10YR5/2) 砂多量ローム
粒多量 サクサクしている
5 褐色土 (10YR4/1) 粘性土 ローム粒を
多く含む硬く締まる



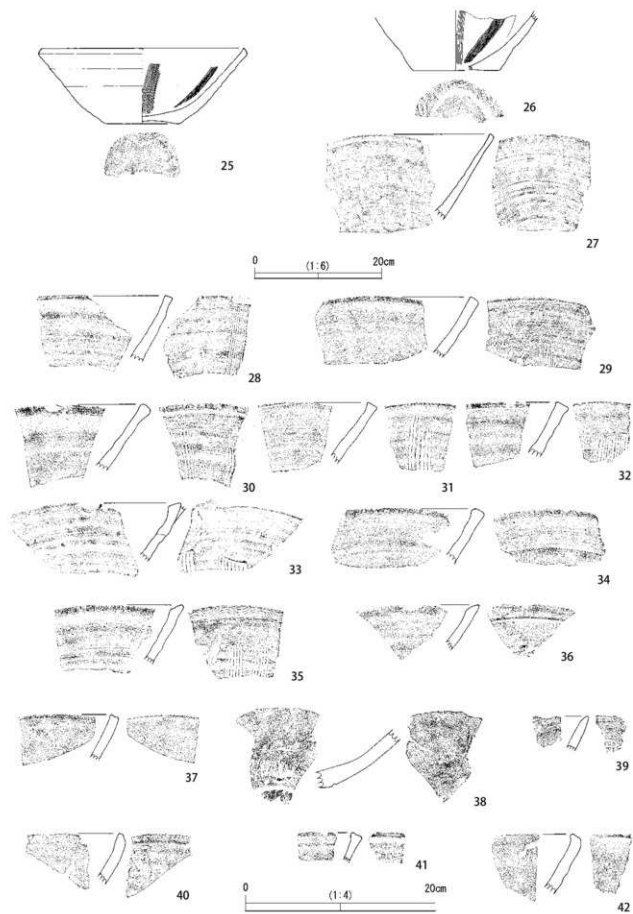
SX103

第159図 BP第5c・d地点の土坑5

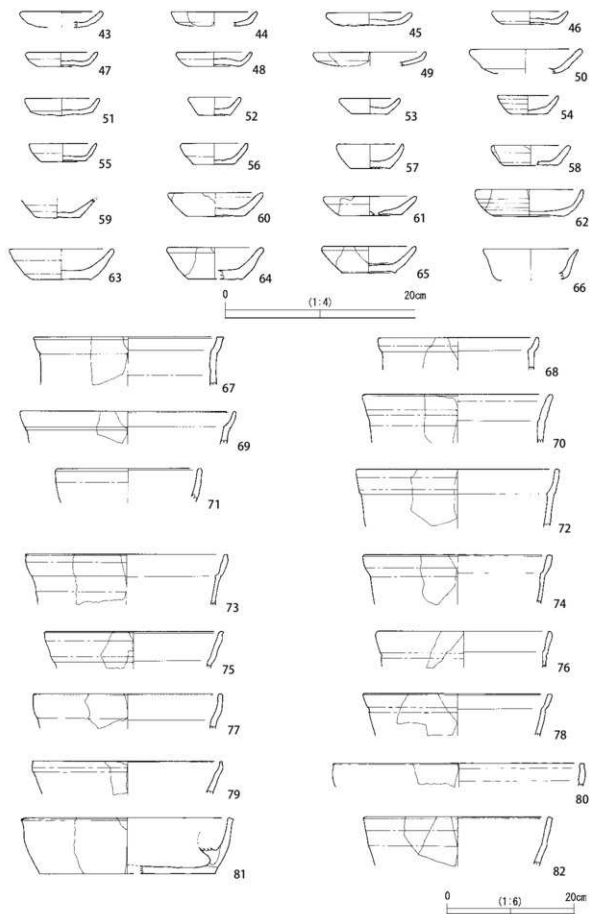
第3章 BP第4・第5地点の調査



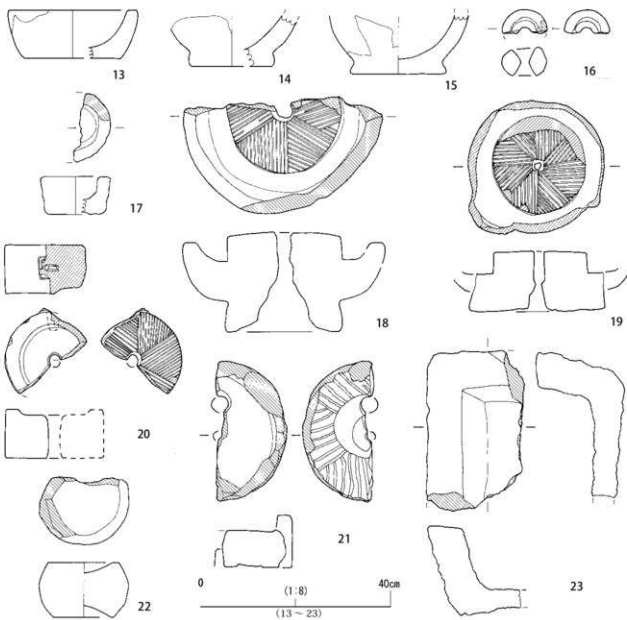
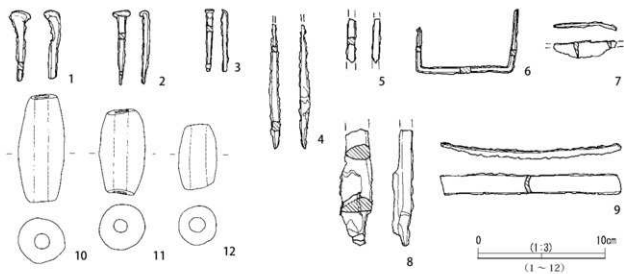
第160図 BP第5地点中世の焼き物1



第161図 BP第5地点中世の焼き物2



第162図 BP第5地点中世の焼き物3



第163図 BP第5地点中世・近世の鉄製品・土製品・石製品

第4章 自然科学分析

第1節 自然科学分析の概要

第18表の分析の委託業務をおこなった。分析結果の概要は、第1章～第3章の当該箇所で触れている。分析結果報告の詳細は、添付CDにPDF形式のファイルを取録した。調査報告には調査時の地区名が用いられており、本報告書で用いた地点名の対応関係は第1章第3節に記載した。

分析結果報告のタイトル	分析内容	分析資料出土地点	分析委託機関
仲町遺跡における動物分析	旧石器時代砂礫層中のAT層の確認	BP第4地点	(株)パレオ・ラボ
仲町遺跡のC4区SF52出土炭化材樹種同定	縄文時代草創期～早期の炭化物集中の樹種同定	BP第5a地点	(株)パレオ・ラボ
放射性炭素年代測定1	炭素14年代測定(SX107出土の古墳時代～古代の燻形木製品)	BP第5d地点	(株)パレオ・ラボ
仲町遺跡C7区出土木材の樹種同定	旧石器時代仲町砂礫層出土の材の樹種同定	BP第5a地点	(株)パレオ・ラボ
放射性炭素年代測定2	炭素14年代測定(旧石器時代遺物包含層年代測定/ 縄文時代早期土坑内炭化物年代測定/ 縄文時代草創期上部付着物年代測定)	JS・BP第2地点/ BP第2地点/ BP第5a地点	(株)パレオ・ラボ
仲町遺跡から出土した炭化材の樹種	旧石器時代炭化物の樹種同定	JS・BP第3地点・ BP第5a地点	(株)パリオ・サーヴェイ
仲町遺跡出土の黒曜石製石器の産地推定	旧石器時代・縄文時代の黒曜石産地推定	全調査地点	沼津高等専門学校 望月明彦教授
長野県仲町遺跡出土の縄文時代草創期の上部関連資料のAMS 14C年代測定(放射性炭素年代測定3)	縄文時代草創期上部付着物と包含層出土の炭化物の炭素14年代測定	BP第5a地点	古環境研究所 名古屋大学年代測定総合 研究センター
長野県仲町遺跡出土縄文時代草創期上部付着物の14C年代測定(放射性炭素年代測定4)	縄文時代草創期上部付着物炭素14年代測定	BP第5a地点	国立歴史民俗博物館
仲町遺跡植物化石の同定結果	下部野尻湖層出土の種子の同定	BP第5a地点	同志社青里中・高校 伊藤徳治教諭

第18表 仲町遺跡科学分析一覧

第2節 自然科学分析の結果

1 樹種同定

調査では、多数の炭化物が出土した。基本土層Ⅲ層～V b層の縄文時代早期～旧石器にかけて、約3,000点の炭化物を採取した。直径5mm以上のものをサンプル対象としており、中には直径1cmを超える大形の炭化物も出土した。これらのサンプルの内、JS地点とBP第3地点の環状ブロック群に関わる炭化物集中を中心に樹種同定をおこなった(第19表)。これらの環状ブロック群は、いずれもV b層中に生活面が想定されるブロック群であるが、JS地点ではコナラ節が卓越しているのに対し、BP第3地点ではカエデ属とサクラ属が主体となるなど、樹種組成に差違が認められる。この差違が周辺の植生の変化を示すのか否か今後検討が必要であるが、JS地点とBP第3地点とは450mの近距離であり、樹種組成の差は植生変化の時間的な差を示している蓋然性は高い。さらに、隣接する貫ノ木遺跡でV b層中の炭化物樹種組成が提示されており、JS地点と類似した組成を示している。また、約4km離れた日向層B遺跡の環状ブロック群に伴う炭化物樹種組成はトウヒ属・カラマツ属が卓越しており、仲町遺跡の両地点とも異なる樹種組成を示している。

今後、野尻湖底の花粉分析結果などを含めて、周辺の古環境復元と、炭化物に伴う石器群を検討することにより、野尻湖遺跡群では層位的に前後関係をとらえることができない石器群の新旧関係を実証できる可能性を秘めていると考えている。

この他、縄文時代草創期～早期の包含層から出土した炭化物集中 (SF52) については、樹種同定の結果トネリコ属が卓越していることが明らかとなった。

なお、BP 第5地点では古墳時代～古代にかけての木製遺物が多数出土したが、遺物の時期が限定できないことを鑑みて、樹種同定はおこなっていない。

調査地点	遺構名	層位	ハンハミ属	コナラ属	カシ	ニレ属	サクラ属	ナシ属	イヌエビ属	キハダ	カエデ属	ミズナ属	エゾノ木属	トネリコ属	広葉樹	種類不明
JS地点	SF201	III・IV上		32												1
JS地点	SF233	IV・V・Vb・Vc		22	1	2	2	4	4	4				1	1	3
JS地点	SF230	Vb		12				1	3					1	1	
JS地点	SF232	Vb		11			2	1	2							2
JS地点	SF221	Vb・Vc							16							3
JS地点	SF222	Vb・Vc		7				2	1							8
JS地点	SF223	Vb・Vc		5	3	2			2							1
JS地点	SF224	Vb・Vc		26			1	1								3
JS地点	SF225	Vb・Vc		33		1										1
JS地点	SF226	Vb・Vc	1	26	1	5	2	2	2	2	5	14	6	1		1
JS地点	SF228	Vb・Vc		32		1	2	3								2
JS地点	SF229	Vb・Vc		14		2	1	3		3						1
JS地点	SF234	Vb・Vc		16		4	1	2								3
JS地点	SF235	Vb・Vc		15												
JS地点	SF236	Vb・Vc		14		4	2	3								1
JS地点	SF239	Vc		9	1	5	2	2								3
BP第3地点	SQ367内	Vb		3		3	1			1						
BP第3地点	SQ371内	Vb					1									1
BP第3地点	SQ372内	Vb						1								
BP第3地点	SQ373内	Vb						9	1		1					3
BP第3地点	SQ375内	Vb						6								
BP第3地点	SF306	Vb					4				10					
BP第5a地点	SF61	10a		2		3	4	2	1	1	1			6		1

第19表 旧石器時代炭化物樹種同定結果

2 年代測定

年代測定は以下の4点の問題設定をし、分析を実施した。

①旧石器時代包含層出土の炭化物の年代測定をおこなうことにより、同一層順から出土する石器群の年代を推定する。(分析結果の概要は第2章第1節に報告した。)

②縄文時代草創期土器群(隆起線文土器と円孔文土器と無文土器)付着物の年代測定をおこない、土器群の土器の年代を推定する。合わせて、これらの土器が出土した包含層中の炭化物の年代測定も実施した。

③縄文時代の陥し穴と考えられる土坑より出土した炭化物の年代測定により、土坑の時期を推定する。(分析結果の概要は第2章第5節に報告した。)

④遺構の時期が未確定なBP第5地点SX107出土の木製品の年代を推定する。(分析結果の概要は第3章第5節に報告した。)

①②③については、第2章・第3章の当該遺構中の説明の中で分析結果の概要を記した。ここでは④について若干の所見を含めて、概要を報告する。

草創期土器群と周辺出土の炭化物の年代測定について

分析資料はBP第5a地点のSQ03とした土器集中の土器付着物と、SQ03と同一層順から出土した炭化物集中(SF52)の炭化物である(第20表)。資料の土器片9点は、隆起線文土器1点、円孔文・円形刺突文土器3点、無文土器5点である。

なお、Na 8228とNa 8232が接合して同一個体であることが判明し、胎土や器面調整の観察から、Na 3487は円孔文・円形刺突文土器の胴部である可能性が高い。土器付着物の分析は3つの機関でおこなわれ、 $11,420 \pm 44(\text{yrBP} \pm 1\sigma) \sim 12,280 \pm 110(\text{yrBP} \pm 1\sigma)$ の測定値が示され、約800年(歴年代較正值で853年)の年代幅がある。しかし、同一個体である資料に270年の差があることから、測定値の幅が土器群の年代幅をそのまま示していると理解するには、躊躇する。

しかしながら、測定値はほぼ $12,000(\text{yrBP} \pm 1\sigma)$ 前後にまとまっている。Na 46511(隆起線文土器)以外は、円孔文系土器群と理解しており、今回示されたcal BC11,472～cal BC12,325の年代幅の中に、

円孔文系土器群が位置づけられると理解したい。また、No.46511も上記の年代幅の中に納まっており、円孔文系土器群と隆起線文土器の何らかの関連を匂わせている。

さらに、今回得た測定値は、同町内の星光山荘B遺跡の隆起線文土器の付着物の年代測定値と近接している^(註1)。前述の同一個体での測定値の幅を考慮すると、星光山荘B遺跡の隆起線文土器と仲町遺跡の円孔文系土器との間に年代差を与えることは難しい。隆起線文土器の新しい段階と、円孔文土器が併行する可能性さえ示唆する分析結果である。今後の資料の増加をまってさらに検討する必要がある。

試料データ	$\delta^{13}C_{org}$ (‰)	14C年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	14C年代を暦年代に校正した年代		測定番号
			暦年代校正値	1 σ 暦年代範囲 (IAAA-40496のみによる値)	
BP第5a地点 1層 No.46511(隆起線文)	-23.6	12,010 \pm 130	cal BC 12,120	cal BC 12,200 - 11,870 (92.7%)	PLD-1839
BP第5a地点 1層 No.9052(円孔文)	-26.1	12,200 \pm 120	cal BC 12,185	cal BC 13,080 - 12,755 (28.7%) cal BC 12,415 - 12,105 (62.7%)	PLD-1840
BP第5a地点 1層 No.8232(円形刺突文)	-24.6	11,770 \pm 120	cal BC 11,865	cal BC 12,075 - 11,990 (8.2%) cal BC 11,900 - 11,820 (20.2%) cal BC 11,740 - 11,545 (61.5%)	PLD-1841
BP第5a地点 1層 No.8228(円形刺突文)	-24.6	12,040 \pm 110	cal BC 12,130	cal BC 12,365 - 11,895 (95.9%)	PLD-1842
BP第5a地点 1層 No.9696(無文)	-25.5	12,280 \pm 110	cal BC 12,325	cal BC 13,125 - 12,700 (40.7%) cal BC 12,445 - 12,140 (59.3%)	PLD-1843
BP第5a地点 1層 No.8291(無文)	24.8 \pm 1.0	12,039 \pm 39	cal BC 12,125	cal BC 12,183 - 12,067 (54.1%) cal BC 12,016 - 11,884 (45.9%)	NUTA2-7387
BP第5a地点 1層 No.9404(無文)	-29.7 \pm 1.0	11,420 \pm 44	cal BC 11,472	cal BC 11,508 - 11,352 (65.1%) cal BC 11,319 - 11,240 (34.9%)	NUTA2-7388
BP第5a地点 1層 No.8221(無文)	-24.1 \pm 1.0	11,537 \pm 36	cal BC 11,519	cal BC 11,847 - 11,719 (41.9%) cal BC 11,568 - 11,459 (58.1%)	NUTA2-7389
BP第5a地点 1層 No.3487(無文)	-30.6% \pm 0.9	11,990 \pm 60		cal BC 13,345 - 12,730 (41.2%) cal BC 12,355 - 12,215 (7.0%) cal BC 12,200 - 11,859 (42.0%) cal BC 11,810 - 11,705 (5.2%)	IAAA-40496
SF52 遺層 (炭化物)	24 \pm 1	7052 \pm 31	cal BC 9,875/ 9,849/9,816	cal BC 9884-9842 (5.1%) cal BC 9824-9787(46.1%)	NUTA2-7386
SF52付着 1層 No.33334(炭化物)	25 \pm 1	15955 \pm 47	cal BC 20989	cal BC 21281-20986 (100%)	NUTA2-7390
SF52付着 1層 No.33337(炭化物)	-21 \pm 1	6030 \pm 33	cal BC 8813/ 8769/8757	cal BC 8849-8747 (100%)	NUTA2-7391

※土器料はすべて土器内部付着物の測定値。
※暦年代校正値は、オキサジムの報告ではBPの年代値で報告されているものもあるが、BCに換算して示した。

第20表 B P第5a地点SQ03土器およびSF52炭化物年代測定結果

また、SQ03内に確認されたSF52の炭化物の年代値が土器の年代値とは大きく異なる結果となった(第20表)。土器資料は全て1層で、炭化物はⅢ層のものも含むが、Ⅲ層中から多数の無文土器(第3群土器)とわずかな円孔文土器と表裏縄文土器が出土しており、調査時の認識では、炭化物集中SF52は、無文土器を含む円孔文系土器群に伴うものと認識していたが、土器付着物の年代と炭化物の年代の差が大きすぎる。炭化物集中は円孔文系土器群とは異なる時期のものであると判断せざるを得ない。また、土器より極端に古い年代を示している炭化物は、下層にある旧石器時代の仲町砂礫層中部のものが混入したものと考えられる。同一層位で、土器周辺から出土した炭化物が、必ずしもその土器と同じ時代のものであるとは限らないことを示す1例となった。

3 黒曜石産地同定

仲町遺跡出土の旧石器時代から縄文時代の黒曜石2826点の産地推定分析をおこなった(第21表)。分析対象は、旧石器時代のブロック内出土資料全点、それ以外の石器については、ナイフ形石器、石鏃など明らかに時代を判別できる器種に限定した。分析した資料の大半は、長野県産の黒曜石であったが、旧石器時代細石刃と縄文時代草創期の石器の中に長野県外の産地の黒曜石が含まれていた(第22表)。これら県外産の黒曜石はBP第5c地点に多く見らる。BP第5c地点では、多縄文系土器など室谷洞窟の草創期土器群に類似した資料が出土している。新潟県室谷洞窟においても、青森県深浦、伊豆諸島の神津島、栃木県高原山などの黒曜石が見つかっており(藪科2001)、縄文時代草創期に黒曜石が広域に流通していたことを示す資料と考えている。しかしながら、本遺跡で出土した県外産とされた石器の多くは草創期から早期の土器群を出土した包含層から出土しており、石器の時期をさらに検討する必要がある。

註1 星光山荘B遺跡隆起線文土器の測定資料は3点有り、年代値は12,340 \pm 50、12,000 \pm 40、12,160 \pm 40(yrBP $\pm 1\sigma$)。

第5章 調査の成果と課題

仲町遺跡では、これまでに数次にわたる野尻湖発掘調査団と信濃町教育委員会による発掘調査がおこなわれてきた。そして今回、野尻バイパス建設に伴い、信濃町教育委員会と当地文センターの2機関による4年次にわたる発掘調査で、約25,000㎡の発掘調査がおこなわれ、旧石器時代から近世にいたる多量の資料を得ることとなった。特に、旧石器時代、縄文時代草創期、古墳時代から平安時代前半、中・近世の4つの時期に大きな調査成果が得られた。これらの調査成果を概観し、今後の課題についての所見を述べ、本書のまとめとしたい。

(1) 旧石器時代

旧石器時代では、145箇所のブロックが検出され、約36,500点の石器群が出土した。野尻湖編年1期～V期(谷・大竹2002)にわたる石器群である。さらに、1期を遡る中期旧石器の可能性もある資料も得た。

中期旧石器時代の資料について

BP第5c地点の約4万年前の地層から、膨大な数のナウマンゾウの足跡が検出され、足跡の覆土から石器の可能性のある資料が出土した。隣接する立が鼻遺跡では同時期の骨角器やキルサイトが報告されており、中期旧石器時代^(註1)の遺跡として知られている。また、野尻湖発掘調査団による調査では、中期旧石器時代の石器の接合資料などが報告されていた(野尻湖人類考古グループ1993)。このような周辺の調査成果があるため、今回出土した資料は、中期旧石器時代の石器の可能性があると注目された。しかし残念ながら、石器・偽石器の論争に決着をつけるための根拠を示すことはできず、第3節で検討したとおり「石器と断定するには時期尚早」、というのが本報告書の結論である。

今回出土した中部野尻古層出土資料については、多くの研究者から貴重な意見をいただいたが、石器とする立場と、偽石器とする立場に別れているのが現状である。今後さらに、多くの研究者に実物を検討していただき、新たな観察の視点が見い出されることを望む。

仲町遺跡と立が鼻遺跡(野尻湖底の発掘)で中期旧石器時代の石器と指摘されるものは、いずれも水成層から出土したものであり、明確な石器製作跡が確認されていない。野尻湖遺跡群では、石器製作跡が確認できる最古の石器群は、日向林B遺跡や貫ノ木遺跡などのVb層に検出されている。仲町遺跡の問題となる資料は基本土層VII層[赤スコ]相当の下面から出土したものであり、中期旧石器時代の石器製作跡があるとすれば、VII層より下層のローム層中に検出されることが想定される。しかし、VII層以下を掘下げたのは、仲町遺跡の全調査面積約24,000㎡に対し、わずか370㎡である。野尻湖遺跡群の他の遺跡においても事情は同じで、VII層以下の調査面積はごくわずかである。中期旧石器時代の遺跡数は後期旧石器時代に比べ少ないことが予想され、石器製作跡を見つけるためにはもっと広い面積の試掘調査が必要であろう。赤スコは非常に硬い層で、人力で掘下げることは困難である。しかし、裏を返せば層位的に確実に年代を抑えることができる土層条件を有した遺跡群であるということである。今後、VII層以下での遺跡の更なる探求が望まれる。

また、BP第5c地点の調査では、野尻湖発掘調査団によって中期旧石器時代の遺物包含層と認識されていた層が、中期旧石器時代の中部野尻古層を削って堆積した後期旧石器時代の堆積層(BP第5c地点8層)であることを確認した。野尻湖発掘調査団による調査区は、BP第5b地点内にあり、信濃町教育委員会が調査を担当した。中期旧石器時代と報告されていた地層と石器については、信濃町教育委員会の正式報

註1 便宜的に約3～4万年前以前を中期旧石器とする。層位的には、中部野尻湖層、中部野尻ローム層以下に対比される。

告を待つ、改めて論考する必要がある。なお、立が鼻遺跡の中期旧石器時代以前の石器についても、現在、野尻湖発掘調査団による再検討が開始されている。

前期旧石器製造事件により、日本列島における中期旧石器時代以前の考古資料がほとんどなくなってしまった現在、より慎重な学問的な検討が必要であろう（鶴田 2002）。野尻湖遺跡群の周辺には、中期旧石器時代から後期旧石器時代への移行期とされる資料（中野市がまん淵遺跡、沢田鍋土遺跡など）が指摘されており（大竹 2002、中島 2002）、野尻湖遺跡群を取り巻く地域が中期旧石器時代研究の核の一つであることは間違いない。今後の資料増加を期待したい。

後期旧石器時代の調査成果について

今回の調査では、JS 地点と BP 第 3 地点の 2 箇所、AT 降下以前の環状ブロック群が確認された。小菅氏が分類する「I a 群」「II b 群」（小菅 2000）にあたるものと思われるが、きれいな環状を呈さないものもあり、「環状」の言を用いるのがはばかれるものもある。さらに、BP 第 1 地点と第 2 地点においても AT 降下以前の環状ブロック群と思われる石器群が検出された（BL105～107、BL115～117 など）。調査範囲が狭くブロック群の全体像がつかめないが、同時期に複数のブロックが形成された状況が伺われる。

BP 第 3 地点では二つの環状ブロック群が接して存在しているような状況が観察された。両者のブロック群間での接合が希薄であり、ある程度時間差をもって形成されたものであると考えたが、その時間差がどれくらいのものであるのか、今後検討を要する。本報告では十分に検討することができなかったが、遺跡形成論的な分析をとおし、環状ブロック群が形成される時代背景を考察する上で、重要な資料であると考えられる。また、JS 地点と BP 第 3 地点で確認された環状ブロック群は、台形石器と斧形石器と共に、凹石、台石、楔形石器などを多数伴う石器群であり、野尻湖遺跡群内の日向林 B 遺跡の環状ブロック群とは異なる石器組成を示す。また、主要器種の台形石器の形態にも差異がみられる。今後石器群の詳細な検討が必要である。

AT 降下以降の石器群では、石刃を伴うブロックが BP 第 2～BP 第 4 地点で確認された。BP 第 2 地点の BL206・207・217・220～223・229・232・234・235・239・243・245、BP 第 3 地点の BL306・308、BP 第 4 地点 BL401・402 などである。これらは IV 層～V 層に生活面が想定される礫群を伴っており、ブロックと礫群で構成される遺構群を形成している。BP 第 2 地点と BP 第 3 地点では、各調査地点内でブロック間の接合があり、同一時期に複数のブロックが形成されたことが判明した。特に、BP 第 2 地点ではブロック群が大きく 2 箇所に分けられ、それぞれ石材組成と石器組成などが異なる。BL234・235・239 では掻器が多く出土しており、他の石刃を伴う石器群とは異なる石器組成を示す。また、BP 第 4 地点では、杉久保型ナイフ形石器と彫器を主体とする、比較的純粋なブロック（BL401・402）とそれに伴う礫群が確認された。包含層が厚く、他時期の混入が少ない良好な資料である。

BP 第 5 地点では細石器のまとまった資料が出土した。大半が砂礫層中の資料であり、当センターの調査範囲では石器製作跡は確認できなかったが、同時期と思われる礫群が検出された。上ノ原遺跡、向新田 A 遺跡などとともに、野尻湖遺跡群では希少な資料となる。

多数の石器を観察する中で、旧石器時代を通し種類の石材が用いられており、時期によって使用石材が変化している印象を受けたが、十分な分析をすることができなかった。近年の調査事例の増加により、周辺地域を含めた石材組成の時間的・空間的な変化を検討する材料が十分に揃ってきたと思われる。しかし、同じ石材名であっても風化の様子などから異なった産地が想定されるものが存在すること、同じ石材であっても地域により石材名称が異なる場合があることなど、研究の基礎となる石材分類が十分に検討されていない。このような状況を踏まえ、本報告書では、遺物のカラー写真を多用し、個体分類をおこな

た資料については個体番号ごとの記録写真を添付CDに収録した。今後の石材研究の一助となれば幸いである。

また、接合関係など本文中では十分な資料提示ができなかった部分も多々あるが、添付CDの遺物台帳に接合順、個体分類などのデータを記載したので、参照していただきたい。

(2) 縄文時代草創期の遺物群について

BP第5a地点とBP第5c地点で縄文時代草創期の遺物群が多数出土した。その他の調査地点でも草創期の遺物は散発的に出土しており、仲町丘陵全域に草創期の遺物が分布していることが予想される。かつて、野尻湖発掘調査団によって爪形文土器が出土する土坑が確認されたことから、仲町遺跡は爪形文土器が単独に出土する遺跡として理解されていた。しかし、今回の発掘調査により、爪形文土器期の土坑から40mほど北西側のBP第5a地点に円孔文土器を含む無文土器が多量に出土し、100mほど北側のBP第5c地点では隆起線文土器、爪形文土器、多縄文土器などの草創期の土器群が出土した。仲町遺跡は爪形文土器だけではなく、多種多様な草創期土器群を含む遺跡であることが明らかとなった。

特に、BP第5a地点では草創期の純粋な包含層が確認されており、円孔文、円形刺突文を含む無文土器が多量に出土した。無文土器の中には円孔文・円形刺突文土器と類似した胎土のものが多数見られ、これらを含めて円孔文系土器群と理解しておきたい。円孔文系土器群には数種類の胎土が確認されるが、新潟県壬遺跡の円孔文土器に極めて近いものが認められる。さらに、壬遺跡の円孔文系土器にみられる、「下の粘土帯を上の粘土帯で大きく巻き込むように接合する手法」(手法a)(國學院大學文学部考古学研究室1982)が、仲町遺跡の円孔文系土器群にも特徴的にみられる。また、器面調整など整形技法、平底の器形など壬遺跡第4群土器(円孔文系土器群)と仲町遺跡の円孔文系土器群との共通点が多い。

円孔文土器は、栃木県大谷寺洞窟で指摘され、壬遺跡でまとめて出土して注目を集めた。その後、鳥浜貝塚などの類例が知られているが、管見に触れる限り良好な資料は少ない。本遺跡から南東へ約30kmの上高井郡高山村湯倉洞窟(高山村教育委員会2001)でも円孔文土器が出土しており、壬遺跡に胎土と焼成などが類似する。長野県北部から新潟県にかけて、類似した資料が揃いつつある。

円孔文土器の編年的位置づけは、谷口康浩氏により「隆起線文系→円孔文系→押圧縄文系→室谷第1群」という編年案が示されている(谷口1988)。本遺跡の資料を用いて、型式学的検討をする用意はないが、円孔文系土器の付着炭化物の年代測定を実施したので、その結果をふまえて若干の所見を述べる。分析結果は第4章にふれたが、炭素14年代で $11,420 \pm 44$ (yrBP $\pm 1\sigma$) ~ $12,280 \pm 110$ (yrBP $\pm 1\sigma$)の年代値が測定された。これらの年代は星光山荘B遺跡の隆起線文土器付着炭化物の年代測定値と重なる部分があり、円孔文系土器群が、隆起線文土器の新しい段階に併行している可能性を示した。

BP第5a地点の草創期包含層には円孔文系土器群の他に隆起線文土器、爪形文土器が少数出土し、無文土器の中には、隆起線文土器の胴部破片と思われるものも含まれる。しかし、円孔文系土器群と隆起線文土器の無文部分の破片を明確に分離することができなかったため、多くの無文土器は円孔文系土器群と理解したが、隆起線文土器と円孔文系土器群の関係を議論するためには、無文土器の更なる分析が必要となろう。今後に残された課題である。なお、BP第5a地点の隆起線文土器の一部は、胎土、文様の特徴など信濃町内の星光山荘B遺跡の出土資料に類似している。

また、BP第5a地点の草創期包含層の土器は円孔文系土器群(第2群・3群土器)が主体を占めるが、相伴した石器群の主体が円孔文系土器に伴うと結論づけるには疑問が残る。新潟県壬遺跡の石器群と比較すると、本遺跡では有茎尖頭器が多数出土し、石鏃の形態なども共通しないものがある。本文中で触れたように、BP第5a地点は、石器製作の痕跡が希薄であることから、複数の時期もしくは集団が狩猟に訪れた場所である可能性がある。少量ではあるが、隆起線文土器と爪形文土器も出土しており、すべての石

器が土器の主体を占める円孔文系土器群に伴うものであるかどうか、さらに検討が必要である。

草創期包含層から出土した石器群の中には、有茎尖頭器が13点含まれている。円孔文系土器群を出土した壬遺跡や湯倉洞窟では有茎尖頭器（有舌尖頭器）が報告されているが、基部の返しが明確なものは認められず、本遺跡の有茎尖頭器とは明らかに異なった形態である。特に、湯倉洞窟の有茎尖頭器は報告書で見ると限り不整形なものが多く、有茎尖頭器とするには躊躇するものである。湯倉洞窟では隆起線土器はわずかであり、草創期の石器群の大半は円孔文系土器、爪形文土器、多縄文系土器などに伴うものである。明確な有茎尖頭器が認められないのは、円孔文系土器や爪形文土器に有茎尖頭器が伴わないことを示していると考えられる。また、隆起線土器を主体とする星光山荘B遺跡では基部の返しが明確な小型の有茎尖頭器が認められる。このような周辺遺跡の状況から、有茎尖頭器は隆起線土器には伴うが、円孔文系土器や爪形文土器には伴わないという仮説が導き出される。しかしながら、本遺跡では円孔文系土器群と同一層からは有茎尖頭器が多数出土しており、周辺の遺跡と状況が異なる。包含層からは、円孔文系土器とともにわずかではあるが隆起線土器が出土しており、本遺跡の有茎尖頭器には星光山荘B遺跡のものと同様の形態のものが含まれている。このような状況から、BP第5a地点の草創期包含層には隆起線土器に伴う有茎尖頭器が混在していると解釈したい。

石器の出土状況と前述の土器付着物の年代測定結果を重視するならば、星光山荘B遺跡などに見られる隆起線土器と円孔文系土器群が並存していたか、極めて短い時間幅の中に両者が収まる蓋然性は高いと考えられる。

なお、縄文時代草創期と想定される有茎尖頭器と石鏃に、長野県外の黒曜石産地と推定された資料が9点見つかった。山形県羽月山、富山県魚津草月上野、新潟県新津津津、新発田板山、東京都神津島恩馳島などの産地が推定されている。また、細石刃で青森県深浦八森山産の黒曜石が2点確認された。旧石器時代終末期から縄文時代草創期にかけて長野県外産の黒曜石が目立つようになる。この時期に黒曜石の流通経路が変化したらしいことがおぼろげながら見えてきた。今後、縄文時代草創期の黒曜石産地推定の資料が増加することを期待したい。

(3) 古墳時代から平安時代の調査成果

信濃町町内では、古墳時代前期から平安時代前半期の遺構、遺物は稀であり、特に、古墳時代では、今回調査した仲町遺跡と川久保遺跡の他は東裏遺跡で数点の土器が出土している程度である。

古墳時代の遺物はBP第5d地点のみで出土しており、丘陵全体に遺跡が広がる様子は見られない。仲町遺跡BP第5d地点と川久保遺跡の調査地点とは、池尻川低地を挟んで約400mの距離にある。調査区内に竪穴住居などの居住施設はなく、いずれも湿地や沼の縁に土器が多数出土した状況が共通する。近年、関川を越えた新潟県側でも、中頸城郡妙高村大洞原C遺跡、小野沢西遺跡などの調査で古墳時代の様子が明らかになってきた（新潟県埋蔵文化財事業団1996・1997）。長野と新潟の県境の山間地は、弥生時代後期の遺跡がほとんど確認されない地域であり、古墳時代前期に突然遺跡が出現しているような状況を示している。いずれの遺跡でも、前期の土器の中に東海系や畿内系の土器が含まれる、これら一連の遺跡は同じ歴史的文脈の中で成立してきたものであり、今後その文脈の解明が残された課題といえよう。

仲町遺跡周辺は、延喜式に記載された東山道支道の「沼辺駅」の推定地となっており、駅関連の資料が出土することが期待されたが、東山道および駅関連の資料を見出すことはできなかった。

しかし、9世紀代の竪穴住居跡がまとまって検出される状況は、越後の国府の移動にともない、越後に抜ける新たなルートである東山道支道が築かれ、仲町遺跡周辺に沼辺駅が設置されたことを示す状況証拠になるのではないかと考えている。

信濃町町内では、10世紀以降の集落がいくつか確認されているが、9世紀代の集落跡は今のところ仲町

遺跡に確認されるのみである。これらの事実が、東山道沼辺駅との関連を予想させる。今後、新たな資料が出てくることを期待したい。

(4) 中世の遺構と近世北国街道野尻宿について

中世から近世の遺構・遺物はBP第5d地点に集中した。BP第5d地点は調査前には人家が建っていた場所であり、その下層から掘立柱建物跡、土坑などが密集した遺構群が検出された。中世に集落が存在し、近世の北国街道野尻宿に繋がっていったことが明らかとなった。また、享保八年(1723年)、嘉永元年(1848年)の大火の後と思われる炭化物の集積層なども確認されたが、遺物の出土層位が不明確であり、大火との関連を検討することができなかった。集落の変遷等、文献資料も合わせた検討が必要な遺跡であったが、その責務を十分果たすことができず、残念である。また、遺物群の検討など十分でないことも心残りである。十分な資料提示ができたか心もとないが、今後の、更なる研究に期待したい。

JS地点とBP第1・第2地点では国道18号線に沿って中世以降の道跡(道路状遺構)が検出された。隣接する照月台遺跡でも道跡が確認されており、これらは北国街道に関連した遺構と考えられる。道路状遺構は、歩いた結果として溝状にわずかに窪むもの、明らかに掘られた溝の底面に硬化面が認められるものなど、いくつかの構造上の違いが認められる。これらの違いは、時期差を示していると考えられるが、出土遺物が少なくそれぞれの遺構の時期が判明しないため、構造の変遷を明らかにすることができなかった。さらに、BP第2地点の道路状遺構(SC302)は中世まで遡る可能性があり、BP第5d地点の中世の掘立柱建物群との関連も今後検討していかなければならない課題である。

長野県埋蔵文化財センターでは、平成5年度より上信越自動車道と国道18号バイパスの建設に伴う発掘調査を実施し、17の遺跡を調査してきた。その調査成果の中心は、やはり旧石器時代であり、膨大な資料が蓄積されてきた。仲町遺跡の調査では、旧石器時代の資料に加え、縄文時代～近世に及ぶ各時代の遺構、遺物が発見され、旧石器時代以外にも野尻湖が人間の生活に重要な場所であったことがうかがわれるようになってきた。これは、仲町遺跡の発掘調査の最大の成果であった。

十分な資料提示ができない部分もあり、記録保存の責務を十分に果たしているかどうか心配であるが、本調査報告書の刊行をもって、野尻湖周辺の大規模な発掘調査事業は一段落することとなる。これらの膨大な資料が、野尻湖を中心とした山間地の歴史の解明の一助となることを願うものである。

参考文献

- 大竹憲昭 2002 『長野県竹佐中原遺跡』『考古学ジャーナル』495
 小菅哲夫 2000 『環状ブロック群の構造』『考古学ジャーナル』465
 國學院大學文学部考古学研究室 1982 『壬遺跡 1982』國學院大學文学部考古学実習報告 第3集
 高山村教育委員会 2001 『湯合洞窟』
 谷和隆・大竹憲昭 2003 『野尻湖遺跡群における石器文化の変遷』『第15回長野県旧石器文化研究交流会 シンポジウム「野尻湖遺跡群の旧石器時代編年—発表資料—』
 谷口康浩 1988 『円孔文土器群とその編年的位置をめぐる問題』『大和のあけぼのⅡ』大和市教育委員会
 鶴田典昭 2002 『どうして、遺跡に遺物が残されるのか—考古学における史料批判—』『SCIENCE of HUMANITY』Vol.40 勉誠出版
 中島庄一 2002 『後期旧石器時代直前の石器群』『長野県旧石器文化研究交流会—発表資料—』
 長野県埋蔵文化財センター 2000 『日向林B遺跡・日向林A遺跡他』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書48
 長野県埋蔵文化財センター 2000 『星光山荘A・星光山荘B他』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書49
 野尻湖人類考古グループ 1993 『仲町遺跡 第6回陸上発掘の考古学的成果』『野尻湖の発掘 6』野尻湖博物館研究報告第1号
 新潟県埋蔵文化財事業団 1997 『大瀬原C遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書85
 新潟県埋蔵文化財事業団 1996 『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報 平成7年度』



仲町遺跡 BP 第4・第5地点の調査と野尻湖



BP 第5a地点の水成堆積層 1



BP 第5a地点の水成堆積層 2



BP 第 5a 地点の水成堆積層 3



BP 第 5a 地点の水成堆積層 4



BP 第 5a 地点の水成堆積層 5



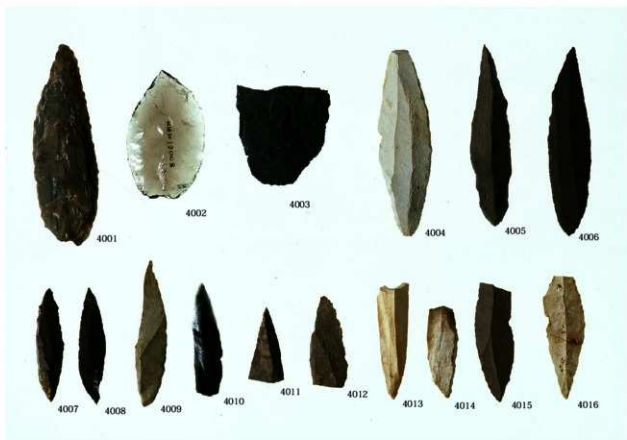
BP 第 5c 地点の水成堆積層



BP 第5c地点の水成堆積層とゾウ足跡内出土遺物（右上）とゾウ足跡（右下）



BP 第5d地点の土層 調査区東側（左）と西側（右）



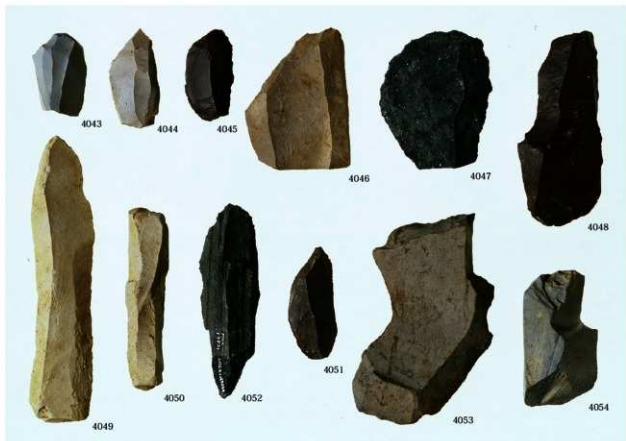
BP 第4地点 槍先形尖頭器・ナイフ形石器 (約 3/4)



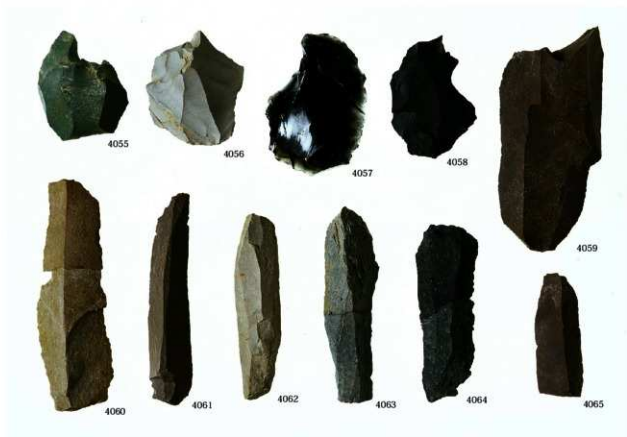
BP 第4地点 ナイフ形石器 (約 3/4)



BP 第4地点 石器 (約 3/4)



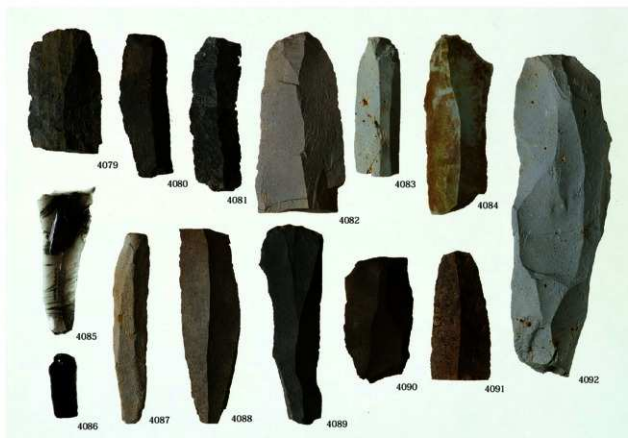
BP 第4地点 石器 (約 3/4)



BP 第4地点 影器 (約 3/4)



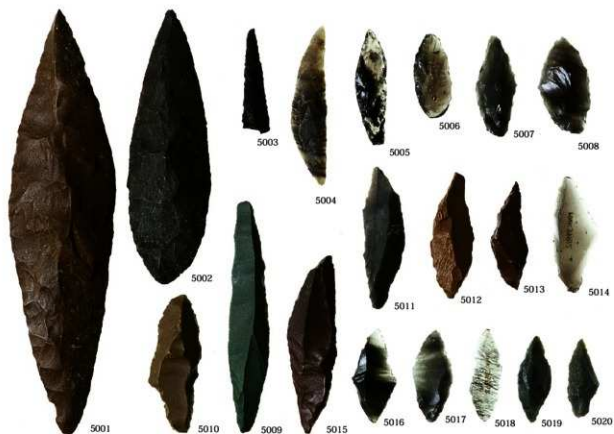
BP 第4地点 削片・削器 (約 3/4)



BP 第4地点 石刃 (約 3/4)



BP 第4地点 石刃・石核・斧形石器 (約 3/4)



BP 第5地点 槍先形尖頭器・ナイフ形石器 (約 3/4)



BP 第5地点 ナイフ形石器 (約 3/4)



BP 第5地点 台形石器 (約 3/4)



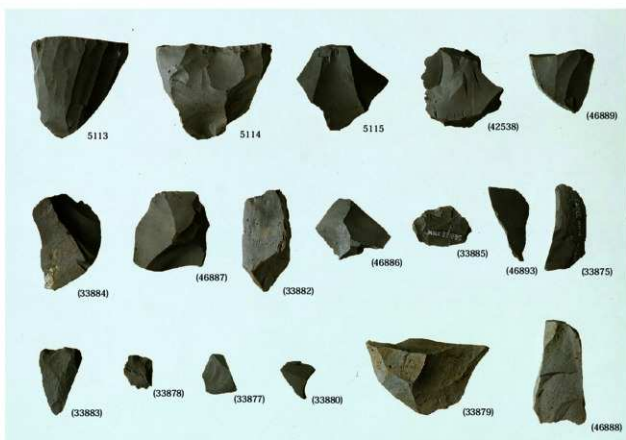
BP 第5地点 彫器・搔器・削器 (約 3/4)



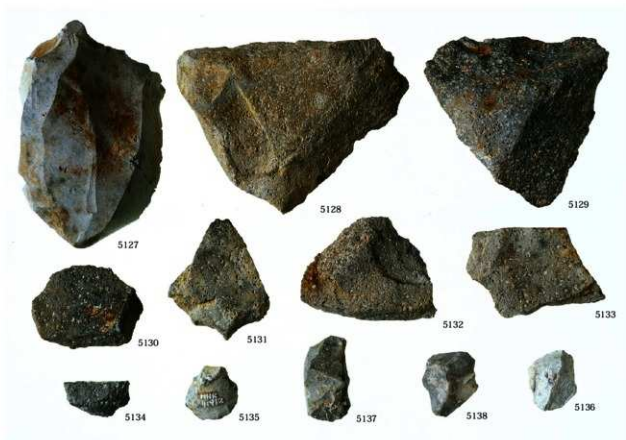
BP 第 5 地点 楔形石器・石刃・斧形石器・石核 (約 3/4)



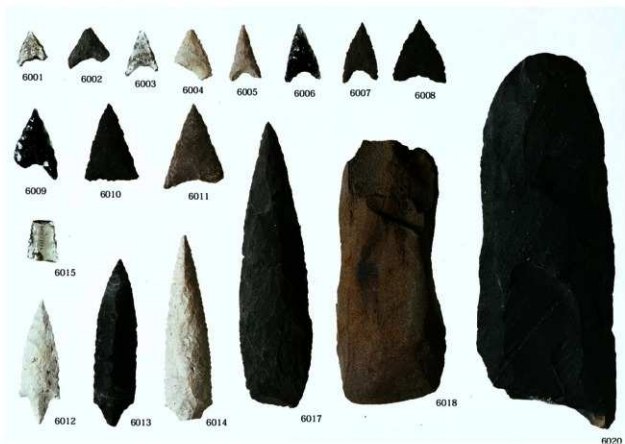
BP 第 5 地点 細石刃・細石刃核・船底形石器 (約 3/4)



BP 第5a地点 ピット内出土の細石核と関連資料（約3/4）



BP 第5c地点中部層出土遺物（約3/4）



BP 第 4 地点 石鏃・有茎尖頭器・局部磨製石斧他（約 3/4）



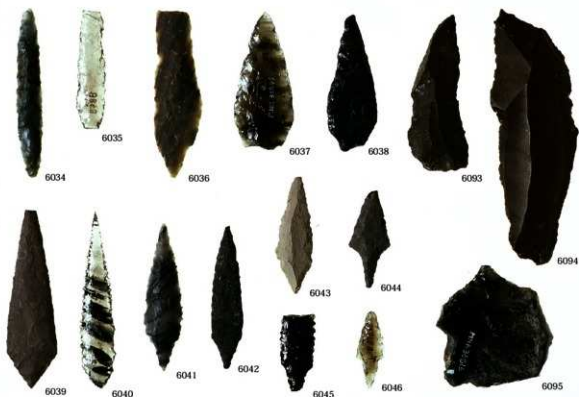
BP 第 4 地点 局部磨製石斧・磨製石斧・削器・抉入削器（約 1/2）



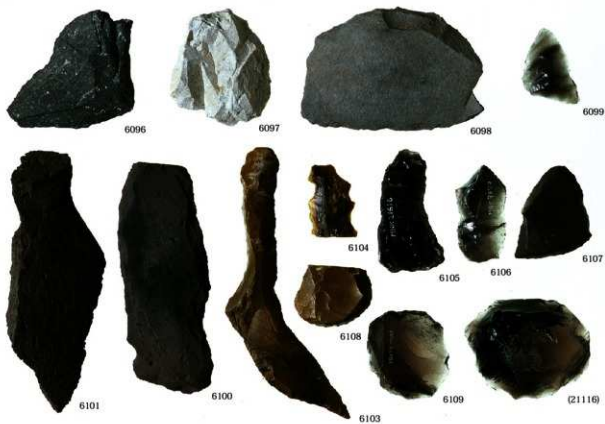
BP 第 5a 地点 槍先形尖頭器 (約 3/4)



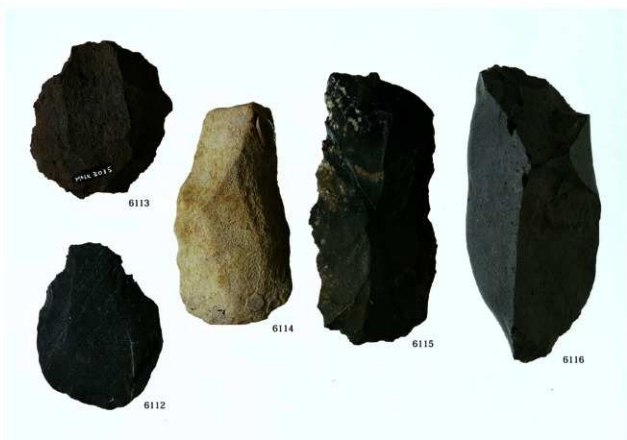
BP 第 5a 地点 石鏃 (縄文時代草創期包含層出土) (約 3/4)



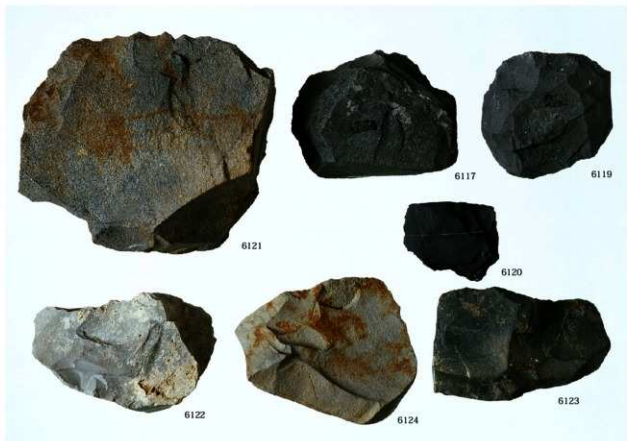
BP 第5a地点 尖頭器・有茎尖頭器・揉錐器(約3/4)



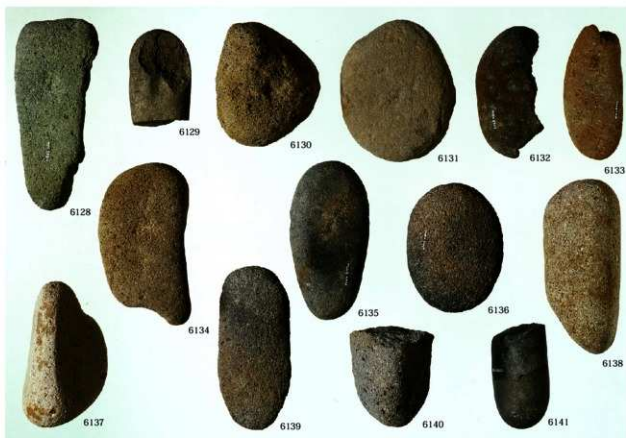
BP 第5a地点 削器・抉入削器・搔器(約2/3)



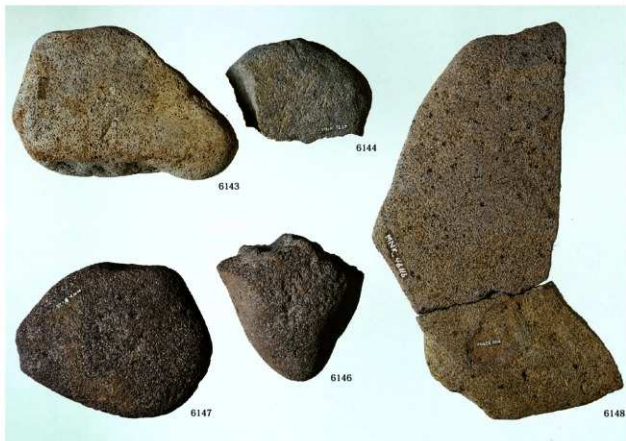
BP 第 5a 地点 碟器・局部磨製石斧他 (約 2/3)



BP 第 5a 地点 石核 (約 1/2)



BP 第5a地点 凹石・磨石・敲石(約1/3)



BP 第5a地点 凹石・台石(約1/3)



BP 第5c地点 有茎尖頭器(約3/4)



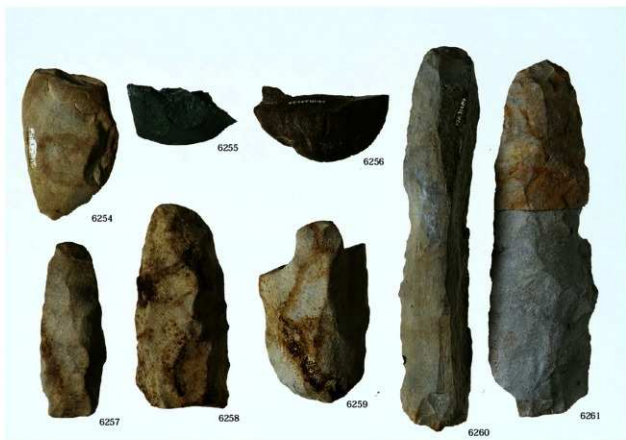
BP 第5c・5d地点 草創期～早期の石鏃(約3/4)



BP 第5c地点 槍先形尖頭器他（2/3）



BP 第5c地点 削器・搔器・小型船底形石器（2/3）



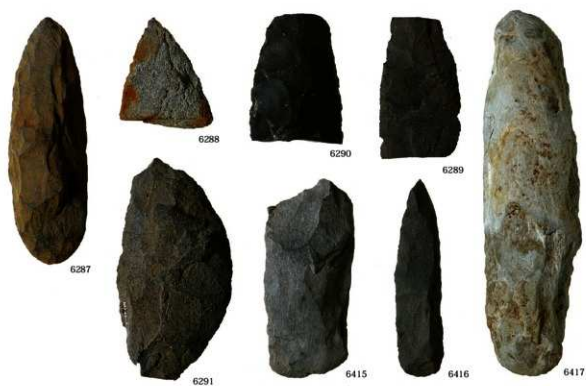
BP 第5c地点 石斧 (約2/3)



BP 第5c地点 石錘・砥石 (2/3)



BP 第 5d 地点 有茎尖頭器・槍先形尖頭器 (約 2/3)



BP 第 5d 地点 半月形石器・局部磨製石斧他 (約 1/2)



BP 第5d地点 石鏃 (約3/4)



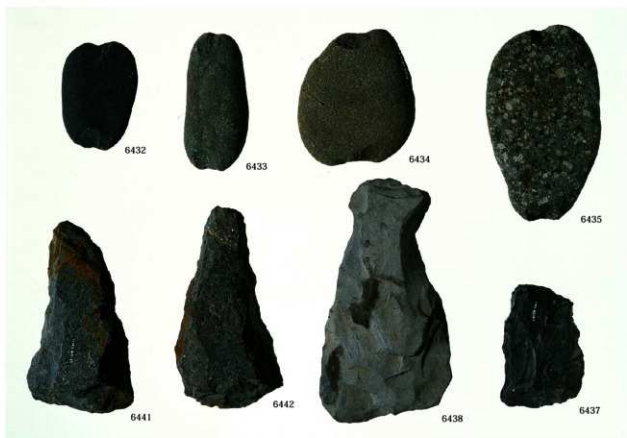
BP 第5d地点 石鏃 (約3/4)



BP 第5d 地点 石錐・石鏃未製品・石匙 (約 2/3)



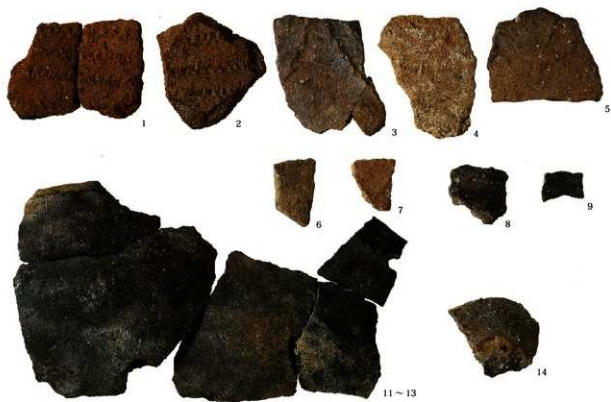
BP 第5d 地点 搔器・削器 (約 2/3)



BP 第 5d 地点 石錘・三角錐形石器・打製石斧 (約 1/2)



BP 第 5d 地点 磨製石斧 (約 1/2)



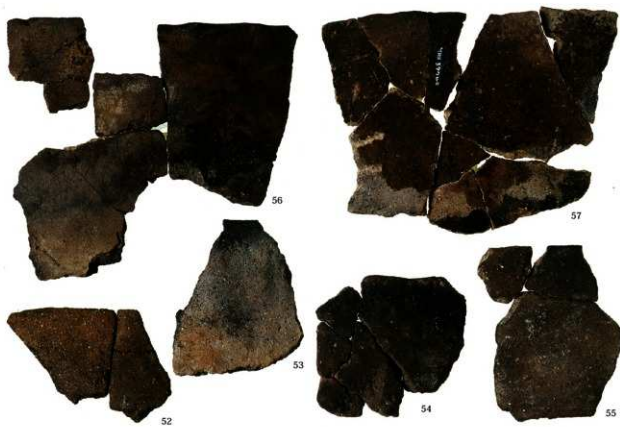
BP 第5a地点 草創期土器(約 2/3)



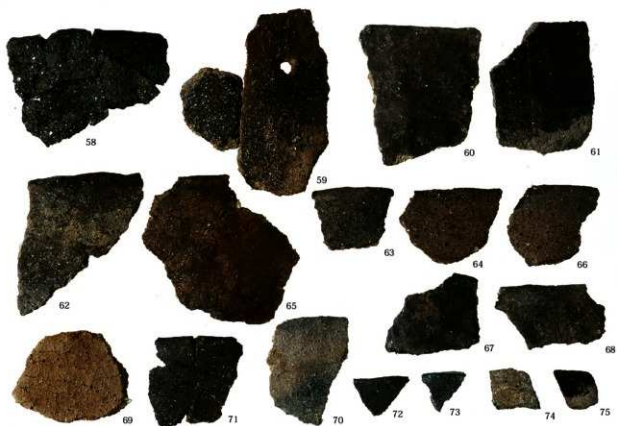
BP 第5a地点 草創期土器(約 2/3)



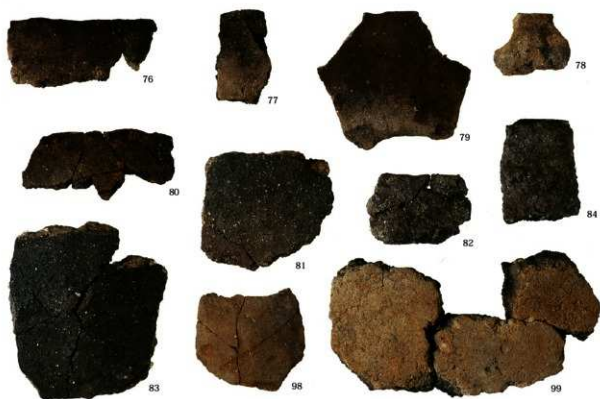
BP 第 5a 地点 草創期土器 (約 2/3)



BP 第 5a 地点 草創期土器 (約 2/3)



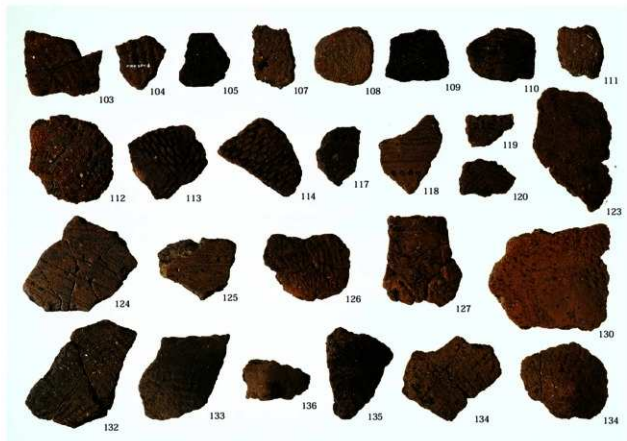
BP 第5a地点 草創期土器 (約 2/3)



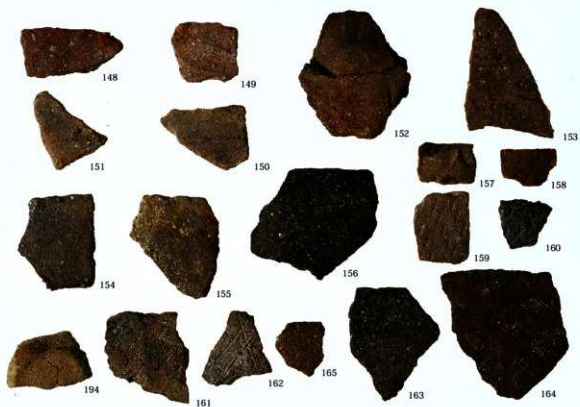
BP 第5a地点 草創期土器 (約 2/3)



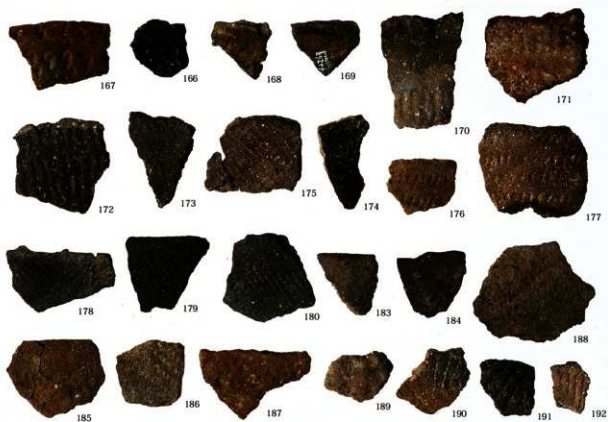
BP 第 5a 地点 草創期土器 (約 2/3)



BP 第 4・5a 地点 早期土器 (約 1/2)



BP 第 5c 地点 草創期土器 (約 2/3)



BP 第 5c 地点 草創期土器 (約 2/3)



古瀬戸花瓶 (約 1/2)



その他中世陶磁器 (約 1/4)



地元産播鉢 (約 1/4)



珠洲焼播鉢 (約 1/4)



中世土師器 内面拡大写真



珠洲焼壺・甕 (約 1/4)



京焼（左）と瀬戸美濃焼（右）（約 1/4）



志野焼（左上）と越中瀬戸焼（約 1/4）



伊万里焼1 (約 1/4)



伊万里焼2 (約 1/4)



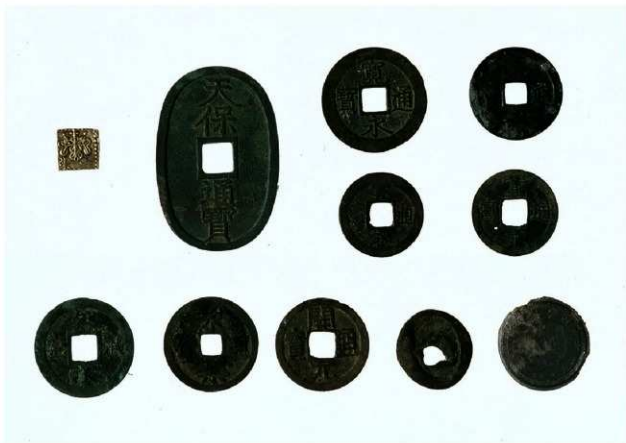
唐津焼1 (約 1/4)



唐津焼2 (約 1/4)



唐津焼3 (約 1/4)



BP 第5地点 銭貨 (約 1/1)



BP 第4地点 前期土器



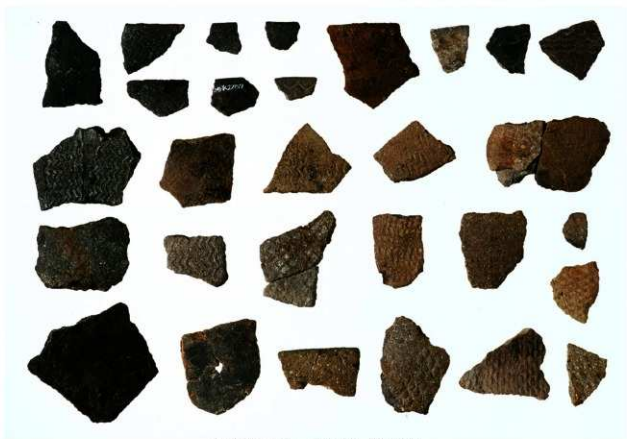
BP 第4・第5地点 後期土器



BP 第5a地点 表裏縄文土器表(約1/2)



BP 第5a地点 表裏縄文土器裏(約1/2)



BP 第5c地点 早期土器 (約 1/2)



BP 第5c地点 早期土器 (約 1/2)



BP 第5c 地点 早期土器 (約 1/2)



BP 第5c 地点 早期土器 (約 1/2)



BP 第 5c 地点 早期～前期土器表 (約 1/2)



BP 第 5c 地点 早期～前期土器裏 (約 1/2)



BP 第5d地点 縄文時代早期～中期土器（約 1/3）



BP 第5d 地点 縄文時代後期土器1 (約 1/3)



BP 第5d 地点 縄文時代後期土器2 (約 1/3)



BP 第5d 地点 縄文時代晩期土器2 (約 1/3)



BP 第5d 地点 縄文時代晩期土器3 (約 1/3)



BP 第5d 地点 縄文時代土器底部 (約 1/3)



BP 第5d地点 縄文時代無文土器 (約 1/3)



BP 第5d地点 縄文時代土製品



BP 第 5d 地点 実測図未掲載の槍先形尖頭器 (約 1/2)



BP 第 5d 地点 実測図未掲載の槍先形尖頭器 (約 1/2)



BP 第5d地点 弥生時代土器1 (約1/4)



BP 第5d地点 弥生時代土器2 (約1/3)



弥生前期土器条痕文アップ



BP 第5d地点 弥生時代土器3 (約1/3)



BP 第5d地点 弥生時代土器4 (約1/3)



BP 第5d地点 古墳時代土器1 (約1/4)



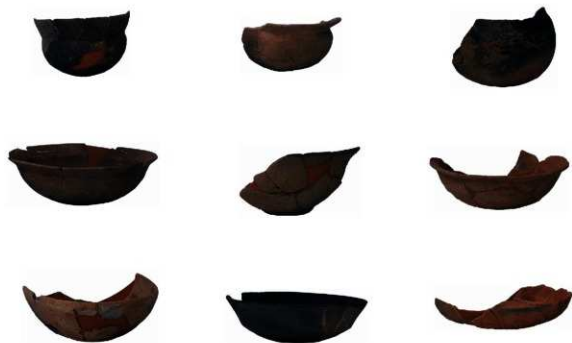
BP 第5d地点 古墳時代土器2 (約1/4)



BP 第5d地点 古墳時代土器3 (約1/3)



BP 第5d地点 古墳時代土器4 (約1/3)



BP 第5d地点 古墳時代土器5 (約1/4)



土器底部穿孔部分



土器底部拡大



(約1/3)

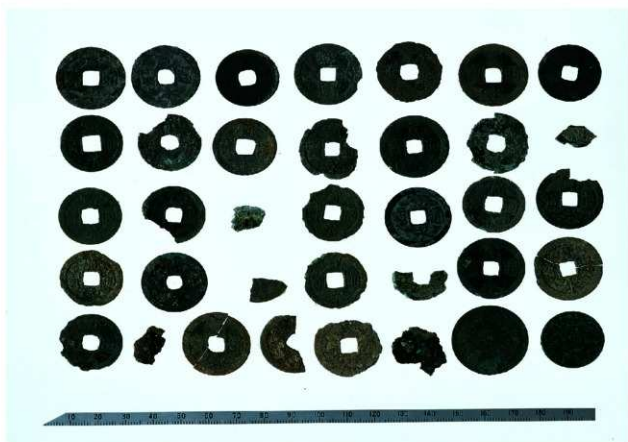


土器口頸部接合部分



土器胴部接合部分

BP 第5d地点 古墳時代土器6



BP 第 5d 地点出土の銭貨



BP 第 5d 地点出土木製品 (約 1/3)



BP 第5d 地点出土木製品 (約 1/4)

報告書抄録

ふりがな	いっばんこくどう 18 ぐらう (のじりばいばす) まいぞうふんかざいはくつちようさほうこくしよ
書名	一般国道 18 号 (野尻バイパス) 埋蔵文化財発掘調査報告書
副書名	信濃町内その 3 仲町遺跡
巻次	3
シリーズ名	長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	63
編著者名	鶴田典昭 谷和隆 山崎まゆみ 中島英子 市川桂子
編集機関	財団法人 長野県文化振興事業団 長野県埋蔵文化財センター
所在地	〒388-8007 長野県長野市篠ノ布高田 963-4 TEL026-293-5926
発行年月日	2004 年 3 月 19 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
仲町遺跡	長野県上水内郡 信濃町大字野尻 字一盞清水他	205834	40	36° 49' 59" (世界測地系)	138° 12' 14" (世界測地系)	1999 年 9 月 15 日 ～ 10 月 26 日 2000 年 4 月 27 日 ～ 12 月 1 日 2001 年 4 月 23 日 ～ 12 月 4 日 2002 年 5 月 7 日 ～ 10 月 29 日	23,920 m ²	国道拡幅工事に 伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
仲町遺跡	集落	旧石器	石器集中地点 (ブロック) 145 露群	ナイフ形石器・台形石器 斧形石器・石刃・細石刃・ 台石・巖石・砥石	3 箇所の環状ブロック群
		平安時代	竈穴住居跡	須恵器・土師器・灰輪陶器・ 緑釉陶器片・鉄製品	
	中近世	掘立柱建物跡・井戸・土坑・ 道路状遺構	中近世焼き物・砥石・土師・銭 貨	近世野尻宿関連の遺構と北国街 道に關わると推定される道路状 遺構	
	散布地	縄文	草創期が跡・早期陥し穴	草創期・早期・後期・晩期の土 器石器	円孔文系土器群の土器付着物年 代測定
		弥生 ～古代	土器集中	弥生時代前期・中期土器 古墳時代土師器・須恵器 木製品・金属器	刀子柄・櫛形木製品などの木製 品

長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 63

一般国道 18 号 (野尻バイパス) 埋蔵文化財発掘調査報告書 3

信濃町内その 3

仲町遺跡《第 2 分冊》

発行 平成 16 年 3 月 19 日 発行

発行者 国土交通省関東地方整備局

長野県埋蔵文化財センター

〒388-8007 長野県長野市篠ノ布高田 963-4

TEL 026-293-5926 FAX 026-293-8157

印刷 柳澤印刷株式会社